
ア・ホールド・ダンジョンズ！

オレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ア・ホールド・ダンジョンズ！

【Nコード】

N3976U

【作者名】

オレン

【あらすじ】

世界的に発生した謎の事件。

それは、巨大な洞窟のような穴が突然現れるというもの。しかも、入った物は数分足らずで遺体となって帰ってくる。

物足りない青春の時間を送っていた主人公。

だが、彼の住む場所の近くにも謎の横穴が出現し、死者も出た。そんな横穴を前に主人公は足を止めた。

横穴の前で少女が泣いているからだった。

主人公の慰めもむなしく、少女は死の横穴へと吸い込まれていく。

そして、それを追うように、主人公自らもその穴へと……。

その先に待ち受けていたものとは……。

そして、主人公の未来はどうなってしまうのか。

第1層 プロローグ（前書き）

この作品は、知識の少ない作者さんが作り出した妄想の世界です。分かりにくい表現、漢字の間違いなどが含まれることがあります。ご注意ください。

第1層 プロローグ

いつもと何も変わらない道のり。

いつもと同じ風景。

そんな見慣れた道を、毎日のように自転車で往復している。

もう往復500回を超えたぐらいだろうか。

「ん？」

ただその日は、いつもとは違う『何か』を感じ取った。

夕日で照らされている道脇の岩肌に、妙な黒い空間を感じたのだ。

まあ一瞬だったので、気にせずそのまま家に帰ることにした。

次の朝、朝早くから学校から「今日は休校になった」と先生から一本の電話が来た。

理由は、通学路で殺人が起きたらしい。

いつもなら「ラッキーだ！」なんて笑いながら遊びに行くのに、なぜか今回は冷や汗が止まらなかった。

そして、いても経つてもいられずにすぐに家から飛び出した。

自転車でいつもの通学路を全力で進んだ。

そして、昨日の妙な空間あたりで自転車を降りて、立ち止まった。

事件現場を警官が囲んでいて、それを取り囲むように報道者や一般の人がいる。

その現場を見たとき寒気がした。

そこには、昨日まで無かった巨大な穴と、体を引き裂かれた死体があったのだ。

その風景を見た後、僕は自転車を押しながらゆっくり帰った。

その時は、僕があそことかかわりを持つなんて思うはずも無かった。

あの事件が起きてから1週間がたつ。

あの事件は解決どころか、日に日に発展していったのだ。

テレビのニュースキャスターさんが、「巨大な横穴が世界規模で発生しています。絶対に近づかないようにしてください。」と毎日のように言っている。

てか、もう1週間ずっと『巨大な穴』の話題しかテレビで流れていない。

テレビ情報だが、死者は日本でも5000人以上。

世界規模だと何十万人。

そういえば僕の学校でも死者がでた。

死んだ子は不良だったから、誰一人悲しまなかったが……。

ただ、その時もう一人同行していた不良から、良い情報も聞いた。

『あの穴は、入ったら一瞬で死ぬ』

じゃんけんで負けたら10秒間穴の中に入るといって、馬鹿な遊びを考えて死んだ子は入ったが、5秒で死体で出てきた……ということなんとも恐ろしい話だ。

まあこんな感じで、事件を脳内でおさらいしていたら、1週間ぶりの午後からの1時間全校集会だけの学校は、あっさり終わったのだった。

帰り道、不気味な穴の前にて、白いワンピースで長髪黒髪の女の子と出会う。

見たことも無い子だったが、泣いている子は無視できないたちの人間だから、声をかけた。

「ねえ、どうしたの？」

しゃがみこみ、女の子の顔をしたから覗き込むようにやさしい口調で言った。

「ぐすつ、ぐすつ……」

両目を擦りながら、ぐずっている。

「どうしたの？」

もう一度僕は、やさしめに聞いてみる。
すると、女の子は穴のほうに指を指す。

「あの穴は危険だか・・・」

危険だといおうとしたら、女の子は例の横穴に向かって走り出した。
「待て、行くんじゃない！」

言い終わる頃には、女の子の姿は穴の暗闇へと消えていった。

背筋が凍る。

終わった。

あの子の人生は今終わってしまった。

穴との距離5メートル地点で、呆然と立ち尽くす。

無意識のうちに秒数を数えていた。

最低な人間だ。そう思いながらも数え続けた。

1分間しつかり数えて、思わず思ったことが声に出る。

「あれ、でてこないか？」

自分の情報を脳内でおさらいしてみる。

あの情報は嘘だったのだろうか？いや、でも、しかし・・・

女の子は出てこない。

女の子を助けられなかった後悔から、良心が僕自身に問い詰めてくる。

「あの子はまだ死んでない。まだ、間に合うはずだ！」
なぜか、この時僕は自信にあふれていた。

そして、僕は例の横穴へ1歩2歩と踏み入れていった。

こうして僕は、後悔への道筋をたどるのであった。

第2層 だまされましてようこそ

3歩4歩と横穴を進んでいく。

横穴というか、この洞窟は何故だか心が落ち着く。

湿気も洞窟の割にそこまで無いし、若干女の子が通った後のあまい香りがする。

無事なのだろうか・・・。

心配しつつも、ふと自分歩いてきた方向を見た。

洞窟に入ってから一直線に歩いてきたので、当然のように日の光が入り口を明るく照らす。

「ふうー」と胸をなでおろし、顔を正面に戻し歩き出そうとした。

「あれ？こんな明るかったっけ・・・前」

自分の声がブオンブオン響き渡るのに少し感動。

でも、明らかにこちらに來いといわんばかりに、小さな明るい光が見える。

いやな予感がするが、進むしかないのだからと自分に言い聞かせ、歩くことにした。

見えた光は、歩けば歩くほど大きくなっていき、とうとう出口に出た。

出口とは言っても、大きな空間に出ただけなのだが。

それにしても広い。

円形の巨大な空間と、天井いっぱいには貼り付けてあるように浮いている、謎の大量のモニターのようなもの。

さすがに何が移ってるがわからないが、上下左右に1回転しながら見渡した。

見渡した瞬間に異変に気づき、瞬時にこの空間に入ってきた場所を見る。

「無い」

思わず口に出る心の声。

空間内に声が大きく反響するが、感動はしない。

そう、入り口というか出口というか、それらしきものが360度どこにも無い。

「はははははははは・・・」

僕の口から変な笑い声が出てきた。

体全身に流れる何かを感じ取れる。

ああ、これが死ぬとわかった時の状況なのか。

僕が絶望の底にいるその時、薄気味悪い声が聞こえた。

「ふふふふふ・・・」

女性の笑い声、しかも若々しい声。

僕は心が折れたかのように足に力が入らなくなり、へんな足の形で座り込む。

そして声のする方向・・・天井の方向へ目を向けた。

当然のように降りてくる物体は女性なのか？

女性と判断させるのは、胸だろう。

首元から胸元、そしてへそにかけて一直線の素肌のラインが見える。

正直、ものすごく直視しづらいってことは、エロい。

一言で表すなら、「黒い悪魔コスプレの露出者」だろうか。

「あら、初めて言われたわ」

心が読まれた？いや心の声が出てしまったのだ。

反響した自分の声が耳に入ってきて確認した。

視線をあげると露出者はニコニコしていた。

死ぬ前の人が、そんなにもおもしろいのか？

それとも、人を殺すのがそんなにも楽しみなのか？

いろいろ頭をグルグルさせていたら、あの女の子が頭の中に浮かんでいた。

そして、気がついたら無意識に言動していた。

「もう殺すなら好きにするがいいさ。ただここにきた女の子は生きて返してやってくれ。たのむ！いや、おねがいします！」

頭は地面についていて、自分の目から涙が流れるのも感じた。

「あつはっはっはっはっは、はーはっはっは。ふーう」

腹を抱えてケラケラ笑う露出者。

「な、何がおかしいんだ！」

「ごめんなさーいお兄ちゃん、だましちゃいました。てへっ」

返ってきたその声は、まさしくあのときのかわいい女の子。

くそう、くそう、そんな声まで出せてるのかよ。

完全にだまされた。

気がついたら正座で、体も震えている。

露出者は、ふわふわと浮きながら、こちらとの距離2mあたりのところまで近づいてきて、僕を止める言葉をかけた。

「おほん、まあ悪かったわ。そう、ええっと、落ち込むな」

「えっ？」

とっさの相手の謝りに、変に聞き返してしまった。

なぜか、汗も涙も緊張感も止まっていた。

「ようこそ！『ホール・ダンジョン』へ。123455人目の挑戦者よ！」

彼女が放った言葉は、洞窟の空間内に広がった。

その声は、10万回以上言ってきたような、堂々として言い慣れた感じの声だった。

だが、こちら側はいろいろ言いたいことがある。

最初から説明してほしいことが山ほどある。

ただ、この時の僕の心の奥底の声は、ものすごく単純だった。

「挑戦者じゃないから、かえしてくれえええええええ」

僕の突っ込みのようなその言葉も、洞窟の空間内に広がったのだった。

第3層 管理人さん

僕の響き渡る声は、長い黒髪をなびかせ軽くスルーされた。

「おお、そういうえば自己紹介がまだだったわね。我が名は『ネロ』で、この世界の・・・・管理者？うん、管理者みたいなものよ」
突然何を言い出すかと思えば自己紹介か。

露出者の名前はネロらしい。

あの『管理者』という設定は、明らかに今作ったたる。

でも、もしこの台詞を123454人全てに言っていたとすれば・・・
いや、ないか。

そう思いながら、さっきまで動かせなかった足に力を入れて、しっかりと立ち上がった。

「では死刑執行人のネロさん。私はどう殺されるのですか？」

この人からは殺されることは無いだろうと思ったので、すんなり目を見て言えた。

「ふふふ、死刑執行人とは面白い。主のことを気に入ったぞ。名を申せ」

「未来・・・ですが？」

「ごめんなさい。未来と言う名前はダメだわ」
「は？」

当然こんな感じで返すだろうと思う。

突然名前聞いてきて、言ったら言ったで否定するって・・・。

「もうその名前はこの世界に登録しているから、他のにしてって」と。
わかる？」

わかる？の聞き方に妙な苛立ちを感じたが、まあいいとしよう。

それにしても、まだ頭の中で理解できていない。

ここはいつたい何なんだ？

まず、ここは僕の生きてきた世界とは違う空間なのですか？

そう、いろいろ考えていたら、そんな僕の状況が理解できたのか、

ネロは一言で聞いてきた。

「説明してほしい？」

「お願いします」

無意識での即答だった。

「素直でよろしい。質問や反論などは、全てが話し終わってからでいいわね？」

ネロは、そう言って僕に目を向ける。

その視線を感じ取り、僕は軽くうなずいた。

「では……」

そう言って、若干僕を見下ろす形になるように浮いて、色々説明し始めるのだった。

第4層 ネロの定義

「こんな所・・・かしらね」

ネロの大まかな説明が終わった。

何となくだが、この世界の『定義』が分かった・・・気がする。

「じゃあ、覚えたか確認のためにもう一度『定義』を言ってもらえる？」

ネロは空中から降りてきて、僕に近づいてきて言った。

「一つ、この世界は『ホール・ダンジョン』で、地上世界の逆の地下世界のようなものである」

僕はスラスラと答える。

「よろしい、はい次ね」

なんだかネロは楽しそうにしている。

「一つ、挑戦者はこのホールダンジョンを好きな職業で冒険する。

ゴールは同じなので、冒険内容は挑戦者の自由である」

僕は、もはや棒読みで言い切った。

「これが実は一番重要なことよ？」

ネロはそう言うが、これはそんなに気にならない。

「一つ、この世界の1日は、地上世界での6秒である。これはよく分かりません」

「そうね。こつちで10日過ごして向こうで1分。365日過ごしたら36分30秒かしら？」

ネロは質問にすぐに答えるが、僕の聞きたいことはそういう事ではない。

僕は、質問の言い方を変えて言ってみた。

「この世界では、一瞬で日が昇って沈むのですか？」

「あー、こつちの世界でも体感するのはしつかり24時間よ。おまけだけど、もちろんこちらの世界基準で、お腹も空くわよ」

ネロはそう落ち着いて対応する。

これで、洞窟に入って一瞬で死体になって出てくるというのも説明がついた。

ある程度の質問なら、答えてくれそうだな。

僕は、軽くうなずき『定義』を続ける。

「一つ、こちらの世界で死んだ時、死体のまま地上に戻してくれる安心設計」

「うんうん」

ネロはうなずくが、安心設計ではないと思う。

せめて屍で返してくれるとか、死亡届をあの洞窟前に届ける、とかでよかったと思う。

「こんな感じですよ」

僕はそう自信を持って言った。

すると、ネロは少しむすっとしてこちらに歩いて向かってくる。

そして、僕の前で立ち止まり少し屈んで、下から目線で僕に一言。

「ちょっとー、後一つ大事な事忘れてるわよ」

相変わらずのお姉さま口調。

そして、近くで見分かったが、相当この人？なのか？まあ、若い。

下手すれば、俺と同じ17歳かもしれない。

露出している肩から、胸の谷間のほうに目線を送り思わず目線をネロさんから右にそらす。

ネロはそれを見て、嫌がらせのように目線をそらした先に一瞬で現れて、再び下から目線。

僕はそれから逃げ出すように目をつぶり、最後の『定義』を言った。

「一つ、ヘンタイは私が個人的に消す。・・・これ冗談じゃないんですか？」

僕は当然のように聞き返す。

もちろん目を開けることはしない。

「まあ、最近作ったのよー」

僕は、ネロの声が遠くの方から来たと思い目を開ける。

「うわっ！」

目を開けたときに、ネロが僕の目の前に現れたので、思わず後ろに尻餅をついた。

「ふふふ、まあ簡単に言うとなー最近ねえ、増えたのよ」

「何が？」

尻餅をついたまま、僕は聞き返した。

「女性キャラクターのスカートなどを覗く馬鹿。なんでも出来ると思っただらお間違えなだからっ！」

「は、はあ……」

「ちなみに、そのような行為をしてきた挑戦者男女関係なしで、1割ぐらいは消したかしら？レベル差50のモンスターそいつの目の前に送り込んだり、私自ら葬り去りに行ったり……まあ、あなたも気をつけなさいよ？」

ネロは、薄気味悪い笑顔で言った。

初めてネロさんが恐ろしく感じた。

それよりも1割って……男はともかく女って……

あと、どうやらモンスターやレベル制度という感じのものがあるらしい。

RPGみたいだな……

「覚悟しときます」

僕はそう軽く返答した。

ネロは、それを聞き、笑顔でうなづく。

そして、僕と歩いて距離を置き、また宙に浮き上がっていった。

「さつとと、だいぶ話し込んだじゃったわね。さて、そろそろあなたの『ホール・ダンジョン』内の名前を決めないかね」

そう言つて、僕の目の前に謎の電子パネルのような物を浮かび上がらせた。

「えっ……なにこれ？」

「それで名前を打ってちょうだい。私ちよつと準備してくるから」

そう言つて、ネロはものすごい高い位置まで浮き上がり、天井付近の画面をいじくりだす。

また一人、世の変態が消されるのだろうか。

そう思いながら、自分の目の前のパネルを見つめる。

「さて、諦めてがんばりますか」

そう僕は独り言を呟き、慣れない手つきで名前を打ち込み始めるのだった。

第5層 お名前と職業をお願いします

「よし！ やつとできたー」

パネルを触り続けること、5分ぐらいかな？ ようやく出来た。

まあ、名前を決めることがこの世界で物凄く重要なのが分かった。と言うのも、名前をパネルで打ち込み、決定ボタンを押すと「本当にこの名前ですらいいですか？」と言う文字が浮かび上がる。

ここまででは良いのだが、もしも「よろしいですか？」システムの決定ボタンを押し間違えて「ミスったー！」とならないように、「本当によろしいですか？」の問いに、もう2度決定を押さなければいけない。

さらにその後、名前がこの世界の他の誰かと被ったら、「この名前はすでに存在しています。他の名前を考えてください」と出てくる。

それを先に言ってくれよ……。

そんな名前被りのループを、5回は繰り返した気がする。

結局決まった名前は、ネット内とか、あだ名とか色々試してダメだったので、本名をそのままカタカナ表記で『ミライ』と言う名前登録された。

「では、挑戦者ミライよ。『職業』は何にする？」

名前が決まったことを察したのか、ネロは画面を操作しながら言った。

「職業って？ 何ですか？ それ……」

「そのまんまよー、一般的に剣士とか戦士とか魔法使いとか、とにかく『何でも』いいわよ」

そうネロは言い、ミライの方へと降りてくる。

「分かりましたー。じゃあどうやって決めるんですか？ 選択肢的な……何かは？」

「想像するのよ、頭の中でね。あとはイメージ通りに私が作ってあ

げるわ」

腕を組み、こちらを見てうなずくネロ。

想像で・・・ねえ・・・。

なんだか、相当な理不尽な未来的ゲームに迷い込んだような気がする。

「まあ、分かりました。では、いきます」

そう言って僕は目をつぶり、理想の職業を頭に浮かべるのだった。

第6層 職業員転送

「ふむふむ。なるほどー」

ネロは腕を組み、僕を見ながらそう言った。

そんなに難しいこと想像したっけ？

「どうにか成りますかねー？」

ネロの考える表情が、妙に気になったので声をかけた。

「何がー？」

ネロはそう聞き返すと、こちらに向かってフワフワ降りてくる。

「何がって、職業ですよー出来そうですか？」

こちらに向かってくるネロを、目で追いかけながら言った。

「え、何も感じない？もうあなた、立派な『魔法使い』よ？」

「えっ・・・こんな・・・物なんですか？」

「ええ。ご想像のとおりよ。と言うより、あなたの想像がこれだけだったのよ？」

まじめ表情で答えてくれる所を見ると、これが、僕の思う魔法使いらしい。

全く俺は何を想像したんだ？と言いたくなるぐらい見た目も中身も何も変わっていない。

自分の頭の中で整理する限り、服装や手に持つ武器なども想像しなきゃダメだったらしい。

もしかして、魔法などここで想像しないとこの先ずっと発動できなかつたりして・・・。

そんな事を思っていると、ネロが説教のようにミライに言葉を投げかけてきた。

「不満そうね？でも、あなたは何も考えなかった。服装とか、どんな魔法を使うとか・・・全くと言っていいほど考えてなかった。だからそうだったの」

ネロの言葉の強さに、ネロの表情を見ることが出来ない。

「すみません。自業自得、ですよね」

「分かれればいいわ。あと、ここで全てが決まるのじゃないのよ？この先で変えようと思えばいくらでも変わるわ。安心しなさい」

そう言われてネロの表情をようやく見れたが、笑顔だったのでホッとした。

「そういえば、他にも魔法使っているんですか？」

名前であれだけ被るのがダメだったのに、職業はすんなりし過ぎた気になっていたのだ。

「いないわよ。被りはもちろんなし！」

そう言われて妙な優越感に浸された。

僕だけが魔法を使えるなんて・・・。

「でも、近い部類はたくさんいるわね」

笑顔で言葉を続けるネロ。

「大魔道士や黒魔道士、魔法剣士や・・・まあ、一番凄そうなのが・・・」

ここまで聞いた時点で、優越感って何だっけ？見たいな感じになった。

「一番凄いののは？」

熱は冷めたが、一番凄いと言うものはやっぱり気になるので、興味津々な人のように聞き返した。

「インフィニティーブラックカオスネクロマンサーキングヴォルズ
セクリペンス、バスターヴォルケンシュタインブリザードエンペラ
ーウォール、マイクロソフトウエアサイバーグラディション魔道士？・・・だったかしらね」

長すぎるわ！と、心の中でツツコミを入れておく。

誰なんだよ、こんな無駄な想像力の塊のような職業名作っただの・・・。

しかも、それを職業化して覚えているネロさんって・・・。

「お疲れ様です。いろんな意味で」

色々考えて、こんな感想の返答になった。

「あら、それはどうも。意外と反応薄いわねー。一応ほんといけるのよ」

予想外の返答に、がっかり気味なネロ。

きつとあの名前が出来てから、ここに来た人たちに話してきた王道の話題ネタだったのだろう。

ネロは少し上のほうに飛んで行き、モニターをいじりはじめた。

今思うのもなんだが、これからいったい何が始まるのだろう。

それよりも、あの人がどうやって飛んでいるのだろう。

そんな事が考えられる、無音の空間が少しばかり続いた。

急に静かになるのも悲しい物だなと、この時思った。

「あのーどうでもいいんですけどー、名前とかの上限ってあるんですかー？」

無音空間を断ち切れるように、何となく質問を遠くの方に投げた。

「基本的に上限と言う上限は無いわよー。たぶんこの先もー。あとー今、転送装置起動させたからー。時間も無いし、中央の四角いパネルに乗っというてー」

だいぶ上の方から、ネロの言葉が帰ってきたが・・・それよりも、転送装置？

「これか？」

ミライは言われるがままに、四角く囲ってあって少し回りの床より高い床の中心に立った。

空中からこちらへとネロは向かってくる。

「もうすぐ飛んで行くから覚悟しててね。あと、場所はランダムだから」

「ランダムって・・・大丈夫なんですか？」

「うん、たぶんだけどね。運が悪かったら、空の上とか真下には針とかあるからね。か・く・ごー！しててね」

すばらしい笑みが、ここまでで恐怖だと感じたことも無いだろう。

若干耳障りな騒音と共に、ミライの体が透け始める。

ネロさんは、まだ何か言っているようだ。

全くと言っていいほど聞こえないが……。

そして、転送装置は完全に作動し、視界は真っ暗になった。

「……から、がんばってきてね」

まあ、この言葉が聞けたから良かったのだろうか。

そう思いつつ、暗闇に続く転送空間を飛んでいくのだった。

第7層 地下潜入

転送されてからどのくらい経つのだろうか。

とにかく、真つ暗な世界が続いている。

意外とこの空間は、居心地が悪くない。

表現すると、無重力世界にいて、だれかから勝手に体が引つ張られていく感じ。

何も無いと、こつも長く感じる物なのか。

もう死んでしまっているのでは！？とか、この先ずつと真つ暗な世界を旅するのかとか、実はもう出口に出ているが真つ暗だった！とか、色々考えを膨らまして時間潰し。

体を動かそうにも、縛り付けられたように全くと言っていいほど動かないのだ。

「お？おおおおおおおおお！」

思わず叫んでしまう。

光が正面に見えてきて、どんどん大きく広くなっていく。

光の大きさに連なるように、もの凄い胸の高鳴りと恐怖心も大きくなっていく。

「頼む！安全な場所に出てくれー！」

これが空間内での最後の祈りであり、叫びであった。

ついに、光の先に出ることが出来た。

出て、現状も把握することも無く、ここがどこだか分かる。

上を見れば、大きな青空が見える。

上しか見えないけど・・・。

「うわあああああ」

落ちる。

落ちていく。

間違いなく死ぬ。

死因は、『運の無さ』だろう。

死ぬ覚悟は出来ていたその時、「ドスッ」と言う音とともに地面にたたき付けられ、体に振動が伝わる。

「いててててて・・・」

ミライはうつ伏せ状態から体を起こした。

落ちるのが長く感じたが、実際は3m程度で全然痛くなかった。

ミライは立ち上がり、周りを見渡した。

「うおー！すげー！」

どうやら自分が落ちたのは、崖の上らしい。

崖の下は、広がる大草原に森に大きな目立つ木。

大草原には、町のような場所がぽつんと1ヶ所あるだけ。

あまりの広さに感動で声が出てしまうのも無理はない。

見渡すこと190度地点。

1mも無い先は、切り立った崖の下だった。

「あ、あははははは。ふうー」

足がすくみ、へんな笑い声が出た。

もう自分の『運の良さ』を笑うことしか出来なかった。

もしも、もう少しあちら側に出たらと思うと・・・。

360度上下左右と景色を見渡し、自分自身を見渡し、何も以上が無いことを確認する。

「さて、先に進んでみますか」

そう独り言をいい、見渡したときに見つけた、崖を降りる広い道を進んでいくミライであった。

第8層 未知との遭遇

「ふうー。やっとかー」

どうにか崖を降りる坂道を下りきった。

まあ、崖下に来てても景色はそんなに変わりない。

目の前に広がるのは、地平線まで広がる大草原だけ。

しかし、妙な物音がする。

ミライは、その物音のするほうへ向かうことにした。

ほんの少し、崖から草原方向に進んだ先。

ミライから、数10m先で繰り広げられていたのは、謎の生き物と、人との戦闘だった。

謎の生き物は恐らく、あの人の大きさからして、2mはあるのか。手に元々装着している、鎌のような物をブンブン振り回している、カマキリみたいな奴だ。

人の方は、片手に剣、もう片手に盾というポピュラーな格好だった。

「ために、この魔法使ってみるか」

そう言つて、何となく精神統一。

崖を下りる時に、何か魔法は使えないかと試行錯誤を繰り返し、ようやく編み出した最初の魔法である。

「よし、じゃあ、『アペンシス』！」

名前も成り行きで考えたのだが、言わなくてもその気になれば発動できる。

ミライが魔法呪文を声に出すと、戦闘している生物と人の名前が出てきた。

魔法内容は恐らく、一定区間に発動する空間魔法。

魔法内容は、ただ相手のレベルと名前と変なのが見えるだけと言う単純魔法。

ええっと、あのモンスターの名前はマンティスで、レベルが12か。

人の方は、名前はあああああで、レベルが10つと……ん？

ミライは思わず、人の方に浮き出るステータス画面を二度見した。

「『ああああ』……ねえ」

思わず声に出して名前を読んでもしまう。

何て適等すぎる名前なんだ……。

ネロさん……本当に何でもありだな……。

しかも、あああああさんイケメン……。

そんなことを思っていたら、戦況が大きく変わった。

あああああが持っていた、剣と盾が弾き飛ばされて遠くに飛んでいったのだ。

マンティスは、鎌を振り上げる。

あああああは、動かないと言っより動けなくなっている。

これは……やばくないか……。

「うあつ、うあつ、うあああああああああああああ」

そうあああああが叫んだ瞬間、マンティスが鎌を振り下ろした。

あああああが体が、肩から腰にかけて、斜めに引き裂かれる。

あああああが体から、血などが噴き出した。

「うわっ！う、うそだろ！」

思わず叫んでしまう。

あああああは、地面に転がったと思うと血の跡を残し、光に包まれて消えてしまった。

これが、この世界の『死』なのだろうか。

こんな光景見るのではなかった……。

変な汗が出て、吐き気が襲ってくる。

だが、吐いている暇も無いようだった。

マンティスがこちらの存在に気がつき、向かってくるのだ。

「やばい」

そう言ってミライは、マンティスと逆方向に全力で走り出す。

「たすけてくれー！」

無意識に叫びながら逃げるミライ。

でも、どうやらマンティスの動きはこちらよりも遅いらしい。

これなら逃げられるか？と思つたら、ドカツ。

ミライは、岩肌に体全身でつ強くぶつかった。

そういえば、崖の方から来たんだっけ……。

気づいた頃には、もう遅かった。

頭上には、マンティスの姿が……。

ミライは岩肌に背を向けて立つ。

もう戦うしかない。

ミライは、とりあえず何か無いかとアペンシスを自分にかけてみる。

「えっ……」

ミライの口から、むなしい音のような声が出た。

名前がミライ、レベルが1……。

しかもMPという、魔力のメータのような数値が、0/0……。

絶望的というより、死亡確定。

アペンシス……魔力要らなかったのね……。

体全身に力が抜け、岩肌に体をもたれて座り込む。

マンティスの鎌が射程圏内に入り、鎌を振り上げる。

もう、終わりなのか……。

そう思つた次の瞬間、シュバババババという音と共に、マンテ

イスの体がバラバラに引き裂かれ、砕け散った。

変な緑の液体が飛び散るが、そんなの全く気にならなかった。

そして、バラバラになつた死骸の後ろの方から姿を現したのは、

同年代ぐらいだろうと思われる少女だった。

両手には、刃物のような物を持っている。

「君！大丈夫？」

少女はこちらに近づき、手を差し伸べる。

当然この子に助けてもらつたんだろ。

髪は長くて、金髪と茶髪を足して2で割つた位の髪色。

服装は、よく分からないが、スカートを履いてる。

パンツは、白とピンクの縞模様って……。

「えっ……」

思わず声に驚きが出てしまった。

完全に見えていたのだ。

彼女はまだ気がついていない。

ふと、ネロの言ったことを思い出す。

やばいと思いつつも、これは事故だ！と自分に言い聞かす。

「ねえ、どうしたの？」

彼女は、優しい声で問いかけてくる。

この光景もネロさんきつと監視してるのだろうな……。

僕の心の中の答えは、言わなければ死ぬだった。

「あー」

「なにか？」

彼女の笑顔が心に刺さる。

どうしたら……どうしたらいいんだ。

どうすれば、全てが丸く収まるんだ。

そう考えていたが、僕の口は先に動き出してしまったようだ。

「ピンクの縞パン……」

そう僕が声に出すと、彼女は顔を赤くし、スカートの前の方を強く抑える。

このときの彼女は、もの凄く可愛い天使のような感じだった。

だが実際は、罪深き物を裁く、審判員だった。

「変態！」

彼女の下した審判は、叫ばれたその2文字と、ものすごい強力な蹴りだった。

その強力な蹴りが、ミライの顔面を直撃し、ミライは意識が遠のいていくのであった。

第9層 宿主のお姉さん

頭がズキズキ痛む・・・。
何も見えない真っ暗な世界。

ここは・・・。

「変態！」

「うわっ」

ミライは、声と共に飛び上がった。

どうやら僕は、気を失ったらしい。

気を失う前はたしか・・・。

そう考えれば、まあ気を失って当然か・・・。

「いてててて・・・ここは・・・」

声を放ったびに、頭に痛みが響く。

ふと周りを見渡してみる。

それなりにふかふかなベッドが下にあり、部屋のあちこちに、鏡や棚などの日常品が置かれている。

何となくどこかの建物の中だと分かった。

ふと鏡を見ると、鼻下と服が赤く染まっている。

恐らく鼻血の赤だろう。

その鼻血は、あの強烈な蹴りでなのか、一瞬の強烈な興奮によるものなのか分からないが・・・。

しかしここはどこなんだろう。

そう思っていたら、左奥にあるドアがガチャッと開いた。

「おっ、目が覚めたか。いやーよかったよかった」

ドアの先には、左腕にタオルを掛けて持っている女性が現れた。
恐らくこの家の人だろう。

「あー、ここはどこですか？」

「ここはただの宿屋さ。なーに、お代はちゃんど彼女からもらってあるよ」

見た目も口調も若い姉さんと言う感じだった。

助けてくれたのは、おそらく鼻血の原因の子だろう。

あんな場所に他に女の人があると、到底思えなかった。

あの子・・・助けてくれたんだな。

しかも、町まで運んでくれたらしい。

「あの崖から落ちたんだって？よく生きてたわねー」

はつきりと記憶失う前の記憶は戻ってきているので、あの子が何か嘘でも言っただろう。

「あはははは・・・ほんとにラッキーでしたよ」

僕は笑顔で返し、つじつまを合わせておく。

まあ、本当のことなんて言えやしないんだが。

「あのーココに連れてきた人はどこに？」

一応合つて話をしておこうと思ったので聞いてみた。

「市場のほうに行くと言つて出たと思っけど？」

「ありがとうございます。えーっとな・・・」

「宿主のネルロスよ。出口はその扉を出て、廊下をまっすぐ行けば玄関があるから」

僕の考えていることが見え見えのようだ。

そして、よく頭が回る良い印象の宿主だ。

「じゃあ、その子に会いに行つてきます。ミライです。ネルロスさんありがとうございます」

「きおつけてね。市場はここを出てから右にまっすぐよ」

そう聞いてミライは、ネルロスの顔を見て軽く頭を下げる。

そして宿屋を出て市場へと向かうのだった。

第10層 「変態！」の子

外の景色と言うよりは、町の景色だろう。

街灯がてらされていて、町並みはおとぎ話のような洋風の田舎と言った感じがした。

しかし、日が暮れるまで気を失っていたとは……。

そう思いながら歩いていたら、市場らしき街路地に行き着いた。その道は出店のような店があり、ずらりと店が道の両脇にきっちり並んでいる。

人がちらほらいる市場の入り口で、見覚えのある髪色の子を見つけた。

恐らく間違いは無いと思うが、服装が前見たときと違う気がする。それは、学生の夏服のような感じだった。

ミライは、声をどう掛けようか迷っていたら、あちらの方から声を掛けられた。

「あら、やっと目が覚めたようね。私はミチよ。よろしくね変態さん！」

そうミチは、微笑みながら自己紹介。

それにしても、女の微笑みって怖いものだとつくづく思う。

「助けてくれてどうも。名前はミライで、変態さんではないから軽く冗談とお礼を混ぜつつも、お互いの自己紹介が終了。」

まあ、ミチは笑ってくれたから良い感じになったかな？。

「とりあえず君、服、着替えたら？」

ミライの服の血の跡を見ながらミチは言った。

僕もそれはずっと思っていたんだが、服が無いんだよな。

「服が無いから変えられないんだ」

「えっ？君しらないの？」

何が？と心の中で言い、首をかしげる。

「服はね、メニュー画面から、変えられるのよ」

「メニュー画面？」

首を傾げっぱなしで、聞き返す。

「ええっとね。こうしてっと・・・ほら！」

そうミチが言うと、ミチの目の前にネロが扱っていたような、電子画面が出てきた。

「おおー。で、どうすれば出るの？」

「この世界は、大体想像でできるって最初に聞かなかった？」

ミライは首を横に振る。

「まあ、いいわ。左手の甲を右人差し指で押して、後はイメージ！」

そう言われた通りにすると、ミチと同じ感じの画面が出てきた。

ミチより数倍大きい・・・。

「うわっ！」

あまりの大きさに思わず声が出る。

「まあ、慣れよ慣れ」

右上の×ボタンを押して一度消し、こんどは理想の大きさの画面を想い、画面を出した。

「あとは、ステータス画面を押して、服装を押して、あとはイメージね」

ミライは人差し指で、色々な項目の中からステータス画面、服装と順番に押して、服装を想像する。

暖かいし、夏の学生服・・・と。

そう思うと、一瞬で服装が変化した。

「うわっ」

驚いたのは一瞬だからではない。

目の前にいる人の格好と全く同じなのだ。

僕は、顔が赤くなっていくのを感じた。

「結構似合ってるわよ。それにしても、君、少し抜けてるって言わない？」

そう笑顔で聞いてくるミチ。

余計なお世話だ！と言う思いを押さえ込んでおく。

「あはははは・・・はは」

もう僕は、笑うことしか出来なかった。

今すぐにでも変えようと、メニュー画面を開こうとしたときだった。

「森から使者が来たぞー！」

市場の奥の方から声がした。

そして、町中に響き渡る、「カンツカンツ」と言う音。

すると、町中の人が瞬時にいなくなり、町全体からほとんどの人が消えた。

あまり騒いだ雰囲気でもなかったので、良くあることなのだろう。

そんな町の風景をぼーっと見ていたら、ミチがミライの手を引っ張り走り出した。

向かう先は、声での通告があった方。

「行ってみようよ！。ね？」

走りながら一瞬ミライの顔を見て言うミチ。

「え？ちよつと、ええー」

ミライは何も反応できずに、ミチの強い力に引っ張られながら、市場の奥へと走るのだった。

第11層 イベント戦

長いようで短い市場の道を抜けたら、円状の広場へと出た。広場奥には、3体のモンスターと、1人の青年が戦闘していた。

3体のモンスターは、2体は崖のところで見えたマンティスで、もう1体は・・・イノシシかな？

イノシシみたいな奴の大きさは4m位と、とにかく大きい。マンティスよりも2倍近く大きく見える。

青年の方は、右手に大きな剣を持って振り回してる。

ただ、左手を怪我しているらしく、その手は血で染まっっていて動かない。

しかも、剣の振りが遅くてモンスターにかすりもしない。

「あんなの一人じゃ勝てないわ！ほら、助けに行くわよ！」

ミチはそう言い両手に剣を装備し、青年の方へと走る。

確かに、あの状況はどう見たって青年の方が不利だ。

このままでは、あの青年は死ぬかもしれない。

とりあえず僕に出来ること・・・。

「とりあえず、アペンシス！」

そうとう遠距離から発動したが、情報を読み取ることが出来た。声を出してしまうのは、もう癖だな。

とにかく、情報は公開しておこう思い遠くの方へと叫んだ。

「ミチ、ユミルさん。2体のモンスターはマンティスで、1体の方はノス。レベルはどちらも17レベルです」

「君は面白い技おもっているんだな。人の名前が分かるなんて」

「さすが変態ね！」

遠くにいる2人に大声で教えたら、大声で変態だどと声が返ってきた。

それにしても、確かに2人の所からも、ステータス情報が出てきた。

魔力使わないで出せるのに、結構使える技かもしれない。

そんなことを思っていたら、遠くから声が聞こえた。

「ミライ！早く君も戦闘に参加してよ！」

そんなミチからのお叱りが入った。

「わかったー。今行く」

ミライはそう言って、戦闘の行われている方へと向かっていた。

第12層 イメージ魔法

近くで見るとやっぱりモンスターは大きい。と言っても、中距離に立ってからの感想だが。

ミチとユミルさんは、うまく前線で戦っている。

ミライが何をしようかとおどおどしていたら、ミチから良い情報が来た。

「私のPTに勝手にミライも登録しているから、あなたもそれなりに強くなっただんじゃない？」

こちらに振り向いてミチは言った。

ミライはメニュー画面を開き、自分のステータスを見る。

「レベル9・・・か」

色々見たがそれぐらいしか分からなかった。

技も自分で登録しなければいけないという、めんどくさい設計。それにしても、レベルがもう8も上がっているなんて・・・。どれだけ戦闘すればこんなにも上がるのだろうか。

しかし、気を失っている間に何をしたらか後で聞いておこうか。でもレベル差8って大丈夫なのか？

そう色々考えているが、戦闘はおらない。

「きゃっ」

ミチがノスの鼻息で飛ばされ、民家に衝突した。

ユミルさんもふらついていて、そろそろまずい。

考えている暇はなさそうだ。

ミライは目の前に落ちていた木の枝を右手に持ち、右手を手を伸ばして枝を天に向ける。

目線はモンスター1点で、精神を集中させる。

「うおおおおりゃああああああ」

ミライは完全にイメージを膨らませて、そう叫んだ。

すると、ミライの真上に火の玉が出来ていた。

ミライの周りには、きれいな小さな魔法陣。

「ちょ、ミチ。ユミルさんっ。離れて！熱っ！」

イメーヂ外なのは、巨大な火の大玉だったこと。

早く放たないと、自分が溶けてしまいそうだ。

「ちょ、大きさを考えなさいよ！」

ミチがそう言い、慌てて逃げる

「大丈夫だー放て！」

ユミルさんも逃げきった。

モンスターは3体とも固まって、ミライへと向かってくる

「いけえええええええええ！」

ミライは叫び、右手と杖をモンスターに向ける。

すると、火の大玉は3体に向かって行き、包み込むように落ちる。

地面に火の玉が付くと同時に、もの凄い爆風がその場所から広がる。

「うっっ」

ミライは思わず声を漏らす。

3人はその光と爆風に、思わず目を腕で隠した。

その爆風は一瞬だけで、すぐに治まった。

3人は目を開け、爆発後の風景に近づいてを見る。

「あはっ、あははははははは・・・」

最初に声を出したのはミライだった。

喜べない笑い声が、夜の街に響く。

あの攻撃が落ちた場所は、深くは無いが穴があいていた。

モンスターの姿は、焦げたマンティスの鎌の一部だけだった。

「これは、さすがにやり過ぎじゃない・・・かな？」

ミチはそう呟くように言った。

「良いんじゃないか？勝てたんだし」

ユミルも、まだ困惑しているよう言った。

「そう、勝てたんだよね」

ミライは呟くように言った。

「うふふふふふ」

「ふっ」

「ははは」

ミチ、ユミル、ミライの3人はその状況に笑っていた。

その時だった。

ユミルが崩れるように倒れこむ。

「ユミルさん！」

ミライは大声で叫んだ。

「とにかく、宿に急ぎましょう！」

ミチはそう良い、ユミルを肩に担いで走り出す。

ミライも、手に持っていた木の枝を捨て、ユミルの持っていた剣を持って、ミチを追いかけ行くのであった。

第13層 お譲ちゃんのお買い物(前書き)

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第13層 お譲ちゃんのお買い物

どうにかユミルさんをあの宿屋まで運ぶことが出来た。

それにしてもユミルさんの大剣は、何で出来ているんだこれ？と言
うくらい重たかった。

僕はぜいぜい言っていたが、こんな重い大剣を持っている本人を
宿屋まで運びきったのに、全然疲れていないミチ。

宿屋に着いて、ユミルさんを僕が倒れていたベッドに寝かせ、一
息つく。

宿主のネルロスさんはこの町で医者もやっているらしく、ユミル
さんの治療を急いで行っている。

口で何かを唱えていたが、恐らく回復呪文だろう。

ミチは回復呪文を覚えたいと、ネルロスさんの隣に座っている。

僕はユミルさんの剣を綺麗にふき終わり、ユミルさんの回復をじ
っと待つ。

ぼーっとしているミライに対し、ネルロスが声をかけた。

「ちょっとミライ君。おつかい頼めるかしら？」

「いいですよ。何を買って来ればいいんですか？」

「えーと、そうねえ。ビーフ10個と、サフラン15個。市場の
方に売ってると思うから、お願いね」

「わかりました」

個数だったのが疑問に思ったが、とりあえず承諾した。

ミライは、ネルロスさんから指示された場所に置いてあるお金を
手に持ち、ネルロスに見せて確認する。

ネルロスは、無言でうなずきユミルの回復に集中する。

ミライは、部屋の扉と玄関の扉をそつと開け閉めし、市場へと向
かうのだった。

市場は、まるでさっきの戦闘が無かったかのように、元通り開い

ていた。

しばらく市場内を歩いていくと、目的の店らしい出店を発見した。

『草屋』という分かりやすい看板が立ってかけてあるので、恐らくサフランぐらい売られているだろう。

そう思いながら店の中に入っていった。

「いらつしゃい。何にするんだい？」

お婆さんが、椅子に座りながら言った。

「サフラン欲しいんですけど、ありますか？」

「あるわよ。何個いるんだい？」

やっぱり個数なのかと、聞いて思ってしまった。

「じゃあ、15個お願いします」

「はいよ。それじゃあ1500リピオンね」

お金に書いてあった、『rp』はリピオンと言うらしい。

ミライは恐らく1000rp紙幣だと思われる紙を、2枚お婆さんに渡す。

「ありがとうね」

お婆さんから、サフラン15個入った軽い袋と、100rpと書かれた硬貨5枚と、笑顔を受け取った。

「ありがとうございます」

ミライも笑顔を忘れずに返して、草屋を出て市場を進むのだった。

肉屋は、草屋を出てからすぐの所にあった。

名前もそのまま『肉屋』だ。

あの時は気がつかなかったが、焼いた肉も販売していたらしく、焼き肉のいい香りが

肉屋周辺を包み込んでいた。

ミライは、肉屋に入って行った。

「はい、いらつしゃい。何にするんだい？」

店に入っただけに太い声が飛んできた。

それにしても肉屋の店主は、脂の乗った泥棒髭の明るい店主だ。

「ビーフを10個ください」

「はいよ、1500リピオンね」

店主はそう言いながら、生肉を袋にがんがつめていく。

そういえば、ネルロスさん・・・生肉とか何にも言っていなかったな。

ミライは店主に、1500rp渡し、袋を受け取る。

「ありがとうございます」

もちろんお礼は笑顔で言う。

「ありがとうね。お譲ちゃん」

店主も笑顔で言葉を返した。

って・・・ん？

お譲ちゃん・・・？

ミライはあわてて店を出た。

現状確認は、目で見る必要も無かった。

足元が夜風で、すーっとして気持ち良い・・・。

完全に服装を変えるのを忘れていた。

顔の熱が、夜の気温に反発するように熱くなって行く。

もう、足元は見れない。

ミライは全力で走り出し、宿屋へと向かう。

スカートが風で揺れるとか、市場の人だとかを全く気にせず、ただ走り続けた。

そんなコスプレ500mを走り終えて、宿屋に戻ってきたのだった。

それでも宿屋の扉は、ゆっくりと開けた。

そして荷物を持ったまま、ユミルを治療している部屋を空けた。

部屋の中では、ユミルさんも回復したらしく、ミチとネルロスさんと話していた。

ユミルさんは、こちらに気がついたらしく手を上げてくれたが、その行動に対して、僕は妙ないらだちを感じた。

ミチとネルロスさんは、明らかに笑いを堪えているのが見て分かった。

その行動に、さらにむっとしつづ僕は思ったことをすべて言葉にした。

「ユミルさん怪我回復したんですね。・・・あと、どうして言ってくれなかったんですか！」

その言葉を言い切った瞬間、ネルロスさんとミチは笑いを噴出した。

「あははっ、似合っているわよその格好」
腹を抱えながら、そうミチは言った。

どう聞いても、嫌味にしか聞こえない。

この家ごと燃やしてやろうか！と、心の奥で叫ぶ。

「あの状況で言たと思う」

ネルロスさんも笑いながらそう言った。

正論なのが、余計に腹立たしい。

「この格好で町歩いたんですよ！」

言えば言うだけ、2人は笑い出す。

何を言っても笑いを作り出すだけのようだ。

そういえば、ユミルさんはポカンとしている。

と黙っていたら、ユミルは何か気がつくように言葉を放った。

「ミライ。お前・・・男だったのか!？」

そのユミルの発言で、ミチとネルロスはさらに笑い出した。

恐らく、もう笑いの頂点に達しているだろう。

「もおーいやだあー！ー！！」

ミライは顔を真っ赤にし、力が抜けるかのように叫んだのだった。

第14層 結束（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第14層 結束

しばらくして笑いも治まり、ネルロスさんは調理場に夕食を作りに行った。

ふと壁に掛かっていた時計の針を見てみる。

短針は、9を指していた。

もうこんな時間だったのか。

そう思っていると、ユミルさんが明るい空気の残る中、言葉を出した。

「さてと、ミライの性別もわかった事だし、改めて自己紹介だな」
一息ついてミチが言う。

「そうね。じゃあ私から！私のココの名前はミチで、そのままミチって呼んでくれて良いわ。あと職業は両手武器使いよ。こんなものかしら？」

続けてユミルさんも言う。

「では次は俺が。俺の登録名は、ユミルで、そのままユミルで呼んでくれて。敬語は堅っ苦しいからな。そして職業は見た通り大剣使いだ。まあ、こんなものかな」
もちろん順番で、僕が言う。

「僕は、ミライって言います。呼び方もミライです。職業は魔法使いです。以上ですかね」

とりあえずの自己紹介は終わった。

感想と言えば、全員がパツとしない職業だったな、という事。

自己紹介の後すぐに、ユミルが笑いながら言う。

「一応もう1度、性別も確認しとくか？」

「見た目通りよ」

ミチも、ちよつと呆れたじで笑いながら言った。

ユミルが笑いを落ち着かせてから言う。

「さてと、まず俺らは3人でPTを組んで進んでいきたいが、良い

か？」

二人は、ただただうなずいた。

ユミルが言葉を続ける。

「よし！それで目標は……」

「この世界を脱出する！」

ミチは大きくそう言って、腰掛けていたベッドから立ち上がった。

「でも、無茶して死なないようにね」

ミライも冗談交じりで言い、床から立ち上がる。

ミチとユミルは、その冗談は軽い微笑みで受け流した。

一息ついてユミルさんも立ち上がった。

そしてユミルは、3人の中心に手を出す。

ミチもミライも、その出された手に手を重ねる。

しっかりとした口調でユミルが言う。

「俺たちはこれからP.Tを組んで進んでいこう。どんなことがあっても、お互いに助け合って行こう！」

「おー」と言う掛け声は無かったが、3人が目を合わせ、腕を天井に向けた。

この時のユミルの顔つきは、物凄い信頼できるしっかりとした表情だった。

「でも、今日みたいに死にそうにならないでね」

ミチは微笑みながら嫌味なように言った。

それを聞いて、ユミルのあの表情は笑顔に戻った。

それからネルロスさんからの声がかかったのは、すぐのことだった。

どうやら夜飯が出来たらしい。

それを聞いてミチは、待ってましたとばかりに部屋を飛び出し、隣の部屋に向かった。

ユミルもやれやれと部屋を出ていく。

ミライもおいしそうな香りにつられるように、部屋を出て行くのだった。

第15層 カレーライス（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第15層 カレーライス

隣の部屋は思ったよりも広くて奥行きがあり、部屋の真ん中には貴族が持っているような長机が置いてある。

そして、机にはぎつしりと椅子が置いてあり、夕食らしいものが長机の奥の端に置かれている。

さらに長机の奥にはキッチンがあるので、ここはダイニングキッチンと言った所だろうか。

部屋中にスパイシーな甘辛い香りが漂い、食欲を引き立てて来る。部屋では、もうネルロスが一番右奥の席に座っており、その横にミチが座る。

そして左奥の席から順に、ユミル、ミライの順に座る。

「さて、後は自由に食べていいわよ」

ネルロスの言葉が食事の合図となった。

ユミルは、お腹が空いてたのか何も言わずに黙々と食べ進める。

ミライは、「いただきます」と一言言ってから一口、銀のスプーンでほおばる。

ミチは、手をつけなかった。

「どうしたの？早く食べないと冷めちゃうわよ」

一口食べて、ネルロスさんは不思議そうに言った。

「何これ？」

「カレーライス！」

ミチの問いに、ユミルが突然大声で答えた。

「知らない？色はともかく、味は確かよ。ほら、だまされたと思って」

ネルロスさんは楽しそうに言った。

それにしても、カレーを知らない人っているんだな。

スプーンはあんなに綺麗に持つのに……。

そう僕が思っていると、ミチは恐る恐るスプーンでカレーをライ

す多めですくい出し、1口ゆっくりと口の中に入れた。

「おいしい・・・」

ミチの表情が柔らかくなっていく。

ミチは、カレーライス of 存在を受け入れたように、勢いよく食べ始めた。

「ふふふ、どんなに早く食べても、おかわりは逃げないわよー」

そう、微笑みながらネルロスは言った。

たしかに、このカレーは癖がなくておいしいなーと、僕も思いながら食べ進めた。

「うまい！ネルロスさんおかわり！」

ユミルはいち早く食べ終わると、そう大声で言った。

「そこまで食べてもらえるところうれしいわねー」

ネルロスさんも照れくさそうにそう言い、おかわりを注ぎにキッチンまで行った。

そんな絶品のカレーは、あっという間に底をつき、全員が満足した食事となったのだった。

第16層 ココに來た理由、ユミル（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第16層 ココに来た理由、ユミル

食事の後は、全員解散と言うことで自由行動になった。

ミチは指示された場所の風呂に行つて、ユミルはトイレに駆け込んでいった。

僕はと言うと、ネルロスさんの食器の片づけでも手伝おうかと思つたが、あっさり断られてしまったので、さっきの部屋に戻ることにした。

部屋の中に入り、立ち止まる。

そういえば、買い物前は血だらけだったベッドは、純白で清潔なベッドに変わっている。

そんな綺麗なベッドに座つて一息つく。

今思えば、今日は色々ありすぎた。

突然の洞窟の中の世界、突然の仲間、突然のパンチラ……。色々今日を思い出していたら、あの出来事を思い出し、顔を赤くした。

「ふうー。おつミライ。どうした？」

トイレが終わつたのか、当然扉からユミルが入ってきた。

「風呂でも覗いてきたか？」

そして、入ってきてこの一言である。

「そんな覗くわけないだろー」

ミライは、棒読みで言った。

「なんだ、つまんないの。よいしょつと」

そう言つて、同じベッドの、ミライとは反対側の方にユミルが座つた。

「今日は、助かったよ。色々」と

突然ユミルが呟きだす。

「僕は助ける気なかつたですよ。ミチに引っ張られて助けただけです。感謝するならあの子にですよ」「

ユミルと全く同じような、まじめなトーンで返す。

顔はお互い反対方向だから、表情は分からない。

「急に大人になったな。でも、結局君の魔法で助かったんだ。君は強いよ」

ユミルは楽しそうにそういうが、言葉は真面目だった。

「ユミルが15でミチが13。僕はまだ9だよ」

「レベルの数字なんて、ほとんど意味ないさ。ところで・・・」

ユミルはそう言うと、すたすたと歩いて、ミライの目の前の床に座った。

戦闘の時には見れなかった、ユミルの姿があった。

髪は鮮やかな緑色で、少し焼けた肌、若干赤みがかかった目。

そして、よい肉付きの体で、特に腕はそんなに太くは無いが、筋肉だけだっけ言うのが見て分かる。

「俺は、正直・・・あの戦闘で死のうと思ってた」

表情のくもっているユミルが、そう言った。

返す言葉が見つからない。

ユミルが、少し間をおいてから話を進める。

「俺にも仲間がいた。ここに来る前から、来てからもだ」

「ユミルは、どうしてこの世界に来たの？」

少し話をそらすかのように、ミライは言った。

「ああ、俺は向こうでは、採掘業をやっている。毎日せつせと働いてたよ」

ユミルの表情は、もの凄く遠くい過去を見ているようだった。

「しかしある時、突然採掘場所に得体の知れない大きな穴が現れたんだ」

どうやら、世界中のあちこちで穴が出来たのは本当のようだ。

ミライは、ただうなずいた。

「無法の採掘かと思って、同僚の一人がその穴に入ってしまった。そしてすぐに出てきたと思えば、死体で出てきやがった」

ミライはうなずくことしか出来ない。

「何かあると思って、俺を含めて5人がこの世界に入り込んだんだ。正直最初ここに着た時は、驚きと楽しさがあった。でも、他の奴らは、この町に来るまでに消えていった。はっきりと覚えているし、思い出せるよ。」と言うより、時々思い出してしまふ。正直、あいつらの消えていく姿を思い出すのが死ぬほどつらい。だから、あの明らかに勝てそうになさそうな、モンスターの集団に俺は突っ込んで行っただ」

ユミルはそう言い切ったが、まだ表情に違和感が残っている。

「じゃあ、良かったです。自殺を止められて。ちゃんと生きてくださいよ。その人たちの分まで」

ミライはそう言うと、ユミルはポカンとしていた。

「死を見たら、その死を受け入れ背負って生きろ！って、何かの台詞で見ましたから」

ミライはそう笑顔で言った。

「ははは、そちらの世界はだいぶ発達しているようで」
そうユミルは言ったが、いまいちその言葉を理解できなかった。

「さて、俺は話したぞ。次はミライの番だな」

「えー」

完全なユミルの不意打ち攻撃だった。

「そんなに深い重い話じゃないよ？」

女の子について行ったらここに来た、なんて言えるはずがない。

「ははは、かまわん。早く話せ！」

ユミルはニヤニヤしながら、こちらを見てくる。

もう逃げ切れそうに無いようだ。

「はいはい。えーっとね・・・」

ミライは、不意打ち攻撃をかわせず、ここに来るまでの話を淡々と話始めるのだった。

第17層 うまい1日(前書き)

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第17層 うまい1日

「・・・と、言うわけで今の状況があるわけです」
「なるほどねえ」

ユミルの会話が嘘だったかのような楽しい感じだった。
話が重くなる事が無かったのは、何よりユミルの対応というか、突っ込みがすごかった。

少女について行ったと言えば、「おまえはロリコンか！」なんて言葉で帰って来たりした。

「それにしても・・・」

ユミルが話を切り替えるように話し出した。

「それにしても、やっぱりネロさん良かったよな」

そう言った時のユミルの顔はにやけていた。

「僕には刺激が強すぎましたよ・・・」

そう返すと、ユミルが大声で笑いだす。

「でもいいよなー、俺はそんなに長いことネロさんと話さなかったぜー、羨まし過ぎる」

5人で行ったんだから当然だろ。

その言葉を心にとどめつつ、言葉を返した。

「心外だよ！それにしても悪女だったと思うな」

「それは見た目の問題だろうよ」

ユミルの返しに、2人で笑い出す。

そう笑いだした瞬間に扉がガタンと開く。

「2人とも、ちょっとうるさいわよ！」

そう言つて、ネルロスさんが出てきた。

思わずビクツとなつてしまった。

「すいません」

ユミルが軽く、まじめ口調で返した。

ミライも続けて同じ言葉を言い、視線をユミルからネルロスさんに

向ける。

ネルロスさんを見た瞬間に、思わず目をそらしてしまった。ネルロスさんがこわい顔をしていた訳ではなく、何というか、格好が異常だったのだ。

風呂上がりだったらしく、きれいな金髪は湿っていてタオルを頭に巻いている。

そして、緑で縦縞のパジャマ姿。

サイズが間違っているのじゃないかと思ってしまっほど、さっきまで目立たなかった大きな胸が、パジャマをはち切るうとしてしている。

パールの下着がはみ出て見えるのですが……。

ちよつと隣に目を向けると、ユミルが口を空けて胸をうっとり見ている。

どこかに行ってしまったようなユミルを、指でつついてやる。ハツと目が覚めたかのような反応をして、こちらをにやけ顔で見ている。

こいつ、かなりのヘンタイだ！

そう思っていたら、ユミルが自分の鼻を指で指し、鼻下をこすつてミライに見せる。

まさかと思い、自分の鼻下を右手人差し指で触れる。ベトツとしたものが指に触れた。

その指を見ると、ものすごい鮮やかな赤色が、指についていた。やってしまったと、顔が赤くなっていく。

顔が赤くなっていくに連れて、鼻下の赤さも増している気がする。ユミルがミライの鼻を指差し、笑い出す。

「これ以上この部屋を、血で汚さないでくれる？」
ネルロスさんが、笑顔で呆れながら言う。

「すいません」

ミライが鼻を押さえながら言い、ネルロスさんにふたたび視線を向ける。

ふとネルロスさんの後ろを見ると、パジャマ姿のミチがいた。

ミチもこの光景を見ていたのだ。

ミチの哀れなものを見る目がこわい。

そう思っていたら、ネルロスさんが僕らに向けて言った。

「ほら、男共は2階ね。ココは客室じゃなくて私の部屋なんだから。まさかタンスの中とか見てないでしようね？」

そう聞いて、ベッドから立ち上がるユミル。

そして何かを思い出したかのようにミライに言った。

「おまえ、あの時の顔は、まさか・・・」

何のことだろうと一瞬考えたが、それもすぐに思い出した。

「あの時は違う！」

そう大きく批判を声に出したが、顔が赤くなり、思わず鼻を押さえってしまった。

「ほら、もういいからさっさと行った！」

呆れたようにネルロスさんが言った。

女2人の目線が怖い。

そう思いながら、その場から立ち上がって目を合わせないように、ユミルとミライは二階に上がっていくのだった。

2階には部屋がたくさんあったが、一番奥が開けっ放しだったので、そこを使えと言う事とすぐに分かった。

そして真っ暗でほとんど何も見えない中で、ユミルが先に入ってすぐ近くの右のベッドに跳びこむ。

ミライも、入ってドアを閉めて反対側のベッドの布団に入る。

ユミルは全く動かなくなったので、寝たのかと思いきやミライは目をつぶる。

「今日は、いろいろとうまかったな」

寝ているかと思っていたユミルは、突然の呟いた。

起きていたのかと思いつつ、その呟きを無視して、ミライは眠りにつくのだった。

第18層 朝早く(前書き)

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第18層 朝早く

「な、何だこの巨大なモンスターは！こっちに倒れてくる！？ちよ、ちよつと！うわー！」

ぐしゃり。

「はっ！」

ミライは、突然目を覚ました。

もの凄い悪い夢を見ていたようだ。

それにしても、体が動かない。

天井に向きっぱなしの自分の顔を、無理やり動かし辺りを見る。

そして、現状を把握した。

ここは、どうやらベッドの下の床のようだ。

ベッドが左右見えると言うことは、ベッドとベッドの間に落ちたのだろう。

そして、体が動かないのは、上に僕よりも身長が高く、体のつくりも良い人が乗っていたからである。

ミライは、ユミルの体からうまくすり抜けて、ユミルを床にそっとな寝かせて、ユミルにかけ布団をかける。

ふと壁にかかっている時計をミライは見る。

「5時ねえ……」

見えた時間を口にし、体を伸ばす。

体が汗でべたついて気持ち悪い。

そういえば、風呂あったよな…。

そう思いながら、ミライは部屋を出て行ったのだった。

風呂は1階に在るのは分かっていたので、迷わず来れた。

『入浴場』と、分かりやすく立てかけられた看板の扉を引いて開

ける。

「結構広いなー。ん？」

ミライは、脱衣所を見てそう呟いた。

たぶん風呂がある方の扉の向こうからだろうが、シャワーの音が聞こえてくる。

こんな朝早くから、ネルロスさんは掃除を始めているのか。

そう思いつつ、シャワーの音が聞こえてくる扉を、ガラガラと開けた。

「ネルロスさん。シャワー使ってもツノアツ！」

突然目の前に飛んできた木の桶を避けられず、ミライは後ろに大きく倒れた。

「馬鹿！何で入るのよ！」

ミチはそう叫んだ。

どうやら風呂に入っていたのは、ミチらしい。

何でこんな朝早くに…。

「ごめん」

そう謝って、ミライは入浴場を立ち去るのだった。

入浴場からすぐ近くの所にある、あの食堂。

ミライは、その食堂の一番手前の席に座っていた。

机の上に手を組み、そこに顔を置き、うつ伏せで目をつぶっている。

ミライはそこで、何も考えることもなく、ただ時間が流れを感じていた。

しばらくすると、少し怒った口調の女性の声が聞こえた。

「風呂、空いたわよ」

ミチはそれだけ言うと、スタスタ歩きネルロスの部屋に入っていた。た。

それを聞いて、ミライは無言でその場から立ち上がった。

そして、ただシャワーのことだけを考えて、入浴場に向かうのだった。

第19層 食事時の訪問者（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第19層 食事時の訪問者

「どうした？ミライ、その跡」

ユミルが疑問そうに聞くのも無理は無いだろう。

ユミルは質問した跡、ユミルは朝食のサンドイッチを口にほおばる。

その跡というのは、風呂場の鏡で確認したが、僕の顔に付いた長方形の真つ赤な跡だろう。

この跡をつけた本人さんは、飲み物のミルクを飲んで、ただじつとこちらを見ている。

「僕にも見に覚えが無いんだ。寝跡…かな？」

とにかく何でもいいから誤魔化そうとするミライ。

「なんか悪いことでもして罰でも当たったんじゃない？」
ミチが笑顔でそういった。

当たったのは罰ではなく桶だが…。

そんなことを思っていると、玄関の扉が叩かれた。

「ネルロスさんや、おるかの？」

「はい、今行きます」

そう言うとネルロスさんは、コップいっぱいミルクを一気に飲み干し、椅子から立ち上がり、玄関へと向かう。

こんな朝早くから、誰なんだろうか。

そう思っていたら、ネルロスさんに連れられて、小さな爺さんが食堂に入ってきた。

その爺さんは入ったとたん、なぜか驚いた表情をしていた。

「町長、この子がミライです」

そう言っつて、ミライの方を指差すネルロス。

「ほほっ」

町長の爺さんは、そう言っつと軽くうなづく。

そして町長は、食堂の長机の、ちょうど中心の席に座る。

これから何が始まるのか、予想も付かなかった。

ただ言えるのは、昨日の事件は恐らく絡んでいるということ。

「ここにワシが来た理由は、ちよつと君らに頼みごとを願いに来たからじゃ」

無の空間の中、突然長老は3人を見ながら話し出した。

ネルロスさんが、食堂入り口近くの椅子に座る。

「ワシは困っておったんじゃ。それも長いこと。だが昨日、妙な噂が耳に入ってきたんじゃ」

町長は、ミライの方を向き息を吸う。

「森の使者をたった一撃で倒したという魔法使いが現れた、との」

町長はそう言うと、ニヤリと笑みを浮かべるのだった。

第20層 昔話（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第20層 昔話

町長の言葉は、食堂内時間を一瞬止めた。

ユミルは、ミライをジーと見る。

ミチも、ミライを見つめているが、表情は納得いつてないようだ。

「で、頼みごとって何なの？」

ミチはそう言い、時間の流れを切り返した。

「この町を、モンスターの脅威から救ってほしいのじゃ」

「何故この町には、モンスターが時々入り込むんですか？」

ミライが、町長に向かって言った。

「おほん。まあ、そうじゃな。ワシが生まれる前の昔話でも少し話そうかの」

町長は、少し遠くを見るように言った。

町長に、4人の目線が行く。

そして、町長は昔話を始めるように、ゆっくりと話し始めるのだった。

昔、何年も何年も昔のこと。

ピナンケという小さな町が在りました。

そこは、モンスターの住む世界と対立することもなく、ただモンスターと決められていた境界線を境に、平和に暮らす町でした。

そんな平和な町に、とある一人の若者がやってきました。

その若者は、地形に詳しく、この町は裕福な国にしようと考えました。

そんな若者の考えを、その町の町長さんが受け入れ、若者を町が歓迎しました。

その若者は、山にある鉱石を集めて、いろいろな物を生み出し、それはお金に代わり、それはそれは裕福な町へと発展を遂げました。

しかし、その鉱石を採る量には限りがあり、とうとうピナンケの

周りの山からは、鉱石が採れなくなりました。

そして、若者は町長の反論も無視して、モンスターの住む境界線へ足を踏み入れたのです。

そこには、若者の思った通りたくさんの鉱石がありました。

しかし、若者たちが順調に鉱石を集める中を、モンスターたちに見つかってしまったのです。

若者は、仲間と共に、そのモンスターたちを殺めました。

そして、若者たちが町に戻ったとき待っていたのは、ボロボロになった町と、モンスターの世界の長と、町長と数少ない人たちでした。

モンスターと話せる女性により、モンスターの長とは、この若者と町の大切な種を渡すことで、また元通りの関係になることにした。

そして、その約束を守るため、モンスターたちの約束の地へ、町長と、若者と、モンスターと話せる女性が、向かうことになったのです。

しかし、約束の地には、モンスターの長はいませんでした。

モンスターの長は、死んだらしく、新しい長がそこにはいたのです。新しい長は、古い長の考えが気に食わず、町長も、若者も、女性も、みんな殺してしまいました。

そして、新しい長は、ピナンケの人を許すことはありませんでした。

こうして、モンスターと人は、対立し合う関係になったのです。

第21層 難しい依頼（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第21層 難しい依頼

「まあ、こんな事があつての」

「で、この町を救えということね」

ミチの言葉に、町長はうなづく。

切り返しよくやったミチ！と僕の心の中にとどめておく。

と言うのも、数回にわたって同じ話が町長の口から出ていたのである。

あまりの話の長さや重さで、隣のユミルは完全に右手を付き、眠っている。

「で、私は救う気満々だけど、あなたたちはどう思う？」

ミチは、ミライとユミルにそう聞いた。

ミライは、ユミルの肩を左人差し指で強めに突き、ユミルを起こした。

「正直、死と隣り合わせだから……ねえ」

「もちろん、それに見合った報酬を出そう。10万リピオンでどうかの？」

ミライの軽い批判に、町長が答えた。

10万リピオンと言う言葉に、ミライとミチは驚いた表情を見せる。

「俺は助けるに賛成だ。報酬も良いし、それより俺たちならいけると思つ」

寝起きとは思えないユミルの発言だった。

気がつけば、全員の視線が、ミライに集中している。

「多数決の通りです。それで、どうすれば良いんですか？」

ミライはそう答え、町長に視線を向ける。

「それはまた後日話をするにしよう。その時資金も持ってくる。

おお、自己紹介がまだじゃつたの」

何かを思い出したかのように言い、席から立ち上がる町長。

「わしの名は、リケード・ガープ。ガープでよい。では、また明日こちらに伺うとしよう」

「ミチです」

ガープの自己紹介の後、ミチは名を名乗り、席から立ち上がる。

「ユミルです」

「ミライです」

ユミルもミライも、ミチと同じ行動を取る。

ガープは、何も言わず、少し軽い表情をして、食堂を出て行く。

「じゃあ、私は町長さんを送ってくるわね」

そう言つて、ネルロスも立ち上がり、ガープについていく。

そして、玄関の扉が開いて閉まる音が、無音の食堂に響き渡った。

「ふわー。終わったー」

そう言つて、ミチが崩れるように席に着いた。

「て、本当に行くんだよね。死んだりしないか？」

ミライも本音を漏らしつつ、席に座り、腕を机の上で組み、そこにあごを乗せる。

「死んだら、ねえ…」

ユミルも席に座つて呟く。

「ところで、よく寝起きで賛成なんて言えたな」

ユミルに向かつて、未来は聞いた。

「あれは…何となく言葉が出てきた」

ユミルの言葉に、2人は笑い出した。

それに釣られてユミルも笑った。

「さて、今日はどうする？何する？」

ミチは、何か行動しないと落ち着かないようだ。

そして、3人は今日の空白をどう埋めようか、しばらく考えるのだった。

第22層 初級依頼講座（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第22層 初級依頼講座

宿屋を出て、右手の例の市場を進んだ先で、あの戦闘が行われた広場に入る前の地点。

そこに、ミライたちは来ていた。

「この掲示板の依頼をこなして、お金稼ぎが出来るんだ」

そう言つて、大きな木で出来た掲示板を指差すユミル。

「そんな情報初めて聞いたし…」

ミライは呟くように言つた。

「ネロさん情報」

ミチとユミルの声が重なり、2人は笑い出す。

「え・・・」

そう言つてミライは、ポカーンと口を開いたままにしている。

「ふふ、その感じだと、本当に説明聞いてないみたいね」

そうミチは、笑顔で言つた。

ミチは言葉を続ける。

「簡単に言つと、基本的に依頼でしかお金は入らない。モンスターは、お金落とさないし、アイテムだつてめつたに落とさない。まあモンスターから貰えるのは、ほぼ経験値ぐらいね。だから私たち挑戦者は、依頼でお金を稼ぐしかないのよ」

ミチは、説明を淡々と言つた。

その説明を聞いて、ユミルはうなずいていた。

色々言われたが、長すぎて頭に入つてこなかったんですけど…。

しかし、そういえば挑戦者だったんだな…。

「なるほど、わからんが要するに依頼受けてみるってことね」

ミライは、無表情で思うがままに言つた。

ミチは、ミライの言葉に笑いながらうなずいた。

「ま、今日1日何もすることないし、依頼受けることにするか。で、どうするの？」

ミライは、掲示板を指で突きながら言った。

「まずはな、メニュー画面を開いて……」

「それから、右上の依頼って所をね……」

こうしてミチとユミルの、『依頼の仕方講座』が始まったのであった。

第23層 長時間依頼（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第23層 長時間依頼

依頼を受けるのは、とつても簡単だった。

メニュー画面を開いて、依頼という枠を押して、依頼を取り込むボタンで、依頼を取り込めば良いだけだ。

ただ……。

「依頼って、こんなに時間掛かるのか」
思わずミライは声に出した。

ミライは、依頼をこなすために2人とは別行動を取っている。

ミライの現在地は、この町の一番南の道。

空を見上げなくても、空の色がオレンジ色なのが分かる。

依頼始めたの、昼前だったよな……。

もう何時間たつのだろうか……。

依頼と共に教えてもらったメール機能も活用しているが、2人とも発見したと言う報告が無い。

ミチからのメール件数30とか…探すのに専念してほしい物だ。

ユミルは、なかなか返信しないタイプだ。

探しているのか心配になるが……。

探すと言えば、猫のことだ。

『迷子の猫探し』これが、今回の依頼内容。

しつかりと、探す猫の名前も画像もある。

猫の名はマロンで、虎模様の虎のような目立つ猫だ。

しかし、そんな模様なのにここまで見つからないものなのだろうか。

しかし、この依頼の設定にも問題がある。

依頼は、一度受けるとキャンセルできない。

選択肢は、依頼クリアするか、死んで依頼永久実行不可能になるかのどちらか。

もう少し甘い設定にしてくれよ…と、ネロさんを思い出しながら、そう思った。

ミライは、南の道を色々考えながら歩いている。

しばらく歩いていると、ユミルから珍しくメールが届いた。

『依頼の猫が見つかった。これで依頼終われるぞ！早く掲示板前に戻って来い！』

その文章を見て、ミライは思わずガッツポーズをした。

やっと終わったのか！。

もう、二度と依頼なんてしない！

そう思いながら、来た道を走って戻るのだった。

第24層 依頼不無事完了（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第24層 依頼不無事完了

ミライは、掲示板のあるところへ向かって歩いていった。

この辺を曲がって、まっすぐ行けば着くはずだよな……。

そう考えながら、十字路を右に曲がろうとした。

その時だった。

「うわっ」

「きゃっ」

ミライは、曲がる時に誰かとぶつかり尻餅をついた。

ミライは、すぐに立ち上がって、尻元を軽く両手で掃った。

「ごめんなさい。大丈夫ですか？」

そう言って、ぶつかった相手の方を見た。

そこには、小さな女の子が開脚状態で座っていた。

それにしても、おしゃれな格好をしている。

青髪の、ロングのツインテールの綺麗な女の子。

その体で、そんな大人のパンツは無いと思うが……。

そんなこと思っていたら未来の目線に気づいたのか、女の子はス

カートを押さえて、頬を赤くそめながらこちらを見た。

正直、少女のパンチラなんか興味ないのだが……。

ミライと少女の目線が、しばらく合い続けて無言が続く。

「君、怪我してない？大丈夫？」

あまりにも立ち上がらないので、ミライは右手を少女に差し出した。

「うるさい！」

「えっ」

少女の突然の声と共に、左腹部の激痛を感じた。

気がつけば、少女はその場から立ち上がっていた。

ミライの胸元ぐらいの身長だった。

「ばーか！」

そう言って、少女はミライの歩いてきた方向に走っていった。

ミライは、その少女の姿を目で追いかけることしか出来なかった。そして、何となく少女に向かってアペンシスをかける。

「ははは、28レベルね・・・」

少女のステータスを見て、思わず呟くミライ。よく生きていたな、と自分でも思ってしまった。しばらくすると、少女の姿は見えなくなった。

左腹部を手でかばいながら、その場に待機していたら、遠くの方からミライに向けての声が聞こえてきた。

「おーい。ミライ」

そう掲示板のある方向から叫んでいたのは、ミチだった。

ミチはこちらに向かって手を振っている。

後ろには、ユミルもいるようだ。

ミライは、ミチたちに向かって、手を振り替えした。

そして、目の前の水溜りを踏み越えて、ミチたちの所へ走って向かうのだった。

「じゃあ、依頼の画面で、依頼完了って所押して終わり！」

ミチは、そう猫を抱えながら言った。

ミライは掲示板前に立って、依頼完了ボタンを押した。

すると、ミチの抱えていた猫は消えて、依頼完了の文字が目の前に浮かび上がった。

「やっと、終わったー」

ミライは思わず声に出した。

「そうだな。こんなに掛かるのも珍しいがな」

そう言っつて、ユミルは笑う。

ミチは、両手を挙げて体を大きく伸ばした。

それに釣られるように、ミライも体を大きく伸ばした。

「んんー。あれ？」

ミライは、何かに気がついたように言った。

視界が…歪んでないか…？

そう感じた瞬間ミライは、突然地面に背中から倒れていった。

「ちよっと、ミライ？ミライ！しっかりして！」

ミチが、ミライを揺さぶりながら叫んでいる。

「とにかく宿まで運ぼう！」

ユミルはそう言つと、ミライを背中に軽々抱えた。

ミチとユミルは、宿屋までミライを急いで運んでいく。

ミライは運ばれていく中、だんだんと意識が遠のいていくのであった。

第25層 信頼と二度寝（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第25層 信頼と二度寝

真つ暗闇な世界。

ミライは、そんな世界に1人立っていた。

誰もいない、何も無い、寂しい世界。

自分の手を見るが、今にも消えてしまいそうだ。

ただ、何だろうか。

足元と胸元から、力がわいてくるように温かい。

そして、ぬるっとしている。

ん？ぬるっど……。

「うわっ」

変な感覚を感じて、ミライは叫び、目を覚ます。

何だ…、あの闇の世界は夢だったのか。

ミライはホツと胸をなでおろす。

たぶん外からだろうが、鳥のさえずりが聞こえる。

そして、足元からは2つの寝息が聞こえる。

「いいやつらに会ったな……」

2人を見て、そう呟くミライ。

そして、ミチの長く甘い香りのする髪を、指でなぞる。

これだけ可愛いなら、足元が唾液で汚されていても憎めない。

少しだけ、ミライは笑みを浮かべた。

そして、部屋内の無音の時間が、ゆっくりと進んでいく。

ミライは、そんな時間を幸せに感じるのだった。

無音の薄明るい空間の中、左の扉がひとりでに開いた。

そこからは、ネルロスがゆっくりと入ってくる。

そして、ベッドの上で起きているミライに気づき、少し笑顔になった。

「あら、ようやくお目覚めね。お二人さんはどうするっ？」

「このままでいいです」

「そう」

ネルロスは、ゆっくりと歩き、ミライが寝ている所の左の位置の椅子に座った。

「まだ完治したわけじゃないから、あまり無理はしないほうが良いと思うわよ」

「わかりました。でも、ネルロスさん。僕は、いったい何が・・・」
「左腹部損傷および、肋骨の左側の一番下が折れてたわね。そうとう重症よ。いったい何があったのかしら？」

ネルロスは、少し機嫌が悪いように聞いてきた。

機嫌が悪いのじゃなくて、心配しているの間違えか。

「少女に、左腹殴られただけです」

「ふふ、災難なものね」

ネルロスは、目を細めた笑顔でそう返した。

「まあ、ここまで直りが早かったのは」

「この2人のおかげ、ですかね。まあ、ネルロスさんの治療あってこそですけど」

ネルロスの言葉を途中で切り、ミライは軽く笑いながら言った。

「ちゃんと、感謝しておきなさいよ」

ネルロスは微笑みながら言った。

「もう、とつくにしていますよ」

ミライも、微笑みながら言う。

「その様子だと、もう大丈夫そうね。じゃあ私は、そろそろ仕事の方に戻るわね」

ネルロスはそう良い、椅子から立ち上がる。

「ネルロスさん。ありがとうございます」

ミライは、部屋を出て行くこうとするネルロスの背中に向かって声をかけた。

「ふふふ、どうも。治療費と宿代は、後から3人分きっちり貰うからねー」

そう言つて、ネルロスは部屋をゆっくりと出て行った。
ちやつかりしているな！。

そう思いつつ、ミライはゆっくりと目をつぶる。

「すー・・・すー・・・」

ミチの寝息が響く。

「すうー・・・ぬうー」

ユミルの寝息と寝言も響く。

そんな静かなオーケストラのような寝息たちを聞きながら、ミライはもう一度、浅い眠りに付くのだった。

第26層 3日後（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000 Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第26層 3日後

ミライは、甘い匂いに起こされることになった。
匂いは、恐らく食堂の方からだろう。

起きてすぐにベッドを見るが、2人の存在は無かった。
まあ、食堂から声が聞こえるから、2人とも食堂だろう。

ミライは、ベッドの上であぐらをかく。

そして、お腹の左の方を優しくなでてみる。

思ったより痛くない…かな？

それにしても、1日でここまで治るとは…。

そう思いつつ、ミライはベッドから降りて、食堂の方へと向かうのだった。

食堂と廊下との間に、扉は無い。

そのため、ミライが食堂に向かっていく姿は、ミチたちにすぐに気づかれた。

ユミルは、ミライの姿に気がつき、「おお」と目を丸めながら言った。

ミチは、今にも泣きそうな表情だ。

「おはよーございまーす」

ミライは、3人の視線を感じながらも、軽い口調で言った。

「久々に目覚めて、第一声がそれか？まあ、いいけど」

ユミルも軽い口調でそういった。

「ばか！もう目が覚めないのじゃないかって心配してたんだから」

ミチは、席に座ったまま泣き出してしまった。

「あーミライ。女は泣かすなよー」

ユミルはそう言うが、顔は笑っていた。

「帰り遅くなった、ごめん。て、半日寝てただけでしょ」

その言葉で、ミチは泣き止み無言になった。

「いや、君、3日は寝てるから」

ミライの言葉に、ネルロスさんが冷静に言葉を返した。

「え…3日？」

「たしかに3日だ。いや、3日と半日だな」

ユミルも冷静に言葉を返してくる。

え、状況がつかめないのですが。

僕は、あの少女に殴られて、3日間眠りについたらと。

確かに言われてみれば、お腹の空き具合がすごい気がする。

「え、じゃあ、えーっと…ガープさんは？」

「とつくに来て行ったよ。凄腕魔法使いさんに会えなくて残念そうだったけど」

ユミルは問いに答えると、どこからか袋を取り出し、こちらに見せてきた。

中身は聞かなくてもお金だろうと想像できる。

「なんだか…」

ミライは、その先の言葉が詰まる。

「なんだか？」

ネルロスさんは軽く聞き返す

「なんだか、色々悪い事した気分だ。何も悪さした覚えはないのに」

ミチとネルロスさんは、軽く笑いを噴き出した。

きつと悪い事に対する引っかかりが有るのだろう。

「さて、早くミライ君もこっち来て朝食食べてよね」

ネルロスは、そう言っつて雰囲気の流れを切り替えた。

そして、ミライは言われるがままに席に着き、机の上に置かれたホットケーキを勢いよく食べ始めるのだった。

第27層 出発（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第27層 出発

だいぶ遅めの朝食を食べ終えて、ミライたちは宿屋の玄関前にいた。

「本当にもう行くの？」

扉越しからネルロスさんは、心配しているように言い、ミライの方を見る。

「準備も出来てるし、ミライも問題ないと言っているから大丈夫です！」

ミチは、はつきりとした口調で言った。

ミライも、ネルロスさんを見てうなずく。

ネルロスさんは、まだ不安そうだ。

正直言つて、まだ大丈夫が分からない。

でも、ミチと考えが一緒だから無理にでも行こうと思った。

「早く解決できれば、この町も早く平和になるから。だから今日で良いんです」

ミチは、自分の考えを主張し、ほほ笑んでみせる。

「そう、なら止める気はないわ。気をつけて」

ネルロスはそう言つて、笑顔を3人に向けた。

「じゃあ、行つて来ます」

ユミルは、そう言つて笑い、先に歩き出した。

「ちよつと先行かないでよー。じゃ、また来ます」

ミチもそう言つて、ユミルを追いかけて行つた。

「本当に大丈夫？」

ミライが別れを告げる前に、ネルロスさんが聞いてきた。

「心配ないです。2人がいれば何とかかりますよ」

「そう」

ミライの言葉に、ネルロスもほほ笑む。

「それじゃ、行つてきます」

ミライはそう言い、軽くお辞儀をして2人を追いかけていった。

「行ってらっしゃい」

ネルロスは、そう言つて3人を見送つた。

ミライは、少し歩いた所で後ろを振り向き、宿屋を見る。

ネルロスさんは立っていたが、まだ心配しているのか、表情は曇っていた。

そこまで心配しなくても良いのに…まあ、うれしいことだが。

そんなことを思いつつ、ミライは先に行つた2人の方へと、走つて向かうのだった。

ミライたちは、市場を通り、広場を越えて、町の北の出口を出た。町を出てから、町の方を振り向いてみると、それなりに綺麗な町並みが見える。

そして、町の入り口には『ビナンケ』と言つ、看板が建てかけてある。

ミライは向きを戻して、これから行く先の道なき道を見る。

目的地は、最初にここに来たときに見えた、巨大な木。

そこに進むためには、整備されている道とは違う道を、歩いて行かなければ行けないらしい。

巨大な木の前には、巨大な迷路のような森もあるとか。

とにかく、これから長い旅になりそうだ。

今思えば、全てはあの横穴から始まつたんだっけ…。

ここは、どこなのだろうか。

そして、この2人も同じような洞窟から来たのだろうか。

まあ、色々考えても仕方ないか。

少なくとも、この世界もそんなに悪くない。

そう色々思いながら歩いている時だった。

突然、どこから来たのか分からない3人組が、ミライたちの行く手を阻んだ。

「おい！持っている荷物全部持つて行け！」

3人組の1人の男がそう言った。

脅しようだが、小型のナイフをちらつかせている。
ただ、ミライたちは、呆然としている。

恐らく、考えていることは僕と同じなのだろう。

そして、ミライは3人の考えを代表するように言う。

「何も持って無いように見える僕らを、何故脅すんだ？」

そのミライの言葉で、6人の中の空間は一時的に止まったのだった。

第28層 挑戦者魔女クリー（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第28層 挑戦者魔女クリー

僕たちは、確かに準備をしてから町を出た。

でも、アイテムなどはメニュー画面に全て入れられて、極めて軽装備の状態です。町から出てきたのだ。

では何故、僕らを狙って襲いに来たんだ？

答えは、相手の方から教えられた。

「私たちも挑戦者だからよ。さあ、メニュー画面の物を全て置いてきなさい。じゃなと痛い目見るわよ」

おそらく向こうのPTのリーダーだろう女性が、そう言った。

見た目は、男2人のダサイ地味な格好と違い、明らかに魔法使いという感じの服装だ。

「ミライ。相手のステータス見ておいて」

ミチはミライに近づき、相手に聞こえないように小声で言った。

ミライは言われてすぐに、アペンシスを相手に向けてかけた。

ミライから半径10mぐらいかけて、全員のステータス画面が見える。

今思えばアペンシスは、自分中心の全体魔法のようだ。

「えっとね、一番奥の男が25、挑発した一番前の男が27、真ん中のあの魔女が33だね。ユミルが魔女さんよりレベル2個上だし、大丈夫じゃない？」

ミライは、ミチにそうささやいた。

ちなみに、言葉に出さなかったが、名前は奥から順に、ギユウ、クリー、ゼインだ。

「あら、レベルだけが戦闘の全てじゃないのよ。相性や努力で実力は変わるのよ！」

魔女クリーはそう言うと、瞬時に杖を出して装備し、空に向かって杖を掲げる。

「やばい、離れるぞ」

ギユウは叫ぶと、魔女クリーの後ろまで走り待機した。

杖を掲げた先の空中で、光のような物が発生した。

そして、その光から無数の野球ボールぐらいの火の玉が、あたり一面に飛び散りだした。

クリーは魔法で前方にバリアをつくり、その後ろに2人が隠れる。

見事な作戦だと感心してしまうが、それどころではないようだ。

「熱っ、ミライもバリア張れないのか！」

ユミルは攻撃を一撃足にくらい、真剣な表情で言った。

ミライはそう言われて、瞬時にバリア想像して放った。

「薄っ！冷たっ！」

場所を想像しなかったので、ミライのすぐ目の前にバリアが出来た。言葉に出したとおり、紙切れ1枚のような厚さで、どうやら氷で出来ているようだ。

当然、すぐに相手の魔法で割れて、ミライにも相手の魔法が当たる。

「あちちち。ふー」

ミライは、割れたバリアの破片で当たった腕を冷やす。

制服の夏服の格好だったので、ダメージは大きい。

「こんな攻撃跳ね返せばいいのよ！」

ミチはそう言い、両手に剣を持ち、火の玉を跳ね返し続けている。

ユミルも言われてすぐあの大剣を装備し、火の玉から身を守る。

あ…僕、装備無いのですが…

そう心の中でそう思いつつ、ミライは薄いバリアを張り続ける。

火の玉の勢いは治まることを知らない。

よく見たら、向こうの魔女さんが、集中し続けている。

そつとうの実力者のようだ。

「よし！」

ミライは火の玉の隙を見て叫ぶ。

そして、薄っぺらいこちらのバリアを、向こうのバリアにぶつけた。もちろん、こちらのバリアは粉々に砕けた。

しかし、相手もそのバリア同士の衝撃に集中力を途切れさせる。

そして、火の玉の弾幕はなんとか治まった。

「やるじゃない。あなたも魔法使いなのでしょ。そちらの魔法も見せてみなさいよ」

そうクリーは、ミライに挑発をしてくる。

「やってやれよミライ。あの時出したでかい奴」

ユミルは、ミライに向かって笑顔で言った。

あの時とは、町の戦闘の時のだろう。

「でも、さすがに死ぬんじゃないかな？」

「レベル差あるし、大丈夫だろ。相手も俺らに本気だし」

ユミルは、軽い口調で言った。

「打って来なさい！圧倒的守りで、打ち砕いて見せるから」

クリーは、こちらに向かって叫んで言った。

あの女、耳が凄く優れているらしい。

「では、『フゲネス・フレイム』！」

ミライは、クリーに向かって叫んだ。

クリーに向かって火の玉が飛んでいく。

「え、小さっ！」

ミチが、ミライの攻撃を見て叫んだ。

「しかも遅っ！」

ユミルも、付け足すように叫んだ。

そんな小さく遅い動きの火の玉は、ゆらゆらと3人組の方向へ飛んでいくのであった。

第29層 「実力魔法」対「発想魔法」（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第29層 「実力魔法」対「発想魔法」

ミライの火の玉は、20mという短い距離をゆっくり飛んでいる。相手に届くするには、もう少し時間がかかりそうだ。

それよりも、途中で消えてしまうのではないのかとも思ってしまう。

「アツハハハハ。それがあなたの実力」

魔女クリーはミライを見て、見下すように言った。

そしてクリーは視線をギユウに向けて何かを言った。

何を言ったかは聞き取れなかったが、ギユウは言われてすぐに、

ミライの放った火の玉に歩いて近づく。

「こんなもん、俺が消してやるよ」

そう言うと、ギユウは火の玉とのタイミングを見計らって、ミライたちを襲おうとしたときに使ったダガーを振り、火の玉を力強く斬った。

ダガーの刃と火の玉がぶつかった瞬間だった。

もの凄い爆音と共に、爆風が6人を包み込んだ。

「うわっ！」

ギユウは叫ぶと共に、大きく吹き飛ばされてクリーにぶつかった。

「いやっ！イタタタ・・・」

クリーは、上に乗ったギユウをどけて立ち上がる。

それに釣られるように、ギユウ、ゼインも立ち上がる。

「おい！ギユウ！大丈夫か！」

ゼインはギユウを見た瞬間に叫んだ。

ギユウはダガーを持った右手に火傷を負って、左耳から血を流しているのが、こちらからも見て分かる。

ゼインは、両手をギユウにかざしている。

どうやらゼインが、向こうの回復担当のようだ。

敵3人組が向こうで慌てている中、こちらの3人組は納得が出来ていなかった。

「ミライ、いつあんな見かけ騙しな技を？」

ユミルは、微笑みながら言ってきた。

「いや、イメージと違うし。と言うより、イメージ不足かな？」

ミライは、思ったままのことを口にした。

「あんな名前まで付けたのにね」

ミチは笑いながら言った。

「うるさいなー。まあ次こそはうまくするとして、今はあの人たちをどうにか追い払おうか」

ミライも笑いながら言った。

「あくまでも追い払うなのね」

ミチは呟くように言った。

「いや、殺すとか概念に無いし、見るのもいやだし…」

「じゃあ、どうやって追い払うんだ？」

ユミルはミライに向かって聞いた。

「考えがある。1人で大丈夫だと思うけど、何かあったら援護して」

「おっけー、まかせて！」

ミチは軽々しく答えた。

ユミルも軽くうなずく。

そしてミライは、自分の考えを実行するのだった。

「逃げるなら今のうちだぞ？」

ミライは、少し離れた30m先ぐらいの3人に大声で言った。

「だ、だれが逃げるものですか！」

クリーはそう叫ぶが、体が若干震えているのが分かる。

ミライは、その言葉を聞いてから、もう一度火の玉をイメージし、3人に向かって放つ。

今度は、大きさは変わらなくても、速さが数倍速い火の玉が打てた。もちろん、爆発力も変わらなかった。

「つう……」

クリーはバリアで爆風を防ぎきる。

「フゲネス・フレーム！」

ミライは守りきつたのを見計らって、同じタイプの火の玉を、2個3個という感じで、数を増やしながら放っていく。

クリーも必死に、バリアで爆風から3人の身を守る。

「あんまり調子に乗るんじゃないわ!」

クリーは隙を見て叫ぶと、ミライがあの時出したような、巨大な火の玉を空中に出した。

「やばっ、フゲネス・フレイムっ!」

ミライは焦りつつも呪文を叫び、空中に浮かぶ火の玉に向かって、こちららも火の玉を打った。

クリーの大きな相手の火の玉と、ミライの小さな火の玉とがぶつかり、爆風を起こして2つとも相殺される。

「うそでしょ!?!」

クリーは、そう大声で叫んだ。

どうやらあれが、彼女の最大の力だったらしい。

「フゲネスツ・フレイムっ!」

ミライは大声で叫んだ。

すると、ミライ前方上空には、無数の小さな火の玉が、並んで現れた。

まるでそれは、巨大な1枚の炎の壁にも見えた。

「ちよつと、まずくない?」

ミチは、その大量の火の玉を見て言った。

ミライはミチの言葉を無視して、炎の壁の端っこの5発を3人組の前に落とした。

そして、安定の爆発を見せる。

「クリー。これは、逃げようって!」

それなりに回復したギユウが、そう言った。

「うるさいわね!お、覚えておきなさい」

クリーは、ミライに向かって言うと、一目散に町に向かって逃げ出した。

それを追うように、ギユウとゼインも逃げ出していった。

しばらくすると、3人の姿は町へと消えていった。

「ふー終わったー」

ミライは、そう言って火の玉を地面に落とそうとした。

「ちよっと、遠く狙わないと爆風に・・・」

ミチは、そう言いかけたが、落ちていくのを見て言うのをやめた。残りの火の玉は、地面に落ちても爆発しなかったのだ。

「ダミーか・・・」

ユミルは呟くように言った。

「そういうこと。まあ、だいぶ魔力節約したほうだよ」

ミライもそう言って、自分のステータスを見る。

「戦略的だったわね。ほら買っておいた奴の1本、あげるわ」

ミチはそう言って、ミライに向かって魔力回復ビンを投げる。

「どうも。まあ、発想の勝利だったな」

ミライはそう言って、納得したようにうなずいた。

「まあ、ばれてたら形勢逆転してただろうがな」

そのユミルの冷静な言葉に、3人は笑い出したのであった。

第30層 答、想像の世界（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第30層 答、想像の世界

「さて、先を急ぐわよ！」

戦闘の笑いと反省も治まり、ミチは先に進んでいく。

もちろん目指すのは、あの遠くに見える大樹だ。

周りの木と比べ物にならないくらい大きいのは、大樹の周りの森と比べれば見ればよくわかる。

正直言つて、死という恐怖を感じない。

今なら何だつてこなせる！そんな気分だ。

僕はそう思っているが、ミチを追いかけていったユミルの思いは違うようだった。

表情が、どこか晴れていない気がする。

まあ、考えすぎだろうか。

そう答えを導き出して、2人との距離を縮めていくミライ。

そしてミライは2人に追いつくと、少し疑問に思っていたことを話した。

「ねえ、ここつて…どこなんだろ？」

ミライは2人に対して問いかけた。

「地下世界とかじゃないの？洞窟から来たんだし」

ミチは軽い口調でそう言った。

「でもさー。太陽の動きとか完成度高いなーって…」

ミライは、まぶしく輝く太陽の光を見ながら言った。

「あれが、太陽じゃなかったりしてな」

「なるほどね。しかも雲一つ無い青空の時点で、実物と言う考えは違うみたいね」

ユミルとミチの意見を聞く限り、この空は偽者だと判断された。

しかし、それは最初の問いの答えになってない。

「じゃあここはどこ？」

ミライはしつこく聞きなおした。

「想像の世界。で良いんじゃない？」

ミチは少し考えて、そう答えた。

「想像の世界か……。なるほどねー」

ミライも復唱し、ミチの意見に納得した。

想像で作られた世界か……。

想像すれば何でも出来る物なのだろうか。

「ん、じゃあ誰がこんな世界を想像したんだろ？」

「それは……」

ミライの問いにミチは言葉をつまらせる。

そんな歩きながらの、ミライの質問コーナーは、しばらく続くのであった。

第31層 夕暮れ後（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第31層 夕暮れ後

歩きに歩いて、太陽のような光が動き、沈み、月のような光が夜の草原を照らす。

照らすといつても、その弱き光は僕らの姿も映し出せない。

ミライたちは、夜になり辺りが何も見えなくなると歩くのをやめて、木の枝を適当に集めて火をつけて暖に当たっている。

火はミライの魔法で灯した物だ。

「さて、夜食何にする？」

地面に座っているミチは2人に聞いた。

時間は分からないが、夜食にはちょうどいい時間だろう。

お腹がグーグー鳴る。

他の二人も鳴っているの、人の腹の音を笑うことの出来ない状況だ。

「なに、ミチなんか作ってくれるの？」

地面でうつ伏せになりながら、ユミルはそう言った。

「じゃあ、今日は私で！」

「今日はって・・・当番制とか？」

地面から立ち上がるミチに、ミライは地面に座りながら聞いた。

「そういうこと。私そんなに料理得意じゃないし」

ミチはなぜか得意げにそういった。

「まあ、別にいいんだけどね。ユミルもそれでいいよね？」

ミライはユミルにそう聞き、ユミルは軽くうなづいた。

「じゃあ、早速作るわね！」

「ちゃんと手、洗っとけよ」

ミライはミチに一応注意する。

「はいはい」

ミチは軽く受け答え、保存している水で手を洗い、目の前の焚き火付近で料理を開始する。

そんな姿を男二人はのんびり眺めるのだった。

「はい、出来上がりー。召し上がれ」

ミチは可愛げに言ってみせた。

「いただきまーすって何でホットケーキ？」

ユミルは、ミチを見ながら言った。

焚き火周辺には甘い香りが漂っている。

まあ、作っている途中から甘いものを作っているのはわかったのだが。

しかし、夜にホットケーキも珍しい気がする。

ミチにとっては当たり前なのだろうか？

「何でも良いじゃない。要らないなら私が食べるわよ」

ミチがそう言くと、ユミルはすぐにホットケーキを口にほおぼりだした。

確かに、粉調合から作り出したにはおいしい。

「うん、これうまいよ」

ミライは笑顔でそう言った。

「ありがとー。今度もまたこれでいい？」

「いや、次は違うので」

笑顔のミチの言葉に、ユミルは即答した。

ユミルの即答に、ミライが少し噴き出して笑う。

「じゃあ、今日は私だから…明日1日はミライね！」

ミチは笑顔でミライを見てそう言った。

この時初めて僕は、ミチを出来る女だ！と思った。

うまいこと今日1回の料理当番だけで逃げ切ったようだ。

「はいはい」

ミライは関心も込めて言った。

「じゃ、ちよつとトイレ行って来るわ」

ミチは食事を終わると、そう言っ立ち上がった。

「いってらっしゃーい。なんか遭ったら、どんな時でも叫べよ。で

ないと助けに行けないし・・・」

ユミルは、ミチに注意を言っておく。

「わかったわ」

ミチはそう言くと、歩き出し闇夜に姿を消した。

その時だった。

「キヤーー！」

ミチの、もの凄い高音が静かな草原に響き渡る。

「早いわ！」

ユミルはそう言葉を吐き捨て、ミライと目を合わせてうなづく。

そして2人は立ち上がると、叫び声の元へと走って向かうのだった。

第31層 夕暮れ後（後書き）

- 指摘された文の修正 - 途中から

「じゃあ、今日は私だから……明日1日はミライね!」

ミチは笑顔を振りまいてミライの方を見た。

ミチ、ここまで考えていたのか……。

たった1回の料理で、1日の当番を終わらるとは……。

「……わかったよ」

ミライは言葉に関心をこめて言った。

「で、私……ちよつと行つてくるわ」

ミチが、もじもじしながら2人に対していった。

「行くつてどこに?」

ユミルがおもむろに聞く。

「べ、別に気にすることも無いわよ」

「危ないから、俺も付いていこうか?」

ユミルは、ミチに優しく言葉を掛ける。

「いいわよ。ここで2人とも少し待つて……」

「でも、本当に夜は」

「察してやれよ馬鹿!」

ミライがユミルに対してそう言った瞬間、ミチは顔を赤く染めた。

そして、闇夜の草むらの中にミチの姿は消えていった。

「なあ、ミライ……」

先生に答えを教えるほしい勉強の出来ない子のような表情で、ユミルは聞いてくる。

「……トイレ」

「……あー。あー」

ミライの3文字の回答に、ユミルは高い音と低い音の2種類の同じ言葉を放った。

その時だった。

「キヤーー！」

もの凄い高音の叫びが、静かな草原に響き渡った。

「付いて行ったほうが良かったか？」

「それは無い。それより早く行こう！」

ユミルの言葉にミライは素早く対応した。

そして、2人は立ち上がると、叫び声の元へと全力で向かうのだった。

指摘されて、書き直す場面が無かったので、この場をお借りしました。

第32層 あつい触手戦（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第32層 あつい触手戦

ミライとユミルは、月明かりの中すぐにミチを発見することが出来た。

ミチは、完全にモンスターに捕まっていた。

植物のような、緑の触手の巨大な塊。

その物体に、ミチは両手両足を4本の触手で固定されていた。

ゲームなどで見る触手と比べても、数段太く、気持ち悪く感じた。

「ちよつと、なんなのよ、こいつ！」

ミチは必死で叫び抵抗する。

だが、触手が解けるような感じはしない。

ミライは緑の物体に向かって手をかかげ集中する。

「アペンシス！」

ミライの周りの、様々なステータスが見えてくる。

「名前はシブクリンで、レベル40!? 属性が火」

ミライは書いてある通りに読み上げる。

属性なんてあつたっけか？

ただ、今はそんな事はどうでもいい。

一番高いレベルのユミルでも5レベル差。

僕なんて、17レベル差もある。

下手すれば全滅もありえる。

どうすれば……。

そうこう考えていると、どこからか声が聞こえてきた。

（フッフ、良い遊び相手じゃないか、ぜいぜい楽しませてくれようぞ）

恐らくだが、あのモンスターから声が聞こえた。

「あいつ、話せるのか！」

ミライは、そう叫んだ。

ミライの声を聞き、ユミルは少し驚いた表情を見せる。

ミチは必死に、もがき続けている。

(しつこい小娘め…この程度の細い右腕、軽くもぎ取ってくれようぞ！)

「させるか！」

ミライは叫び、目の前に氷のバリアを大きめに作り上げる。

そして、バリアの向きを変えて、ミチの右手に絡まる触手に向かって強く放った。

そのバリアは一発で触手を貫き、触手をミチの手から切り離れた。

(うぐう・・・)

モンスターは少しひるんだ。

ミチは右手がぶら下がり、体の体勢が不安定になる。

「きゃ、きゃあああああ」

「ミチ！」

ミチの叫びに、2人はミチの名前を同時に叫んだ。

切断された触手部分。

そこから体液が流れ出てる。

その体液に、ミチのぶらぶら揺れる右腕が当たり、当たった箇所が火傷した時のように、焼け爛れていたのである。

ミチの手が骨まで溶けると言う感じではないので、ただ熱いだけなのだろう。

でもその威力は凄まじいらしく、ミチは気を失ってしまったようだ。

(ふっ、小僧、なかなかやるではないか)

「くそっ！どうしたら・・・」

ミライが、そう言葉を吐いたその時だった。

「うおおおおおおおおおおおおお！」

ユミルが、叫びながらモンスターに突っ込んでいった。

第3層 氷バリア使い（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第33層 氷バリア使い

あんなに重い剣を持っているのに、あのスピードか！
ミライは、心の中でそう思った。

早いのは、ユミルの動きではなく、ユミルの剣の振り。
緑の物体シブクリーンまでの距離をゆっくり近づいたと思っていると、剣がもう振り下ろされている。

これが、職業主の実力か……。

ユミルは、シブクリーンに何度も切り込み、少し距離を置いた位置に戻る。

「ライトアタック、ライトアタック、ライトアタック……」
ユミルが同じ言葉を何度も繰り返しながら、大剣をクロスさせながら、又んちヤクのように振りまわす。

ユミルが1度剣を？を書くように振るたびに光のような斬撃が現れ、シブクリーンに向かって確実に飛んでいく。

（小僧、なめるなああああ！）

シブクリーンが叫ぶと、触手を1本新しく作り、ユミルの足を目標けて凄い速さで飛んでいった。

「ぐわっ！」

ユミルの声と共に、骨の折れる鈍い音がここまで聞こえた。

「ぬうあああああああ」

ユミルの無残な叫び声を上げ、うつ伏せに倒れ、その後は静かになる。

ユミルは少し浮かせていた顔を地面につける。

ユミルはもう回復させない限り動けない。

あんなユミルの声……はじめて聞いた……。

（緑髪の小僧は後だ。まずはお主からだ）

どこが顔か分からないが、恐らく僕に向けての言葉だろう。

「くそっ、どうすればいいんだ！」

ミライは心境を言葉で吐き捨てる。

そして、シブクリーンに向かって、バリアを縦にしたのを3発放つ。シブクリーンは、触手を1本作り上げて、再びミチの右手に絡みつく。

そして、バリアから身を守るように触手を前に伸ばし、ミチを盾にする。

「やばい解除！」

ミライは叫び、無意識にバリアを解除させようとした。すると、バリアは消えはしなかったが、粉々に砕け散りまわりに飛び散る。

飛び散ったバリアの破片は、ミチの服やスカートと、シブクリーンを細かく引き裂く。

あぶなかった・・・。

もう少しで、ミチを2つに引き裂くところだった・・・。
引き裂く・・・。

ミライの頭の中に、1つだけ案が浮かぶ。

ミチを助ける唯一の方法。

「お前は、触手を4本しか出せない」

(だから、どうしたと言うのだ?)

思ったとおりだ。

4本以上の触手を出せるなら、3人ともつかまって、ゲームオーバーだ。

「それがお前の弱点だ！」

ミライは叫び、再び氷バリアを作り上げ、シブクリーンに向かって1つ放った。

(その技は無駄だと分かんのか!)

シブクリーンは、触手をすべて伸ばし、ミチを盾にする。

ミライは、ほぼ雑念を考えずに、ひらめいている事を思い、実行を開始した。

今度は、飛んでいるバリアーをうまく消せた。

そして、ミチに向かって飛ぶバリアが消えた瞬間。

シブクリーンが、2 mぐらい伸ばしている触手目掛けて、幅広く、分厚く、底の方が鋭い氷の壁が落ちてきた。

そして、ミチに絡まる4本の触手を、ほぼ同時に切断した。触手を切断して、ミチが地面に落ちる前に次の作業に移る。

触手を切断した氷の圧壁を、2枚の薄い氷板に変える。

そして、ミチ側の氷の壁をミライ方向に向かわせ、シブクリーン側の氷の壁は、とにかく反対方向に大きく動かした。

ミライは氷に押されてきたミチを体で受け止め、氷の壁をぶつかる寸前に解除する。

同じ1つの魔法なので、シブクリーン側の氷の壁も解除された。

次に、向こうがひるんでいる隙に、ミチの触手を一本一本解いていく。

氷の冷たさで、触手体液の熱が冷めたのはラッキーだった。

触手を1本解くごとに、シブクリーンの周りに氷の圧壁を作る。

ミチに絡まる全て触手を解く頃には、シブクリーンの四方に氷の壁を作り上げた。

(さ・・・させるか！)

こちらの策に気がついたのか、シブクリーンは触手を天に伸ばし始める。

だが、もう遅い！

ミライは、ミチを右手で抱えたまま左手を天に向けて、そして左手を下ろした。

すると、すぐさま上空に出来ていた、横にした氷の厚いバリアを、4方の氷の壁に蓋をするように、その上に落とす。

落ちた瞬間に、地面が揺れる。

(お前は、魔法を同時にしか解除できない。小僧攻撃はの私にはこの壁がある限り貫けん！)

「確かに解除は同時にしか出来ない、だが俺のバリアの、もろさは知っている」

ミライはそう言葉を放つと、シブクリン上空に今までで一番底が鋭い氷のバリアを作り上げた。

(ま、まて！くそがああああああ)

「フリーズ・スライス」

ミライは、鋭いバリアを真下に下ろし、眩くように魔術名を言った。氷の壁で出来た箱は綺麗に2つに別れ、透けて見える箱の中は、無残な物だった。

さすがに箱の中の生物は、生きてはいないだろう。

「はあーほんとに死ぬかと思ったし」

ミライは心の声を漏らし、足の力を抜かれたように、その場に座った。

そして、ミチとユミルに目を向ける。

『死ねば消える』と言うのが分かっているので、死んではいないと確認する。

ただ、2人は動かないので完全に気を失っているようだ。

まあ、当然と言えば当然だろう。

ミライは疲れきった精神に鞭を打ち、立ち上がった。

「2人とも、貸し1ね」

ミライはそう独り言を言い、2人を暖を取っていた場所に運んだ。

そして、2人のアイテム治療を開始させるのであった。

第34層 治療（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第34層 治療

どうしてだろう。

2人は気を失って、大怪我を負ったというのに、なぜか顔がにやけてしまう。

自分ならどんな相手でも勝てるのでは、と言う考えしか浮かんでこない。

地上の世界よりも楽しいかもしれない……。

そんな事を考えている今は、2人の治療をえた後のことだ。

今思えば、治療作業は大変な物だった。

ミライ用の掛け布団を地面に敷いて、2人を仰向けに並べて寝かせる。

そして、アイテムの説明を見ながら治療を開始した。

ユミルは、両足のすねの部分が完全に折れている様子で、その部分は赤紫に腫れ上がっていた。

腫れた部分に、スプレータイプの痛み止めと、再生剤を振りまき、ユミルの口の中に、液体の回復薬を流し込み、ユミルの応急処置は終了。

あとは、ユミル次第で早く直るだろう。

ミチは、火の明かりのそばで見て分かったが、縛られた4箇所は完全に青あざになっていて、火傷は右手と背中にあった。

特に右腕の部分は、気持ち悪いぐらいの重度の火傷だった。

火傷治しと言う便利な道具は無いので、ユミルと同じような感じで、痛み止めと再生剤を火傷の箇所には振りまき、口に回復薬を流し込む。

ミチの口を開ける作業は、少し抵抗があったが、どうにか開けた。

あと、ミチについでに、あの生物の体液を出来る範囲で拭く作業もする。

流石にスカートの中に手を突っ込むなんて事は、勇気の無い僕には

出来なかった。

足元、腕、体、頭と、出来る範囲内をタオルで拭いたが、足に付着していた液体が、あの生物の物ではないと分かったのは、全て拭き終わってからの事だった。

そして、2人を仰向けと、うつ伏せ状態を交互に強引に変えて、もう何も異常が無い事を確認する。

2人を仰向けにし、掛け布団をかけてあげて、ようやく治療終了。

その後は、これだけ出来た自分をしばらく褒めた。

そんな事が数時間前であって、今があるのだ。

その後と言うと、寝ずにモンスターが来ないか見張ってようか、とも思ったが、2人のいい寝顔を見て、自分も淒く眠くなる。

ミライは、大きなあくびを堂々とした。

どうやって寝ようか……。

もう、そのことにしか考えが無かったし、することも無かった。

ミライは、3人が安全に寝れるように、色々考えて実行してみる。しかし、残り少ない魔力と数少ない魔法で色々実行するのは、流石に無理があった。

結局色々試したが、あのモンスターを倒す一歩手前の状態の、自分から半径5m付近四方にバリアを落とし、上に蓋をする事が採用となった。

寝ながら、四方にバリアを張り終え、最後に上に大きめのバリアで蓋をする。

思い通りに出来上がっているなら、厚さは5cmぐらいだろうか。

こんな傷だらけの戦闘は、二度としたくない……。だって、下手すれば僕だって死んでいたかもしれない。

逆に生きていたのが、奇跡なのかもしれない……。

あのモンスターは一体……。

2人はいつ目覚めるのだろうか……。

そんなこんなを思っているうちに、ミライは眠っていたのであつ

た。

第35層 お目覚め(前書き)

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第35層 お目覚め

コンコンと何かを叩く音で、ミライは目を覚ました。目を覚まして始めに思ったのは、今日はやけに寒い。

「ううー、寒っ」

思わず口に出てしまうような寒さだ。

ふと周りを見ると、ユミルが、まだ気を失っているのが分かる。

そして、ミチの姿は寢床には無く、5m先の所で空中を叩いていた。

「あ、そういえば…どおりで」

バリア張ってたんだな・・・氷の・・・。

ミライは何かを思い出したかのように言った。

その言葉で気づいたのか、ミライの存在に気がついたミチがこちらを見る。

表情は、今にも泣きそう。

ミライはそんな泣きそうなミチに声を掛ける。

「ミチ。ちよつとバリアから離れて。失敗したら危ないから」

そう言われてミチは、訳が分からないと言いたい様な表情をしながらも、バリアから離れ、ミライの方向へ向かってくる。

「解除！」

言わなくてもよかったのだが、一応ミライはそう叫んだ。

すると、寝る前に張っておいたバリアたちは割れる事も無く、綺麗に消えてくれた。

消えた瞬間に来た暖かい風が心地よい。

ただその後に来たのは、嵐を予感させる口調の言葉だった。

「ねえミライくん。何があったか説明してくれる？」

ミチは、だんだんこちらに近づき、言葉を向けてくる。

くん付けだったときに、凄い悪寒を感じた。

いや、きつとバリアの寒さのせいだろう・・・。

そう考えつつも、道に向けていい言葉が思い浮かばない。

「早く言いなさい!」

「はい!」

ミチの追い込みに、とっさにミライは反応してしまう。
そして、ミチによる、ミライ取調べが始まったのだった。

第36層 笑顔（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第36層 笑顔

「・・・と、こんな感じかな？」

そう言つて、ミライは説明を終わらせた。

だいぶ大雑把に話したが、検問員も納得してくれたので良いだろう。

表情を見る限り、何となく嘘ついているのが分かっていたようにも見えた。

そんな複雑な表情を見せていた、検問員ミチが口を開いた。

「まあ、いいわ。私はユミルの回復の手助けしてみるし、ミライは朝食お願いね！」

言葉を聞く限りでは、許してくれたのだろうか。

いや、目を瞑ってくれたが正しいか・・・。

「はいはい」

ミライは軽く返事を返し、昨日火をつけていた暖炉に魔法で火をつけた。

ミチは、ミライの返事を聞いてから、ユミルの元へと向かう。

さて、なに作るのかなーっと。

そんな事を思いながらミライは、慣れない手つきで朝食を作り始めるのだった。

「はい。ミチ、朝食できたよ」

そう言つてミライは、簡単に作ったサンドイッチを、回復に専念するミチの隣に皿ごと置いておいた。

サンドイッチは、スクランブルエッグに、炙ったベーコンと生のレタスを、パン耳を切った食パンに挟んだだけと言うシンプルな作りだった。

切ったパン耳は、摘んでいたらあつという間に6枚分無くなっていた。

「ありがとうね」

声は笑っているが、顔は真剣だ。

そうとう回復術って難しいんだろつな……。

そんな事を思いながら、ミチの回復作業を見ると、ミチに離れてくれと左手を払われた。

ミライは立ち上がり、黙ってミチから離れて、暖炉のそばに座る。

そして、サンドイッチを一口。

しばらくの間、火花が弾く音しか聞こえなかった。

そんな何も無い時間が数十分過ぎた頃、ミチがミライの隣に座った。

「ユミルは？」

「もう大丈夫なはずよ。骨もくつついたし」

ミチの表情は、まだ自信がなさそうだった。

しばらくの沈黙が続いてから、ミチが口を開いた。

「なんか、ありがとうね」

「え、何が？」

「この感じだと、あなたのおかげで私は生きていた。見たいな感じだからね」

ミチは、分かりやすい作り笑いを見せた。

「それは、どうもー」

ミライも、ぎこちない笑顔で返した。

「本当にね、あのモンスターに捕まった時、怖かった。凄い力だったから……ね……本当にね……本当に……」

そう言っている途中で、ミチは泣き出してしまった。

相当怖い思いをしたのだろう。

ミライは、そんな泣いているミチに何も言うことができなかった。

ミチは、幼い子が怖い物を思い出した時のように、ミライの肩ですすり泣いている。

ミライは、左手でミチをそっと撫でる。

何も言葉を掛けられない自分が悲しい……。

しばらくの間、ミチのすすり泣きしか聞こえない時が進んだ。その時の流れが変わったのは、「わ！」と言う声と共にユミルが目を覚ましたからだだった。

「おはよー」

ミライは、目を擦るユミルに向かって、軽く声を掛けた。

ミチは、まだ泣いていて声を出せない。

「おはよー。なーんだ夢だったのか？ん？」

ユミルは、ぼそぼそ呟いて、こちらを見た。

そして、追加の一言。

「お2人さん。いつのまに？」

そのユミルの言葉を聞いた途端、ミチは、ミライを手で突き飛ばした。た。

「うわっ」

ミライは反射的に声が出て、突き飛ばされた方向に4回転。

「な、ビックリしたー」

ミライはその場で立ち上がり、少し大きな声で言った。

ユミルは、訳が分からないと口をあけてたまま、ミチの方を見ている。

「さ、さ！早く朝食食べて、先に進みましょう！」

ミチは、涙を必死に拭きながら言った。

その時、今日始めてのミチの笑顔を見ることが出来たのだった。

第37層 暇つぶし（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第37層 暇つぶし

3人とも、朝食のサンドイッチを食べ終えて、さあ先に進もう！
と言うことになったのだが……。

「すまん、無理だ。足が動かない」

ユミルは、悲しい表情を見せながら言った。

さすがに1日で、複雑骨折を治せるほど、この世界は甘くなかった。

ユミルは、地に足をついて立ち上がることが出来なかったのだ。
足が動かないと言うよりは、足でバランスが取れないだろう。

ユミルは地面に座ったまま、足を曲げ伸ばしする。

「じゃあ、仕方ないわね。今日はここで待機！」

ミチの決断は早かった。

「すまないな」

「明日治ってなかったら、置いていくから」

ミチは、そんな冗談を笑顔で言った。

「そうきたか」

そう言葉を口にし、ユミルは笑った。

あれだけ笑えれば、きつとすぐに治るだろう。

そうミライが思っていると、ミチがミライに声をかけた。

「ねえ、ミライ。私と1戦交えてくれない？」

「はい？」

ミチの突然の言葉に、ミライは思わず聞き返した。

「ダメージ食らったらアイテム使わなきゃいけないし、それ以前に、
戦って死ぬ可能性だって……」

ミライは、正論を述べた。

「大丈夫よ」

そう言ってミチは突然、双剣の一本を取り出し、ミライの腹の手前で刃先をとめた。

ミライは刃を向けられ、思わず尻餅をついた。

「うわっ！なにするんだよ！」

強めの口調で、ミライは言った。

「ごめんごめん。ここまで刃を向けられて、ミライが参ったって言えば、私の勝ち」

「参った！」

「まだ始まってないから」

冷静な、ミチのツッコミだった。

ミライは自分は戦いたくないと、顔でアピールする。

「分かったわ。ミライが勝ったら、今日の当番私がするわ」

ミライの表情を見て、ミチは少し考えてからそう言った。

恐らく、何言っても無駄だろう。

何故そこまで戦いたいんだ？

ミライはそう思い、ミチに言葉を向けた。

「分かった、1戦だけね。ついでに、ミチはどうなったら負けなの？」

「私が、降参！って言ったらね」

ミチは笑顔で言った。

絶対、負けるなんて思ってないし、降参なんて言う気ないな……。

「まあ、いいや。早く始めちゃおうか」

ミライは、軽い口調で言った。

「相当自信ある口調じゃない？それ」

「それは、ミチだって……」

「2人とも、20mほど間隔とって！」

突然、ユミルが口を割って来た。

「急にどうした？」

ミライは思わず聞き返した。

「戦闘するんでしょ？近距離と遠距離の戦いなんだから、少し距離置かないと……」

そうユミルは、淡々と言った。

「どうぞやら、一番戦闘を楽しもうとしているのは、ユミルのようだ。2人はユミルに言われるままに距離を置き、お互いに一礼するのだ。」

第38層 ミチVSミライ 天地の攻防（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第38層 ミチVSミライ 天地の攻防

「それでは、始め！」

ユミルの掛け声が響いた。

ユミルはどれだけ真剣試合を見たいんだ？

色々言いたいし考えたいが、そんな暇は無かった。

「そおおおおおい！」

ミチが叫びながら、こちらに向かって来た。

そして、いきなりチェックメイト。

ミチの持つ双剣の刃が、ミライの腹元に両方とも向けられた。

「何か言うことは？」

「離れてないと危ないぞ」

そうミライが言うと、ミライ足元から分厚い氷の壁が湧き上がってきた。

厚さは、ミライが二足で立てるのが精一杯。

横幅は無いが、高さは、見下ろせばミチが小さく見えるほどの高い位置だ。

「ちよつと！降りてきなさいよ！」

そうミチは言い、ミライの乗るバリア根元を強く蹴った。

蹴られてバリアは大きく揺れる。

「ちよ、ちよ！あぶねえ」

ミライは、どうにかバランスを取った。

バリアは揺れたが、壊れた様子は無い。

どうやら氷作りでも、バリアの機能を果たしているようだ。

「壊れないなら、倒すまで！」

遠くからミチの声が聞こえたと思ったら、バリアが大きく揺れる。そして、どんどんバリアの塔が傾いていく。

「え、これ、まずくないか？」

そうミライが呟いている間にも、バリアは傾いていく。

このまま落ちたら、さすがに死ぬだろ……。

ユミルが……。

「ちよっと、待ってっ！」

そうユミルは叫ぶ。

ミチも、バリアを蹴るのをとっくに止めてるが、バリアは重力に従って倒れていく。

やばい、どうすれば……。

ミライは、ユミルの事を思っていたが、考えは自分の方にすぐに向きを変えた。

バリアは氷で出来ている……。

氷は滑る物。

そう気づいた時には遅かった。

完全に自分の足場は、氷ではなく空気だった。

「ぬわああああああ」

ミライは、そう叫びながら、バリアと共に空から地面に向かっていくのだった。

第39層 思いの比例（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第39層 思いの比例

「いてててて・・・」

ミライは、10mぐらいの高さから落ちてきた。

落ちたけれど、まだ、生きてるから大丈夫だ。

問題なのは、あのバリアが倒れていく方向にいるユミルだ。

ミライは、地面に尻をつけたままユミルの方を見た。

ユミルは・・・大剣で、バリアに押しつぶされるのを防いでいた。

片手で、なんですけど・・・。

ユミルは大剣を右手で持ち、バリアを剣先で突き上げている状態。

それほど力を出している様子でもなかった。

「よいしょっと」

そうユミルは言いながら、剣を右に傾け、バリアをユミルの少し右側に倒した。

もちろん、余裕の片手での作業だ。

「な、なんでだ」

ミライは、予想外の光景に本音が出た。

「いや、底まで重くなかったし」

ユミルは、軽く応答した。

「お喋りする暇があるの？」

ミチは突然、ミライの目の前に現れて、剣先を向けてきた。

今度は、腹元と、頭の上。

もう、ミライには逃げる手段は無かった。

いや、もう戦う気は無かった。

「参った」

「全然『参った』って感じの口調じゃ無いわね。まあ、いいけど」

ミチは、残念そうに言った。

ミライは、ミチが剣をしまうのを確認してから立ち上がり、倒れたバリアの方に向かう。

そして、バリア先端前に来て、バリアを下から持ち上げてみた。すると、簡単にバリア先端は地面から離れた。

「こんな重さだったんだ」

そうミライは言ってみて考え込む。

いや、軽かったら昨日の戦闘が勝てたとは思えない。

あの時、バリア落としたとき、地面揺れてた気がするのだが・・・

ふと、ミライは何かを思い浮かべたように、座布団ぐらいのバリアを作った。

そのバリアを作るときに、少し空想的工夫を加えてみた。

「ねえ、ちょっと持ってみて」

ミライは、お手軽サイズのバリアを指しながら、ミチに対して言った。

「持ってみてどうかなるの？」

ミチは、そう言いつつも、バリアを持ち上げる動作をする。

だがバリアは、ミチが引つ張ろうが、押そうが、蹴ろうが、剣で斬ろうが、びくともしなかった。

「なにがしたいの？」

ミチは質問をぶつけてきた。

「これ、地面にでも引っ付いてるのか？」

ユミルは苦笑いで言った。

「意思の重さか・・・」

ミライは、2人の言葉を完全に無視して呟いた。

その時の状況や思いで、魔法の能力が変わるのか？

あくまでも、予想だが・・・。

ミライは、そんな事を思いつつも、細長いバリアと、重たいバリアを、綺麗に消し去るのだった。

第40層 休憩終了(前書き)

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第40層 休憩終了

「石の重さって何よー」

ミチは、考え込んでいるミライに向けて言った。

僕の耳はミチの言葉を、意思ではなく、石と判断した。

まあ、発音には個性があるから、あちらは意思と言ったつもりだろう。

「まあ、気にすんな。あー負けた！」

「そんな元気に言われたら、勝った気がしないのですが？」

「負けた・・・だと・・・」

「そう！そんな感じだって、もう遅いけどね」

そんなやり取りをし、ミライとミチは笑った。

「ミライ、何で火術使わなかったんだ？」

唯一笑ってないユミルが、笑いの空間に言葉を挟んだ。

「そういえば・・・そうね。で、ミライ、答えなさい？」

ミチの言い方が、ちよつと怖かった。

あの炎の呪文を使えと？

目の前の可愛い女の子に対して？

肩元で怯えて泣いてたんだぜ？

そんな子に、炎を放つなんて、出来るわけがない。

「いや・・・使う暇が無かっただけ」

ミライは色々考えて、言葉を口に出した。

その言葉に、ユミルは不思議そうな顔をしていた。

「まあ、いいわ。さてどうする？これから」

ミチは、2人に対して聞いた。

「先に進もう。時間は早いほうが良いんだろ？」

ユミルはそう言つと、その場から立ち上がった。

「回復早いな。地上じゃ有り得ないけど」

ミライは、そう言葉をユミルの送った。

「ほんとに大丈夫？」

ミチは心配そうに、ユミルに言った。

「君の優しさに惚れてしまいそうだ。…いてっ！」

ユミルが、ミチの頬を撫でながら言うと、ミチは顔を少し赤くし、ユミルのすねを蹴った。

ユミルは、地上ではこんな人だったのか？と考えてしまう。

まあ、冗談は得意のようだが・・・。

「さてと、ユミルも元気だし…目指しましょうか！」

ミチはそう言って、奥の方に見える巨大な木を目指して歩き始めた。2人も黙って、ミチの後ろをついて行く。

ユミルの足取りも軽いようだ。

こうして、休憩時間は終わり、また歩く作業が始まるのだった。

第41層 食後のトイレ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第41層 食後のトイレ

歩き始めて何時間が経つのだろう。

辺りは暗くなり始めている。

だいぶ歩いたが、周りの景色は空以外まるで変わらず、目標の木にも近づいた気がしない。

それよりも、モンスターが全く出てこなかった。

まあ、平和に歩けたので良かったのだが。

「さて、今日はこの辺までにしとく？」

ミチが歩く足を止めて、振り向いて言った。

休憩などの指摘は、全てミチが指示していた。

リーダーシップが有り、ムードメーカーでもある。

そんなミチが、何となく羨ましかった。

「もう良いだろ。全然近づいた気がしないが」

もう1人のムードメーカー、ユミルはそう言った。

この2人がいるからこそ旅が楽しいのかもしれないと思う。

「じゃあ今日はここで野宿か。じゃあ夕食作るね」

ミライはそう言い、草原の一部を魔法で燃やし、その場所に牧を投げ入れる。

牧はメニュー画面にたくさん常備してある。

物を無限大に入れて重さは全く無い。

そんなメニュー画面は反則な気がする。

「ミライ、辛いのが食いたい」

ユミルからの注文が来る。

「却下！甘いものよ」

ミチは、相当甘い物好きのようだ。

「はいはい。期待しないでね」

ミライは、フライパンを持ちながら言った。

さて、何を作ろうかな。

ミライはフライパンを片手に考える。

甘いものと辛い物……。

「さて、何を作るうか」

今度は、言葉に出して考えるミライ。

そして、何を作るか何となく決めて、ミライは料理の工程に入ったのだった。

「はい、出来たよー」

ミライがそう言うと、待つてましたとばかりに2人がこちらに来る。

「おお、うまそうー！」

ユミルは喜びながら、料理の置かれた敷き物の上に座る。

「チャーハンだけ？オーダーと違うのですけど」

ミチは不満そうに言うが、表情は柔らかかった。

「ちゃんとデザートも作ったって。どーぞ」

ミライはそう言って、2人の座る敷き物の上に甘い物を乗せた。

「さっすがミライ。プリンとは、分かってるじゃない」

ミチの表情は、柔らかい表情から笑顔に変わった。

「味の保障はしないけどね」

ミライは自信満々に言った。

「では、いただきますー！」

「いただきます」

ミチの言葉の後に、2人が声を合わせて言う。

合掌制度でも言うのだろうか。

手を合わせて食べる制度は、ミライから広まったものだ。

「それにしても、やっぱりミライって料理上手いよねー」

ミチが口をもぐもぐし終わると、何気ない感じで言った。

「上手いも何も、一人暮らししてるから勝手に腕上がるって」

「その若さで独り身か。偉いな」

ユミルが感心そうに言った。

独り身ねえ……。

「これから先もずっと料理担当でいいのよ?」

ミチが微笑みながら言った。

「遠慮しときます」

ミライが即答で答える。

「明日は俺かー。料理作るだけって言っても、大変だろうなー」

ユミルが料理を食べ終わり、力が抜けているような言葉を放った。

ミライも食事をすませる。

「ま、がんばって!」

料理を作ってくれと訴えるユミルの目に対して、ミライは言った。

「なー、ミライー」

「交代制度だからね、お断りだ」

ミライは、しつこいユミルに強めに言った。

そう言われてユミルは、手を横に開き首を横に振る。

どうやら諦めてくれたらしい。

「ご馳走様でした!」

ミチは、食べ終わり、しつかり手を合わせていった。

「ご馳走様でした」

2人もミチの後に続いた。

ミチが食べ終わると、食事が終了。

こんな形で、しばらくの間は続きそうだ。

「さて、食事も終わったし、私は少しトイレしに行くから・・・」

ミチはそう言って、周りを見渡す。

女の子だから、もうちょっと、トイレに対する恥じらいを持って

ほしいものだ。

ミライは、そう思いながらミチに言葉を掛ける。

「行ってらっしゃーい」

「ミライ。ついて来て・・・」

ミチは、少し恥ずかしそうに言った。

ユミルは、口に含んでいた水を「ブー」っと吹きこぼす。

「いや、何で!?!」

ミライは、当然のように聞き返した。

「えっと・・・暗いし、周り見ええないし、怖い・・・」

ミチの声は、どんどん小さくなっていく。

ふとユミルの方を見ると、なぜか不満そうな表情。

「2人とも、行ってらっしゃーい」

ユミルは軽い口調で言った。

「早くしてよ・・・」

ミチがミライに向けて、そう言った。

どうにかしようと考えている時間は無いようだ。

「分かったよ・・・」

ミライは諦めた感じで言った。

ミライが承諾した瞬間、ミチはミライを引っ張り暗闇の方へと走って行くのだった。

月明かりに照らされているが、ほとんど影でしか判断が出来ない。そんな所に、ミチとミライはいた。

遠くには、暖炉とユミルの姿が見える。

「こっち見ないでよ？」

ミチが恥ずかしそうに言っつて、影を小さくする。

どうやら、その場に座ったようだ。

「見るわけ無いだろ。暗闇で見えないし」

とは言っつても、月明かりで近くにいるミチの姿は、はっきりと見える。

ミライは、ミチに背を向ける。

背を向けた先の、暖炉にいるユミルは大きなあくびをしている。

しばらくしないうちに、生々しい音が聞こえてきた。

正直、もの凄く気まずい空気だ。

向こうは、もっとだろうけど・・・。

「もう、こっち向いて良いわよ」

ミライは言われるがままに、ミチの方を向いた。

「つき合わせてごめんね。…でもモンスターが怖くて・・・」

月明かりでも分かるミチの赤面に、すこし胸の鼓動が高まる。

「まあいいよ。1つだけ聞かせて。ユミルじゃないの？」

「ユミルは堂々と見てきそうだから…嫌！」

「なるほどねー」

2人は、軽く笑う。

ユミルのことに対して否定できないのは残念だが・・・。

「さて、戻りましょー！」

そう言っつて、ミチはミライの手首をつかむ。

そして、2人は暖炉へと戻るのだった。

第42層 軽い戦闘、進化する魔法（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第42層 軽い戦闘、進化する魔法

「お、お帰りー」

暖炉でユミルがお出迎え。

恐らくだけど、あの場での心境や状況を言わされるだろう。

ユミルのこちらに対する目を見れば分かる。

そんな目線に、苦笑いを浮かべつつ、暖炉のそばへと近づいた。

「着替えるから、こっちは見ないでよね」

ミチは2人に対して、目を細めながら言った。

ミチのお着替えタイムのようだ。

メニュー画面は、もの凄く便利だ。

どんなに汚い物でも入れてしまえば、次出すときは必ず綺麗になって出てくる。

さつき使った食器なども、洗わずにメニュー画面にしまった。

服なども、しまっってしまったら、次出すときには汚れや傷などが綺麗に無くなって戻ってくる。

だが、同時進行で入れ替えと言うものは出来ないらしい。

つまり、一瞬だが、全裸状態になるということ。

その状況を、ミチはお気に召さないらしい。

まあ、当然だが。

「はいはい、早くしてよね」

ミライはそう言い、ミチに背中を向けた。

ユミルもミライの動きを見て、ミチに背中を向ける。

「絶対に見ないでよね!」

「へいへい」

ミチの2度押しに、ユミルは軽く返事を返す。

ほんの十秒、火の子が弾ける音以外は、何も聞こえない空間が出来る。

「もついいわよ」

ミチはそう言い、2人はミチの方向へと向きを変える。

ミチの姿は、黒白のチェックのパジャマ。

夏の学生服より可愛いかもしれない。

そんな事を思っていたら、隣にいるユミルが突然倒れた。

ユミルの横には、燃やすのに使う牧が落ちていた。

「いつつつつ…、何すんだよ」

ユミルが、ミチに対して言う。

一瞬過ぎて何が起きたのか、ミライにはさっぱり分からない。

「自分の胸に聞いてみれば？」

ミチが強気に出る。

「何だ、ばれてたのか・・・」

ユミルは微笑みながら言った。

ユミルの顔の鼻下には、赤い液体が、ゆっくりと垂れていた。

この男、どうやら覗き見犯のようだ。

「何故分かったんだ？」

「誰でも分かるわよ！」

「僕でも分かる」

ユミルはそう言われて、何かを察したように、自分の鼻を触る。

そして、触った指を見て、笑い出した。

「生理現象には、逆らえないか」

笑いながらユミルは言う。

「黙りなさい！許さないんだから！」

ミチはそう言い、牧をメニューから取り出し、ユミルに向かって投げ
げる。

ユミルは、投げられた牧を右手でキャッチする。

「ハハッ！二度も同じ攻撃がつぶはっ」

ミチの3撃目がユミルに命中する。

「フン！口ほどにも無いわね」

ミチはそう言って、メニュー画面から寝袋を出し、暖炉の反対側の方へと向かう。

ユミルは、負けたオーラを背中から出しながら、ぐったりと倒れている。

ミライはそんな状況を、ただ苦笑いを浮かべることしか出来ないのであった。

ミチはもう、スヤスヤと寝袋で眠っている。

ミライは、そんなミチの姿を見ながら、自分の布団に包まり、暖炉の側でぼーっとしていた。

しばらくすると、ユミルが負けから立ち直ったらしく、ミライの隣へと、ゆっくり歩いて座った。

「よう。・・・寝ているときは、こんなにおとなしいのにな」

ミライに軽く声を掛け、ミチの方を見て、呟くようにユミルは言った。

「この時ぐらい、おとなしくないとね」

ミライはそう言い、2人は軽く笑う。

「寝込みを襲ってやろうか」

ユミルは呟いた。

「寝起きでも勝てないと思うよ」

「違いねえな」

2人は笑う。

さすがにユミルも懲りたようだ。

ふと、ネロさんを思い出し、一番消したい存在だろうなーと思いつつ、ユミルの方を見る。

ユミルはそんな視線を察して苦笑いを浮かべる。

少し時間がたち、ユミルが口を開いた。

「ミライに2つ聞きたいことがあるんだが・・・」

「何なりとどうぞ」

「おまえ、モンスターの声分かるのか？」

ユミルの言っていることが、いまいち分からない。

ユミルが言葉を続ける。

「昨日、あの強力なモンスターと戦ったとき、ミライが会話してるように見えたんだが・・・」

「うん、あいつ…しゃべってたけど？」

「俺には、ミライの声しか聞こえなかった」

ユミルの言葉に、ミライは驚いた表情を見せる。

「え、聞こえなかったの？」

ミライはユミルに聞く。

ユミルはうなずき、口を開いた。

「俺には聞こえなかった。たぶんミライのあの呪文が、強化されて聞こえるようになったのだと思う。あくまで予想だが」

「アペンシスか・・・」

ミライは呟くように言って、その言葉に対して、ユミルがうなずいた。

「まあ、悪い効果でもないし、今後役に立つだろうな。で、もう一つの方に移るのだが・・・」

ユミルの言葉に対してミライはうなずき、身構える。

「ミチとトイレ行ったとき、どうだった？」

「やっぱりきたか」

「やっぱりつてなんだよ！」

2人は、笑い出す。

「で、どうだった？」

ユミルが、しつこく聞いてくる。

こいつ、根っこからのヘンタイの様だ。

「現実では、おいしくないイベントだった」

あえて率直には言わなかった。

「なーんだ。羨ましいイベントなのにな」

ユミルは残念そうに言った。

もっとしつこく聞いてくるかと思ったが、これ以上の質問は無かった。

「さて、そろそろ寝るとしますか」

ユミルはそう言って、立ち上がる。

ユミルは、一つため息をつき、掛け布団出して、その布団に体を包める。

「じゃ、おやすみ」

ユミルは、ミチともミライとも少し離れた場所で、そう言って横になった。

「おやすみなさい」

ミライも軽く挨拶を交わす。

そして、大きなあくびと深呼吸を同時に行う。

しばらく体育座りの状態でぼーっとして、うとうとと、眠気に教われ始める。

「・・・バリアー」

ミライは小声で呟き、昨日と同じように、暖炉を中心として相当の距離を囲むように、バリアを4方向に張り合わせる。

高さは昨日よりも無い気がする・・・。

上も塞がないと・・・。

そう思いつつ、バリアで天井に蓋をした。

そして、ミライは眠気に逆らわずに、草の地面に横になってから眠りにつくのだった。

第43層 包囲(前書き)

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第43層 包囲

「おはよう。やっと目が覚めた？」

ミライは眠りから覚めた瞬間に、そうミチに言われた。

ミチの隣にはユミルも居るので、ミライが一番最後に起きたようだ。

「お2人とも、お早いお目覚めのようで」

ミライが目を擦った後に言った。

「それはね・・・」

ミチはそう言っつて、向こうのバリアの方を見る。

ミライもミチの視線を追うようにバリアの方を見る。

バリアを1枚越えた先には、モンスターがずらりと並んでいた。

なんだ、モンスターの群れじゃないか・・・。

「え、ええ!？」

ミライは突然叫ぶと、もう一度バリアの方を目を凝らして見る。

バリアを1枚越えた先には、モンスターがずらりと並んでいた。

ミライは、ふと立ち上がり、体をゆっくり1回転させバリア全体を見る。

昨日の暖炉の焚き火は完全に消えている。

そして、バリア周りを囲むように、両手に鎌を持つモンスターの群れ、恐らくマンティスの群れがそこにはいた。

「何故こうなったのか説明してください」

「私が知りたいわよ!」

ミライの問いに、ミチが強めに返した。

「どうするの?これ・・・」

ミライが呟くように言った。

「とりあえず・・・ミライ、あの呪文できるか?」

ユミルに言われて、ミライは少し考えてから、あの呪文の存在を思い出す。

「あー了解。では、アペンシス！」

ミライは目を覚ますためにも、呪文名を大声で言った。呪文発動後、ミライを中心に、ステータス画面が現れる。

「おー僕レベル上がったるじゃん。って・・・気持ち悪・・・」

ミライが自分のレベルの上昇が喜べるのは、一瞬だけだった。

ふと、バリア越しのモンスターたちを見ると、ステータス画面が気持ち悪いぐらい重なっていた。

その数ざっと見て50匹。

「モンスターの声、聞こえるか？」

ユミルがミライに対して聞いた。

「うん・・・聞こえすぎて気持ち悪い。でも、やる気らしいのは分かる」

やる気と言うのは、中の3人を殺す気だということ。

どうやらユミルは理解できたらしく、苦笑いを浮かべている。

「ミライって、モンスターの声聞こえてるの？」

ミチもミライに対して質問をした。

そういえば、ミチは知らないんだっただな・・・。

「たぶん完全に身に着けたと思うよ」

「ふーん」

ミチは軽い返事をして、バリアの方を見る。

「んで、どうする？」

ミライが2人に対して聞いた。

ミライの質問の後、3人とも少し黙り込んだ。

その間、バリアがマンティスの鎌を弾く高い音が、いろいろな場所から聞こえてくる。

少し自分のバリアの頑丈さにに感心してしまう。

そして、昨日の戦闘のミチの蹴る力に対しても・・・。

3人が黙り込んだ中、一番最初に口を開いたのはミチだった。

「とりあえず、このまま待ってみようか？」

「腹減ったね。そういえば・・・」

ミライは呟くように言った。

「戦闘する前に、腹ごしらえしとくか」

「賛成！」

ユミルの言葉に対し、ミチが手を上げて、笑顔で言った。

「思わずこちらも笑顔になってしまう。」

「じゃあ、軽く作りますか」

ユミルはそう言って、調理の作業へと入る。

ミライとミチは、周りの視線を気にしつつも、ユミルの調理作業を話しながら眺めるのだった。

第44層 破片無双（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第44層 破片無双

「よし、できた!」

「よし、焼けた!じゃないの?」

ユミルの完成の声に、ミチが笑みを浮かべながらツツコミを入れた。ユミルが、作っていた朝食は、じゃがバターとでも言うのだろうか。

ジャガイモを大きめの鉄の棒で刺して、バターを乗せて焼いただけ。ミチと共に、料理じゃない!と批判してたが、焼けてきたときに来る良い香りによって、批判は共感へと変わっていった。

シンプルなのに凄く美味しそうなイメージ。

いや、間違いなく美味いだろう。

そんな美味しそうな芋が棒に刺さったまま、ミチ、ミライへと配られる。

「いただきます!」

「いただきます」

いつもの合掌を終えて、ミチは熱々をがぶりつく。

「あふっあふっおふっほふっ……おいしい!」

「そんなに慌てなくても」

ユミルは軽く笑い、ミチに言葉を返した。

ミライも、よく吐息をかけてから一口食べる。

「うん、おいしい」

「シンプルイズベストだな」

ミライの言葉の後に、ユミルは言った。

しばらくの間、3人は黙々と焼き芋を食べ続けた。

「ごちそうさまでした!」

「ごちそうさまでした」

3人は手を合わせ、合掌。

「さて、これからどうする?」

ミチのこの聞き方も、パターン化されてるなと思う。

まあ、今からすることって言っても、この状況どうにかしないと
な……。

「どうするも、こうするも、この状況だしな」

ユミルは腕を抱えながら言った。

「ミライ、バリアの外側に魔法出せないの？」

「やってみる」

ミチの言葉に応答し、ミライは集中する。

そして、真上目掛けて手を伸ばし一言。

「フゲネスフレ임」

そう呪文名を言った瞬間、バリアの内側で大きな炎の玉が出来上がる。

「だめっばいね」

ミライは呟き、真上の炎の玉を消した。

「だめかー。うーん……」

ミチはそう言い、目をつぶる。

3人ともしばらくの間無言になる。

周りからは、モンスターたちの声が聞こえる。

(どうしたら、このバリアを越えられる？だれかわからんか)

(隙間はありますが、入るのは無理です)

(どうやったら奴らを……)

モンスターも考えるんだなーと感心してしまうミライ。

少し時間がたち、ミチが何か思い出したかのようにミライに聞く。

「そういえば、昨日、何でバリアから離れなきゃダメだったの？」

「バリア消すときに、失敗して破片が飛び散らないように……」

ミライがミチに言葉を返したときに、一瞬空気が止まった。

「それだ！」

3人の言葉がほぼ重なり、2人はミライに対して指を刺した。

「じゃあ、早速！」

ミライはそう言い目をつぶると、集中モードに入る。

バリアを粉々にし、相手に飛ばすイメージ……。

「よし、どうだ！」

ミライは目を開けて強めに言った。

するとバリアは、うまい具合に割れて、破片がマンティスの群れを全体的に襲った。

次々と、バリアの近くに居たマンティスから順に倒れていく。

いい感じだと思っていた、その時だった。

3人の近くに、大きなバリアの破片が1つ落ち、地面に突き刺さる。

どうやら、蓋になっていたバリアの破片が、一度天に向かって飛ばされ、地上に戻って来たらしい。

ミライは、真上の空を見た。

それに釣られて、ミチもユミルも見ると。

空に見える、無数の破片。

「みんなかわせ！」

ユミルの言葉が言い終わる頃に、2個目の破片が地面に刺さる。

ミチとユミルは、武器を取り出した。

次々とバリアの破片が空から降ってくる。

「えい！いやっ！えい！」

ミチは、破片を弾くたびに声を放っている。

ユミルは大剣を振り回し、無双状態。

「うわっ、ひいっ……あ……」

ミライも必死に叫びながら避けて、何かを思い出したかのように立ち止まった。

「解除！」

ミライは大声で叫んだ。

叫んだ瞬間、上空から振ってくる破片も、地面やモンスターに刺さった破片も、全て綺麗に消え去った。

「ふー危なかった……」

ユミルが一息つく。

「ちょっと、気づくの遅すぎ!」

ミチはミライに対して少し怒った。

「まあ、助かったんだし…今はそんな事よりも…」

ミライはそう言っつて、周りを見渡す。

周りには、バリアの破片の襲撃から生き残ったマンティスが数匹いた。

やけに戸惑っているようだが、襲ってくることには変わりないらしい。

「この戦闘終わったら、反省会ね!」

ミチは、両手の剣を振り回し、余裕の表情。

「へいへい、行くぞ!」

ユミルはそう言っつと、目つきが鋭くなる。

そして、8匹対3人の戦闘が始まるのだった。

第45層 ファッションショー準備（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第45層 ファッションショー準備

「ミチ！ラスト！」

「えーいつ！」

ユミルの掛け声で、ミチが最後のマンティスを双剣で切り裂いた。

「はあ、はあ・・・」

ミチは相当息を切らしているようだ。

まあ、相手のほとんどがミチ狙いだっただけで無理も無い。

「お疲れさん」

ミライはそう言って、2人に飲む回復薬を2人に投げた。

2人は当然のようにキャッチする。

「どうもー」

「おっサンキュー」

2人はミライに軽く礼を言うと、ほぼ同時に回復薬を飲み始める。

ユミルは一気に飲み干した。

「ぶはー。いやー長期戦だったな」

ユミルが言った通り、危なげなシーンは無かったが、もの凄く時間が掛かった気がする。

まあ、時計なんて物は常備してないので分からないが。

「何で私ばかり狙ってくるのよ！」

「一番狙いやすかったからじゃ？」

ユミルがそう言葉を返した。

「ふん！女だからって、甘く見たら痛い目見るんだから！」

「痛い目どころか、全滅だけどね」

ミライがミチに言葉を返して笑った。

ミチが、2人を見て、自分を見て、呆れるよう口を動かした。

「うっわ…パジャマ、どろどろ・・・」

ミチがそう言ったので、ミライは自分を含め3人の体に視線を向ける。

マンティスの体液で、3人とも、どろどろ状態だ。

ミチは凄く顔を強張らせている。

「さて、着替える事にしようか」

ミライが言い、視線をミチに向ける。

「ミライ、暖炉に火をつけて！」

何故だと疑問に思いつつ、ミライはミチに言われるがままに、昨日の暖炉の場所に火をつけた。

「もっと大きい目の火がいい！」

「はいはい」

ミライは火の大きさを2mぐらいまで高くした。

「いいわよ。じゃあユミルここで待機ね」

ユミルはミチに言われて、不思議そうな顔をする。

「何考えてるんだ？」

ミライは、ミチに引つ張られながら言った。

「いいからいいから。ここでミライ待機ね」

ミチに待機を指定されてから、すぐにミチ声が聞こえてきた。

「ミライ、ユミル、今からそこで着替えてね。誰も見えないでしょ？」

言われた後に周りを見るが、確かに熱く燃え盛る暖炉で、2人の姿は見えなかった。

「これをする意味はー？」

ユミルが暖炉の向こうから叫ぶ。

「覗き見防止とか！服装の見せ合いみたいなの？」

ミチは前半部分を少し嫌味口調に言った。

ユミルは何も言い返せないようだ。

「じゃあ、着替えるわよ！5秒でいいわね？」

「おっけー」

「いいよー」

ミチの問いかけに、ユミル、ミライと答える。

「ミライ！5秒私が数えきいたら炎消して！」

「了解」

「じゃあ、スタート！」

ミチの掛け声と共に、お着替えタイムが始まったのだった。

第46層 おしゃれ(前書き)

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第46層 おしゃれ

「よーん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「っ！」

ミチのカウントが、ようやく終了する。

ミチは5秒数えたが、実際は20秒ほどだろうか。

ユミルが「長いわ！」っと突っ込んだのも無理は無かった。

2人はどうか知らないが、ミライ自身は、ミチカウントで2秒後には着替え終わっていた。

ミライの前の服装は夏用半袖学生服だ。

軽くて、動きやすく、一番なじみがあった服装だった。

ミライの5秒間で着替えた姿は、あの時戦った魔女クリーを参考にした。

半分は想像なので、どう出来るかは心配だが……。

上半身は、ベージュ色の長袖で大き目のパーカー。

一応、フードは前髪以外隠すように被っているが暑い……。

自分の黒髪に湿気を感じる。

見せたらフード被るのやめようっと。

フードの先っぽは、あの魔女さんと同じく長めで、とんがっている

やはり魔法使いの帽子は、こうでないかね。

首元には、2本の紐が、だらしなく伸びている。

そして、下半身は魔女と同じスカートという訳にも行かないので・

・・、ダークブルーのカーゴパンツ。

ジーンズでも良かったのだが、戦闘用に動きやすさを重視。

でも、長ズボン。

靴は変えずに、泥だらけの黒いスポーツシューズ。

自分なりに、短時間ではよく思いついたなと思う。

この世界に着てから、想像力が急成長した気もする。

ミライは、ミチのカウントの5を聞き終わると、目の前に燃え盛

る炎を消した。

ミチとユミルの姿が、同時に見える。

2人とも服装変わると、イメージ変わるな……。

まずは、ユミルの服装から見ようか。

前の服装は、覚えてる範囲で、グレーの長袖ジャケットと、中に白いシャツ、黒の長ズボン見たいな感じだったかような……。

今着ている服装は、まず、頭に帽子を被っている。

緑髪の上に、ライトイエローのチロリアンハット。

飾りに付いている青と白の羽と、髪色と、焼けた肌色が、なぜか良く合っている。

上半身は、インナーとして白いシャツが見える。

前と違って模様があるが、そのスタイルが相当気に入ってるようだ。

そして、羽織ってるのは、ブラックの半袖のサファリジャケット。

下半身は、カーキのカーゴパンツ。

デザインはミライとは違うものの、長ズボンなのは変わらない。

靴はホワイトのスポーツシューズ。

表情を見る限り、かなり自分の服装に自信があるようだ。

ミライは目線を、ユミルからミチに変えた。

ミチは、前が夏季学生服だったので、今回のがもの凄くおしゃれに見える。

まず、長く、輝いていない金の髪に、変化があった。

まあ、頭のとっぺんに、大きくも小さくも無いような大きさの、アリアのリボンが付いていた。

そして、服装はと言うと、スプリンググリーンのワンピース。

腕や肩が露出するタイプで、両肩に架かる2本の細めの紐を切ってしまうば……。

そんな肩に架かる紐は、少しふりふりが付いている。

ワンピースの色は、下に向かってどんどん薄くなっていく。

ワンピースのスカートの方は、丈が膝まで来ていて、お嬢様が着る

ような感じにしか見えない。

シンプルだが、一番ベストなワンピースだろう。

ミチの白めの肌色にも合っている。

そして足元は、ブラックのハイソックスに、ホワイトのブーツ。

何故だろう、かわいさが増した気がする……。

3人はしばらく黙って、他人の服装を見る。

みんな表情はどこか明るさを感じる。

「2人とも良い感じね」

ミチは笑顔で言った。

「そちらこそ」

ミライはミチに言葉を返した。

ミチは言われて、にっこり笑う。

「さて、じゃあ先に進みましょうか」

ミチは服装が変わると、言い方もオシャレな感じがする。

「だな。時間は待ってくれないしな」

ユミルがそう言い、帽子の角度を調整する。

「行こう！」

ミライが元気に言い、ミチの元へ歩いて向かう。

ユミルもミチの元へ歩く。

ミチはそんな2人の姿を見て、大樹に向かって歩き出す。

こうして3人は、旅の3日目を歩き進めるのだった。

第47層 明日への作戦会議とあの時の少女（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第47層 明日への作戦会議とあの時の少女

「ついに着たわね」

ミチは、目の前の光景を見ながら言った。

3人の目の前に現れているのは巨大な森であった。

木の1本1本が規格外の大きさだ。

だが、目的の大樹はまだまだ先で、まだ大きく見える。

そして、森の雰囲気が夕暮れのせいかもしれないが不気味だ。

入り口は何となく分かるが、1本道と言うわけでは無さそうだった。

この場所に来るのに、ほぼ一日掛かった。

途中で、モンスターとの戦闘が数回あったが、そこまで苦戦はしなかった。

むしろ、良い経験値稼ぎとなった。

「今日は、ここで休みましょ」

ミチが冷静に言う。

2人は、ただただ肯く。

そして3人は、夕食作りと、各自明日への準備を始めるのだった。

夕食の焼きチーズパンを食べ終え、ミチのトイレも昨日のように済ませて、ミチが着替え終わった後。

3人は、今後の作戦会議を立てていた。

「だーからー、前戦なんて無理だつて」

ミライは強く主張した。

ミチの提案は、自分自身は後方から回復の援助で、ミライが前戦で魔法を放つと言う案だった。

その提案に、もちろんミチは賛成で、ミライは大反対。

ユミルは、別にどちらでも…と言った感じだろうか。

確かにミチの回復術は便利だ。

今日あった戦闘の中で実感した。

戦闘中の回復は、戦闘を有利に運べるようだった。

ただ、魔法使いが前戦？

聞いたこと無い話だ。

どんなゲームでも、魔法使いは後方から遠距離特殊攻撃！

まあ、魔術師前戦が無いというわけではないが……。

大体、ステータスが違いすぎる……。

「あっ」

ミライが呟いた。

「どうした？諦めが付いたのか？」

ユミルが笑みを浮かべながら言ってくる。

「いや、みんなステータス見せ合おうよ」

ミライはそう言っつて、自分のステータス画面を出す。

2人に見えるように、少し大きめの画面にした。

ミチとユミルは、ミライの言を疑問に感じながらも、ステータス画面を出す。

「3人の体力と防御力に注目ー」

そうミライは言っつて、自分の体力と防御力をの場所を指差す。

ミライの体力は522で、防御力は280。

ミチは、1553の、488。

ユミルは、2233の、520。

「おわかりいただけただろうか？」

「ミライが弱すぎるね」

ミライの問いに、ミチが笑顔で返す。

少し心が痛い、魔法使いだから仕方ないと自分に言い聞かせる。

「確かにレベル差も有るかもしれないけど、やっぱり職業でステータス変わるんだよ。僕が前戦に行ったところで、死にやすくなるだけだっつて」

「なるほどねー」

ミライの説明に、ユミルが納得の声をあげる。

ミチも諦めた表情をしている。

この考えは否決された。

「まあ、仕方ないわね。じゃあ、私とミライが後戦で、ユミル一人で前戦ね」

「却下！俺一人だったら持たないって……」

「そこは私が援護するから！」

「却下だ！」

こんな感じで、3人の作戦会議は長々と続くのだった。

作戦会議も終わり、ミチもユミルも完全に寝てしまった。

会議結果は、結局ほぼ今まで通り。

変わったのは、危なくなったらミチが下がって援護するが追加されただけ。

2人はスースー眠っている。

だが、ミライはどうしても眠れなかった。

ミライからの視線で、少し奥の草陰に何か居るのだ。

魔法で燃やそうかとも考えたが、一応こっそりアペンシスを掛けた。すると、相手はミライと同じ挑戦者なのだが、レベルが43と異常に高い。

ミライとのレベル差13。

魔法打たなくて良かった……。

そんな事を思いつつ、いつも通り5面にバリアを張った。

だが、妙にあの草陰が気になって眠れない。

ミライは、じーっと草むらを見続けた。

しばらく見ていると、ついに草陰の中にいる者の正体が分かった。「あっ」

ミライは、その正体に思わず声を上げた。

出てきたのは、ビナンケの町でミライを瀕死まで追い込んだ、あの依頼時のすれ違いの少女がいた。

名前はセーナね……。

セーナの格好は前と同じだ。

そして、セーナは草陰から出たと思うと、夜の森の中へと消えていった。

何がしたいんだろう・・・。

ミライは、深く考え込もうとする前に、凄い眠気に襲われた。

「いいや。ねよう」

ミライは呟くと、その場で横になり、深い眠りに付くのだった。

第48層 森へ(前書き)

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第48層 森へ

「おはよー」

先に目覚めている2人に対して、ミライは言った。

「お、やっとお目覚めか」

「おはよー！もう朝食出来てるからね」

ユミルとミチに言葉を返されてから、ミライは甘い香りのするホットケーキの前に座った。

ミライは、大きくあくびをしてから「いただきます」と言い、フォークに手をつけて食べ始めた。

「眠そうだな。昨日なんかあったか？」

ユミルは少し笑みを浮かべながら、ミライに対していった。

「いや、ね…セーナって言う女の子がああ森から森に入ってたんだ」

「ふーん。分からないが、まあいいや」

ミライの説明にユミルは軽く言葉を返した。

「何で名前分かるの？」

ミチは不思議そうにしている。

「モンスターかと思ってアペンシスかけた。レベル43だったね。」

確か・・・」

「ふーん」

ミチはミライを疑った表情を見せてくる。

「ごちそうさまでした」

ミライは手を合わせて言った。

「さて、全員朝食も食べたし、行きましょう！ミライ、明日は無理にでも起こすから」

ミチはそう言って立ち上がり、ワンピースのスカートの部分を両手で払った。

「寝坊してごめんなさい…っ」と

ミライも立ち上がる。

ユミルも立ち上がり、険しい顔で一言言った。

「気を引き締めていこう。この先辛くなるかも知れないからな」

3人は、森の入り口の方を見る。

「じゃあ、入るわよ」

ミチは森の入り口に向かって歩き始めた。

ユミルも、ミチに就くように歩き始める。

「よし、行こう！」

目を覚ますために大きく声を出し、ミチについていった。

そして、3人は森の中へと姿を消したのだった。

第49層 迷死森へシタテス（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第49層 迷死森へシタテス

森の中。

入ってみて、その中の雰囲気を一言で表すと『闇』だろうか。

森の上の上空からは光が差しているが、地面までは届いてない。

地面からの景色は、太い幹たちと、広がる苔と、少しのシダ植物だけ。

空気も、そこまでおいしく感じない。

そんな森の中、ミライたちは……モンスターたちから逃げていた。

「ちよつとー何なのよ、この数！」

ミチは全力で先頭を走る。

「しるかよ！いいから走れ！」

ユミルも言葉を吐き捨てながら、ミチの後ろを進んでいく。

「はぁ、もう魔力なくなっちゃうよー！」

ミライは最後尾で、走りながらバリアを後ろに放っている。

どうしてこんな事になったのかと言うと、さかのぼる事数分前。

「うわっ、迷い死に行くの森、へシタテス……だって」

ミチは、目の前の苔だらけの看板を見ながら言った。

「だれがこんな所に看板建てるんだ……」

ミライがぼそつと呟いた。

「たしかにね。で、迷うで思ったんだけどさ。このまま、まっすぐ行ったら、あの大樹に着くよね」

「そうだけど、それがどうした？」

ユミルがミチに聞き返した。

「どうにかして、この森をまっすぐ抜け出せないかなーってね」

ミチは、恐らく大樹のあるだろう方向を向く。

「たとえば……この森の上までミライのバリアで上って、そこから、

あの大樹に向かってバリアの上を歩いていくとか」

ミチは右人差し指をピンと上に立てながら、2人に対して言った。

「それいいかもな！」

ユミルも賛成の様で、ミライを見つめる。

「たぶん、無理だと思うよ・・・」

「何で？」

ミライの声に、すかさずミチが言葉を返してくる。

「だって…ほら」

そうミライは言って、目の前に細く高いバリアを作り出した。

そこに出来たバリアは、大樹と一直線につなぐ道筋に塞がる木の半分までしか、高さが届いていなかった。

10m位が限界のようだ。

「これが、僕の限界っぽいよ」

ミライは、バリアを見上げる2人に対して言って、バリアを消した。

「だめか・・・じゃあ、この木たちを全部伐っていくとか！」

ミチはそう言うと、目の前の木の幹に、跳び蹴りをくらわした。

蹴られた木は大きく揺れて、上から何かドサツドサツと落ちてきた。

「え・・・」

ユミルは驚いた表情で、一言いった。

落ちてきたのは、蜂のようなモンスターが2匹。

モンスターの体は、人の顔位の大きさがあるだろうか・・・。

それよりも、その体と比例する位の大きさの針って・・・。

しばらくしないうちに、落ちてきた2匹も起き上がって飛び、その周りには、お仲間さんが沢山集まっていた。

「…ねえ、これ…まずくない？」

「良くはないと思うよ・・・」

ミチに対してユミルは言葉を返す。

モンスターの軍勢と3人はらめ合いをしていたが、ついに向ここの軍勢は、こちらとの距離を素早く縮めてきた。

「逃げるわよ！」

ミチは叫び、走り出した。

2人もミチを追いかけて走り出す。

ユミルが走りながら後ろを振り向く。

振り向いた瞬間、顔を強張らせ前を向き言葉を吐く。

「やばい、やばいつて！これ！」

こうして、3人の逃走劇は始まったのだった。

だいぶ道を右や左にぐねぐね曲がって、長い直線の道をだいぶ走った辺り。

ミライのバリアのおかげで、数は半分に減って、距離も離れたものの、まだまだモンスターは沢山追いかけて来る。

バリアを置いても回り込まれる。

どうすれば当たる・・・よし！

ミライは一つの案を浮かべる。

そして、しばらく走ってから、最後尾にいたミライは、突然足を止め振り返った。

「バリア！…発射！」

ミライは目の前にバリアを張り、強くモンスターの方へと飛ばした。道幅ギリギリの、高さと重さ最大のバリアだ。

バリアを飛ばしてから、ミライはミチたちの方へと全力で走り出す。

ミチたちに追いついてから、ふっと後ろを向いた。

振り向いた先にモンスターの姿は無かった。

どうやら、作戦は成功したようだ。

「ねえ、もう追いかけて来ないよ！」

ミライは、少し先を走る2人に対して叫ぶように言った。

2人はこちらに振り向き、足を止めた。

しばらく3人の呼吸の乱れる音が鳴り響く。

「どうにか逃げ切ったみたいね」

「だな」

ミチとユミルは、呼吸を整えてから言った。

「あんな針反則よ。間違ひなく刺さったら毒無くても貫通して死んでたわ！」

「まあ、飛ばしてこないだけ、いいんじゃない？」

ユミルは、ミチに言葉を返して笑った。

ミチも釣られて笑う。

ミライも笑うが、すぐ表情を戻し一言疑問を言う。

「ねえ、どっちが大樹の方だろう？」

ミライの質問に、2人の笑顔は苦笑いへと形を変える。

360度、どこを見てもほぼ同じ景色。

こうして3人は、完全に森の中で迷子になるのだった。

第50層 夜の森（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第50層 夜の森

「あーもう！こごとこよ！」

「森の中ね」

ミチの言葉に、冷静にユミルが返す。

このパターンは、もう3回は聞いただろうか。

それくらい、だいぶ長い時間の間、3人は迷いに迷ってるのだ。

どうにか森を抜けようと、色々試みたものの、全て失敗で終わっている。

ひたすら真っ直ぐ歩いて行こう作戦や、地面に剣で線を付け続け行こう作戦は、モンスターに出くわせばすぐに終了。

結局3人は、ただただ歩くことしか出来なかったのだ。

しばらく歩き続けていると、ミチとユミルの姿が、だいぶ見えなくなってきた。

どうやら、夜が近づいているらしい。

「なあ、今日はここで休まないか？」

森の中の広い場所に出て、ユミルが言った。

「ミライも無言でうなずく。」

「でも、危険すぎるんじゃない？」

「夜道を動くほうが危険だ」

「分かったわよ・・・」

ユミルの言葉に、ミチも納得したらしい。

ミライが少し開けた場所に、薪を入れて魔法で火を点す。

ただ今回は、燃え広がり避けるために、暖炉の周りにはバリアを張っておく。

「お、わかってるな」

ユミルが感心ながら言った。

「じゃあ、軽く作るわね！見張りお願い」

「了解」

ミチの声かけに、2人の返しの声が重なる。
2人は思わぬ事に軽く笑った。
こんな感じで、夜の森が始まるのだった。

第51層 羽音の訪問者（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第51層 羽音の訪問者

3人が食事にしようとした時だった。

暗闇から羽音をたてて、蜂のようなモンスター集団が3人を取り囲んだ。

3人は立ち上がり、お互いに背中を向け合う。

蜂もどきの軍団は様子を見ているようだった。

「やばっ、どうするのよ」

「どうするって言われてもなー。戦うしか・・・」

「バリアー！」

2人の会話を聞くことも無く、ミライは呪文を唱えた。

蜂もどきの軍勢との間に、バリアで境界線を作り上げた。

「おお、やっぱりバリアって便利だな」

ユミルは感心している。

周りの蜂もどきたちはバリアに針を刺すが、傷一つつかない。

「じゃあ、食事にしようよ」

ミライは余裕の表情を見せつけながら言った。

2人は、そのドヤ顔に苦笑いを浮かべることしか出来なかった。

そして3人は、ミチが作ったと言うよりは盛り合わせた大量のフルーツの前に、囲むように座った。

「いただきますー！」

「いただきます」

こうして3人は、モンスターに見られながらの食事を始めるのだった。

第52層 燃え盛る双剣（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第52層 燃え盛る双剣

バリアには防音性など無い。

だから、食事中は、バリア外から「ブンブン」と言う音が鳴り止むことは無かった。

3人は、この羽音を話のネタにしながら、食事を進めていった。もちろん、この状況を回避するための作戦も考えながら。

「ごちそうさまでした！」

「ごちそうさまでした」

3人は食べ終わると、すぐに立ち上がり、同じバリアの方を見る。

「作戦通りに行くわよ！」

ミチが双剣を構えて言った。

「了解！アペンシス！」

ミライは右手を高く上げて、叫んだ。

が、3人のステータス以外まるで見えなかった。

「敵のステータス見えないんだけど・・・」

「やっぱりバリアが跳ね返すんだな。仕方ないか」

ユミルが残念そうな表情をしながら言った。

バリアで跳ね返す説は、作戦会議中にも出ていたので予定内だ。

「じゃあ、アペンシスなしで行くよ！」

ミライはそう言い、目をつぶり集中に入る。

「フリーズ・スプリンター！」

ミライが呪文名を叫ぶ。

すると、3人を取り囲んでいた5面のバリアは、粗い氷の破片となり、蜂もどきに刺さっていく。

「バリア！」

ミライは、すぐに新しいバリアを張る。

今度は、6面だ。

左右と、後ろと上に1枚ずつ。

そして、3人が向く正面にはバリアが2枚で、真ん中はあえてモンスターが入れるように隙間を作る。

そう、これが3人の考えた作戦だ。

これなら、この数を全て同時に相手しなくてすむ。

ミチとユミルは、作り上げた隙間に向かって走り出す。

バリア内の空間は、だいたい10×10×10の1000立方センチだろうか。

蜂たちが予定通り、1mぐらいのバリアの隙間に入ってくる。

その数1度に4匹程度。

これならいける！

「アペンシス！」

ミライは叫んだ。

「レベルは右から順に30、35、25、33。弱点は火！」

「了解！」

ミライの言葉に、ミチが軽く返事を返した。

ちなみに名前は、全て「アビリー」。

ミチとユミルは、確実に数を減らしている。

全てが作戦通りに行っている。

と思ったその時だった。

素早く一匹のアビリーが、ミチとユミルの攻撃をかわし、ミライの後ろに回り込んだ。

「やばっ」

ミライは声を漏らし、すぐさま振り向き、火の魔法を放つ。

見事に、アビリーに命中し、アビリーは燃えて消えた。

だが、少し遅かった。

「うああああああああああああああ」

もの凄い痛みに、ミライは叫んだ。

腕の半分ぐらいの太さの針が、ミライの右肩に貫通していたのだ。針はまだ残っていて、出血が止まらない。

ミライは、足元から崩れるように倒れた。

地面に寝そべって、2人の戦闘を観戦するような形になった。

「ミライ！」

ミチが、倒れたミライに対して叫ぶ。

だが、回復に向かうには、残り50匹は、いるだろうアビリーを倒さなくてはいけない。

「ヒート・ブレード」

ミチは、呟くようにその言葉を言った。

すると、ミチの双剣が燃え上がった。

しかも、2段階、3段階と、炎を大きさは増していく。

ユミルは驚いた表情を見せながらも、ライトアタックでアビリーにダメージを与えていく。

ミチも、双剣の炎を4段階まで火力を上げて、アビリーに斬りかかる。

斬られたアビリーは一撃で燃えて消滅した。

あまりの炎の大きさに、近くにいた2匹のアビリーも巻き沿いを食らい、消滅する。

ははは…ミチもあんな技が使えたとはな…。

これじゃああときの試合は、お互いに抑えあったのね…。

ミライは、ミチとの戦闘を思い出しながら、気を失うのだった。

第53層 恩返し(前書き)

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第53層 恩返し

物音1つない自分の家、部屋。
周りで騒ぐ同級生、教室の中。

ああ、戻ってこれたのか。
戻ってきてしまったのか……。

「……………ついで……………つらい……………みらい……………ミライ!」

ミチの叫ぶ声に、ミライは目を開けた。

「よかった……」

ミチは今にも泣き出しそうな表情を浮かべている。
すぐ隣には、ユミルの微笑む顔が見える。

「ここは……」

ミライは、周りを目だけ動かし見る。

張り巡らされたままのバリアと、真上のバリアの奥の木々の葉の隙間から、かすかに光が見えている。

とにかく、もう日は昇っているらしい。

「大丈夫か、ミライ。一応言っておくと、あの戦闘が終わってから
の朝だ。ミライの怪我は夜通しでミチが治した。そして俺はユミル
だ。分かるか?」

ユミルがゆっくりとした口調で説明した。

そういえば、右肩のもう痛みも無い。

一応左手を右肩に当てて確認するが、穴なんて開いてないようだ。
「なんか、ありがとね」

「いって別に。これで借りが返せたしな」

ユミルが言い、笑顔を見せる。

「ふぁーあ、さて、ミライも目を覚ましたし、私は少し寝るわね。

ミライ料理よろしく!」

ミチが笑顔で言った。

そういえば、今日、当番だっけ……。

「いててて、急に右肩が……」

「嘘ついてもダメね」

ミチには嘘が通用しないようだ。

「まあ、当番だから頑張れよ！俺も寝よつと」

ユミルは言つてから、大きな欠伸をして立ち上がる。

「んじゃ、よろしくね。あと、バリア張替えとかないと、モンスター入ってくるかも」

「はいはい、しときますよ」

ミライは軽く返事を返し、体を起こし、頭をかく。

ミチも立ち上がり、ユミルの方に歩いて行く。

ミチとユミルは、バリアフロアの中心辺りで、地面に寝転がり目を瞑った。

「おやすみー。…ありがとうな」

お礼の言葉は聞こえないように小声で言った。

寝ているかどうか分からないが、2人の表情は笑顔だった。

良い仲間に合えたな…本当に。

2人の寝顔を見て、ミライも思わず微笑んでしまう。

「さてと……」

ミライは立ち上がり、バリアを全て一回消し、今度はほぼ隙間無くなるようにバリアを張り替えた。

そして、ミライは昼食の準備を始めるのだった。

第54層 暇な時間（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第54層 暇な時間

2人が「スースー」と寝音を立ててから、何時間が経つのだろうか。

食事の準備はとづくに出来ている。

起きてからすぐに食べれるように、チーズフォンデュにした。

2人が起きたらチーズを溶かせばいいし、食材は切ってメニュー画面に保存できるし、と思つてそれにした。

だが、2人は眠つたまま起きない。

ミライはあまりにも退屈なので、自分の魔法で一人楽しんでいた。アペンシスを放ち、ミチとユミルのステータスを見比べてみた。でも、文字を読む作業しかないのですぐに飽きた。

次は、バリアを大きさや厚さを色々変えて、作つたりもした。でも、面白さも何も感じなかった。

そして、今は壁になっているバリアに対して、最弱力の火の玉を放ち、バリアに跳ね返つて、地面でそれが消える。

この地味な作業を、座りながら淡々と繰り返した。あまりのむなしさに、心が落ち込んでいく。

自分ももう一度寝ようかな・・・。

そんな事を考えてた、その時だった。

ミチが突然、上半身を地面から起こして、周りを見渡している。

「お、やつと起きたか・・・」

ミライが言葉を掛けている途中で、ミチは再び地面に体を倒し、寝音を立て始める。

「アペンシスで相手の夢も見れたらいいのにな・・・」

ミライはそんな事を口にしつつ、火の玉をバリアに当て続けるのだった。

第55層 異変（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第55層 異変

バリアが魔法を反射するときの角度が分かり始めた頃だった。ふと、バリア外の何も変わらない木々の景色に異変が見えた。

モンスターの軍勢が、同じような場所に向かっていているように見えた。

見た事あるモンスターもいれば、全く始めて見るものもいる。

「いったい、あんなに急いでどこに行くんだろっ……」

「そういえば、目的地の大樹って……」

「ミライー何見てるのー？」

ミチが突然声を掛けてきた。

「ミチは、ミライの隣に座った。」

「お、やっと起きたか。随分と変な夢を見ていたみたいで」

「何？夢の中でも覗いてたの？」

「ミチは少し目をとがらせてミライを見る。」

「いや、一回突然起き上がったらと思ったら、また寝たから気になっ
つて」

「ふーん。まあ、話す気は無いけどね」

「ミチは微笑んでミライを見る。」

「で、何か考えてたみたいだけど…何かあった？」

「ミチがそう言っつて、話を切り替えてきた。」

「いや、さっきあの辺りで結構な数のモンスターがさ、あっちの方
に向かった行っつたんだよ」

「ミライは指を指しながら話した。」

「それで？」

「なんか変だなーっつて…それだけけど」

「ねえ、そっちの方向行っつてみない？」

「何で？とは聞かなかった。」

「恐らくミチは、僕と同じ考えにたどり着いたのだから。」

「そうだね。行くところか。いく当ても無いからねー」
そう言っつて、ミチと目が合う。

そして、2人はお互いに笑顔を見せる。

「なんだか、不思議な出会いよね。私たち」

突然ミチが、遠くの方を見ていった。

確かに、ミチと会ったもあの場所で偶然だし、ユミルもあの町で偶然出会った。

そう思い、ミライはユミルの方を軽く見る。

少し笑みを浮かべているユミル。

ユミル起きてないか・・・？絶対こっちの方向いて無かったよな、さっきは確か・・・。

ミチもミライに釣られてユミルの方向を見る。

「確かに偶然が引き合わせたんだよな。ねー、ユミル」

ミチは一回ミライを見て、またユミルの方を見る。

ユミルからの出ていた微笑が消えた。

ユミルのやつ、間違いなく寝た振りして話聞こうとしたな。

「ねーユミル！」

ミライが少し強めに言った。

すると、ユミルは再び笑みを浮かべた。

「なんだ、ばれたか」

ユミルはそう言っつて、起き上がった。

「向き変わりすぎだ。さて、食事の時間にしようよ」

ミライはそう言っつて立ち上がる。

「お腹空いたー。朝食何なの？」

そう言っつてミチも立ち上がり、ユミルの方向に歩き出すミライについて行く。

ユミルは待ってましたと言いたいような、うれしそうな表情を見せる。

「今出すっつて。あと、朝食じゃなくて、昼食だと思っつよ」

ミライはそう言っつて笑っつ。

ミライは準備していた鍋を取り出し、置いた鍋を三人が囲む。そして、3人は話しながら昼食を食べ始めるのだった。

第56層 迷死森脱出と新たな問題（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第56層 迷死森脱出と新たな問題

食事中は、今後の作戦会議。

ここ数日は、そんな食事を送ってる気がする。

今現在も、作戦会議中だ。

「で、行ってみようかってね!」

ミチの元気の良い説明が終了した。

まあ、説明しても、しなくても、結果は同じだろう。

「まあ、行こうか。モンスターに見つからない程度にだけどね」

ユミルが少し笑顔を見せていった。

「ごちそうさまでした!」

「ごちそうさまでした」

3人は手を合わせて言った。

これが作戦会議の終了の合図なのかもしれない。

3人は食器をメニュー画面に入れた。

「さて、行きましょうか!」

「なんか楽しそうだな」

ミチの笑顔に、ユミルは笑顔で言葉を返した。

「なんか目的が有ると、ね、やる気出るのよねー」

これから向かう方向をミチは見て、微笑みながらそう言った。

本当に喜怒哀楽が多い子だな、とミチを見ながら思ってしまった。

「あのモンスターの姿を見失わないように行こう」

ミライはそう言って、バリア外の少し奥を指した。

そこには、慌ててどこかに向かうモンスターの集団がいた。

「急ごうか。ミライ、バリア解除」

ユミルはモンスターを目で追いながら言った。

ミライはバリアを全て解除した。

最初の頃に比べれば、バリアの消えるスピードが速くなった気がする。

モンスターの姿がだんだん小さくなっていく。

「急ぐわよ！」

ミチはそう言うと、モンスターの集団を追うように走り出した。そして、ミライもユミルも、ミチを追うように走り出すのだった。

この世界での体力は、地上と比例してるのだろうか。

いや、恐らく比例したとしても、相当強化されているだろう。何故かと言うと……。

「や、やっとな……やっとな……」

息を切らしながら、ミライは叫んだ。

恐らく体感時間的に、3時間ぐらい走っただろうか。

前半は話しながらだったが、森を抜ける少し前の頃には、足音と呼吸音しか聞こえなくなっていた。

「意外と近場に在ったもんだな」

ユミルは息も乱れず、落ち着いた口調で言った。

ミチも全く息を切らしていない。

どうやら、体力は地上と比例しているらしい。

3人はしばらく無言で、辺りを見渡す。

目の前に広がる、草丈の低い草原。

久しぶりの大空。

少し先に見えるのは、目標地点としていた大樹。

今度はちゃんと根元の方まで見えている。

そして、大樹の頂上は、ここからでは見えなくなった。

雲が大樹の周りをおおっているのだ。

と言うよりも、あの木が雲を出してるという捕らえ方も出来る。

「ねえ、ちよつと見てよ！」

ミチは突然叫び、少し遠くの方を指差した。

そこには、恐らく3人がいただろう、あの草丈が少しある大草原が広がっていた。

少し道を変えれば、森に入る必要が無かったらしい。

3人は、少し力が抜けた。

「まあ、悔やんでも仕方ないな。それよりも、あの大樹見ろよ。モンスターがわんさか出入りしてるぜ」

ユミルは、大樹の方を見ていった。

確かに今まで戦ってきたのから、全く知らない物まで、様々なモンスターがそこには集まっていた。

その中には、あの苦戦した触手や蜂も数え切れないほどいる。

「ねえ、僕らはあの中を進むの？」

「さすがに大変そうよね」

ミライとミチは、不安を隠しきれない。

目の前の圧倒的な数に、3人で立ち向かうなんて、まず無理だろう。

それが、どんなにレベル差が有ったとしても。

「大丈夫だ。俺に良い案がある」

ユミルが不敵な笑みを浮かべながら、そう言った。

「なに？そんなに自信がるの？」

ミチもユミルの笑みを見て、思わず笑ってしまふ。

「たぶん行けるだろう。まあ、作戦の主体になるのはミライだけだな」

そう言つて、ユミルはミライの方を見る。

「僕が！？てことは魔法で？」

「そう！その通り」

ユミルは相当作戦に自信があるらしい。

ユミルから笑みが消えないのだ。

「まあ分かったよ。どうせ良い案浮かばないし。ユミルに乗るよ！出来る範囲で」

ユミルに笑みを見せるミライ。

「ユミル、私は？」

ミチはユミルに対して聞いた。

「魔力回復の呪文とか無いしな！。ミライが魔法はなったら、魔力

回復薬を口に流し込んでやれ！」

その言い方は、ユミルなりの優しさだろうか。

まあ、こんなミチに対して「役割は無い」なんて言えないだろうな。

「んで、肝心の作戦の方、そろそろ話そうよ」

ミライは落ち着いた口調で、ユミルに対して言った。

「そうだな。もったいぶっても、しょうがないしな」

そう言っつて、ユミルの表情からだんだん笑みが消えていく。

そして、ユミルは一呼吸をして、話し出す。

「では作戦内容を言う！まずは……」

こうして、ユミルの考えた策が2人に話されていくのだった。

第57層 大樹へ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第57層 大樹へ

ユミルの作戦内容はいたってシンプルだった。

僕らが少し考えても、その答えにたどり着いたのかもしれない。

「その作戦は分かったんだが、そう、うまくいくか？」

心配で思わずユミルに答えを聞いてしまう。

「大丈夫、あのビナンケでの戦闘位で十分だから。飛距離も、あの魔女っ子との戦闘で大体予想つくし」

ユミルの言う魔女っ子とは、クリーのことだろうか。

「ねえ、早くしないと気づかれちゃうわよ」

ミチは大樹の方を見ながら言った。

大樹の周りには、蜂のアビリーが数え切れないほど居る。

まさに、モンスターの拠点なのかもしれない。

「そうだな。ミライ準備は良いか？」

「準備も何も、装備いらないし、集中力の問題だし、いつでも良いよ」

「そうだったな。じゃあ、これ貸してやるよ」

そう言つて、ユミルはミライに愛用している大剣を渡した。

「え、何で…って重っ！」

あまりの重さにミライは、ユミルの大剣の剣先を地面に刺した。

「非力だなー。まあ、持ち手握ってるだけで良いよ」

あなたが怪力過ぎるんだ！

そう思いながらも、少しユミルの言葉に疑問を持つ。

「ミチの武器もそうだけど、大体の武器や道具には、魔力が備わってる物だ。だから、それを装備すれば、今まで以上の力を発揮できるとね」

「ふーん、分かった」

ユミルの説明には軽く返事を返し、地面に突き刺さった剣をミライは握る。

何となくだが、力が湧いて来るような気がする。

「準備おつけー。さて作戦を実行しようよ」

2人に対して、ミライは言った。

「そうだな。大丈夫か？ミチ」

ユミルは、ミチに確認をする。

「大丈夫。さて、行くわよ！」

結局仕切るのはミチのようだ。

ミライは、ミチの掛け声と聞いて目をつぶり、集中力を高めていくのだった。

「フゲネス・フレイム！」

そうミライは叫んだ。

ミライの少し前上空には、今まで作ったことの無い大きさの燃え盛る大玉が、宙に浮いていた。

「そーりゃー！」

ミライは変な掛け声と共に、巨大な火の玉を遠くの方の草原に向かって飛ばした。

巨大な火の玉は、ほぼ地面との平行を保ちつつ高度を落としていきながら飛んでいく。

ものすごい、ゆっくりと……。

「この速さは、予想外だったなー」

ユミルは、火の玉の動きの遅さに、苦笑いを浮かべる。

その火の玉の遅さといったら、早歩きで追いかければ追いつくだろうかと言った具合だ。

ミライは火の玉を残念そうに見ていると、ミチがこちらに向かってきた。

「はい、魔力回復薬ね。どうする？私が飲ませてあげようか？」

ミチはそう言って、手に持った回復薬と笑顔を見せる。

その笑顔に、飲ませてもらっても良いかなーなんて思ってしまう。

だが、その飲ませると言う言葉は、失敗魔法に対する慰めの言葉

な気がする。

なので、軽く断ってから回復薬を受け取り、ミライは一気に飲み干した。

魔力回復薬は無味だが、爽やかなミントの香りが口中に広がっていく。

その香りと同時に、体の中で足りなくなった何かが、満ち溢れていく気がする。

「さて、魔法は落ちてくれないが、大樹に向かおうか」「そうだね」

ユミルとミチは笑う。

ミライも笑うが、素直には笑えなかった。

「ユミル、剣返すよ。ありがとね」

そう言っつて、ミライは剣を地面から引っこ抜いた。

引っこ抜いた大剣をユミルに渡した。

「おお、そうだったな」

ユミルは大剣を受け取ると、グルグル大剣を振り回して、メニュー画面にしまった。

「さて、じゃあ、向かいましょうか！」

ミチは元気よく言った。

ミチの言葉に、2人はうなずく。

そして、3人は大樹に向かって、ゆっくりと歩き始めるのだった。

第58層 規格外（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第58層 規格外

大樹前の少し大きな木陰。

3人は、その木陰で火の玉の着陸を待っていた。

「ねえ、思ったんだけどさ。あれが着陸したとき、爆発しなかったらどうなる？」

ミライはユミルに対して、小声で聞いた。

「どうなるって、モンスターの気が引けなくて、失敗！みたいな感じになるだろ」

ユミルは少し楽しそうに言った。

ミライは少し笑顔を見せながらも、動揺を隠し切れない。

「大丈夫よ！爆発しなかったら、あの数突破するだけだし」

ミチの元気な言葉が、未来の精神に追い討ちをかける。

「ははははは・・・」

ミライの口から、変な笑い声が出る。

「そろそろ来るぞ」

ユミルは、落ちていく火の玉を見ながら言った。

そして、あの火の玉が、地面とぶつかった。

その瞬間、もの凄い爆音が一面に広がった。

ミチは思わず、耳を塞いでいる。

爆音の次に、大きな火柱を立てて、地面の方から順に炎が消えていく。

そして、最後に残ったのは、大きな黒雲だけ。

3人は火の玉が落ちてからの光景を、ただただ口を空けて見ることに出来なかった。

3人は、火の玉の落ちた場所に向かうモンスターの軍勢を見て、我に返った。

ユミルは、手を広げてミライに近づいていく。

そして、綺麗な音のハイタッチ。

もちろんミチともハイタッチ。

「完璧だよ！予定外の規模でよかったよ」

ユミルが大絶賛をして、ミライを見る。

「待ったかいがあったって感じね！」

ミチは笑みを浮かべながら言った。

「はあーよかったー！」

ミライも心から声を漏らす。

本当に失敗しないで良かった。

全く考えなかったけど、どうにか成った！

うれしくて、無意識に笑ってしまう。

「さて、だいぶ行ったかな。あの数が戻ってくる前に侵入しようか」

ユミルはそう言って、手を高く上げて体を伸ばした。

ミライはユミルを見て軽くうなずく。

「じゃあ、行くわよ！」

ミチは掛け声と共に、大樹に向かって走り出した。

そして、2人はミチの後ろを走るのだった。

第59層 目の前の大樹（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第59層 目の前の大樹

「ついに、ここまで来たか」

ミライは、大樹の幹を手のひらで感じながら言った。

「長いようで、短い旅だったわね」

ミチは過去を思い出すかのように、大樹の上の方を見ながら言った。

「ユミル、大丈夫か？」

ユミルの表情が、なんだか暗かったので、声を掛けてみた。

「あ、ああ。大丈夫だ問題ない。しっかし、でかいな」

ユミルはそう言って、大樹を見上げる。

2人とも大樹を眺めていたので、ミライも釣られて大樹を見渡した。

大樹の幹は、地面の方から緑の苔に侵食されて、大樹の幹自体が緑だという捉え方も出来ないこともない。

相変わらず、大樹の枝や葉になる上の部分は雲がかかっていて見えない。

結構な黒雲だが、雨は降らないようだ。

「ねえ、そういえばさ…ここに何しに来たんだっけ？」

ミチが不思議そうに聞いてくる。

「それを聞くか？」

ユミルはミチに対して軽く返した。

「このモンスター脅威からビナンケの町を救うこと」

ミライは大樹を見ながら、はつきりとした口調で言った。

「そうだったわね。じゃあ時間も無いし、中に入るわよ！」

ミチはそう力強く言うと、周りを見渡してから、歩き出した。

そして、左回りに大樹の幹をたどって、少し歩いた場所で立ち止まった。

「ミライー、ユミルー、入り口あったー」

ミチは遠くの方で叫んでいる。

「ほら、ユミル、行くよ！」

ユミルが大樹を見て、ぼんやりしていたので、ミライはユミルの背中を軽く叩いてやった。

「ああ、なんかすまねえな」

ユミルは何故か謝ってきた。

「どうしたユミル？まあ、いいか。ほら、ミチが待ってる」

ミライの言葉に、ユミルは軽くうなずく。

そして、2人はミチの元につき、ミチの見ているところに視線を向けた。

大樹の少し高い位置に、大きな穴が開いている。

「え、どうするの？」

ミライは思わずミチに聞く。

「そんなの、バリアを足元から、ね！」

「了解」

ミチの言葉を聞いて、すぐに理解した。

バリアを地面から出して伸ばし、3人をエレベーター方式での穴まで上げるということ。

ただ、3人をあの高さまで上げれるのだろうか……。

そう思いつつも、3人は、その入り口の真下で固まって立つ。

さあ、行こうかと思った時、突然ユミルが、ユミル自信の顔の頬を両手で叩いた。

パチンパチンと、2回大きな音が鳴り響いた。

「よし！行こう！」

その行動と言動に、ミチはポカンとしている。

ミライはユミルに、笑顔を見せてつけてやる。

ユミルはミライに、明るい笑顔を返す。

「どうやらユミルは、何か吹っ切れたようだ。」

「さて、バリア出すよ。足元滑るから気をつけるよ」

ミライは軽く2人に対して注意を払った。

2人は、ただただうなずく。

そして、ミライは集中して、バリアを足元から出すのだった。

第60層 共同本登り（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第60層 共同木登り

「ねえ、もうちょっと高くならないの？」

ミチはミライに対して、強い口調で言った。

「やっぱり上に物が乗ると、高さが縮むんだな」

ミライは、自分の魔法を関心しながら言った。

「で、どうするんだ？侵入する前に、あの団体さんに捕まるぞ」

ユミルは、火の玉の落ちた方向に集まる虫たちを見ながら言った。

団体さんの数は、ざっと見て1000は居るだろうか。

「どうするって、登るしかないわよ。たとえば…3人で肩車とか」

「こんな滑る足元でか？」

ミチの意見に、素早くユミルが批判した。

確かに足元は、少し高い位置に出来たバリアの上だ。

落ちれば、死にはしなと思ういが、危険なのは確かだろう。

「大丈夫よ。一番下のユミルの足なら！」

「ちょっとまって！一番下ってどういう事だよ」

ユミルは少し強い口調で言った。

「だって、ユミルとミライじゃ体格まるで違うし。私が一番下なんてまず無いでしょ。まあ、消去法よ。たぶん、ユミルなら大丈夫よ」

ミチは淡々と説明した。

その説明を聞いてユミルは、やれやれと首を横に振り、大樹の幹のすぐ側でしゃがみ込んだ。

「ほら、ミライ、俺の肩に乗れよ。足乗せたら、大樹の幹に手を置いとけよ」

ユミルはそう言ったが、いまいちよく分からなかった。

ミライは、靴と靴下をメニュー画面に片付け、ユミルの肩に足を乗せ、両手のひらを幹につけた。

「はい、ミチ乗る番」

ミライは、ミチに対して軽く言った。

そしてミチは、ミライの首元に股を入れ、足をミライの胸元で交差させ、手のひらをポンと、ミライの頭に置いた。

ミライ視点からは、ミチのしなやかな足がクロスしてるのしか見えなない。

だが、いやと言うほど体の部分でミチを感じる。

特に、首後ろ。

気を抜けば、今にも鼻時が出そうだ。

そうミライが顔の熱を上げると、ミライの下から掛け声が届いた。

「じゃあ、立ち上がるぞ。気をつけるよ。」

そう言っってユミルは、ゆっくりと曲げている膝を伸ばし始めるのだった。

第61層 下から上（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第61層 下から上

ユミル、ミライと足を伸ばし、大樹の幹に手を伸ばして付いて、体重を大樹の方に傾けている状態。

この状態まで来るのに、若干だが時間が掛かった。

と言うのも、ミチが肩に足を乗せず、あの状態になったためだった。2人が足を伸ばそうとして少し揺れると、ミチが揺れの恐怖でクロスした足でミライの首を絞めてしまうのだ。

そうなったら、ミライは苦しいのに、ユミルは気づかない。

ミライは苦しいが、手は動かせないし、口はミチの手で塞がれてる。まさにミライは、完全な地獄と化した2段目の立場だった。

そして、2人が立ち上がった後、ようやくミチはミライの首を開放した。

「じゃあ、私が登るわね」

そう言っつて、ミチは両足をもそもぞ動かしたり、手をミライの顔から放したりした。

頼むから、ミチ、あんまり股を首に押さえつけないでくれ……。心の中で叫び、顔の温度上昇を気にしていたら、温度上昇の原因の動きが止まった。

「ねえ、ミライ。1秒でいいから、手を放してくれる？」

ミチは、いつもより小さな声で言った。

ミライは、ミチが手でミライの口元を押さえる中、口をもごもごさせ、しゃべろうとする。

「……………は無理言っつなよ！まあ、1秒ぐらいなら……………」

ミライの気持ちを分かってくれたのだろうか、ミチの手が、ミライの口から目の方に移動したので、言えた。

「お願いね。じゃあ、ミライのタイミングでいいから掛け声お願い」
そう言っつて、ミチは手をミライの頭の上に移動させた。

体重は完全に大樹の方に向けている。

怖い、やるしかない……。

「いくよ。せーの！」

ミライは掛け声を言い切った瞬間、幹を軽く押して、一瞬だけ手を離し、両手を横に広げて、また大樹に両手を伸ばして態勢を立て直した。

手を放した瞬間、ミチが力をこめたのか、頭に凄い重さを感じた。態勢を立て直して、体が凄く軽くなったと思ったら、すぐに上から3段目の重荷が降ってきた。

ミチの両腕がミライの首を絡めて、ミライに若干のダメージを与える。

ミチの手が交差するのが、ミライの首の後ろ。

つまり、ミチは態勢を立て直し、ミライを前方から抱きしめるという状態になったのだ。

ミライの胸の少し下の辺りで、自分のとは違う、鼓動の速さを感じ取る。

それに共鳴するように、ミライの胸の鼓動も速さを増す。

ミチの貧な胸でも、十分その独特の柔らかさを感じ取れる。

「もうしばらく我慢しててね……」

ミチのその優しい言葉に、視線を少し下に戻すが、すぐに視線を大樹の方へと戻した。

やはり、ミチの下から視線には、どうしても目を合わすことが出来ない。

それをじっと見てると、まぶしさや魅力に目が泳いでしまうのだ。

ミチは、声を掛けてから、少し時間を置いてから、一気に上り始めた。

ミライの鼻に、ミチの緑のワンピースが、するすると擦れていく。

ミチは手を後ろに伸ばして、ミライの肩に足を伸ばして付けた状態でバランスを取る。

そして、ゆっくりと手足を順番に動かし、3人とも同じ状態に、ようやく成った。

「ミライ！今からミライの腕進んでいくから、覚悟してて」
「了解！何でもいいから登ってくれ」

ミチの言葉に、ミライは感情をこめて返した。

ミチはゆっくりと、足をミライの肩から腕に移動させていく。
ミライは、ただ耐えて、ミチを下から見守ることしか出来ない。

下からの光景は、予想できたが、すばらしい物だった。

スカートの中が丸見えでだが、これは仕方ないんだと、自分に言い聞かせる。

完全に純白のパンツが見えてしまってる。

だが、ミチから目を放せないで、視線をそらすことは出来なかった。

ミチのワンピースは、上下が一枚で繋がっていて、背中の綺麗なラインが見える。

あれ・・・まさか、着けてない？まさかね・・・。

ミライの小さな疑問は、ミチが登りきってから確信へと変化する。

「やったわ！やっと登りきったわ！ほら、ミライ手を伸ばして！」

ミチはうれしそうに言って、ミライに向かって体を限界まで倒して手を伸ばす。

その時、隙間からミチの胸元がちらり。

何も考えることも無く、片手でミチの手をつなぎ、引き上げてもらう。

「はあ、やっと上がったー」

ミライの登り切った感動の声は、ほぼ棒読みだった。

色々ありすぎて、頭が少しフラツとする。

「ミチ、ブラ、つけとけよ・・・」

大きな深呼吸をしてからの、ミライの言葉だった。

ミチは、自分の胸元を押さえて理解したのか、頬を少し赤くする。

ミライは身構えていたが、ミチからの攻撃は飛んでこなかった。

「み、み、みなの？」

今更の気もするが、ミチはオドオドしながら言う。

「見えてないよ」

胸は、と言う主語を入れずに、ミライは言った。

「まあ、いいわ。ミライ、後ろ向いてて！」

「はいはい」

ミチの注意に、ミライは軽く言葉を返す。

「おい、ユミル、今助けるから」

ミライは、バリア上で寝そべってるユミルに対して言った。

ユミルは、座りながら手を振っている。

ミライは、画面に持っていたロープを取り出し、ユミルの元まで垂らした。

「ミチ、ユミルを引き上げるよ」

「分かったわ。ミライ、見た借りは返しなさいよ！」

「ここまで来るのに、首絞めてたんだから、おあいこだ」

「…わかったわよ！」

ミチは、ミライに渡されてロープを握る。

「引き上げるぞー！」

ミライはユミルにそう叫び、2人でユミルを引き上げるのだった。

第62層 始まりの坂道（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第62層 始まりの坂道

ユミルも無事引き上げ、ようやく3人は大樹の入り口に立つことができた。

入り口は先は、木の幹の内側の周りを通路が通つてるといった感じで、中心には入れそうに無い。

通路は緩やかな上り坂だが、そうとう先は長そうだ。

「ここからは、敵の本拠地だ。気を引き締めてこよう！」

ユミルは、回復薬を飲み干して言った。

「わかつたわ！じゃあ、ここから先、武器はなるべくしまわず行きましょう」

「了解！僕武器無いけど」

ミライは笑いながらミチに言葉を返す。

ミチとユミルは、いつも通りの武器を装備する。

「じゃあ、遅れた分取り戻すわよ！」

そうミチは言つて、通路を駆けて行った。

「あんまり先に行くなよな」

ユミルも、そう言つてミチを追いかけていった。

しかし、まだ走れるのか、あの2人。

こっちはもう体力が残つてないって言うのに……。

ミライは、回復薬を一気飲み。

そして、2人を追うように、坂道を走り出すのだった。

第63層 闇と光（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第63層 闇と光

大樹内部の上り坂。

そこを途中から、3人は固まって行動していた。

入り口付近は、外の光で大樹の上り坂が明るく感じた。

だが、しばらく進んでいくと、先が見えない真っ暗闇な道に変わってしまったのだ。

立ち止まった先頭のミチにユミルがぶつかり口論になっていたが、どうにか僕の火の明かりと、「急ぐ」と言う単語でどうにか丸く収まったのだった。

そして、明かり担当のミライが先頭で進んで行き、しばらく坂道を走り進んでいったところの事だった。

今更ですつと暗闇だった道の奥から、若干の光が見えてきた。

「ねえ、そろそろ外なんじゃない？」

「まさか、それは無いだろ」

ミチの言葉にユミルは軽く返す。

「行ってみれば分かるって。ほら、だいぶ明るくなってきたよ」

ミライは走る速さを遅めて言った。

でも、どうして暗闇から急に明かりが……。

ミライは色々な考えを浮かばせながら走る。

そんな中、坂道を照らす謎の光は、進むにつれて、まぶしさを覚えるほどの光となっていくのだった。

第64層 蜂フロア（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第64層 蜂フロア

ついに3人は開けた場所に出た。

「ここは・・・うわっ、気持ち悪・・・」

ミライは開けた場所を見た瞬間、率直に言葉が出た。

開けた場所は、天井が高く、相当広い円状の地形のホールのような場所。

そして、その円ホールの外側、おそらく木の側面に当たる場所に、一人は入れそうな六角形の穴が、びっしり無数に敷き詰められている。

そして、その穴のほとんどには、虫の幼虫のような生物が入っている。

大きさは様々だが、その動きと数に吐き気を覚える。

「どうやらここは、あの森での、蜂のアビリーたちの住み家のようなだ。」

入ってすぐに見えるのは、六角形内にいる大量の芋虫と、地面に転がる大量の蜂の死体・・・。

「何で、こんなにも死んでるのだろう？」

「あんまり・・・長くは居たくないわね・・・」

ミチは、そう言う目線をそらすように、地面の方に目を向ける。

「確かに・・・。しかし、ここはやけに明るいが、どこから光ってるんだ？」

ユミルは周りを見渡しながら言った。

確かに、凄く明るいフロアだが、光を出すような物は見当たらない。

「いったいどこから・・・。」

ミライとユミルがフロア内を見渡していた、その時だった。

六角形の眉のかかった穴から、次々と色の黒い蜂が飛び出してきた。その数、ざっと見て十数匹。

「くそつ 戦闘になるぞ！ミライ、入り口をバリアで塞げ。下から来られたら困る」

「わかった」

ユミルの指示通り、ミライは入り口に立ちすくんでいるミチを引っ張り、上ってきた坂と、この部屋の間を完全に塞ぐようにバリアを張った。

「ミチ！ミチってば！」

ミチは、何故か下を向いて震えながら動けなくなっている。

ミライが声を掛けても、首を横に少し振るだけだった。

虫が嫌いでもないが、芋虫はダメなのだろうか……。

「ミライ、ミチを守れよ！あと、来るぞ！」

ユミルは、こちらに振り向くことも無く、大剣を構えながら言った。

『十数匹』対『3分の2人』の戦闘が、モンスターの先行で始まるのだった。

第65層 黒蜂（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第65層 黒蜂

黒色の蜂は、尾から伸びる細長い針をこちらに向かって飛ばしてきた。

その針をユミルは素早くかわして、ミライはバリアで防ぐ。

「アペンシス！」

ミライは呪文を叫んで、相手ステータスを表示した。

「名前はブラックアビリーで、レベル全て40！弱点が火だけど、下手に火を出すと大樹自体が燃えてしまうよ！」

ミライは注意も含めて聞こえやすく言った。

ユミルはミライの言葉を聞き流して、ライトアタックで光の斬撃を出し、1匹、2匹と倒していく。

さすが50レベルだなと言えるだろう。

「バリア。フリーズ、スプリンター」

ミライは呪文名を無意識に言う。

ミライは守っては攻めるのカウンター戦法で戦う。

敵の攻撃をバリアで守り、そのバリアを鋭い破片にして飛ばすと言った感じだろうか。

この戦い方が早い敵には一番効率が良いようだ。

ミライは一瞬ミチの姿を振り向いて確認する。

ミチは下を向きながら、泣く手前の表情を浮かべて頭を抱えている。手には強く握り締められている双剣が震えている。

その姿は、体あれども心は無いと言う感じだろうか。

「ミチ、ミチ！戻って来い！」

ミライは背中に居るミチに対していった。

ミライの視線はブラックアビリーの動きを追っていた。その時だった。

ミライは後ろの方で、もの凄い熱さを感じて後ろを振り向いた。

後ろには、ミチの姿は無い。

「うおーりゃー！」

突然のミチの声に、振り向いた顔を元に戻した。

そして、目線の先には燃え盛る双剣を手に持って飛んでいるミチの姿があった。

第6層 思い出力の電光石火（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第66層 思い出力の電光石火

ミチは、目の前のブラックアビリーたちを次々と切り裂いていく。電光石火と言うのは、きつと目の前の光景のことを言うのだろう。2体目、3体目と、目の前の敵を切り裂いたと思うと双剣が炎をまとい、4対目から全て燃やし尽くした。

そして、ミチはまた叫んだと思うと、このフロアの外周を走り、幼虫たちを次々と燃やしていった。

ミチは止まらない。
止めることが出来ない。

そして、元々転がっていたモンスターの死骸が、今一瞬で倒されていったモンスターの死骸と区別が出来なくなると、ようやくミチの動きが止まった。

「はあ、はあ……」

ミチは呼吸を乱している。

確かに体力と魔力の使いすぎだが、その他にも息を乱れさせる原因がありそうだ。

まあ、聞いてはいけない気がするから聞かないが……。

「ミチ、一体何があつたんだ！」

ミライの考えを反するように、ユミルはおもむろにミチに聞いた。

「芋虫には色々思い出があるのよ……」

ミチは大声で元気に言ったつもりだろうが、表情は死んでいた。

よくない思い出だろうが、一体何があそこまで……。

ミライは考えるよりも先に、ユミルの少し高い位置にある方を2回強めに叩いた。

「まあ、火事にならなくて良かった。それよりも、先に進もうか」
ユミルは、にやけ顔で言った。

ユミルも聞いてはいけないと察してくれたいらしい。

「そうね。先に進まないかね。まだ続いているみたいだし」

ミチは、このフロアの入り口とは反対側の方にある、出口らしき場所を見ながら言った。

「結局分からなかったな、この明るさ」

ミライはフロア全体を見渡しながら言った。

「まあ、いいさ。ミライそんな事より、これより先魔法解除するなよ?」

ユミルが苦笑いを浮かべながら言った。

そして、ミライはユミルの視線を追っていった。

目を向けたのは戦闘前に仕掛けてた入り口のバリア。

もの凄いドスドス揺れている。

良く見ると、バリアの向こう側に数え切れないほどのモンスター。

嘘たる……。

思わず苦笑いを浮かべてしまう状況だった。

僕の苦笑いを見て、ミチも後ろを振り向いた。

きっと、見た後の表情は苦笑いだろうな……。

「さてと、見ててもしょうがないし、先を目指そう!」

妙な空気を断ち切るため、ミライは2人に対して明るく言った。

そして、2人の視点を変える為に、入り口のバリアの後ろに倍の大きさのバリアを追加した。

ミライの言葉に、ユミルは目を合わせて肯いた。

「じゃあ、進みましょうか!」

目の色も、顔つきも、元に戻ったミチがいつも通り元気に言った。

やっぱりミチは、こうではないとね。

ミライの表情は、ミチ同様、柔らかくなった。

そして3人は、モンスターの死骸と体液だらけのフロアを後にするのだった。

第67層 希望の光（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第67層 希望の光

フロアを抜けた先の暗い上り坂。

だいぶ暗い中進んだと思うのだが、新たな景色や変化は無かった。

「さすがに、疲れてきたわね」

ミライの後ろから、ミチは少し弱った声で言った。

疲れの原因は、ここの息苦しさ、暑さだ。

木の温もりとでもいうのだろうか。

妙な暖かさと湿度があるのだ。

「とにかく先に進もう。こんな所では休めもしないからな」

ユミルの声も疲れている。

「早いとこ登りきろう。そろそろ着くだろうと思うし」

ミライは少し前向きな発言をして、2人を元気付けようとした。

そして、3人は暗闇の中、明かり一つで希望の見えない坂道を歩き続けるのだった。

ミライの「そろそろ着くだろ」と言う仮説から、かなりの時間がたった。

もう目的地なんて無いのじゃないかと3人が諦め始めていた時だった。

暗闇の坂道が、ミライの明かり無しでも見えるようになってきた。

登るに連れて坂道は明るく、はっきりと見えるようになり、3人の暗い心も明るくなっていった。

「もうすぐだよね。もうすぐだよね！やっと坂道脱出できるの！」「うれしそうにミチは言った。

「ああ。この坂はさすがに辛かったな。でも、もうすぐ終わるんだな。終わるんだよな……」

ユミルは、坂の辛さを思い出しているように言った。

確かに、大樹入り口からの坂と、途中のフロアから坂とでは、ま

るでレベルが違った。

「来た！出口見えてきた！」

ミライは少し先にある明るく切り取られた空間に、胸を躍らせた。

「私が一番よ！」

ミチは、今までの疲れが嘘だったように、全力で走って、ミライを抜かした。

「そうはさせるか！」

ミライも必死になって、ミチを追いかける。

ユミルは後ろから追いかけることはしなかった。

相当疲れているようだ。

そして、ミチとミライは、ゆっくり歩くユミルを置いて、全力で出口に向かって走っていくのだった。

第68層 光魔法剣士ちゃん（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第68層 光魔法剣士ちゃん

「やったー！一番乗りー……いい？」

ミチの喜びの声は、最後の語尾が疑問形だった気がするの、間違いでなかった。

出口で立ち止まるミチに追いついて、ミライは目の前の光景を疑った。

もの凄い年輪の床とか、すぐ上を見上げれば真っ青な空が目の前にとか、凄い高さの美しい景色と言うのもあったが、それではない。坂を上りきった先の光景は、巨大な羽の生えたモンスターの死骸と、青髪のロングのツインテールの少女。

忘れるはずが無い……。

ビナンケの町と、ヘシタテスの森に入る前に出会った、少女セーナだ。

一体何故こんな所に……。

「あら、あなた達、ここに何しに？……って、あの町の……」

セーナはミライに鋭い目を向けていった。

どうやら覚えていたらしい。

僕と同じ、好印象ではないようだが……。

「あの件はどうも。お嬢さん」

「ねえミライ、この子、知り合い？」

ミチは状況が理解できないようで、見たいに聞いた。

「僕が町で突然倒れた時あっただろ。その原因」

「何となく分かったわ。でも、どうしてその子が？」

ミチもセーナに目を向ける。

「もう一度聞いわよ。あなた達、何しにここに？」

セーナは少し強めの口調で言った。

「町を救う依頼を受けて、このボスと交渉しに来た。そちらは？」

ミライは淡々と答え、セーナに聞き返した。

「ここのボスを倒しに来た。で、いいかしら？」

体は小さいのに、どこか態度の大きいセーナ。

その言動に少し苛立ちを覚えるミライ。

その時、ようやくユミルが登りきってきた。

「え……ボス……倒しちゃったの？」

ユミルが頂上に登つての第一声だった。

疲れているというよりは、困惑している。

まあ、この状況、無理は無いか。

「あの子がやったらいいわよ」

ミチは苦笑いを浮かべながら言った。

「ははははは……」

ユミルは声だけ笑って、表情は完全に死んでいた。

「倒して何か、まずかったのかしら？」

「そいつを倒したとき、何か出なかったか？」

「ふん。やっぱり、あなた達もこれを狙ってたのね」

セーナとユミルの会話に、2人は付いていけてない。

セーナは、恐らくメニユー画面から、謎の円状の大きなコインを

見せて来た。

この距離からでは、大きな黄色いコインにしか見えない。

「それを渡してもらおうか？」

「私に勝てると思ってるの？」

ユミルとセーナの話は2人を完全に置いていつている。

「ユミル、説明してくれよ。最初の方から」

2人の勝手に進んでいく、特急列車のような会話をミライは止めた。

「それは後だ！それよりミライ、あの子の情報を！」

ユミルは完全に止まる気が無いらしい。

「名前はセーナで、レベルは57。弱点は出ません」

「よし、話し合おうか、セーナちゃん」

ユミルの指示にミライは即答で返すと、ユミルは苦笑いを浮かべてセーナに声を掛けた。

正直、このフロアに入った瞬間アペンシスはすぐ掛けていた。そして、このレベル差も掛ける前から予想できた。だって、あの子強いんだもん……。

ユミルだけではなく、ミチも苦笑いを浮かべている。

ユミルでもレベル6の差。

ミチでレベル9差。

僕に関しては、レベル12も差がある。

3人がかりで行っても、勝てるか分からないのだ。

レベルがここまで来ると、1レベル差が命取りなのは、3人ともとづくに理解している。

「話し合いとは、冷静な判断ね。でも、『セーナちゃん』って子ども扱いしたから、叩きのめすわよ!」

セーナちゃんは、子ども扱いがお気に召さないようだった。

「じゃあ、セーナさん」

「遅いわっ!」

ユミルの言い直した瞬間、セーナの声と共に、ユミルは声を漏らすことも無く地面に崩れ落ちた。

「ユミルー!」

ミチは叫んで、双剣を構えてセーナへと切りかかる。

「遅い、遅すぎるわ!」

ミチもセーナに気を失わされ、セーナに地面に寝かされた。

「さて、あとはあなただけよ。変態さん」

セーナは一瞬につこりと笑ったと思うと、すぐに本気の目に戻し、ミライに真っ直ぐ飛び掛ってきた。

どうやら僕は、ここでは女性の方々に「変態」扱いされてしまうようだ。

「きゃあ!……やるわね!」

セーナはミライの目の前で、大きく弾き返された。

ミライは、とっさに自分の目の前に、しかも肋骨辺りだけにバリアを作ったのだ。

どうやら、セーナは腹元を狙う癖があるようだ。
一度殴られて良かった。

そして、肋骨前に作られたバリアは、重力に従って地面に落ちた。
「そりゃ、一度殴られてますから」

ミライは、前殴られた場所を手でさする。

「じゃあ、私も本気でいけそうね！」

殴る前に見せた笑顔を見せるセーナ。

「レベル差12も有るんだから、やめてください。光魔法剣士さん
ミライは、何故か顔が笑ってしまっている。

「あら？そんなことまで分かるの？素晴らしいストーカー技ね！」

「そりゃどうも。どうせ、下のフロアの明るさも、あなたの技だよ
ね？」

「ご名答」

セーナの言葉を気に、2人は声を出し笑い出す。

ある意味、最悪な空気だ。

敵と笑い合える状況なんて、相手がライバルか、自分が死ぬ前ぐ
らいだろう。

「さて、あなたも武器を出さない。死なない程度にするから、本
気で行きましょう」

セーナは手に武器を持ち、ミライに対していった。

相手は、殺す気は無いようだ。

もちろん、気を失っている2人に対して、止めを刺す気も無いだ
ろう。

そして、あの笑顔を見る限り、どこかの戦闘好きの民族のように、
戦闘がしたいだけの様だ。

「僕、武器装備してないんだ。それよりも、剣士なのに折れ曲がっ
た傘だよ」

セーナの装備する武器にツッコミを入れる。

セーナの装備しているのは、綺麗に真ん中からぐねっと、くの字
に曲がった傘だった。

そんな装備なら、装備しないほうが良くないか……。
「うるさいわね！ 装備しないよりもましよー！ じゃあ、行くわよー！」
そして、2人の魔法使い？の戦闘が今始まるのだった。

第69層 ひきこもり（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第69層 ひきこもり

「はあ、はあ……なかなかやるようね……」

セーナが折れ曲がった傘を、杖代わりに地面に付きなが言った。

戦闘開始から数分がたっただろうか。

戦況はと言うと……。

「は、早く出なさい！そんなの卑怯よ！」

セーナはミライをじっと見つめながら言った。

その距離、30cmだろうか。

セーナの強く可愛らしい目つきが良く見える。

……バリア越しに、だけどね。

ミライは、完全に四方に張ったバリアの中に引きこもっていた。

卑怯者ではない、戦略だ！と、心の中は強気に。

「変な光魔法出されたら、動けるわけ無いだろ」

変な光魔法とは、セーナが打ってきた様々な魔法のこと。

火の玉の光るバージョンや、光るレーザービーム。

ユミルの使ってた、光の斬撃のようなのも使ってきた。

しかも、それが全て魔法を発動してから、こちらに届くまでが速いと来た。

唱えるまでが少し遅いのだが……。

そして、こちら魔法は相手が速すぎて当たらない。

だから、この状況は仕方なかったのだ。

「卑怯者！ひきこもり！ライトビーム」

バリアから距離をとって、セーナの批判と共にビームが飛ばしてくる。

ライトビームは単純な名前の技なんだが、威力は化け物。

最初に奇跡的に跳ね返したビームは、あの空に向かって伸びる大樹の枝を一本粉碎したのだ。

まあ、その技さえ見なければ、ひきこもりなんてしなかっただろ

う。

「死なない程度なんて、嘘だろ!？」

ミライは思っていたことをバリアの中からぶつける。

「瀕死になるけど、死なないわよ。だから出てきなさい!」

「瀕死もお断りだ!」

セーナは折れ曲がった傘で、バリアをガンガン叩く。

当然そんな物でバリアが破壊できるわけが無い。

物理攻撃も光魔法も跳ね返すバリア。

どうやら、この子とは相性が良いらしい。

守ることに対してだけ……。

「もういいわ。あなたから攻めてきなさいよ」

そう言つて、セーナは武器である傘をしまった。

攻めるといわれても、バリアの中からは魔法が打てないのは、とつくに分かっている。

「どうしたの?まさか、それ以外魔法が無いの?」

嫌な所を付かれたものだ。

「そんなわけ無いだろ。今に痛い目合わせてやる」

とは言つても、バリアを解除したら恐らく相手の魔法が先に飛んでくる。

相手よりも先に魔法を放つなら、出来るか分からないが、このバリアを……。

「覚悟しろよ。いくぞ!」

「来れるものなら」

セーナは不敵な笑みを浮かべる。

そして、ミライはバリアの中でイメージを含まらせるのだった。

第70層 一撃勝負(前書き)

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第70層 一撃勝負

フリーズ・スプリンターで、このバリアを破片にして……。

破片は少し細かめで、方向は真正面……。

そして、発動したら、すぐにバックステップ……。

よし、行こう！

「フリーズ、スプリンター！」

ミライは呪文名を叫んだ。

イメージ通り、ミライを囲む四方のバリアは破片へと変わり、セー

ナに向かって飛んでいった。

「ふふ。ライトビーム」

予定外だったのは、セーナが魔法を放つことを確定して、すでに発動までの準備をしていたこと。

相手の魔法の方が、断然速い……。

氷の破片と、光のビームが、2人の中のミライ寄りの方でぶつかった。

その時、まぶしい光がフロア内を包んでいく。

氷の破片といっても、元はバリア。

光のビームを四方八方に跳ね返していく。

ミライにもビームが届くが、熱さを感じる程度の威力。

そして、こちらの破片はビームを跳ね返しつつ確実にセーナに向かって飛んでいってる。

相手は光が跳ね返されてるのは分かっているが、向こうに近づいていってるのはまだ分かってない。

これは……いける！

そう思ったときだった。

セーナは魔法を打つのをやめて、高く飛び上がった。

そして、氷のバリアが完全に通り過ぎてから着地。

「ふふ。なかなか面白い技ね。まあ遅かったけれど」

セーナは余裕で笑顔を見せる。
セーナの余裕の表情に、ミライはニヤリと笑顔を見せた。

第71層 非回避（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第71層 非回避

ミライが笑みを浮かべた瞬間だった。

セーナの頬に一筋の赤いラインが浮き上がった。

そして、そこから赤い液体がたらたらと流れた。

「あら、かわしきれなかったみたいね」

「いや、完全に当たりまくってたよ」

ミライがそう言ってセーナに指を刺した。

次の瞬間、セーナの服や腕や足に、浅い切り傷が大量に発生した。

「きゃっ！な、なによ！？何が起こったのよ！」

セーナの服は一瞬で切り裂かれ、手足に数箇所切り傷。

セーナは今の状況が納得してないらしく、服や腕をじっと見ている。

「教えてあげようか？その傷で戦う気は無いでしょ？」

「嫌よ！教えてもらうなんて！私はしっかり飛んで、かわしたわ」

セーナは大声で拒否して、自分で考え出した。

「分かったわ。私が避ける頃にはとっくに当たっていたんでしょ？」

「ハズレー」

ミライは嫌味っぽく言った。

そして、再びバリアをミライの四方と、その上に作り上げた。

セーナは傷だらけの中、しばらく考えるのをやめなかった。

第72層 切り裂きの正体（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第72層 切り裂きの正体

「べつに知りたくないけど、教えなさいよ！」

セーナは考えるのをやめて、ミライを囲むバリアの前まで歩いて来て言った。

ミチと似てるなと少し思っていたが、今完全にその考えは否決された。

この子、間違いなくツンデレだ！

セーナは、バリアを小さな手で触れる。

当然、触れると全てを跳ね返すわけではないので、セーナは触れ続けられる。

「じゃあ教えてやる」

ミライは、セーナの手にバリア越しで手を合わせる。

セーナは、合わさった瞬間すつと手を引っ込めた。

「まず、君は僕の攻撃を避け切れてないよ」

「しっかりかわしたわよ！」

「荒いバリアの破片は、だけどね」

セーナは不思議そうな顔をしている。

ミライはその表情を見て少し笑ってしまう。

「僕は、君に向かって荒い破片を飛ばした。でもそれだけではなかった。君の上と左右にも、破片を飛ばした。正面に比べたら明らかに細かいのを……」

ミライがそう言うと、セーナは服や腕をくまなく調べた。

そして、指先をじーっと見つめている。

どうやら、例の大きさの破片が見つかったようだ。

「ふふつ。魔法使いさん、なかなかやるわね。名前は？私はセーナ
光魔法剣士よ」

今更名前と職業言われても、とっくに知ってるのですが。
とにかく、どうやら戦闘を終わらせてくれるらしい。

「僕はミライ。職業は、ただの魔法使いさ」

「ダサいわね」

「うるさい。今度は服引き裂くぞ」

お互いに軽い笑顔を見せる。

そして、ミライは四方を囲むバリアを解除した。

解除した瞬間、セーナは一瞬破片をかわそうと身構えたが、すぐに体勢を戻した。

「私はもうここには要は無いし、先に行かさしてもらおう」

そう言つてセーナは、何故かミライの居る入り口とは反対の方向へ歩いていく。

「あ……」

ミライは、セーナの後姿を見て、思わず声を出した。

表側は、そんなに目立たなかった服の切れ目は、裏側では一変して、完全にスタスタに引き裂かれていた。

白い紐パンが完全に丸見えである。

正直、ここに来てそんな光景なれてしまったのだが……。

「何？何かあるの？」

セーナは気づいてないらしく、こちらを振り向いてもまだ笑顔だ。

セーナの背中および紐パンは、まだしっかり見える。

「いや別に何も無いけ……あ」

ミライは何も無いと言い切ろうとした瞬間だった。

バリアの破片で紐が切れ掛かっていたのか、セーナの紐パンがスルスルと地面に向かって落ちていった。

若々しいセーナの尻が完全に見えてしまっている。

さすがにミライは目線をそらした。

「きゃあああああああ」

セーナの悲鳴が耳に響く。

どうやら、今の現状を理解したらしい。

ミライは、横目でセーナの様子を見る。

セーナの体の向きはこちら側になっていて、スカートを完全に手

で押さえている。

目がどうしてもセーナのスカートの方に行ってしまう。

「早く、早く服着替えなおせ！」

ミライは、顔を真っ赤にしてオドオドしているセーナに対して強めに言った。

「ら、ライトフラッシュ！」

セーナがそう叫んだ瞬間、セーナ辺りから、周りが見えなくなるほどのまぶしい光が現れた。

ミライは思わぬ眩しさに目をつぶる。

そして、ようやく眩しさが治まったところで目を開けた。

そこには、腕の傷は残っているが、服は同じデザインの新品に着替えたセーナがいた。

「ふん。この借りは次ぎ会ったら必ず返してもらおうから！覚えてなさい！」

セーナは言い切ると、入り口とは反対方向の開けた場所から飛び降り、姿を消した。

何の借りだよ……と心の中に思っておく。

そして、覚えてたなくても覚えているだろう。

そんな事を思いつつ、ミライは走ってセーナの消えた場所へと向かい、下を覗き込んだ。

下には、それなりに急な、らせん状の滑り台が存在していた。

相当奥まで続いている。

もしかしたら、一番下まで続いているのでは？

「ははは、はははは……」

ミライは声だけ笑い、崩れるように座り込んだ。

ミライの背中には、無数のバリアの破片が刺さっている。

バリアを1面だけ消そうとすると、バリアの破片も含めた全魔法が解除される。

だから、ミライの背中を守るバリアも破片に変えて、コントロールしようと思っただが、そう全てうまくいくわけでもないようだ。

「解除……」

思った以上に魔力消費と、ダメージを受けてしまったようだ。

ミライは、散らばるバリアの破片を全て消して、地面にうつ伏せで倒れるのだった。

第73層 悪夢顔（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第73層 悪夢顔

ガクツ……みたいな感じで倒れてから、少し時間が経って、ミライは目を覚ました。

そして、ミライはその場で立ち、周りをキョロキョロ見渡す。

「2人は……まだ寝てるか」

まあ、あの拳は受ければ分かるが、相当痛い。

町るときよりもレベルの上がった拳なので、考えただけで恐ろしい……。

しかも、技名を言わなかった感じから、通常攻撃と言ったところか。

「さて、回復させますか。アイテムは沢山有るし……」

ミライはメニュー画面を開きながら呟く。

ミチもユミルも、悪夢を見ているような苦い表情をしている。

ミライはメニュー画面から、回復薬と魔力回復薬を取り出し、2本とも一気に飲み干す。

どちらも一本100mlぐらいなので、5本までなら簡単に飲みほせる。

「うっうっうっ……」

突然ユミルが卑屈な声を上げた。

どうやら悪夢から生還したらしい。

「ユミルー。おい、ユミル！」

「うっ……ミライ……腹……減った」

「腹痛いんじゃないんかい」

ミライの軽い突っ込みに、ユミルは笑顔を見せる。

なんだか久しぶりにユミルの笑顔を見た気がする……気のせいだろうか。

そういえば、フロアが明るくて気がつかなかったけど、もう夜だったのか。

ユミルがお腹を鳴らし、こちらに何かを目で訴えてくる。寝転んだ状態のまま……。

「分かった。わかったよ。飯は俺が作るから、自分で回復しててね。あと、ミチも頼む」

「俺よりも寝ぼすけさんが居たんだな」

「まあ、無理やり寝かされたんだから無理も無いだろ」

「たしかにな。ミライも一撃食らったのか？」

「町で一回食らってて良かったよ。そして彼女は逃げてった」

2人は笑いながら会話する。

ほんの数時間前の戦闘がなかったかのように。

「さてと、いつつ……」

ユミルは起き上がると、一撃食らった箇所を手でさすった。

「大丈夫か？」

「大丈夫だ。そんな事より回復させないと」

ユミルは、まだぐったりしているミチの方を見る。

「よろしく頼むよ」

そうミライは言って、ユミルに回復薬を強めに投げた。

ユミルは簡単にキャッチして、一気に飲み干した。

「ぶあー！ミライも飯任せた。それと……」

ユミルが一回言葉を切って、ミライの顔を見て、鼻下を擦ってみせる。

まさか……。

ミライは不安を過ぎらせながらも、鼻下を手でそつと触ってみる。

手には、半分乾ききって、ねっとりとした赤い液体が付着していた。

恐らく自分から見て、右の穴からの物だろう。

「相当、激しい戦闘だったようだ」

ユミルのにやけ顔が、わざとらしくて苛立つ。

「ご想像にお任せします」

でも、否定できない自分である。

ユミルは、わざとらしく笑いながらミチの方へ近づき、メニューー

画面を開く。

ミライは、ユミルの笑いには一切触れず、メニュー画面を開き、今日の献立を考えるのだった。

第74層 悪夢の予感（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第74層 悪夢の予感

「うわっ！焦げた……」

自分の魔法で焼いていた、ハンバーグを1つひっくり返して思った以上に声を上げた。

やはり、魔法の火は火力が強すぎる。

だが、そんな強力な火が引火しないこの大樹は、実は鉄製か何かなのだろうか。

色々考えながらも、ミライは今日の夜食のハンバーグを手慣れた手つきで焼いている。

ハンバーグの大きさは、直径10cm、厚さ2cmと大きめ。

まあ、これと野菜しか食わないからお腹いっぱいになることは無いだろう。

ミライがハンバーグを焼き終わり、野菜と共に盛り付けに入っているときだった。

「げほっげほっ……うつつ」

ユミルの少し強引な回復薬の流し込みで、どうやらミチが目覚ましたようだ。

「ユミル、もつとゆっくり流してやれよ」

「いやーこういうの、あまりやったこと無いからな。思ったより難しい……回復って」

ユミルは何か過去を思い出すように、視線を少し遠くの暗い空に向けている。

「うつつ……ここは？」

ミチは、周りをキョロキョロ見渡しながら言った。

「ここは死んだ物が来る世界だよ」

ユミルがまじめな表情でミチに嘘をささやく。

ミチは、周りを見渡す速度を速めた。

そして、僕を二度見して目で状況説明を訴えてくる。

「ユミル。よくそんな嘘が出るよな。尊敬はしないけど」
ミライの言葉に、ユミルはぎこちない笑顔を見せる。

「いたたた……あの子は？」

そう言つて、ミチも殴られた箇所を手で撫でている。

恐らく、ユミルもミチも骨折れたんじゃないか？

もう復元したのかもしれないけど……。

「ミライが追い払ったらしい。鼻血出しながら」

ユミルは笑いながら言った。

それを聞いて、ミチはミライの顔をじつと見つめる。

たぶん鼻下を集中的に……。

「ほら、飯作つたから、ご飯にしようよ。お腹空いたし、ね！」

何でこんなに自分は隠し通そうとしてるのか分からない。

でも、隠さなきゃいけないと、心の奥底で僕自身が訴えかけてきてる気がする。

「そういえばお腹空いたわね。ミライの言う通り夕食にしましょ。

……ミライの戦闘をじっくりと聞きながらね」

「そうだな。細かく、じっくりとな」

2人の企みの分かりきつてる笑顔を、恐怖としか感じない。

どうやら逃げ道はもう無いようだ。

2人は食事の置いてあるミライの元へと、笑顔を消すこと無く向かってきた。

2人は夢の中で悪夢を見て、僕は現実で悪夢を体感すると……。

これで3人仲良く悪夢にうなされましたと。

まあ、これが夢だったら目を覚ましたとき、どれだけホツとするだろうか。

2人は少し焦げたハンバーグの前に座った。

ミライも覚悟を決めて座り、目の前のハンバーグを見つめる。

そして、ミライは「もっと小さく作つとくのだった」とため息をつくのだった。

第75層 畏に掛かったウサギ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第75層 罨に掛かったウサギ

「……まあ、こんな事があつたんだよ。あの短時間で」

「鼻血を出す場面は含まれてなかつたみたいだけど？」

ミライの曖昧な説明に、ミチは疑問を投げかけてくる。

「勘弁してくれよ……」

ミライは心の声を隠す気力すら残ってない。

「相手も実は魔法使いで、魔法ぶつけ合いに勝ち、自己紹介して別れたって事だろ。どう考ええも鼻血出した人と自己紹介なんて……ありえなくないか？」

ユミルの冷静な考えも飛んで来た。

何故かこういう時のユミルは、推理力を増してる気がする。

好きなものに対する執着心……なんだろうか。

ミライはしばらく無言で乗り切る作戦に出ようと試みる。

だが、それもミチの言葉で作戦失敗に終わる。

「まさか！鼻血の原因は……私！？うそでしょ！」

ミチは何やら感やら想像して、顔を突然真っ赤にした。

「そうか！そんな考えがあつたか！しかし寝ている子にだなんて……」

ユミルも色々考え始めた。

自分自身の思っていた以上の悪い状況が、目の前で起こり始めている。

「それは絶対に違う！」

ミライは2人の妄想を止めようと大きく一言。

「じゃあ証明してみなさいよ！もっと詳しく、説明しなさい！」

ミチは強く言うが、表情はいやらしい笑顔だ。

まるで、罨に掛かつて逃げ出そうと苦しむウサギを、目の前で楽しんでみてるような女の表情だ。

そんな笑顔を目の前に罨に掛かったウサギは、言われるがままに

詳しくもう一度話し始めるのだった。

第76層 ニヤニヤ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第76層 ニヤニヤ

「……………」
ミライは話すこと話してから、しばらく無言になっていた。
全て話したはずだと思う。

将棋で言う穴熊の引きこもり戦術や、セーナの服を切り裂いた事
や、バリアの破片で僕自身気を失ったこと。
鼻血を出す原因となったシーンまで……………。

そして、この先に下りる出口があることも。

「……………なんでそんなにニヤニヤしてるんだよ」

ミチとユミルは、爆笑つて程でもないが笑っている。

笑う場面なんて……………あつたか？

「いやー楽しそうに戦つてたんだなつて」

「そうそう。私もそういう風にしか聞こえなかったわ」

2人の笑顔の原因は同じようだ。

あのときの戦闘、死ぬか生きるかの大接戦だったんですけど！

俺、何かへんなことでも話してる途中に言ったか？

「なんで？ねえ、なんで楽しそうだつて思ったんだよ」

ミライは2人に対して聞いた。

「ごちそうさまでした！」

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした、つておい！」

ミライの突っ込みに、2人は笑う。

ミチの「ご馳走様でした」で話を完全にそらされた。

「別に気にすることでもなんじゃない？それとも、まだ話してない
つて事があるわけ？」

「いえ、何にも……………」

結局ニヤニヤの理由が何一つ分からずに、気がつけば食事が終わ
っていた。

第77層 ボスの居ない敵拠点（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第77層 ボスの居ない敵拠点

食事後、食器を片付けてからのことだった。

「で、どうするこれから？」

ミチからの問いかけだった。

「どうするって、このボスは……あんな感じになってるし」

そうミライは言いながら、セーナが倒していたボスの死骸を見つめる。

目の先に見えるのは、フロアの端に移動させた大きな4枚の羽を持つモンスター。

地上の方での、蝶や蛾のような感じの見た目だろうか。

なんか違う気がするけど……。

大きさは、3人の身長を足してもまるで足りない。

しかし、見た目の大きさよりも、重さは軽かった。

ユミルの大剣数本分ぐらいで、3人で押してどうにか運べるぐらいの重さだ。

今思えば、このモンスターを倒したの……小柄のあの子だったわけ……。

そう思うと、少し顔がにやけてしまう。

「どうした。良いことでも思い出したか？」

ユミルは、ミライの笑顔を見ながら言った。

「いや、何にも無い。てか、交渉するはずのボス倒したから、もう村は襲われないんじゃない？」

「それもそうね。でも、まだモンスターは沢山生き残ってるみたいだけど？」

ミチは、そう言って目を閉じ、左耳に手をかざした。

周りに耳を傾けるって事だろうか。

ユミルも耳を澄ましている。

ミライも耳を傾けようとしたとき、耳を済ませなくても遠くの方

から虫の羽音がするのが分かった。

「ブーーン」と、音がだんだん大きくなっていく気がする。

「ほら、まだこんなに音が聞こえるんだから、襲ってこない可能性も……ってミライどうしたの？」

突然立ち上がったミライを見て、ミチは言葉をやめた。

「やばい、予想が正しければ……」。

「バリア！」

突然ミライは、このフロアの入り口に巨大で厚く重いバリアを作り出した。

第78層 魔法解除（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000 Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第78層 魔法解除

「ねえミライ、一体どうしたのよ!」

ミチは、焦りながらバリアを作り出したミライを見ながら言った。

「いや、僕の予想が正しかったら……」

ミライはずっと入り口を見続けている。

正直、ミチが音に関心を向けるまで分からなかった。

もし、あのとときの戦闘の「解除」が全魔法解除なら……。

あれ……でも1回目の魔法解除で、背中のバリアの破片消えなかったような……。

まあ、何かの思い違いだろうって事にしておこう。

ミライが、そうあれこれ思考を巡らせてるときだった。

ミライの張ったバリアが、もの凄い物音を立て始めた。

「な、なんだ!」

その光景にユミルが思わず声を上げる。

「やっぱりそうだったか……危なかった!」

ミライはホツと胸をなでおろす。

「ねえ、あの数のモンスターって……」

「たぶん、下から追いかけてきたモンスターたちだと思う。僕がセーナとの戦闘で魔法解除しちゃったから、入り口に仕掛けたバリアも解けたんだと思う」

「なるほどね!」

ミライの答えに、ミチは感心する。

「で、ミライは焦ってバリアを投下したと」

ユミルはバリア向こうの光景を見つめながら言った。

「そういうこと。まあ、ミチのおかげなんだけどね」

ミライはそう言うが、ほめられた本人は理解して無いらしい。

ミチは、ミライの言葉にポカーンとしていた。

「ま、せいぜい私に感謝するのね!」

全然理解してないミチでも、褒められているのは分かったようで。「それにしても凄い数だな。あの奥の道に何千匹……ってなんだ！」ユミルが何かを言いかけている時だった。

3人の居るフロアの昼間のような明かりが、急に真っ暗闇に変わってしまったのだ。

「え、これも、ミライに関係あるの!？」

「違う!たぶんセーナが魔法解除したんだ!」

ミチもミライも、かなり困惑してるが考えは冷静だ。

「それってどう言うことだ」

ミライの言葉に疑問を思い、ユミルは聞き返した。

「この下のフロアと、このフロアが明るかったのは、セーナの光魔法のせいなんだ。だから、その明かりが消えたって事は、セーナが魔法を解除したんじゃないのかって」

「なるほど。魔法使いならではの思考か」

「どうやら僕の説明に、ユミルは納得したようだ。」

「しかし、この暗さ、どうしたものか……。」

「ミライ。とりあえず、火でも出してくれ」

ユミルの提案の音が、暗闇の方から聞こえてきた。

なるほど、その手が有ったか!っていつも通りだけど……。

「分かった、今つける」

「ちよつと。ちよつと待って!」

ミライが火の魔法でも出そうかと思った時に、ミチの声が遠くから聞こえた。

第79層 明るさ(前書き)

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第79層 明るさ

「ミチ、どうした？」

ミライは火を出すイメージを止めて暗闇の中聞き返した。

「あと1分、いや30秒で良いから」

やはり、ミチの声は遠いところから聞こえてくる気がする。

声が小さく聞こえるのもあるのだが、何より今までに無いトンネルの中で叫んだときのような響きで、こちらに声が伝わってくるのだ。

「もう良いわよ。早く明るくして」

ミチの声が、近場で聞こえる。

「今明るくする。フゲネス、フレイム……」

ミライは、小声で呪文名を言った。

すると、その声の大きさに合った小さな火の玉が、ミライの手平の上で弱く光を出した。

なんだかイメージより大きさが小さい気もするが……。

「……やっぱり暗いな。今までが明る過ぎただけだと思うけど」
自分で出した火を見て、純粹な感想を呟くミライ。

数分前は、昼間のような明るさだったから、まあ暗く感じるのは仕方ないか。

「んで、何でミチはもう着替えてるんだ？」

ユミルがミチに対して言った。

ユミルの言葉を聞いて、ミライもミチの方を見る。

確かに、そこにはパジャマ姿のミチがいた。

あまりに暗くて、パジャマの色はオレンジにしか見えない。

「別に良いじゃない。真っ暗だったんだし」

「まあ、良いんだけど……」

ミチの言葉に、ユミルは言葉を軽く返した。
その時だった。

ミライの点した弱い炎が、完全に消えてしまった。

第80層 大樹攻略最後の夜（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第80層 大樹攻略最後の夜

「ちよつと、何で消してるのよ」

ミチは再びの急な暗闇に戸惑っているようだ。

「あれ、ごめんごめん。フゲネスフレーム……あれ？そい！……そりゃ……」

ミライの声は張る一方だが、火は全く付く気配が無かった。

「どうしたミライ？」

「火が出せない……魔力切れかな」

そう言つて、ミライはメニュー画面でステータスを確認しようとした。

そして、ここに来て新たな事実を発見する。

「ねえ、みんなステータス画面見える？」

ミライは暗闇に対して声を掛けた。

「……見れないわね」

「見れないんじゃないかって、見えないんだな。たぶん」

ミチもユミルも言葉を揃えて見えないと言った。

そう、僕らの重宝する画面は、暗闇では見えないのだ。

あの画面自体から光を放つてなかったんだな……。

「これじゃ原因が魔力切れか分からないな。で、思ったんだが、ミライの魔法つて、魔力切れたとき……発動していた魔法どうなる？」
そうユミルの声が近場から聞こえてくる。

「たぶん、発動した物は場所を移せば消えないと思う。だってまだドタドタ音なってるし……今回の火は手の上で出さばなしかったから、いけないんだと……」

「まあ、そうか。なら大丈夫か」

ユミルの返答が帰ってくる。

そしてフロアの中は、しばらくの間バリアに何かがぶつかる音しか聞こえなくなった。

「……もう今日はここで休みましょうか」

「だな」

「何もすること無いしね」

ミチの言葉に、ユミル、ミライと返していく。

それにしても、どうして魔法が使えなくなった？

まさか魔力回復薬の魔力のほとんどをあのバリアに使ってしまったのか？

まあ、いいや。

2人の声もしないし、もう寝よう。

こうして3人は大樹の頂上付近のフロアで1泊することになったのだった。

第81層 魔力200回復(前書き)

この作品は、文章表現レベルが1/1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第81層 魔力200回復

「うう……朝か……」

ミライは、あまりの眩しさに目を覚ました。

日が昇りたての朝。

相変わらず大樹の中は生ぬるい気温だ。

「……2人とも、ぐっすりだな」

ミチとユミルは、まだ寝息を立てている。

……3人とも、こんなに近くで寝てたんだな。

そして、開きっぱなしのメニュー画面。

ミライは、開きっぱなしのメニュー画面を操作して、ステータス画面を開いた。

「魔力は……876分の0か。まあ、結局魔力切れが原因のか……」

ミライは一人呟き、その場を立ち上がる。

そして、チラッと入り口のバリアを見た。

まだ大量のモンスターたちが待機しているよう……。。

ミライはバリアから視線を外し、メニュー画面から魔力回復薬を取り出し一気に飲み干した。

ミライは再びステータス画面を見る。

「……200回復か。さて、飯、作っておくかな」

そう言つて、ミライは2人を寝かせたまま、朝食作りを開始したのであった。

第82層 待ち時間（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第82層 待ち時間

ミライは朝食を作り終え、2人が目覚めるのを待っていた。それにしても、大樹の頂上から見える景色は良い眺めだ。

ほぼ外が見えている開放的な空間のフロア。

大樹から周りを見渡せば、1箇所大きな岩山がある以外は、全てが地平線のような気がする。

地平線から少し目線を落とせば、僕らがここに向かう前に居たビナンケの町が、もの凄く小さく見える。

……僕はここを目指して相当な距離を歩いてきたんだな。

そして、大樹を取り囲む巨大な森。

だと思っていたが、実際真上から見るとそんなに面積広くも無いなーと思ってしまう。

大樹を取り囲む森より下は見る事が出来ない。

実際見てしまったのだが、あまりの恐怖感に腰を引いてしまうほどの迫力だ。

それにしても……。

「それにしても、なかなか目を覚まさないな。2人とも」

ミライは2人の寝顔を見る。

昨日の悪夢を見ているような表情ではなく、何か吹っ切れたような、すがすがしい表情を浮かべて眠っていた。

ミチからは、いやらしく唾液が口元を伝っていくのが見て分かる。

「……起こすか」

ミライはそう言って、大きいため息をつき、メニュー画面からフライパンとお玉を取り出すのだった。

第83層 救いのサンドイッチ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第83層 救いのサンドイッチ

「いただきますーす」

「いただきます」

ミチのやる気の無い掛け声と共に朝食が始まった。

ミチは不機嫌と言うか、全体的に力が抜けている感じた。

ミライが奏でたフライパンを叩く音で目を覚ましたことが不快だったらしい。

ユミルは体は動いているが、頭の中は完全に寝ている状態にみえる。

表情が全く変わることが無いのだ。

でも2人とも、いつもより食べるペースが格段に速いのは気のせいだろうか……。

2人の手元のベーコンレタスのサンドイッチが、口の中に消えていくスピードが異様に早い。

「そんなに早く食べたなら喉詰まらせないか？」

ミライは急ぐ2人に対して問い掛ける。

「お腹空いてるのよ！」

「前に同じく」

2人の声は何故か尖っていた。

そんなにフライパンで起こす事が良くなかったのか……？

しばらく3人の間で会話は起こらなかった。

「ごちそうさまでした！」

「ごちそうさまでした」

3人は、しっかりと合掌。

2人の声に尖りは無くなっていた。

「このサンドイッチが不味かったら本当に怒っていたわよ。ねえ、ユミル？」

ミチは突然言うと、ユミルの表情を伺った。

ユミルは一瞬驚いた表情になるが、すぐに笑みを浮かべる。

「だな。作ってあったから良かったが、何も無かったら……」

「なかつたら？」

ユミルが言葉を詰まらせたので、ミライが聞き返す。

「この木の大きさぐらいのケーキを作ってもらうところだった」

そう言っただけユミルは、ミライではなくミチの方を見て笑う。

ミチもユミルの表情を見て、軽い笑みを浮かべる。

「一体2人に何があつたんだろう……」。

まあ、楽しそうだから機嫌治ったみたいだから良いんだけど。

「一体何があつたんだよー」

ミライはそう言いながら笑う。

そして3人は、笑いながら食に関する話を始めたのだった。

第84層 出口(前書き)

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第84層 出口

「夢ねえ……」

ミライは夢と言っ言葉聞いて、苦笑いを見せた。

結局、食の話をしばらくしている内に、2人のあの食事時の態度の謎も解き明かされた。

ユミル話を聞くには、ミチとユミルは同じような夢を見ていたらしい。

……そんな事あるのか？

でも、夢の内容については、良く分からなかったが感心をもてた。何時間もこの木を登り続けて、夕食無しで朝を迎える。

それで空腹のあまり、起こされるまで夢の中で美味しい物にありついていた。

そんな夢見てるんだったら、呼んでくれれば良かったのに……。そんなことを思いつつ、2人の話の流れを微笑みながら見ていたのだ。

「さて、する事した感じないけど、町に戻りましょうか」

話に区切りを指すようにミチは言った。

「そうだな。で、ミライ、話していた出口ってどこ？」

ユミルの言う出口とは、あの時の光魔法剣士さんが逃げていった場所だ。

「あの辺だよ。見てみれば分かる」

ミライはそう言って、セーナの逃げていったほうを指差した。

「この高さから下りるって、どう考えても無理なんじゃ……」

ユミルは不思議そうに言う。

ミチもユミルと似た表情をしている。

「行けば分かる。正直、僕もあんなのが在るとは思わなかったから。まあ、見るだけ見てよ」

そう言ってミライは立ち上がった。

2人も釣られて立ち上がる。

そして、ミライは2人をリードするよつに、セーナの出で行った
辺りまで連れて行くのだった。

第85層 螺旋滑り台（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第85層 螺旋滑り台

「これか……」

「これだよ……たぶん」

「うわー面白そう！」

ユミル、ミライの真つ暗な反応に対して、ミチは実に楽しそうだった。

今、3人が目の前にしているのは、恐らくセーナがここから脱出するために使ったであろう物だ。

その形を言い表すのは難しいが、例えるなら、螺旋階段の階段が滑り台に成っていると言った所だろうか。

……これ、滑るのか？

「でもさ、この滑り台に付いてるこれって何だろう？」

ミライは、螺旋滑り台の異様な光沢を指差して言った。

「……これ、甘い香りするわよ！お菓子で出来てるんじゃないの？」

ミチはいつの間にもメルヘンチックになったんだよ……と、心のうちを抑えとく。

「まあ、あの大軍が集めた蜜か、樹液じゃないか」

ユミルが冷静に推理して、一瞬だけ入り口の方のバリアを見る。

「まあ、何でも良いわ。とにかく行きましょーよ！」

ミチは滑り台を見て、ミライたちを見て、にっこりと笑う。

2人はその笑顔に対して苦笑いでしか返すことが出来なかった。

それもそのはず。

ミライたちがこれから乗ろうって思っている滑り台には、気休め程度の小さな安全処置の外枠があるだけなのだ。

少し勢い良く滑れば、すぐに滑り台外にジャンプ！なんて事になつてしまう命がけの滑りがこの先に待っているのだ。

なのに、ミチのように笑顔だなんて出来るわけが無い。

「……なあ、他の道にしないか？」

とうとうユミルが、この言葉を切り出した。

「他の道が在るならね。私は、バリアを解除しての百戦錬磨は嫌よ」

「それ使い方間違ってる気がするけど、まあ、戦うのは僕も反対」

ユミルの気持ちも分からなくないが、ここはミチの考えに乗っておく。

だって、あの数と戦闘をするなら、まだ滑り台滑ったほうが安全な気がするでしょ。

「……しかたない。滑るか。この危険な滑り台を……」

ユミルは、そんなに考えることも無く腹をくくったようだ。

「じゃあ、考えが変わらないうちに行きましょう」

そうミチは言って、突然1本の長いロープを取り出した。

「……それ、何に使うんだ？」

ユミルは、ロープを体にくくり付けているミチに対していった。

「え、生きるも死ぬも運命共同ってことよ。ほら、ミライもユミルも結んで結んで！」

「……はいはい」

そうユミルは返答して、ミライにどうにかしてくれと表情を見せてくる。

僕は、首を横に大きく振り、ミチから受け取った縄をユミルが結べる分を余らしつつ、腹辺りを巻いて硬結びをした。

そして、ユミルにロープを渡す。

ユミルは、無言で受け取り、腹に余ったロープをくくりつけた。

ユミルの表情は全く冴えていない。

「よし、じゃあ行くわよ！」

「おー」

ミチの元気の良い声に2人は暗く掛け声を合わせ、今後の展開に身構えたのだった。

第86層 途切れた滑り台（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第86層 途切れた滑り台

「キヤーーーーー！」

「うわーーーーー！」

ミチとユミルの叫び声が響き渡る。

僕も叫んでいるが、2人の叫び声が大きすぎて自分の声が聞こえない。

まあ、2人の叫ぶ意味は、苦楽と対照的な叫びなわけなのだが……。

それにしても、この滑り台、もの凄く滑る。

甘い香りを放つ蜜は、完全に固まっていてツルツルと滑る。

そしてこんなにも滑って、安全処置の外枠が甘いものにも係わらず、

ミチはスピードを落とすということをする様子は無い。

……だれかこの子を止めてくれ！

2人の叫び声がしばらく鳴り響き続けた後、ミチは突然ブレーキを掛けた。

急激にスピードを落として、そして「ゴツン」と何かが何かにぶつかる音が響き渡って、勢いが完全に無くなった。

「いたたたたたた……」

ミチが、「た」の音をどんどん低くしながら連呼している。

ミチが完全に止まって、ミチの後ろに居たミライも、ミチの数センチ後ろで完全に止まった。

その後ろから、勢い良くユミルがミライにぶつかった。

「うわっ」

その反動で、ミライはミチにぶつかる。

「きゃっ」

ミチの可愛らしい叫びの後に、パチンと大きな音が響き渡った。

ミチは、ミライの手の甲に大きく平手打ちをしたのだ。

「痛っ！」

そうミライは叫び、ミチに触れていた手を引つ込める。

叩いたミチに文句を言おうと思ったが、少し冷静に考え直してやめた。

……うん。

胸に触ってたな……。

ミライはミチに謝るタイミングを失い、代わりに一言聞いた。

「ミチ。どうして急に止まったんだ」

「だって……どうみても、これ行き止まりよ」

元気なさそうにミチが言う。

その言葉を聞いて、ミライはミチではなく、ミチの前の方を見た。そこには、巨大な空洞の穴が存在した。

ただし、完全に蜜で穴が塞がっているやつ。

「どうするんだよ。この滑り台、絶対登れないぜ？」

ユミルが後ろの方から言ってきた。

「たぶん、あの光魔法剣士さんは、これで地上まで降りたのだと思うよ」

そうミライは言って、滑り台の下を覗き込んで指を刺した。

そこには、1本の長い紐が見えない下の方まで伸びていた。

「うそだろ！大樹の残り半分をロープで下りるのかよ！」

流石にこの状況は、ユミルも冷静さも失うようだ。

冷静さを失うというより、必死に今後の未来を変えようとしているようにも見えるが。

「大丈夫よ。たぶん」

ミチの前向きな言葉も、「たぶん」と言う後付で信じれなくなってしまう。

3人はロープをもう一度見る。

風が吹くだけで、大きく、ゆらゆらと揺れている。

本当にセーナはこのロープで降りて行ったのかと考えてしまう。

「さて……行くわよ」

流石に今回は、ミチの声も真剣みを帯びている。

そして3人は、体にくくり付けたロープをそのままにして、風で大きく揺れるロープに、順番にゆっくりと捕まるのだった。

第87層 網渡り後半戦（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第87層 綱渡り後半戦

3人は無言で縄を伝って下りていく。

誰も弱音を吐くことも無ければ、元気付けることも無い。ただただ必死にロープをつかむ。

だれかが力尽きれば全員が死んでしまうといった状況。

こんな地獄と隣り合わせの状況がしばらく続いた頃、何一つ会話が無かった所にミチが声を入れた。

「ねえ、地面が見えてきたわね。もうすぐゴールよ」

ミチの言葉に元気のよさは無かった。

地面は最初から見えてたわけだが、地面に生える草木が、はつきりと見えてきた。

ミチはきつとその事が言いたいんだろつ。

「がんばろう。もうすぐだ！」

ユミルも元気付けようと、大声で言った。

その時だった。

もの凄い突風が、3人を襲う。

「きゃっ」

ミチは思わず叫ぶ。

3人のつかまるロープは、振り子のように大きく揺れる。

完全にロープに振り回されている。

そんな状況が数十秒続き、それからゆっくりと、ロープは一直線の定位置に戻った。

「何とかなかったか」

ミライは、ユミルの先のロープの上の方を見て言った。

3人はホッと胸をなでおろしていた。

その時、今まで重力に逆らっていた手に、重力を感じなくなった。

一瞬、安心のあまりかと思ったが、どうやら違ったらしい。

上の方から、長いロープの先が落ちてくる。

……完全に縄が切れたようだ。

「うわあああああああ」

3人は全く同じタイミングで叫び、真っ逆さまに落ちていくのだった。

第88層 空中の戦略（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第88層 空中の戦略

「バリア！」

ミライは落ちていくなか、とっさに大きなバリアを目の前に作り出した。

3人は、バリアの上に勢いよく落ちた。

「いたたたた……ミライ、よく出した！」

ユミルが一息付き、未来を褒めた。

「落ちまーす」

ミライは次に起こることを予測して、3人に聞こえるように大声で言った。

ミライのバリアを発動させたのは空中。

重力に逆らえないバリアは、落ちていくのは当然。

「え、何をつて、うああああああ」

身構えてないユミルは、再び大声で叫んだ。

再び3人は、風を切って落ちていく。

ただ、ミライは冷静に空中で集中する。

「バリア！」

ミライは、また3人の下にバリアを張る。

3人はバリアに叩きつけられる。

今度は、バリア上に3人が同時に落ちた瞬間に、バリアが反動で地面に勢い良く落ちて行った。

「おいミライ、何を考えてるんだ！」

ユミルが大声で聞いてくるが、ミライは完全に無視。

今は説明してる暇はない。

「バリア！」

ミライは叫ぶ。

そして、バリアを作り出してはその上に落ち、バリアと共に地面に向かって進む。

これを何度も何度も繰り返していく。

少し集中し過ぎて頭が痛い……。

でも、死ぬぐらいなこの程度の頭痛、耐えなくては……。

「バリア！」

ミライはバリアを少しずつ生産する。

「なあ、みち。ミライは何を」

ユミルは無言でミライを見続けているミチに対して言った。

ユミルが言った瞬間、また3人は落ちていく。

「バリア」

ミライの声に張りがなくなってきた。

「……多分、全員が死なないように必死になってる……」

「それってどういう……」

ユミルが聞き返そうとしたとき、再び3人の体は宙に浮いた。

「バリア」

ミライの作り出すバリアは、どんどん薄さを増して行く。

「バリアに私達が落ちることによって、落ちていく勢いが一回り

セツトされるのよ」

「……ミライ、頭が良いな」

ユミルはミライの行動を理解したらしい。

3人は地面に向かって少しずつ落ちていく。

確実に落ちていく勢いを殺しながら。

「バリア」

弱々しくも、しっかりとした口調で呪文を唱えるミライ。

しかし、今まで通りなら出てくるはずのバリアが出ない。

「バリア……バリア！」

ミライの声の張りも虚しく、どんどん落ちるスピードを加速させて行く。

……魔力が底を尽きたのか。

もう、駄目なのか……。

そう思いながら、ミライは空中で器用に反転する。

反転した先には、二人が並んで風の抵抗を受けていた。

「……魔力無くなったよ」

そう言つて、にっこり笑つるミライ。

「ミライ！後ろ気をつける！」

ユミルはミライを見て叫んだ。

「え？」

ミライが一文字返事した瞬間だった。

パスンと言う音と、背中に激痛をミライは同時に感じた。

そして、ミライの後を追うように、2人がミライと同じ音を立てる。

ミチとユミルは、隣で寝そべりながら笑っている。

でも、2人の向こう側は完全に空だ。

一体何が起きたと言つんだ。

それとも、僕らはもうあの世ですか？

ミライは色々考えながら、その場で起き上がり、胡座をかいて座つた。

「あ」

ミライは驚きのあまり声を漏らした。

足元に広がるのは、巨大なバリア。

さらに、その下全てがバリアで、バリアの層を作り出している。

「はははははは……」

ミライは変な笑いが止まらなくなっていた。

生きてる……僕らは助かつたんだ！

そう思つたときだった。

ミチが何かに気がつき、叫んだ。

「ねえ、足場のバリア……動いてない？」

ミチに言われて、二人は足元を見た。

言われてみれば、少しずつ右に移動しているような……。

「ねえミライ。確かこのバリアの元つて」

「氷だよ。ひんやりしてるでしょ……あ」

ミライは話している途中で今の状況を理解した。

バリアは氷で、ツルツル滑る。

そして、厚さ、大きさが均等なバリアを作り続けるのはまず無理だ。空中なら尚更だ。

……もし、この層を成しているバリアのどれか一枚に、厚さのむらがあったとしたら……。

ただ、気づいたところでどうしようもできない。

だからミライは、たからに言った。

「下に落ちまーす」

そう言った瞬間、3人は数枚のバリアと共に、地面に向かって落ちるのだった。

第89層 半壊（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第89層 半壊

「いたたたたた」

地面に到着して、ミチは呟いた。

「まあ、無事到着か」

ユミルは、そう言って笑う。

「どこが無事だよ！まあ、生きてるけど」

そう言ってミライも笑顔を見せる。

「ふふふ、まあ、ミライ。ご苦労さま」

ミチは、そう言ってミライに魔力回復薬を投げ渡した。

ミライは冷静にそれをキャッチ。

「どうも」

一言お礼を言い、薬ビンの中身をイツキ飲み。

「それにしても減速なんて良く考えたな」

ユミルが関心の態度を示して言う。

「いや、正直最初のバリアはとっさにもがいて発動しただけだから」

そうは言うものの、誉められると顔がにやけてしまう。

ミライはミチに魔力回復薬を一本投げた。

「これは？」

ミチは驚いた表情で聞いてきた。

「魔力を少しずつ回復させてくれたのを気づかなかったとでも？」

そう、ミチは後ろから何かしらの魔法を使って、ミライの魔力を回復させていたのだ。

ミチが照れ臭そうに笑い、受け取った薬を飲み干す。

「どうりで……って、俺なにもしてねえ」

ユミルは、笑顔で言う。

「貸し1ね！」

ミチとミライの声が重なり、3人は笑うのだった。

「さて、町に戻るわよ。少し遠回りをしてね」

ミチは、森と森の間にある大きな道を見て言った。
確かに遠回りだが、森で迷う事を考えると近道な気もする。

「そうだな。ネルロスさんやガーブさんに、この事を伝えないと
な」

そう言ってユミルはその場を立ち上がった。

ミチとミライも動きに釣られて立つ。

「ところで、なんて伝えるの？」

ミチはユミルの方を見ていった。

「なにつて……ボスは倒したんで、これで安心です。とかね。倒したの俺らじゃないけど」

ユミルが笑いながら言った。

その時だった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ……と地面が突然揺れ始めた。

「な、なんだ！」

「地震!？」

ミライとミチは、思わず声を上げる。

もの凄い揺れている。

立っているのも精一杯だ。

思ったのだが、もしもここが地下世界だったら……空が降ってくるんじゃないか？

3人は、不安を隠せず辺りを見渡す。

地面は、数十秒間揺れ続けたが、急にピタツと揺れが収まった。

「ふうー、大きな揺れだったな……」

ユミルは落ち着いた口調で言った。

何もおきなくて良かったと、3人がホツとしているときだった。

みしみしと、何かが破けるような音が3人の耳に入ってきた。

そして、入った瞬間に巨大な爆発音が……。

思わず3人は耳を手で押さえる。

そして、瞬時に爆発音のした、大樹を3人は振り向いて見た。

……そこに見えたのは、半分より上の部分が完全に無くなった大樹と、爆発によって吹き飛ばされるモンスターや、大樹の破片。
そして、今までとは規格外の大きさの体格をしている、羽で空を飛ぶモンスターだった。

第90層 巨蝶ロンギコロシ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第90層 巨蝶ロンギコロ

「何だあの化け物は！」

ユミルが、目の前に浮かぶ巨大なモンスターを見ながら叫んだ。見た目は表現するのが難しい。

巨大な体に見合った巨大な2本の触覚に、巨大な羽が見える。色は鮮やかで、感的には蝶みたいな感じだろうか。

3人は武器を構えて、ずっと目の前の敵を見続ける。

「アペンシス」

相手のステータスを確認するために、ミライは魔法を放つ。

「名前はロンギコロ。レベルは70……弱点なし」

「70だと!？」

ミライの説明後、すぐに2人は驚いた表情を見せ、ユミルは叫んだ。

「これは、逃げたほうが良いんじゃないか」

ミライは苦笑いを浮かべながら言った。

レベル差がユミルでも19も差が開いている。

僕に関しては25も差が……。

「うん。逃げましょうか」

ミチも逃げる提案に賛成のようだ。

(何か騒がしいと思ったら、虫けらかしら)

聞こえてきた声を聞いて、ミライは背筋が凍りついた。

「見つかった……」

「え？」

ミライの言葉に、ミチが聞き返した。

その時だった。

ロンギコロは、4枚あるうちの2枚の羽を大きく動かし、突風を作り出した。

突き刺さるような重たい風が、3人の体を中へと浮かせた。

風なのに、物理的ダメージを受けてるような痛みがする。

「きゃあああああ」

ミチは空中で悲鳴を上げる。

すぐ隣に居るミチを見ると、大樹の破片がミチの右腕を貫いていた。やばい、風だけが攻撃じゃない……。

「バリア！……バリア！」

1枚目のバリアを3人を大樹の破片から守るために発動して、2枚目を3人が吹き飛ばされていく方向につくり、3人の体を受け止める。

「フネゲスフレイム、バリア、バリア、バリア、バリア！」

それなりのスピードと大きさの真つ赤な火の玉をロンギコロンに飛ばし、前と左右と上空にバリアを作り出した。

とにかく、今は体勢を立て直さないと……。

「うああああ、ああああああつ」

「ミチ！」

ミチのあえぐ声にミライは声を掛け、2人は駆けつける。

完全に右腕に鋭い大樹の破片が貫通していた。

そして、血がだらだらと腕から指先まで流れていた。

ユミルは、ミチの肩を布で力いっぱい縛った。

「ミライ、ミチを押さえる！今から引っこ抜く」

「分かった」

ユミルに言われるままに、ミチを寝かせた状態で、腕を中心に強く体を抑えた。

触れたときに、ミチから熱が放出されているのがすぐに分かる。

「ミチ、いくぞ」

そうユミルは言った瞬間、ミチの腕に刺さった破片を一気に引っこ抜く。

「うわあああああああ」

ミチの悲痛な叫びが、バリア内一面に広がる。

ミチがあまりにも暴れるので、ミライはミチの体に、のしかかるような感じで押さえる。

ユミルは冷静に穴の開いた腕に、スプレーのような物を吹き付けて、傷穴を隠すように大きな目の布をかぶせた。

ミチは今まで見せたことの無いような、深刻な表情をしている。

あの時戦った、触手とは比べ物にならないと言った所。

「ミライ、そんなに心配するな。ミライの肩に針が貫通した時も、この方法で直った」

ユミルはミライの顔を見て、少しだけ笑みを浮かべる。

「そんな事より、今はあいつだ」

ユミルは、バリア越しの空飛ぶあいつをじっと見つめる。

ミライも無言でロンギコロンの見つめる。

「ミライ、あいつが何言ってるか分かるか」

「バリア越したと、全く分からない」

「そうか……」

ミライとユミルは、ただただ風を起こし続けるロンギコロンの見続ける。

あの感じだと、目はそんなに見えないようだ。

そうミライが思った瞬間だった。

だいぶ遠くの方で風を起こし続けていたロンギコロンの姿が消えた。

そして、雲ひとつ無いはずの空に、大きな影が突然出来た。

第91層 死の光（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第91層 死の光

2人は影が出来た瞬間、同時に真上を見る。

そこには、消えたはずのロンギコロンの姿があった。

「いつの間に!?!」

ユミルは真上を見ながら叫ぶ。

「見えなかった……」

ミライは呟く。

ずっと見ていたつもりだったのに、消えていた。

そして、放った魔法は当たったのか分からないが消えている。

ロンギコロンは、バリアの上空に現れたと思ったら、突然針のよ
うなものを尾の方から出してきた。

1、2発は跳ね返したものの、3発目はバリアに半分めり込んだ。

バリアはミシミシ音を立てて、ひび割れていく。

「うそだろ」

ミライは目の前の現状を見て言う。

「どうすんだミライ。やばいぞこれ」

ユミルは、いつバリアが割れても良いように剣を構えている。

「この守りを破片にして飛ばす。ユミルは1発ライトアタックを一
発放ってミチ抱えて逃げて」

「わかった」

そう言つて、ユミルは倒れているミチの前で構える。

「いくよ。3、2、1、フリーズスプリンター!」

「ライトアタック」

バリアの破片変化とほぼ同時に、ユミルの斬撃が飛び出す。

ライトアタックは見事にロンギコロンの命中。

(ふ、その程度の攻撃)

あの感じだと、攻撃は全く聞いていないようだ。

そして、ミライの出したフリーズスプリンターは飛距離が弱く、

相手に届いていない。

ミチを抱えたユミルと、ミライは、全力で大樹の方へ走る。

「バリア、バリア、バリア……」

ミライは、適当にバリアを空中に数枚張る。

4枚目が、瞬時に移動するロンギコロンを捉える。

ロンギコロンはその場でうるたえる。

「フリーズプリンター！」

ミライが叫んだ瞬間、地面に向かって落ちるバリアも、ロンギコロ
ンがぶつかったバリアも破片へと変化し、ロンギコロンに向かって
飛んでいく。

(ぎゃああああああ)

ロンギコロンの、目や腹部に幅広く命中。

ロンギコロンは右往左往する。

「いけるぞミライ！」

ユミルはそう言いながら、ライトアタックを繰り返す。

「フゲネスフレイム！」

ミライは目の前に巨大な火の玉を作り、ロンギコロンに向かって飛
ばす。

火の玉は一直線に飛んで行き、ロンギコロンの薄い左羽を1枚貫
いた。

ロンギコロンは空中でバランスを一瞬保てなくなる。

「ライトアタック、ライトアタック、ライトアタック……」

ユミルは追い討ちとばかりに、光の斬撃を飛ばし続ける。

2発3発とリズム良く当てていく。

これは勝てるかもしれない！

(あまり調子に乗るんじゃないわよ！)

ロンギコロンは叫び、体を大きく揺らす。

そして、4枚の羽を大きく後ろに下げて、前に押し出す。

押し出された瞬間、一点に風が集まり、鎌のような形をかたどっ
てこちらに向かって飛んでいく。

「バリア！」

ミライは空中にバリアを作り、カマイタチの風を受け止める。だが、一瞬だけしか耐れず、バリアは真つ二つに割れる。

「ミライ、危ない！」

ユミルは叫んで、ミライの5歩前に立ち、剣でガードする姿勢を見せる。

「ユミル避ける！あれは受け止めきれない！」

ユミルはかわそうとしない。

「バリア、バリアバリアバリア！」

ユミルの前に、分厚く巨大なバリアを4枚設置する。

相当強固に作ったはずのバリアは、カマイタチの前では無意味。

あっというまに4枚は真つ二つに切られてしまう。

そして、カマイタチのような重風は、ユミルの剣とぶつかる。

「くっ、くぬぬぬぬぬ……」

ユミルの手が大きく震えているが、力は対等のようだ。

ユミルは重風を押し返そうと、剣を前に出す。

「フリーズスプリンター！」

ミライは割られたバリアを再利用して、真上に向かって氷の破片を飛ばす。

氷の破片が、ロンギコロンに突き刺さっていく。

ロンギコロンはふらふら飛んでいる。

その時、ユミルの剣からミシミシと、いやな音が鳴り始めた。

「ユミル！」

ユミルの後姿を見て、ミライは叫ぶ。

「ぬおおおおおおおおおおお！」

ユミルは大きく声を上げて、一歩足を前に出す。

そして……………。

空中に舞い上がったのは、ユミルの大剣の刃の部分。

剣の刃が中に舞ったとほぼ同時に、ユミルの体も中に舞い、ミライ

ミライは3本目のスプレー缶を取り出し吹き付ける。
しかし、スプレーの狙いが定まらない。

ユミルの体は、半分近くまで消え始めて、存在自体が薄く透け始めている。

「ユミル……ユミル！」

ミライはユミルの顔をずっと見て、スプレーをかけるのを止めた。
体に触れようと思ったが、何故か触ることが出来ない。

ユミルは目を完全につぶって、少し笑い、口を空ける。

「……ミライ、楽しかったよ。……ミライは強いよ……だから……
ミチを……」

その言葉を残し、完全にユミルの姿が見えなくなる。

残ったのは、赤い大きな血の跡だけ。

ミライはその残った血の跡の上に両手を付く。

「うわああああああああああああああああああああ」

ミライの悲痛な叫びが、あたり一面に響き渡った。

第92層 決戦寸前（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000 Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第92層 決戦寸前

(ようやく虫けらが1匹……)

ロンギコロンは、ミチとミライとの距離をとって、空中で声を弱らせて言う。

その言葉に、ミライは首だけを動かし、横目でロンギコロンを見つめる。

目は大きく見開いているが、視線がどこか冷たい。

(何だその目は！まだやるというのか)

そう言っつてロンギコロンは、あの時の風を起こす体制に入る。

ミライはロンギコロンを見つめたまま考える。

バリアでは防げない。

ならば、対等または、それ以上の威力の魔法で打ち消しかない。

ミライは決心して立ち上がり、ロンギコロンの方向を向く。

両手には、一度刃をメニュー画面に戻して再生したユミルの大剣。相変わらず重すぎて、刃は地面に刺しっぱなしで、持ち手を持つだけの状態。

それでも、力はもの凄く湧いてくる。

「さあ、来い！」

ミライは目を見開いて叫ぶ。

ロンギコロンの発動条件もそろい、ミライも身構えて、いざ決戦。しかし、その時、信じられない出来事が起きた。

ロンギコロンが、突然空中から叩き落されたのだ。

第93層 メテオ・フレイルム（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第93層 メテオ・フレイム

(一体何が……)

そう言う、ロンギコロンの上に乗っているものにミライは驚く。

大樹の破壊により、大樹の破片や大樹の葉などと一緒に落ちてきた物。

あの頂上で作り上げたバリアだった。

相当落ちてくるのが遅かった気もするが、それにしても、こんな奇跡起こる物なのだろうか。

ミライはこのチャンス逃さなかった。

大樹の葉が大量に降ってくる中、ミライは全神経を一点に集中し目をつぶる。

後の行動は、感じる思いのままに……。

ミライは目を大きく見開いた。

その瞬間、ロンギコロンの周りに出来上がる大量の炎の玉。

ロンギコロンを対象として、球状に無数の数が囲む。

(この程度の大きさの火の玉)

ロンギコロンは、大量の魔力の詰め込まれたバリアを押しつけ、宙に飛び立つ。

そして、球体の頂上の1つの炎の玉に触れる。

その瞬間、もの凄い爆音と共に、その火の玉だけが大爆発を起こす。

(うぐあっ……)

爆発力に押されて、ロンギコロンは炎の球体の下の方まで飛ばされる。

そして、再び炎の玉に触れて大爆発。

(ぐはっ)

その動作が、何回にもわたって続いた。

ミライはその光景に、一度も目を向けることは無かった。

しばらく爆発音が鳴り響き、ようやくロンギコロンの空中で体勢

を立て直す。

羽も胴体も焦げた跡と細かい穴が際立って見える。

ミライは空に向かって両手を掲げる。

ユミルの大剣から手を放して……。

「メテオ・フレイム」

声は大きくないがはっきりとした口調で、一文字一文字に思いがこもっていた。

ミライがその言葉を口すさんだ瞬間、真っ青だった空の一部分が、真っ赤に染まった。

ゴゴゴゴゴという音と共に、天から赤黒く燃え盛る、規格外の大きさの獄炎の玉が、地上のロンギコロンに向かっていく。

あまりの大きさに、まるで太陽が振ってきたようにも見える。

（な、そんな事があってたまるか！）

ロンギコロンは逃げ出すべくために、炎の玉に向かってどうにか逃げ出そうとする。

当然のように、爆発。

爆発を受けても、狂ったように炎の玉に突っ込む。

爆発、爆発、爆発……。

無理と分かっているにもかかわらず、ロンギコロンは無謀にも抜け出そうとする事を止めない。

……死と言う獄炎が確実に迫ってきているから。

獄炎が地上に近づいてくると、燃え盛る音も耳障りに感じる騒音と化する。

そして、異様に気温が上昇していく。

「ミライ、あんなの地上の落ちたら、私たちも……」

ミチは力を振り絞って叫ぶ。

「大丈夫だ。たとえどんな事が遭っても、僕はミチを守りぬく！」
きつと、これがユミルの言い残した言葉だろう。

ミライは騒音に負けないよう、大声で叫ぶ。

獄炎の玉は、炎の玉を飲み込み始める。

獄炎の玉が炎の玉に触れるたびに爆発音が鳴る。

まるで、死のカウントダウンをするように、一定リズムで、徐々に大きく……。

（こんな虫けらに、私がああああああ）

ロンギコロンの爆音カウントダウンが終了して、ロンギコロンは自分の体の数倍の大きさの獄炎の玉に飲み込まれていった。

そして、ロンギコロンが燃え尽きて、残るは獄炎の玉が地に着くのを待つだけ。

ミライはミチの目の前に立ち、爆音の中、集中する。

もうユミルの大剣はいらない……。

自分の力で守り抜くんだ。

「バリア！」

ミライは高らかと叫ぶ。

目の前に、過去のものとは比べ物にならない大きさのバリアが発動された。

横幅、縦幅、どちらも数10mで、端っこが確認できない。

獄炎の玉の爆音カウントダウンは続く。

そして、地面まで少しのところまで来た。

「絶対に止めてみせる」

ミライは両手を広げ、巨大なバリアに付ける。

そして、獄炎の玉が地面に密着。

………と思うた。

だが、獄炎の玉は地面すれすれで方向転換をして、真上に向かって飛んでいく。

それも、振ってくるときの数倍速いスピードで……。

ミライは何が起こったか分からず、しばらく放心状態。

そして、何となく獄炎の玉着地地点に目を向ける。

「バリアか……」

ミライはその言葉と言つと同時に、腰を抜かして地面に座る。

着地地点には起死回生の基点となったバリアが有った。

ほぼ無傷の状態で……。

ミライはステータス画面を開いて、今の自分の状況を確認する。

「ははは……魔力、もう、3しか残ってないや……」

ミライはそう言っつて、メニュー画面から魔力回復薬を取り出す。

そして、飲もうと蓋を開けたときだった。

視界が大きく揺れだす。

耳鳴りが大きく鳴り出し、急激な頭痛。

ミライはその場で倒れこんだ。

そして、完全に気を失ってしまうのだった。

……このときミライは、すっかりステータスを確認できていなかった。

もう体力が、二桁を切っていた事。

そして、魔力値が3 / 4380だったことも……。

真つ暗闇な世界。

何にも見えなく、音もしない、寂しい世界。

ミライはそんな世界に、ぽつんと一人いた。

あれ、こんな世界、前にもあったような……。

ただ今回は、体全身に温かさを感じる。

何かに守られているような感じた。

ユミル……。

ミライはその世界で少し笑みを浮かべ、ゆっくりと目をつぶる。

そして、再びゆっくり目を開ける。

目の前に見えるのは、今にも泣きそうなミチの顔だった。

「ミチ」

ありがとうな……。

ミライは眩き、目をつぶって笑う。

「ミライ……ミライいいいいいいいいわあああああああ
ああん」

ミチは一瞬笑ったと思ったら、すぐにミライの胸元で泣き出した。
ミライは泣く事無く、ただただミチの背中に右手を置いてやるの
だった。

第94層 ミチの存在（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第94層 ミチの存在

気がつけば、ミチは泣き疲れて完全に眠りについていて、僕の胸の上で。

ミライは体を動かすことも出来ず、ただただ、空の景色を眺めることしか出来なかった。

目を覚ましたのが夕暮れだったため、今の空は完全に真っ暗だ。大樹を取り囲んでいた雲がなくなり、プラネタリウムで見えるような、大量の星たちが姿を現していた。

ミライはその星を眺めながら、ゆっくりと涙を流す。

一滴一滴が、こめかみ辺りを伝っていくのが分かる。

ミライは7滴の涙を流し、ミチの背中に乗っている手を動かし撫でる。

ミチの鼓動が、手を伝わって感じる事が出来る。

温もりも、息継ぎも、生きているのが分かることを何もかも伝わってくる。

この生を僕の目の前で絶たせるわけにはいかない。

ミライが、ミチの存在を感じていると、ミチは大きく寝返りをした。

そして、ミチはミライの方向を見て、にんまり笑みを浮かべる。

ミライはその表情を、首だけを起こして確認する。

ミライは再び空を見て、少し微笑む。

やっぱりミチの笑顔は癒されるな……。

ミライはそのまま目をつぶり、ミチと言う温もりの布団で眠りに付くのだった。

第95層 2人の朝（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第95層 2人の朝

朝。

2人とも、日の出と言う同じタイミングで目を覚ます。

正直、眠りについたは良いが、浅い眠りばかりで、まるで眠った感じがしない。

一体、何度寝したことだろうか……。

目を覚まして、ミライは適当におにぎりを作るも、2人はほとんど手をつけなかった。

そして、この2週間ぐらいの長旅で、始めて「いただきます」を言わない食事になったのである。

ミライは、皿に盛り付けられた6個のおにぎりを見つめる。

そして、どんどん目線を上げて行き、ミチの顔に目を向ける。

今までに見たことの無いようなミチの表情。

その表情は、先を全く見ず、目の前の闇をずっと見ているかのよう。

ミチはミライの目線に気がついたのか、ミライの方を見た。

ミチはずっとミライの目を見続ける。

ミライも目をそらす事無くミチの顔を見続ける。

笑わないミチは新鮮だが、少し寂しい……。

ミライは少しミチに笑みを見せる。

ミチは笑わない。

ミライは歯を見せるように笑顔を作る。

ミチは笑わない。

だめか、笑わないか……。

ミライはため息をつき、表情を濁す。

「ふふっ」

ミチは笑顔を見せる。

「なんでだよ！」

そうミライは言っ、笑顔を見せる。

「そうだよね。悲しんでいても仕方ないもんね」
ミチは言った。

「うん。悲しんでいても先に進めない」

「そうよね。……そんなユミルが望んでないわよね」

そうミチは言っつて、ユミルの剣を取り出し、地面に置く。

あれ、僕も剣持っつてたような……。

ミライはメニュー画面からユミルの剣を取り出す。

「あれ、なんでミライも持ってるの？」

「それは、ユミルの剣の刃の部分をメニュー画面に……」

「私は、持ち手の方をメニュー画面に入れたわよ」

「まさか……」

そう言っつて、ミライは目の前のおにぎりを手に取り、半分に分けて
半分をミチに差し出す。

「メニュー画面に入れて取り出して」

ミチは言われるままに、メニュー画面に入れて取り出す。

ミライも、ミチと同じ動作をする。

2人の手元には、分ける前の前サイズのおにぎりが……。

これで皿におにぎりが7個。

「これっつて、増殖!？」

ミチが驚いた表情を見せる。

「まあ、そういうこと」

「これを使えば!……」

「やめとこう。たぶん、どこかでネロさんに見られているだろうが」

「……」

ミチの汚い考えをミライは否定して、少し周りを見渡す。

「そうよね」

ミチは少し残念そうな顔をする。

「そんな事より、一回ピナンケに戻ろう。このまま先に進むわけに
も行かないし」

そう言っつて、ミライは立ち上がる。

「そうよね。でも、その前に一つだけ」

ミチは立ち上がると、ユミルの剣を1つ手に持ち、地面に突き刺した。

ミライはその行動の意味が分からなかった。

「こうすると、死人の魂に安らぎを与えられるの……」

ミチは呟くように言った。

「ふーん。だったら……」

ミライは、もう1つのユミルの剣を手に取り、ミチの刺した剣を交差させるように剣を地面に刺した。

まあ、ミチの剣が真っ直ぐ刺さっているので、見た目は不恰好な重なりだが……。

「こっちの方が何となくカッコイイ」

そう言つて、ミライは腕を組みうなずく。

「……まあ、いいわ」

ミチは何か不満があったようだが、何も言わなかった。

「……そろそろ、行こうか」

「いくわよ！ビナンケへ！」

ミチは少し震えた声で、叫ぶように元気に言う。

「じゃあな。ユミル……」

ミライも声が震える。

声は鳴きそうだが、涙は見せないミライ。

こうして2人は、不安定な気持ちの中、ビナンケへと向かうのだった。

第96層 入り口（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第96層 入り口

町の入り口前の見覚えのある看板。

まだ、弱かった頃に最初にまともに挑戦者と戦った場所。

「やっと、戻ってきた……」

ミライは、ビナンケの町の入り口がはっきりと見えてきた当たりで足を止めた。

ここを出て、数週間。

長いようで短く、内容の濃い旅だった。

そして、この場所を始めて訪れたときは、3人だった……。

「色々あったけど、戻ってこれたのよね、私たち……」

ミチの表情は、懐かしさを帯びている。

「行こうか」

そんな表情を見て、ミライは一言言って歩き出す。

ミチも黙って、ミライについて来る。

そして、ビナンケ入り口の門代わりの2本の柱の前。

昼過ぎの町並みは、平和なようで人もにぎわっている。

ミライ、ミチと順番に、草原と町との境界線を潜っていく。

前ここを通過した時とは、潜る順番も、人数も、考えることも、全てが違っていた。

そして、成長もしてきた。

「まずは、ネルロスさんに会おう」

「うん」

ミライの問いかけに、ミチは軽く返した。

そして、2人はネルロスさんの宿屋に向かうのだった。

第97層 留守（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第97層 留守

数回しか通ってない、印象的な市場を抜けて、ミライたちはネルロスさんの宿屋前に着いた。

宿屋前でミチとミライは、顔を合わせて頷き、ミチが扉の取っ手に手を掛けた。

「こんにちわー。ネルロスさん」

ミチの元気良い声は、宿内に響き渡った。

しかし、宿内からの反応は全く無い。

「……居ないみたいね」

ミチは叫んだまま固まり、呟いた。

ミライは玄関に顔を入れて、状況を確認しようと回りをキョロキョロ見渡す。

そして、何かに気がつき、玄関横の台の上の紙切れを一枚手にとった。

ミライの元に運ばれていく紙をミチは目で追いかける。

ミライは紙切れに書いてあることを目で通し、音読する。

「少し空けています。ごようの方は入ってすぐ左の部屋でお待ちください。だつてさ」

「そう。留守なのね」

ミチは軽く返事を返して、さっさと宿内に入っていく。

「おじやましまーす」

ミライは玄関で一言良い、入り口の扉を閉めてから、指定された場所の食堂に足を運んだ。

第98層 食堂にて（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第98層 食堂にて

広い食堂の中にたった2人。

何故か、もの凄いむなしさを感じてしまう。

ミチとミライは、一番手前の席にお互い顔が見えるように座っている。

ミチの表情はどんどん不機嫌そうな顔になっていき、腕を組んだり戻したりと、どこか落ち着きが無い。

「ねえ、ミチさー。少し落ち着こうよ」

「それは、ミライだって同じよ！ミライもそわそわしてるわよ」

ミチは少し冷ややかな目つきで言ってきた。

そんなに僕もそわそわしてるように見えるのだろうか。

「まあ、落ち着こうか。お互いに」

「そうね。それにしても、ネルロスさん遅いわね」

「言われてみれば……まあ、ゆっくり待とうよ。で、思ったんだが、町は平和になりました。僕らはどうするの？」

「次の町を目指す。それだけよ」

ミチの表情が少し明るくなった。

あれ、僕らの当初の目的って……。

「ねえ、僕らの目標って、ここからの脱出だったよね。何か当てでも有るの？」

「それは……ないわね。あはは、まあ、そのうち分かるでしょ」

ミチは笑いながら言う。

そんな適当で大丈夫なのだろうか。

この世界の仕組みをもっと知らないか……。

そんなことを思っていたら、玄関の扉が開く音が聞こえた。

「あ、きたわね」

ミチはそう言って立ち上がると、玄関の方にスタスタと歩いていった。

ミライはその場で座って待機する。

「あら、ミチちゃん着てたの」

「こんにちわ、ネルロスさん。ガープさん。あ、ミライは食堂にいます」

「じゃあ、わしは帰るとするかの」

「いいですよ町長。と言うより、むしろ一緒に話すこと話しましょうよ」

「ふむ。では、邪魔するぞ」

「ごめんね待たせて。少し話が長くなっちゃって」

「いいですよ。そんな事より、色々話すので、とりあえず中に」
玄関の方は、ようやく落ち着いたようだ。

最初に食堂に顔を出したのは町長のガープで、ミライと目を合わせると、軽く礼をした。

ミライも首を下げて礼をする。

ガープはゆっくりと歩いて、食堂奥の方へと進んでいく。

ミライはガープに目を送っていると、食堂の入り口からミチとネルロスも入ってきた。

「ミライ君。いらっしやい」

ネルロスは、周りを少し見渡してから言った。

「どうもです」

ミライも軽く一言返す。

ネルロスは、食堂の奥の方を指差した。

指を差した先には、どっしりと机の端の一席に座るガープの姿。

向こうで話しましょう、と言うことだろう。

ミライは席を下りて、座っていた椅子を机の下に押し入れる。

そして、ネルロスやミチとは対象の机脇を歩き、ガープとは一席空けた席に座った。

右の方にはガープが、対照的にはミチとネルロスさんが座っている。

ガープは話し出す、両肘を付いて手を組んでいる姿勢になる。

一瞬空気が固まったが、その中でミチが始めに口を空けて話し始めた。

第99層 第一章 ホール・ダンジョン（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第99層 第一章 ホール・ダンジョン

「大樹に居たボスは倒しました。この町も大丈夫だと私は思います」

ガープは、ミチの言葉に肯く。

ガープの肯きを見て、ミチが言葉を続ける。

「で、この世界について何か知っていたら話して話してほしいのですが……」

「その事についてなんだけど、とりあえずこれを……」

そう言つてネルロスは、机の上に1枚の手紙を出した。

緑の封に大事に包まれている。

ミチは、その封の端っこを破り、中に入っていた1枚の紙を取り出す。

折りたたまれた紙を広げていくと、それなりの大きさの1枚になった。

ミチは書いてある内容を読み始めた。

「一定条件を満たしたので、町の南の方を進んだ先にワープゾーンを出現させました。ワープ先で会いましょう。ネロより」

「……それだけ？」

あまりの短さに、ミライは聞き返す。

ミチは黙ってミライに手紙を渡す。

ミライは手紙を受け取ると、その内容をもう一度黙読する。

……なお、挑戦者ミライの変態的行動は死罪に値する物だが、本人の望んでやった事では無いと判断し、私に免じて今回は見逃すことにした。

なお、ミライの起こした行動は……。

そういう書き出しで、残りの枠は全てミライの前科の様な物が、ずらっと書いてあった。

……僕、相当危なかったが、助かったんだよな。

そう思いながら苦笑いを浮かべるミライ。

手紙を折りたたんでミチに返したが、ミチの表情は呆れ顔だった。

……ミチに後で色々言われそうだな。

「じゃあ、あなた達は町の南に向かうのね」

ネルロスが少し時間を空けてから言った。

「はい！私たちは今日にでも行こうと思ってます」

そのミチの言葉に、ネルロスはミライに目を向ける。

ミライは、ネルロスの左側からの冷たい視線を感じて大きく肯く。

「そう。1日ぐらい私のところで休んでいけばいいのに……」

ネルロスは、少し残念そうな表情と笑顔を見せる。

「そうか、村を救った英雄たちを称える時間も無いと言う訳かの」

ガープも不満そうな表情を見せる。

「はい。気持ちだけで十分です」

ミチは礼儀正しく言う。

「そうと決まったら……そうね、私が最後にご馳走でも作りましょ

うかしら」

「ぜひお願いします！」

「ミライ！」

ミチはミライの名前を少し大きな声で言う。

「いいだろ。僕はお腹空いたし、それぐらい。腹が減っては……っ

て言うじゃん」

「そうよ。昨日の作り置きを温めるだけだし、時間は掛からないわ

よ」

ミライの言葉に、ネルロスが後押しする。

「……しょうがないわね」

ミチはどうやら折れてくれたようだ。

「やったー。久しぶりのネルロスさんのご飯だー」

心の底から喜びの声が出る。

それだけネルロスの料理は美味しかった。

ミライの言葉にネルロスは笑顔を見せると、席から立ち上がり、

嬉しそうにキッチンの方向に向かっていく。

「ガープさんも動かないところを見ると、食べていくようだ。ミチも気がつけば笑顔を見せていた。」

そして、ミライたちは、ネルロスさんの作る料理を雑談しながら待つのだった。

目の前に並べられる、ロールキャベツたち。

肉を取り囲むキャベツは、トマトスープを染み込ませてオレンジ色に染まっている。

2日目の匂いは、どこかトマトの臭さを強くしている気がする。

スープに浮かぶ黄金の肉脂は、主役を引き立てるかのように周りで細かく輝きを放っている。

待つ間の飲み込む唾が止まらない！って、何を思っているんだらう……。

料理漫画の料理解説者でもないのに……。

「いただきます！」

「いただきます」

突然のミチの合掌にもかかわらず、他の3人は何事も無いようにミチに合わせる。

「ふふ、こんな制度が出来ていたのね」

「はい、ミライがいつもしていたので」

ネルロスは、ミライを見つめる。

ミライはそっちのけでガツガツロールキャベツを食べ進める。

「礼儀はしっかりしてるのに、食べ方は酷いわね」

ネルロスの言葉に、ミチは笑い出す。

あのガープですら「ふっ」と笑いを浮かべる始末。

「それは無いですよー。ネルロスさん」

ミライの言葉にネルロスも笑みを浮かべる。

そんな感じで、楽しい食事はあっという間に終わったのだった。

町の南の門の前。

そこに立つのは、町を救った2人と、それを見送る2人。

「本当に行ってしまうのね」

「はい、早めの行動が一番ですから」

ミチは笑顔を見せながら言う。

「ミライや」

ガープはミライに言葉をかける。

「何ですか、ガープさん」

「お主は武器を持つとしたら、杖か、ほうきか、どちらが良いかの

「どうしてですか？」

「武器を持たぬと、この先大変じゃからの」

「……えっと、じゃあ、ほうきで」

「うむ、ほれ、ほうきじゃ」

そう言っただけでガープは、ほうきを何所からとも無く出すと、ミライに差し出した。

見た目は、普通の竹ぼうきにしか見えないのだが……。

「ありがとうございます」

ミライはしっかりお礼を言い、ほうきを受け取る。

ミライは、そのほうきを握っても、力が湧くのを感じることは出来なかった。

「じゃあ、私たちは行きますね」

ミチは頃合を見計らって声を放った。

「またいつか、どこかで会えたら……」

ミライも一言言う。

「うむ、これからの健闘を祈るよ」

杖を突きながらガープも一言。

「いつてらっしゃい。困ったら、いつでもこの町に戻ってくるのよ。最後に、ネルロスも言葉を残す。

「はい。では行ってきます」

「行ってきます」

ミチの言葉に続いてミライも言う。

そして、2人は先の見えない広い道を歩き始めた。

少し歩き進んで振り向くと、ネルロスが手を振っていたので、2人は大きく振り返す。

そして、2人は手を振るのをやめて、再び歩き出すのだった。

「終わったわね」

「あの子達は、始まったばかりじゃがの」

ネルロスの言葉に、ガープは言葉を返す。

その2人の元に歩いていく、緑髪の肌の焼けた成年の姿。

「あら、あの子達が戻ってきたらどうするの？」

「戻ってきませんよ。ミチは戻らない性格ですから」

ネルロスの言葉に、笑って言葉を返す成年。

「そう。でも、ついて行かなくてよかったの？」

「いいんですよ。元々最初の戦闘で死ぬ予定でしたから。その予定に比べたら、あんな楽しい旅、ご褒美みたいな物ですよ」

成年は、過去を振り返るように遠くを見ながら言った。

「私も、あの戦闘であなたが生き残るとは思ってたわ。宿屋に生き残ってきたあなたを見たとき、どうしようか迷ったもの」

ネルロスは笑みを浮かべながら言う。

「でも、生き残ってきたのは、昔にも無かったかの」

ガープはユミルの方を向いて言った。

「もう1年前のことじゃないですか。あの時は、PTに入ること無かったですから」

成年は笑いながら言う。

「あの子達は、この先大丈夫かのう」

ガープは心配そうな表情で呟く。

「大丈夫ですよ、あの2人なら」

「分からないわよ。あの2人がどんな思いを背負って来たか分からないもの。何も解決しないで、ずっとさ迷い続けるかもしれないわ

よ

「……ホール・ダンジョン。心に隙間が出来た者の来る迷宮……ですか」

成年は呟く。

「ええ。あの子達も明るいけど、何かを抱えてる。あなたと同じようにね」

「俺はずっと前に解決したじゃないですか」

「あら、どうしてこちらに残ったの？」

「いや……恩返しと言うか、罪滅ぼしと言うか……」

「50年も昔のこと、忘れてもいいののに」

「ガープは2人の会話に言葉を挟んだ。」

「ほんとにね。まあ、別に戻らなくてもいいけど。あのイベントでそれなりに分岐点が出来てるから、居てくれた方が楽でいいわ」

「あの一瞬の痛みはどうか出来ませんか？」

「もう慣れてるくせに……」

そうネルロスが言うと、成年は大きく笑い出した。

「全くですね。慣れてって怖いものです」

「さ、私は先に戻るわね。お仕事が有るのよ」

「もう戻るのですか？まだ2人の姿見えますよ？」

「私も忙しいのよ。あなたも管理人って仕事やってみたらどう？ほら、宿屋貸すから」

「じゃあ、俺の代わりに死に続けますか？」

「ふふ、冗談よ」

ネルロスはそう言って、町の方を振り向く。

「じゃあ、わしらは家でユミルの思い出話でも聞かせてもらおうとするかのう」

「お酒出してくださいよ？面白い話や、感動的な話を沢山話しますから」

「うむ、たまには良いかの」

男2人は笑う。

「私も落ち着き次第行きましようかしら。まあ、また話しましよう。それでは、また」

ネルロスはそう言葉を残して、北の宿の方へと歩き出した。

「では俺たちも、ガープさん背中貸しましようか？」

「わしだって、まだまだ歩けるわい！」

そう言っつてガープは、ネルロスとは違う右の道へとスタスタ歩いていった。

成年は、その小さな背中を笑顔で見て、ゆっくりと追いかけるのだった。

目の前に広がる大草原を通る1本の道。

「ねえ、ガープさん何で僕が武器持つてないっつて思ったんろう」

ミライは疑問に思い声を出す。

「さあ？別に良いじゃない。それより、何でほうき選んだの？」

「飛べたら歩かなくて良いなーっつて思っつて」

「で、飛べなかつたわけと」

ミチが言っつと、2人は笑い出す。

ミライは少し前に、ほうきにまたがっつて集中したが、まったく反応が無かつたのだ。

「それにしても遠いな」

ミライは歩きながら呟く。

「遠いわね」

ミチも歩きながら呟く。

先はどこまで続くか分からない。

でも、ミチとなら、どんな壁をも乗り越えられる気がする。

ミライは、ミチの顔をじっつと見つめる。

ミチは、その視線を感じてミライの方を見る。

「なに？」

「ミチ……がんばろうな」

「どっつしたの？急に」

「いや、なんでもないさ」

「ふーん」

ミチは、少し笑顔を見せる。

ミライもミチの笑顔に釣られて笑う。

僕はこの笑顔をごきまでも守り抜いてみせる。

初めての友達と胸張って言える存在なのだから……。

続きがどこまであるか分からないが、確実に明るくい広い道が続いている。

そんな道を若い男女は、想像を膨らませ、前へ前へと進んでいくのだった。

第一章 完

第99層 第一章 ホール・ダンジョン（後書き）

第一章 あとがき

このあとがきは、文章表現レベルが1/1000Lvの作者の書いた一章のです。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

100層と区切りが良いので、あとがきを最終回にさしていただきます。

始めましてオレンです。

いやー長いようで短かったですね。3ヶ月とちよつと。

もの凄く全体的に楽しんで書いてたのですが、まあ、文字数の見た通り、やる気はそれほどなわけで……。

まあ、続けられたので、個人的には良しとしましょう！

そんなわけで、第一章を書き終えたわけですが、個人的には、困ったらミライを動かせ！って感じになってます。

だいぶ柔軟にしましたので……。

あと、ヒロインにミチちゃんを導入して、あとはサブキャラがまとわり付くと。

あ、ユミル君は出した当初から、そのつもりでした。

何か悲しいですけど決まっていたので。

衝撃の99層で、死んだはずなのに登場させたところを見ると、生かしてやったって言うてもいいですかね。

……… だめですよ。

まあ、もう文章構成とかはさておき、話の流れはこんな感じですよ。

表のミライの動きがあり、裏の……と言う感じでしょうか。
結構、複線貼ったつもりですよ！

全くといって良いほど覚えてませんけど……。

まあ、今後のストーリー展開に期待しましょう。

と、言うことで、一章終了です。

一番最初から3ヶ月間も長々付き合ってくださいだった方も、40層を越えた所の文章が一般的になって読みやすくなった所から読み始めた方も、終盤に近づいてから読み始めた方も、今日から読んでくれた方も……。

読んでくださり、ほんとうにありがとうございます！

読む人や感想の声が無かったら、いつ投げ出してたか分かりませんからね。

二章目は、思いついたこと全部忘れずに書けたらなと思います。

一章は、実は投稿してから「書き入れ忘れたーな」なんてよく言っていましたからね。

明日から、また話は出発です。

私は、感想や、雑談掲示板が盛り上がってくれるのをきたししますかね。

そんなわけで、色々書きたいことはありますが、長々書いたら最高文字数を更新する可能性もあるので、今回はこの辺で。

では、次回第二章（タイトルは後から考える）を楽しみにしててください。

もう浮かんでいるし、自信があります！

それでは、また。

こちら（小説家になろう）のみ追記

貼り付けだけの作業でしたが、昔の自分を振り返れてよかった気がします。

突然、章数が出たのは、最後に「第ん章んんんん」と書くためです。

章のサブタイトルは、最後に更新みたいな感じで、みなさんにも章のサブタイトルを読んでいきながら考えればなーと思っています。2章に入るので、アホダ！の説明文も修正できたらなと思います。では、明日からこちらでのリアルタイムの活動になると思います。本当にぐだぐだになります。

今回はまとめて貼り付けたから良かったのですが、次回からは、文字数の長短に驚かれると思います。

ここまで読んでくださり、ありがとうございます！
次回をお楽しみに。

では、また。

現在経験地 51 L V 0 作者オレ

ン

第100層 レッツワープ！（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第100層 レッツワープ！

小石や砂利が敷き詰められた、幅の広い大きな道。

その周りを木々一つ無く、草丈の低い若緑色の大草原が取り囲む。弱い風でも靡く大草原は、緑の穏やかな大海原にも感じ取れる。

上下左右、人の居る気配など全くしない大草原を歩く2人の男女。

「結構歩いたけど、まだ着かないのかよー」

「結構歩いたけど、まだ着かないのかよー」

「きつともう少しよ。日が暮れるまでに着けばいいけど」

ミライに前向きな言葉をかける、両手武器使いミチ。

2人は突然の巡り合わせで仲間になった関係。

始まりは違っても、向かう目的は同じ仲。

「ほら、あれじゃない？」

そう言っつてミチは、進んでいる道の先を指差す。

そこには、空に向かって伸びる光が見えた。

その光の輝きは強く、塔が光を放ってるようにも見える。

いかにも、ワープゾーンが在りますよと主張しているようだ。

あの光の大きさなら、もつと前から見えてても良かったよつな気もするが……。

「ワープしたらどこに行くんだらう」

ミライは呟く。

「分からないけど、ネロさんが居る所ですよ。ほら、早く行こー！」

そう言っつてミチは、光の塔に向かって走り出す。

「ちょっと！待てよー」

元気なミチをミライは追いかけていく。

前で走るミチの濃い金色の長髪が揺れる。

風呂もまともに入っていないのに、どうしてあんなにさらさらしているのだろうか。

まあ、風呂に入っていないのに臭くない僕が思うことでもないのだが。

2人は一本の道を元気良く走っていく。
この先、どんな困難が待っているか分からないのはわかっている。
でも、ミチとやらやっていけそうな気がする。
だから、僕は支えていかなきゃいけない。
目の前を走る、元気な主人公のような彼女を。

「これ……だよ、きつと」

ミチは、目の前の光景を見ながら言った。

「たぶん、これしかないだろ。先に道無いし……」

2人の目の前に在るのは、光を放った謎の台座。

大きさは、10人ぐらい乗れる位の大きさだろうか。

目の前の台座の前に、ミチが疑問を言った。

「これってさ、乗るのよね。乗ったらどうなるんだろう……」

「最初のときみたいに、体が消えて移動するんじゃない？」

「服とか消えちゃったりして……」

緑のワンピースを手で少し伸ばしながらミチは言った。

「まさか無いだろ。たぶん……」

個人的には消えてくれても……。

まあ、体も消えるから、結果見えないわけ。

「とりあえず、乗るわよ」

そう言っつてミチは、ミライの左手を掴んだ。

握られたときに、少しドキツとしたのは気のせいって事にしてお
くじ。

ミチはミライを引つ張り、2人は輝く台座の上に立った。

「……何も起きないわね」

「うん、何も……」

2人は顔を合わせて、不思議そうな顔をした。

もうこのまま何も起きないので……と思った時だった。

どこからとも無く、懐かしい響きの声が聞こえてきた。

「あ、やっとな来た来た」

「ネロさん！？どこに……」

ミライは突然の声に驚く。

聞こえてきたのは、お姉さま的美声のネロの声だった。

「届けてるの声だけよ。まあ、とにかく、こっちに来てもらおうかしら」

「行くつてどうやって？」

ミチは、聞こえて来るネロの声に対して聞く。

「ちよつと、待っててね。今飛ばすから……」

「飛ばす！？」

ネロの声に、2人は声をあわせて返す。

「いくわよ。レッツワープ！」

ネロの声は、2人の声を完全に無視して言った。

「ちよつと待って、まだ心の準備が……」

ミライが言っている途中で、ワープ機能が発動された。

突然、足で地面を踏んでいる感覚が無くなった。

「え」

「は」

ミチとミライの、情けない驚きの声が響く。

足元には、今までの明るい光とは裏腹の、真っ暗な闇が広がった。

これは……落ちるな。

「きゃあああああああああああつ」

「うわあああああああああああああ」

ミチとミライは、突然現れた穴に吸い込まれるように落ちていく。

風圧で、ミチのワンピースが、大きく捲れ上がる。

ワンピースの上下は完全に一枚で繋がっていて、腰の方で何か止めていたわけでもないの、一瞬完全に捲れ上がった。

それを必死に、ミチは前の方を両手で押さえる。

僕の手を繋いだまま……。

ミチの体温が上昇しているのが、僕の手を伝って感じ取れる。

そして、僕も体の妙な火照りを感じる。

「ミチ！手を放せええええええええ」

ミライは風圧の中叫ぶ。

しかし、ミチは全く気づかず、スカートを押さえ続ける。

そして、そのまま足元から風圧を感じながら、2人は穴の闇の中を落ちていくのだった。

第101層 再びの入り口（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第101層 再びの入り口

闇の中を数分間、風を受けながら落ちて行った先には、当然のよう
に地面がある。

地面に落ちる寸前は、ミチの手のことも忘れて叫んでいた。

本当に落下で死ぬかと思ったからだ。

でも、何が起きたかは分からないが、地面への着地寸前で落下す
る体はぴたりと止まり、無事に着地できたのだ。

「ここは……」

ミライは着地後、少し時を置いてから呟いた。

周りに見えるのは、暗闇の中、大量に宙に浮くモニター画面のよ
うな物。

そして、長い黒髪で露出の目立つ服装をした宙に浮く人物。

そう、ここは間違いなく前にも来た事のある場所。

この世界の入り口の場所だろうか。

始めの頃の嫌な記憶がよみがえってくる……。

ミチは、ミライと繋いでいた手に気がつき、無言で握っていた手
を解いた。

ミチは顔を赤めらせて、少し気まずいムードになった。

そんな空気の中、高い場所からフワフワと浮きながらネロが下り
てきた。

「おかえりなさい」

ネロは2人を見下ろしながら言った。

「ネロさん。何で私たちはここに？」

ミチは宙に浮くネロを見上げながら言う。

「だから手紙にも書いてあったじゃない。一定条件を満たしたから
って」

「じゃあ、私たち元の世界に帰れるんですか？」

ネロの言葉を聞き、ミチは質問を投げかけた。

「ええ、いつでも帰れるわよ」

「ネロさん。それは、生きて、ですか」

生きて、の言葉の部分ははっきりと言って質問するミライ。

それを聞いた途端、ネロのどこかしら明るかった表情に曇りを見せた。

「鋭いわねえ……。そうねえ……。今のままじゃ、死んで帰ってもら
う事になるわね」

そう言ってネロは、ニヤリと笑みを浮かべるのだった。

第102層 100枚コイン（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第102層 100枚コイン

ネロの言葉を聞いて、2人の動きが瞬間的に止まった。

ミチはネルロスをずっと口を開けてみている。

「……じゃあ、一体どうしたら！」

ミチは一步前に出てから、少し強めに言った。

「そうねえ……とりあえず、進んでもらうしか無いわね」

ネロはそう言つと、地面の方までゆつくりと下りてくる。

「いつになったら出れるのよ……」

ミチは下を向き、独り言のように呟いた。

「あなたたちの頑張り次第。今はそれしか言えないわね」

そう言いながら、2人に近づいてくるネロ。

ネロはゆつくりと歩いて、ミチの前で立ち止まった。

こうして見ると、ネロの背の高さははっきりと分かる。

ミチの背の感じから見ると、僕よりも背は高いだろうか。

「そういえば、あなたが拾ってきたもので、脱出に役立つアイテ

ムがあったわね」

そうネロは、ミチに向けて言った。

その言葉に、ミチは顔を上げる。

「あなたが、勘で持ってきた、ロンギコロンの戦利品のコイン

よ」

ネロの言うロンギコロンとは、最後に戦った裏ボスのような者。

あいつには、嫌な思い出があるだけだが……。

隣となりに居るミチは、ネロの言葉を聞くや否いなやメニュー画面を開きだ

した。

そして、ミチは、手のひらに円状のコインのような物を2枚取り

出した。

どこかで見たとような気がする……。

「そうそう。それよ」

ネロは、そのコイン上のもを見て言った。

「これが脱出とどんな関係が？」

そうミチは聞く。

「説明するのは難しいけど、簡単に言えば、そのコインを100枚集めれば1つだけ願いが叶うわけよ」

「つまり、100枚集めて『この世界から生きて脱出したい』と言えればいいと」

ミライはネロに対して言う。

「そう言うこと」

そう言っつてネロは肯き、再び宙に浮き上がって行った。

そして、空中でぴたりと止まり、振り向いてこちらの方を見る。

どうやら、あの場所が、ネロの話す定位置のようだ。

「で、本題に進むわけだけど、2人は次のエリアに進んでもらうわ。でもその前に、少しだけ準備と説明が要るのよ。そのために、ここに呼んだわけ」

ネロは両腕を組みながら言った。

それにしても、ネロさんの服装、目のやり場の困る格好だな……。

そういえば、説明は前にも……。

ミライは前の出来事を思い出して口を開いた。

「質問は最後にするので、説明お願いします」

ミライは少し笑みを浮かべて言った。

「ふふ、覚えていたのね。ついでに復唱もしとく？」

「面倒くさいので遠慮しときます」

やる気なさそうに言っつて、ミライは笑った。

ふと、隣のミチを見ると、口を空けてネロを見ていた。

話に付いて来てないのではなく、話の空気に付いて来れてないよ
うだ。

「最初にネロさんに会ったときも、こんな感じだったんだよ」

ミライはミチに対して小声で言った。

「ふふ、まるで私の時とは別人だわね」

ミチはそう言って、ミライに笑顔を見せた。

「では、話すわよ。1回しか言わないから、ちゃんと聞いてね」
ネロの問いかけに、2人は肯くうなずのだった。

第103層 ルール（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第103層 ルール

「まず、準備だわね。次に進むときに持って行って良いアイテムは、食料品、装備、貴重品、金品、その他問わず、3個までね」
その言葉を聞いて、ミライは肯く。

ネロは、ミライの行動を見届けてから話を続ける。

「そして、次のエリアに移動するに当たってなんだけど。まず前回同様どこに飛ばされるか分からないから。あと、あなた達PT組んでるみたいだから先に言っておくけど、飛ばすのは組ごとでなく、個人個人だから最初は1人スタートよ。分かった？」

ミチとミライは同時に肯く。

「あと、ミライ。前エリアでは目を瞑っておいたけど、今回はそういった行動を慎むように」
そう言っつて、ネロは笑う。

ミライは苦笑いを浮かべながら肯く。

隣を見ると、ミチは微かに笑っていた。

「この程度かしらね。では、質問タイム。何なりとどうぞ」
ネロはそう笑顔で言っつて、2人の質問を定位置で待つのだった。

第104層 道具片手に一旦お別れ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第104層 道具片手に一旦お別れ

「持ち物3個って、1種類の所持数マックスで3種類でも良いんですか？」

ミチはネロの方を見上げながら言った。

「それはダメよ。3個と言ったら3個。同種類を複数持つていくんだったら、同じ物を3個が限界よ。水だったら3本、食料でも3個のみよ。大きさは問わないけど」

「それだったら、コイン100枚なんて無理なんじゃ……」

ミライがネロに言葉を投げかける。

「それは大丈夫。持つて行かないその他の物はこちらで預かるわ。

あ、そうそう、今回から汚かったり壊ている物をしまっても、再生出来ない様にしておいたから増殖は無理よ。いい？」

ネロは不適な笑みを浮かべながら言った。

それを聞いて、ミチとミライは顔を合わせて苦笑いを浮かべる。

全部筒抜けでばれてる……。

「あ、それと、資金は繰越じゃないから。また0から集めなおしだからね」

ネロは大事な追加情報を淡々（たんたん）と言う。

「モンスターから金出るようにしてください」

「だめよ、バイトでもして稼ぎなさい」

ミライの頼みは、簡単に流された。

「じゃあ、あのコインの取得方法は？」

ミチは質問を再び投げかける。

「一定条件を満たした強クラスのモンスターを倒したときか、あとは、特殊な依頼やイベントをこなすのね。その他、良い行いおこなでもすれば、私からのご褒美ほうびとしてあげなくもないわ」

ネロは言いなれた感じで、スラスラと言った。

ネロの言葉に、ミチは大きく肯うなずく。

少し間が空いてから、再びネロが2人に聞き返した。

「もう質問は無いかしら？」

「無いです」

ミチは元気よく笑顔で答えた。

ネロの目線がミライの方に向けられ、ミライは大きく肯く。

「それじゃあ、いい頃合だし、早速ワープ作業に移るわね。ほら2人も中央に立って」

そうネロに言われて、ミチとミライは、前にもワープする前に立った場所まで歩く。

「じゃあ、持つて行く道具選んでちょうだい。メニュー画面から取り出すだけで良いわ。いらぬ物はメニューに預けておいてね」

ネロは、ネロ用の大きな電子画面のようなメニュー画面を出してから言った。

「双剣は2組で1つですよ」

ミチが叫ぶように言った。

「うーん……まあ、良いわよ」

ネロは少しだけ考えてから言った。

「じゃあ私はこれで」

ミチは、そう言ってメニュー画面から道具を取り出した。

出てきたのは、双剣、大量に水の入った袋のような水入れ、そして大きく平らな砥石だった。

ミチが朝早くに剣を研いでいるのは知っていたが、まさかこんな大きな石を使っているとは……。

「じゃあ、僕は……」

ミライは呟きながら選び、悩んで選んだ3品を取り出した。

取り出したのは、ミチと同じ水、箒、そして中華鍋だった。

「何で、それ？」

ミチは中華なべを指差しながら苦笑いを浮かべて言った。

「これが一番万能だから。扱いやすいし」

「ぶーん」

ミライの答えに、ミチは笑みを浮かべて、軽く言葉を返した。

「じゃあ、その他は私が預かるわよ」

そう言っつてネロは、画面を操作する。

すると、ミライの開いていたメニュー画面のアイテム覧らんから、全てのアイテム名が消え去った。

それを見て、ミチは少し驚いた表情を見せる。

「それじゃ、早速だけど飛ばすわよ。早く道具しまいなさい」

ネロはそう言っつと、だいぶ高い場所まで上昇じゆうしやうしていく。

ミチとミライは、落ち着いて道具をメニュー画面内に収める。

「準備良いわね。それでは飛びまーす」

ネロはだいぶ遠いところから叫んだ。

ネロの言葉と同時に、懐なつかしい騒音ひびのような機械音が鳴り響く。

しばらくすると、2人の体が透すけ始める。

「一旦お別れね。ミライ、またどこかで会いましょう」

「ああ。どこか町か何かで」

ミチとミライは軽く言葉を交わし、お互いにニツと笑みを浮かべる。

だいぶお互いの姿が薄くなってきた……。

「それじゃ、行っつてらっつ……」

ミライはネロの言葉を最後まで聞く事無く、転送されるのだった。

第105層 次エリア（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第105層 次エリア

「この空間も懐かしいな……」

ミライは、辺り一面真っ暗闇の中、呟いた。

ここは、転送空間とでも言うのだろうか。

自分の姿すら確認できないくらい真っ暗だ。

体は自由に動かせないが、何かしら前に進んでる気がする。

そんな変な空間も2回目となると、さすがに慣れが出てきて全然
平常心で居られる。

それにしても、いつも隣に居た存在が居なくなると、何だか寂しく感じてしまう。

やっぱりミチは存在感が大きかったからな……。

そんなこんな暗闇の中で色々考えていると、やっと出口の光が見え始めた。

やっぱり、出口の光が現れてからの方が緊張する。

ワープした瞬間から即死、見たいなことが起こらないことも無いのだ。

ミライは光がだいぶ大きく見えてきてから、胸に手を当て、大きく深呼吸をする。

そして、小さな願いを一言呟いた。

「どうか、安全な場所にワープしますように……」

ミライは出口の光の眩しさに目を瞑りながらも、暗闇の転送空間を脱出するのだった。

さあ、次の世界はどんな景色だ。

目の前に広がるのは、大空、真っ青な空、そして眩しい太陽。

そして……また、地面に立っている感覚が無い。

「って、またかあああああああああああ」

ミライは叫びながら、地面に向かって落ちていく。

落ちるのが急すぎて、体を地面の方に向けることが出来ない。

「ぐはっ」

ミライは背中から落ちて、地面に叩きつけられた。

「いてててて、って熱っ！」

そう叫ぶと、ミライはその場で飛び上がった。

立ち上がり、地面に目を向けると、そこに広がっていたのは、さらさらした砂だった。

ミライは自分の手のひらにも目を向ける。

手にも細かい砂が付着している。

手の砂を掃いながら、ミライは顔をゆっくりと上げて、辺り一面を見渡した。

広がるのは、一面の砂と空。

その境界線までがハッキリと見て分かる。

……ただその他は何も見えない。

どうやら、今回のステージは大砂漠のようだ。

第106層 PT文通（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

大砂漠の中、ミライは1人立ち尽くしていた。

1歩前に進もうにも、目的となる道や物や町が見当たらないのだ。

「どこ進もうかなー」

ミライは呟きながら、前後左右、ぐるりと見渡した。

見渡したところで、広がるのは、ほぼ同じ景色なわけで……。

そして、どの方向から自分がぐるりと見渡し始めたのか分からない始末。

「うーん」

ミライは声に出して悩むほど追い詰められていた。

下手に前に進めば、あの奥に見える骨のようになってしまっ……。

「よし、決めた」

そうミライは叫んで、前へと進みだした。

目的地は、少し奥の屍まで。

ミライは、歩く足の1歩1歩が砂に埋もれていきながらも、確実に前へ前へと進んでいった。

歩いている途中で、着ているパーカーのフードを被ることにした。

強い日差しが痛く感じたからだ。

「あつい……そして、あの骨どれだけ遠いんだよ!」

暑さに怒りを覚えつつ、言葉を吐き捨てるミライ。

少し奥のほうで見えたはずの骨の大きさは、いまだに小さいまま。

まるで全然進んでないようだ。

フードを被っているの、汗の量が尋常じゃない。

汗を流すのに伴い、手元の水分も減っていく。

手元にあった水を入れてた布袋も、もうだいたい軽くなった。

ミライは、どんどん重くなっていく足取りの中、何となく箒でも取り出そうと、メニュー画面を開いた。

そして、メニューに異変を感じて、足の動きを完全に止めた。
「なんだ？」

ミライが見つめるのは、上の大きな区切りの枠の、左からアイテム、術技じゆつぎ、の次の場所にあるPTと言う枠わくだ。

そのPTと言う枠が、少し周りの色と違う色で光っていたのだ。

ミライは久しぶりにPTの画面を押した。

「うわっ……なんだ!？」

ミライはPT画面を開いてすぐに驚いたおどろ。

何故なぜかミチのPT登録がされたままである。

登録したら、解除するまで残り続ける設定なのだろうか。

ただ、その事に驚いたのではない。

驚いたのは、その下の見たことも無い機能。

簡単に言うと、PT内のやり取りが出来るメール機能と言った所だろうか。

そこにミライ宛あてのメールが来ていたのだ。

9件もの数が……。

そして、PTはミチしかないわけで……。

ミライはメールを1件1件開けて、読んでいった。

「ねえこんな機能あるんだけど知ってた？」

「私は砂漠に居るみたい。近くに変な町が見えるわ。」

「ねえ、返事返してよ!てか、早く気づきなさいよ!」

「生きてる?」

「ねえ、生きてる?」

「まさか、死んだりなんかしてないよね?」

「死んでたら、ミライの名前見えないはずだもんね……」

「私、町の前に着いたんだけど、何か怖くて入れないわ。」

「町の中で待機してます。早く返事返してください。心配です。」

ミライは、ミチの文をすべて読み、大きいため息をついた。

よかった。

ミチは無事に生きているみたいだ……。

ミライは、ミチに返す言葉を腕を組みながら考える。

そして、考えを絞しぼつてから、PT枠の一番下にある「メールを送る」ボタンを押した。

「うわっ！」

ミライは再び大声を出して驚いた。

ボタンを押した瞬間に出てきたのは、メニュー画面の底に、垂直すいじちよくに広がる画面だった。

画面にはパソコンのキーボードのように、英数字と、かな文字などが敷しき詰められていた。

驚いたのは、そのキーボード画面の異い様な大きさだった。

この画面の適度な大きさ作るのにも、慣なれが必要になるのか……。そうミライは考えながらも、ミチへの文をローマ字打ちで書いていく。

「心配どうも。そんな事より、暇ひまそうだな。っと」

ミライは自分の打った文字を読み直してから、送信ボタンを押した。返事の送られたミチの表情を想像すると、少し笑みが浮かんでしままう。

ミチの返事を楽しみにしつつ、ミライは少し軽くなった足を動かし、まだ遠くの方に見える屍を指して歩くのだった。

第107層 氷と水（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第107層 氷と水

「や、やっと着いたー」
ミライは目標としていた屍しかばねの前で叫んだ。

それにしても、この屍、もの凄い大きさである。

前のエリアの世界のモンスターたちの大きさが可愛く見えてくる大きさだ。

完全に肉らしい肉が無くなり、真っ白な骨だけになった屍。

ただ、その骨の形は変わっているというか、手足のような骨が見当たらない。

地と言うより、水で見られるような骨の形に見える。

砂の中でも泳いでいたのだろうか……。

ミライは、そんなことを思いながら苦笑いを浮かべる。

そして、その大きな屍の周りをぐるりと一周して辺りを見渡した。
「うん。何にも見当たらない……」

ミライはため息をつき、屍で出来た影の中に入り、座り込んだ。

水袋を手にとって飲もうとするも、もう1滴たりとも水は出てこない。

ここに向かう途中で完全に空からになってしまったのだ。

その時のシヨックは発狂物はっきょうものだった……。

今は立ち直ったが……。

ミライはあまりの暑さで、その場で横になった。

寝転んでいると、汗が全身に伝っているのが嫌でも感じ取れる。

ミライは寝転びながら、これからどうしようか考える。

「あーーーーー……ああっ!？」

ミライの弱りきった声に、突然活力が戻った瞬間だった。

ミライは突然その場で立ち上がった。

「バリア!」

ミライは少し大きめのバリアを地面に作り出した。

よし、魔法は使えるみたいだ。

そのバリアの上にミライは飛び込んで行き、うつ伏せに寝転んだ。
「あー冷たいー」

ミライは幸せそうに小声で言った。

ミライが考え出して閃いたのは、このバリアの存在だった。

これの元のイメージ素材は、氷だ。

冷たくないわけがないのだ。

「でも、やっぱり溶けはしないかー」

ミライはバリアの上で呟いた。

溶けてくれれば、水不足の心配がなくなったのに……。

「はあー。魔法で水でも出せればなー」

そう呟きながら、ミライはその場で回転し、仰向けになる。

水を出すイメージ。

水鉄砲のように、勢いの良い感じ。

ミライは色々想像を膨らませて、右手を天にかざした。

指を大きく広げて、目を細めてから再び目を大きく見開いた。

その瞬間だった。

かざした手の少し先の空間から、勢い良く天に向かって水が発射された。

その光景は、太く巨大な水柱が、地面から湧き上がったようだった。

「うそだろー！」

そうミライは叫んで、バリアから飛び上がり、バリアから全力で離れた。

水柱は、天高くで勢いをなくし、再び地面の方に戻ってきた。

やはり、どんな魔法も重力は絶対なのだ。

「うぐあ……」

バリアからの水攻撃が、ミライを襲った。

完全に水の動きを読みきってかわしたと思った水柱は、地面に敷いてあったバリアのせいで全体攻撃のように、辺り一面に水が飛び

跳ねたのだ。

「ははは……まさか出るとはね……それにしても、びしょ濡れだ……」

ミライは濡れた服を手で伸ばしながら言った。

そして、びしょびしょなミライは、しばらくその場で呆然と立ち
尽くすのだった。

第108層 復活と人影（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第108層 復活と人影

「ぶはー！生き返ったー！」

ミライの生き返りの声が、高らかと上げられた。

偶然にも出せた水魔法は、臭さも不味さも何にも無い、美味しい水だった。

この状況なら、不味くても飲んだことに変わりは無いだろうが。

水の温度も、この暑さのせいも冷たく感じる。

ただ、この魔法発動に試行錯誤はしたが、水の温度と、強力な水圧は変えられないらしい。

だから、水を酌むのにも一苦労だった。

水魔法を天に向かって飛ばして水袋にしまう。

なんて出来るはずもなかった。

水といっても魔法攻撃な訳で、自分に触れてもダメージが来るのだ。

当然、天から降ってくる水をすくいに行くなんて、自殺行為なのだ。

なので、バリアを水槽型に組み立てて、その中に水を溜め込む作戦で、今に至るのだ。

バリアは水を跳ね返すので、相当な数の魔法を打った訳だが……。「さて、次はどこに進もうかな……」

疲労を回復させたミライは呟き、目印は無いかと辺りを少し見渡した。

見渡し始めて160度辺りで、ミライは動きを止めて、目を凝らした。

そこに見えたのは、2人の人影の姿のようだった。

いや、間違いなく人影だ！

「おーい！」

ミライは、両手を大きく振りながら、人影に向かって大きく叫んだ。

第109層 光魔法剣士ちゃん再び（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第109層 光魔法剣士ちゃん再び

こちらの存在に気がついたのか、2人の人影もこちらに手を振り返してきた。

これで助かった……。

そうミライが、ほっと胸をなでおろしていたときだった。

2つの人影のうち、一つの影が足を止めた。

そして、何故かその影は、こちら側ではない別方向に向かって歩いて行った。

その影をもう一つの影が引つ張って止める。

なんだか不思議な光景だった。

だが、その不思議な光景の理由も、すぐに分かることとなった。

「あ」

ミライは2人の影が、大きくはつきりと見え始めたところで、思わず言葉が出た。

背の高く見える1人は分からないが、背の低いもう1人はハッキリと見た覚えがある。

というより、戦った覚えがある。

青髪のロングのツインテール。

まさしく光魔法剣士のセーナの姿だった。

あの感じからして、前の戦闘で完全に嫌われてしまったようだ。

ミライは軽いため息をつき、2人に手を振るのをやめて、ただ2人がこちらに来るのを待った。

2人の姿がはつきりと見え始めたあたりから、2人の足取りの速さが遅くなっていくのが見て分かる。

足取りを遅くしているのが、セーナだというのも見てすぐ分かる。

どれだけ嫌われてるんだよ……僕。

そうこうしている間に、2人の姿は大きくなり、ようやくミライの元へ2人がたどり着いた。

着いてから、セーナはまるで目を合わせてくれない。

ミライは、もう1人の女性と共にセーナの姿を見て、顔を見合わせる。顔を浮かべる。

僕は完全に苦笑いだったが……。

しばらくの間、3人の間に会話が出来ることは無かった。

第110層 案内人ナトレ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第110層 案内人ナトレ

だいぶ間が空いた後、最初に間を断ち切ったのはミライだった。

「あのー、手を振って呼び止めたのは、町がどの方角にあるか聞きたかったわけなんですけど……」

ミライは言葉を詰まらせ、セーナの方を見る。

こちらの視線に気づいたセーナは、目を細めて、にーっと歯を見せて威嚇のような姿勢を見せてくる。

あの口から、「ガルルルルル……」と言葉が漏れてきそつた。

そして、再び視線をミライから逸らしてきた。

その行動に、ミライは再び苦笑い。

「近くの町はあっちの方角なんだけども、それよりも君、この辺で間欠泉を見なかったかしら？」

少し低めの声で、女性はミライに聞き返した。

「あ、たぶんそれは……」

そう言っつてミライは、右手を空に向かって真っ直ぐ伸ばすと、空中に向かって水魔法を発動した。

イメージ通りの水柱が、上空に向かって飛んでいく。

その光景を女性は見て呟いた。

「なるほどね。遠くで見えたのは、その水魔法だったのね……」

「飲めるんで、いくらでも持っていつてください」

「あれをすくうというの？」

女性は笑みを浮かべて、上空を見ながら言った。

「いや、あれを……」

ミライが上空を見上げて話し出したときだった。

上空から戻ってきた水がミライを襲った。

「おっ……ぐ、ゲホッゲホッ……」

ミライは下を向き、水を吐き出し、むせた。

水が入って、鼻の奥が痛い。

「大丈夫？直撃ちよくげきだったようだけど」
心配そうに女性が見つめる。

「大丈夫です……当たるの二度目なんで……」
直撃は初めてだったけど……。

ミライの言葉を聞いて、女性は「ふふ」と笑う。

セーナからも少し声が聞こえた気がする。

少し間が空いてから、女性は笑顔を戻し、話し始めた。

「私の名前はナトレ。町まで案内あんないする代わりに、水を分けてほしい」
「魔力の尽つきない限り、いくらでもあげますよ。魔法使いのミライです。」

笑みを浮かべながらミライは言った。

「ミライ。私も敬語けいごを使わないから、君も使わないで」

「分かった」

ミライの即答そくとうに、ナトレは笑みを見せる。

前にもこんな考えの人が居たから、敬語を使わないのも慣なれた。

「ここに日陰ひかげもあるし、ここでしばらく休憩きゅうけいね、セーナ。2人の関係もゆっくり話してほしいし……」

そう言っつて、ナトレは微笑ほほえむ。

その微笑みに、ミライとセーナは苦笑いを浮かべるのだった。

第111層 きっかけ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第111層 きっかけ

「……で、それ以来会ってなかったという」

大事な部分ばかりを抜いたミライの話は、ようやく話し終わった。

気がつけば、セーナとは全く関係ない、ミチたちの話もしていた。

「ふーん。まあ大まかなのは置いといて、何で私を見ないで話すの？」

全てお見通しのナトレは、笑みを浮かべながら言った。

……この人に、ごまかしは効かないようだ。

そして、目線を少しナトレから逸らしていたのもお見通しのよう
で……。

「はははは……」

ミライは下手な笑いを浮かべることしか出来なかった。

ナトレを見ないで話し出したのは、話し始めてすぐのことだった。

原因はナトレ服装。

露出率の高いの服装。

金髪の波のような髪の毛の頭に、バンドナのような布が巻きつけられ
ている。

別にそれは全く問題ないのだが、その頭の布と同じみたいなのを、
胸にグルグルと巻きつけたただけなのはやめてほしい……。

胸の谷間が若干だが上から見せてるし、下乳も見方によっては見
える。

少し考えれば、形と大きさが何となく想像できてしまう……。

そして、無防備なのは下半身もそうだ。

座ってて分かりにくいのが、たぶん腰元で縛り付けた、片足見せの口
ングの1枚布のスカートだろう。

ただその格好で、胡坐をしないでほしい……。

ピンクい物が、ちらりで見えてますよ……。

そんなナトレの格好を見ることは出来ず、話の途中でセーナに目

線を向けたが、それも一瞬いっしゅんだけだった。

正直、ここで会ったときから警戒けいかいはしていたわけだが、やっぱり見えてしまったわけ……。…。

セーナの格好かっこうは、青髪あおがみツインテールは置いといて、上下で白のTシャツ一枚だけ。

Tシャツの大きさは、セーナに合ったサイズの数倍大きいサイズだろう。

見るからにぶかぶかである。

その大きさのせいも、Tシャツは下まで隠かくしていたが、それでもミニスカート程度だ。

それで女座りなんかされたら、股元またもとから緑と薄緑うすみどりの縞々しましま（しましま）が見えないはずがない。

我われながら、あの時鼻血を出さなかったのは良くやったと思う。

「私、思ったんだけど。セーナがミライを嫌う理由が、その戦いにあるなら、もう一度戦えば？」

突然のナトレは提案ていあんだった。

「え、それは」

「戦うわ！」

「えっええー」

ミライが否定しようと話し出したら、セーナがその場で立ち上がり、ナトレの意見に乗り出した。

「私が勝つたら、あの時の事を謝あやまりなさい」

セーナが始めてミライと目を合わせて言った言葉だった。

そのセーナの本気の目に、ミライは苦笑いを浮かべる。

そしてセーナに向かって一言。

「あの時はすまなかった」

「それじゃダメなのよ！勝負しなくちゃ。もしあなたが勝つたら…

…なんでも言うこと聞くわよ！」

セーナの言葉を聞くと、ただ戦いたいだけにも思える。

「ほら女の子がここまで言ってるんだから勝負してあげなさいよ」

ライ」

そして、ナトレの言葉を聞く限りでは、彼女は戦いを見ただけなのかも。

提案者だし……。

でもこの戦いで、死ぬ可能性もある。

出来る限りしたくないが、今回は避けられないようだ。

ミライは腹をくくって立ち上がり、答えを返した。

「分かった。で、もし勝ったら何でも僕の言うこと聞くんだな？」

「な、何でも良いわよ。先に言いなさい」

セーナの言葉に、ミライは少し考えてから口を開いた。

「じゃあ、僕を避けるのをやめてくれ。あと、あと……下をはいて行動してくれ」

ミライの2つ目の主張の声が少し小さくなる。

「なっ……1つにしなさいよ！」

「じゃあ、戦いの後どちらか選ぶで」

「……分かったわ」

2人の勝利特典が出揃った。

2人の会話をニコニコしながら見ていたナトレが立ち上がり、話し出した。

「面白いものが見れそうね。2人に死んでもらっても困るから、勝敗は私がつけるわよ。いい？」

ナトレの言葉に2人は肯く。

「では2人とも距離を空けて、武器を構えて」

ナトレの指示に、2人は動く。

ミライとセーナの距離、その幅だいたい20m。

ミライはあの時の箒を右手に持つ。

「あら？今回は武器持つてるようね」

セーナが遠い場所から大声で言う。

そして、セーナは折れ曲がった傘を装備。

「そっちは全く変わってないようで」

「コレが一番ステータス上がるのよ」

ミライの言葉にセーナは即答する。

「それじゃ2人とも良いわね。では、始め！」

ナトレの大きな掛け声で、2人の戦闘が始まるのだった。

第112層 光の物理（前書き）

この作品は、文章表現レベルが1/10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第112層 光の物理

「アペンシス！」

「ライト・ファースト！」

戦闘開始の言葉と同時に、2人の術名が交差した。

セーナのレベルは……1!?

ステータスの高いレベル1だな……。

「私はこのエリアに着てからモンスターと戦ってないから、もちろんレベルは上がってないわよ？」

全てお見通しのセーナは言った。

あれ、もしかしてエリアごとにレベルリセット？

ネロさん、全く聞いてないんですけど……。

「いくわよ！ライトビーム」

「バリア！」

咄嗟にミライは、セーナの強力なビームを跳ね返そうとバリアを作ろうとした。

しかし、相手のビームの方が、バリアの完成よりも早く、ミライに直撃した。

「ぐばっ……」

ミライは吹き飛ばされた。

以前に比べて、格段に速くなってるだ……。

ミライは箒を立てにして、その場で立ち上がる。

ビームの当たった左肩は、服が完全に破けて、軽い火傷のような感じになっている。

「バリア！バリアバリアバリアバリア！」

ミライは前回同様、バリアで前後左右と上を完全に取り囲んだ。

「また、ひきこもる気？」

セーナは笑みを浮かべながら言う。

「これで君の攻撃は通用しない」

「私がその弱点を知ってたとしたら？」

その言葉の後、セーナの笑みが、真剣な顔つきへと変貌した。

「ライト・ステイック！」

そうセーナが術名を叫んだ瞬間、セーナの目の前に光の棒の様な物が現れた。

なんだろう。

圧縮された光にしか見えない……。

「いけー！」

セーナは右手に持つ折れ曲がった傘をミライに向けた。

すると、セーナのすぐ側に出来た光の棒が、こちらに向かって飛んできた。

バリアに光の棒はぶつかり、光の棒は粉々になった。

その光景を見て、ミライは余裕の笑み……を見せる余裕もなかった。

ミライの前方を守っていたバリアに、セーナの攻撃が当たった場所を中心にして大きくひびが入っていた。

ミライのバリアの弱点。

それは、強力な物理的攻撃。

様々な戦闘で分かった弱点だが、セーナにもばれていたとは……。

……これはまずいな。

「フリーズ・スプリンター！」

そうミライが声を張っていうと、ミライを取り囲んでいたバリアは全て破片へと変化した。

ミライは一回全ての破片を上空に上げてから、セーナの元へと飛ばした。

バリアの破片は、横殴りの雨のようにセーナを襲った。

「くっ……やるわね」

セーナの着ているTシャツは、引き裂かれたり、穴が開いたりしている。

「フゲネス・フレーム」

ミライは、小さな火の玉を数十個作り、セーナに向かって満遍なく飛ばした。

「炎技は相変わらず怖いわね」

セーナはそう言いながらも、小さな体を生かして、スルスルと火の玉全弾をかわしてみせた。

「ライト・ステイク！」

セーナの声と共に、今度はミライの上空周りに、十数本の光の棒が出来上がった。

ミライは色々対応を考えるが、何も浮かばない。

不味い、やられる……。

セーナはニヤリと笑みを浮かべながら大きく一言。

「これで終わりよ！」

その言葉の後に、上空でミライを取り囲む光の棒はミライに向かって落ち始めた。

「ぬおおおおお」

ミライは叫びながら、必死にセーナの方に向かって走った。

2、3発はかわせるが、全部は……。

走ってる途中で、勝ち誇っているセーナと一瞬だけ目があった。

その目が合つてすぐの事だった。

光の棒が地面に強く落ちていく音が辺りに響く。

「え」

「え……」

セーナとミライの戸惑いの声が、ほぼ同時に重なった。

気がつけば、セーナとの距離が10cmにも満たない距離だったのだ。

セーナの驚きの表情がすぐ目の前で見える。

セーナの下から覗く綺麗な目をミライはじっと見つめる。

一瞬の間に、ミライとセーナが近づいた。

と言うより、ミライがセーナに近づいたのだった。

第113層 向かう姿勢（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第113層 向かう姿勢

しばらくしてから、セーナの驚きの表情は変化した。それは、嫌いなものを見つめる鋭い目つきをしていた。

そのセーナの表情の変化をみてすぐだった。

セーナの鋭い拳が、ミライのみぞおち目掛けて放たれた。

辺り一面に「パキッ」と何か折れた音が響き渡り、ミライは再び大きく飛ばされた。

その音には、座って見ていたナトレも立ち上がる。

「いててて……」

ミライはそう呟きながら、その場で立ち上がった。

そして、真つ二つに折れた箒を左右にぽいっと投げ捨てた。

とつさに箒を盾にして良かった……。

それにしても……。

「ねえミライ。何を使ったのよ!」

セーナは怒ったような表情でミライに問いかけた。

そう、一体僕は何をしたら、ああなったんだらうか……。

ミライはセーナの問いを無視して、セーナに右手をかざした。

「今度は何をするのよ!」

そう言つて、セーナは折れ曲がった傘を両手に身構える。

ミライは5m位先のセーナと視線を合わせて考える。

一体どんなイメージだったんだ。

逃げる……。

かわす……。

当たる……。

向かう……。

ミライが、セーナに向かっっていく事をイメージした瞬間だった。

ミライは再びセーナの前に現れた。

「きゅっ」

セーナの驚きの声が上がった。

なるほど、発動は向かう姿勢か。

そうミライが、自分の魔法を理解したときだった。

セーナから再び、強力な拳が放たれた。

第113層 向かう姿勢（後書き）

皆さんの応援などもありまして、今回で無事にレベルアップしました！

今のところ 文章評価平均3 ストーリー平均評価4 です。（目標5：5）

こんな感じでレベルアップごとに後書きを書けたらなと思います。

総合評価100pt上昇でレベル1アップです。

これからも作品完成までお付き合いのほど、よろしくおねがいします！

オレン

第114層 戦闘不可能（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第114層 戦闘不可能

ミライはセーナの拳を反射的に両手で防いだ。防いだ、セーナの力だけで宙に飛ばされる。

「つあつ」

ミライは空中で綺麗に1回転して、地面に2足で着地した。

そして、すぐに殴られた手を開いて見つめる。

ミライの右手小指が曲がってはいけない方向に曲がっていた。

それが分かった瞬間、ミライはすごい痛みおそに襲われた。

でも今まで受けてきた痛みを考えたら、叫ぶほどでもないが……。

ミライは右手を少し後ろに隠して、セーナの方を見つめる。

全く効いてないと、軽い笑みを浮かべながら。

「そんな薄笑い浮かべても何とも思わないわよ」

「それはどうかな？ ウォーター・プレス」

そうミライは言くと、セーナに向かってあの水魔法を放った。

「ライト……きやつ」

セーナが魔法を発動する前に、セーナは水の中に飲まれた。

数秒後、水の勢いは治まり、セーナの立ち姿が見えてきた。

セーナの引きずった足跡の距離が、水魔法の威力いりよくの強さを示している。

「う……ゲホツゲホツ」

セーナは下を向いて咽た後、顔を上げてミライの方を見て一言。

「や、やるじゃない」

ただ、言われた側のミライは、セーナを直視していなかった。

見たら、どこかしらの監視人ネロさんに殺される……。

「セーナ、その格好じゃ戦闘不可能じゃ

ないの？」

この戦闘の観客かんきやくのナトレが言った。

戦闘不可能……。

ミライはその言葉を聴いた瞬間、頭に一つの考えが浮かんだ。
戦闘不能は無理でも、戦闘不可能なら出来るかもしれない。

ミライは視線をセーナの方に向ける。

右手に薄く鋭いバリアを持って。

「ふん、別に下着ぐらい見えたって良いわよ！」

セーナはナトレの方を向いて言った。

そう、セーナの姿は、水に濡れてTシャツが透けている状態。

上下が緑で統一なのが見え見えなわけで……。

セーナは視線をナトレかミライの方向に向けた。

その瞬間だった。

ミライは再びセーナの元へ瞬間移動した。

そして、急なミライ行動に驚くセーナの顔下の顎元に左手を添えて、無理やりセーナの視線をミライの方に向けさせた。

「あの時は、本当にごめん……。もう許してくれないか……」

そうミライは感情的に言いながら、右手に持つ鋭いナイフのようなバリアをそつと動かす。

セーナの紐パンの紐を目掛けて……。

「え、えっ……」

セーナは言葉を詰まらせ、頬が少し赤く染まる。

正直、セーナがこんな表情をするのはミライにとっては計算外だった。

普通に殴られるかと思った……。

そして気づかれることなく、結び目切断に成功した。

ミライは、セーナから左手を離し、ナトレの方に向かって歩いていく。

「ナトレ。僕の勝ちで良いよね」

「ちよつと、何言ってるのよ！」

ミライの突然の言葉に、セーナは反論する。

「おそらく、セーナの負けよね」

「なによ、その言い方！」

セーナは声を張り上げて言う。

セーナはまだ現状に気がついてないようだ。

「セーナ。その格好で、まだ戦う気？」

前方のナトレは苦笑いを浮かべながら言った。

その苦笑いを見て、ミライはセーナの姿を見る事無く苦笑いを浮かべる。

見てしまつたら、それこそ死に繋がってしまうから……。

セーナは腕から順に、見つめ始める。

そして、足元に落ちている物に気がつく。

「キヤーーーーー」

セーナの悲鳴の音が、あたり一面に響くのだった。

第115層 日陰と日向（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第115層 日陰と日向

「……絶対に見ないでよね！」

このセーナの言葉から、数分たった。

今ミライたちは、例の巨大骨の所で服が乾くまで休憩していた。

女組みは日陰で、僕は日向ひなたに居る状態だ。

ミライは上半身裸で、大きな骨を背もたれにして座っている。

少し奥の骨先で、自分の服を干していて、フード先から雫しずくがポタポタ垂たれている。

そして、ミライの服を干している隣となりの骨では、セーナの着ているものの全てが干されている。

それを干しに来たナトレの表情は、嫌がらせをする悪魔のような笑みだった。

後ろを見れば全裸ぜんらのセーナが居るが、覗のぞくという自殺行為は絶対にしないつもりだ。

もしも、メニュー画面にアイテム戻したら復元するシステムが残っていたら、今、どんなに気が楽だっただろうか。

それにしても、まだ背中の方から鼻水をすすする音が聞こえてくる。数分前、勝負に決着が着いてからすぐ、セーナは大声で泣いていた。

それが敗北からののか、恥ずかしさからなのかは分からないが、ミライはその状況を背中で感じることにしか出来なかった。

時間を置いて、また謝らないとな……。

ミライは背中では聞こえる声を聞いて待機していたら、背中の方からミライに向かって声が投げられた。

「それにしても、まさかミライがあんな終わらせ方するとはね」

それはナトレの声だった。

少し遠めからの大きな声だ。

「実力じゃ勝てそうに無いと判断したからですよ」

ミライも少し声を大きめにして言葉を返した。

「頭使うわね。あと、敬語禁止ねー」

「了解ー」

ナトレの語尾と同じようなトーンで言葉を返した。

第116層 鍛えの職人（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第116層 鍛えの職人

「それにしても、私の鍛えたセーナが負けてしまうなんてねー」
ナトレは残念そうに言葉を口にした。

「どおりで強かった訳だ。ってナトレが!？」

「1日であの強さよ。成長したでしょ？」

「たしかに……」

確かに、比べ物にならないぐらい、前より強くなっていた。

一体どんな鍛え方をしたら、あんなに……。

「ミライも私が鍛えてあげようかしら？」

「遠慮しときます……」

ナトレの誘い口調が怖かったので、とりあえずミライは断った。

「そう。残念ね……いつでも待ってるわよ」

「ナトレ、そろそろあれ持ってきてよ」

ナトレが待ってるといった後、少し明るめのセーナの声が聞こえてきた。

「そうね。もう乾いてる頃かしらね」

ミライはナトレの言葉を聞いて、自分の服の乾き具合を見た。

もう服から雫は垂れておらず、若干フワフワとしていた布は、ゴアゴアになっているように見える。

ミライは、服を取りに行こうと立ち上がる。

その立ち上がったミライをナトレが横切った。

そして、セーナの乾いた服を持って満足げに言った。

「うん！十分乾いてるわね。ミライはどう思う？」

そう言ってナトレは、セーナの下着をミライに見せ付ける。

「止めてください。敬語で話しますよ？」

ナトレの行動に目を逸らしながら、ミライは言った。

「そう来るか……」

楽しそうにナトレは言って、セーナの元に乾いた服を持っていく。

ナトレが通り過ぎたのを見計らって、ミライも自分の服を取りに行った。

見た目どおり、服は砂で少しザラザラしていた。

ミライは服を持って、あの場へ戻ろうとした。

「こつち見んなバカ！」

「のわっ……」

後ろを振り向いた瞬間、遠距離からのセーナの砂蹴り攻撃がミライを襲った。

ミライは目を擦り、セーナとは反対方向を向いて、ゆっくりと服を着た。

外は乾いていたが、中はまだ少し湿っていて気持ち悪い。

服を着終わった後、ミライはセーナに聞こえるように、大声で叫んだ。

「セーナ。もう良いか？」

「まだに決まってるでしょ！」

その言葉と共に、砂も飛んできた。

ミライは黙り、セーナの言葉をしばらく待つのだった。

第117層 ホットホットホット（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第117層 ホットホットホット

「……もう良いわよ」

尖った口調でセーナは言った。

ミライはその言葉を聞いて、ゆっくりと2人の方に振り返った。

セーナはナトレの体を使い、隠れていた。

それでも、セーナの服装にホットパンツが追加されたのはすぐに分かった。

そうやらセーナは2つ目の選択肢を選んだようだ。

今後の状況的には、嬉しい方の選択肢……なのか？

その答えをミライはすぐに理解し、ため息と苦笑いが出てしまう。

そのミライの行動を見て、ナトレもやれやれと首を横に振った。

「さて、そろそろ進みましょう。いくら時間があっても、さすがに勿体無いわ」

ミライとセーナの関係の間に入るナトレが口を開いた。

「たしかに。日が暮れても困るしな」

「ミライ。悪いけど一夜は絶対に野宿になるわよ。この距離だとね」
ナトレは砂漠の遠いほうを見て言った。

「食料無いんだけど……」

「食料なら私が持つてるわ。それを分けるわ。もちろん、後々でいいから2人とも代金払ってね」

ナトレは若干笑みを浮かべて言った。

「そのうちね」

セーナは笑みを浮かべながら言った。

「それじゃ、話しながらも良いから行きましよ」

ナトレの言葉に2人は肯き、ナトレを先頭に3人は町を目指して歩き始めたのだった。

あの巨骨から歩き始めてだいぶたった。

と言っても、まだ後ろを振り向けば、大きな存在感を放っている巨骨が見えるわけだが……。

歩き始めてからの数分間は、様々な話で盛り上がっていたが、それも数分のこと。

その後は会話も弱りに弱り、とうとう口も開かず、もくもくと歩くだけとなった。

汗の量が尋常じゃない。

それは、左隣にいる彼女もそうなわけで……。

歩いてる間、目を合わせるどころか、口すら利いてくれない彼女も……。

「あーっーいー！」

全く会話の無かった寂しい空間の中、突然セーナは叫んだ。

「一番涼しそうな格好に見えるけど？」

ナトレは歩きながら楽しそうな口調で言った。

その鋭い指摘に、思わずミライは笑みを浮かべる。

ナトレとミライが歩く中、セーナは突然足を止めた。

「ナトレ。ちよっと……」

ミライの問いかけに、1歩前を歩くナトレも足を止めた。

ナトレは振り向き、足を止めるセーナの方を見る。

ミライも複雑な表情のセーナを見つめる。

そして、誰も動かない時間が数秒間続いた瞬間だった。

突然、セーナはロング白Tシャツの下に履いているホットパンツを勢い良く脱ぎだした。

「ちよちよ、ちよっと」

ミライは慌てて体ごと視線を大きく逸らした。

一体、何を突然……。

「ミライ、こっち見なさい！」

セーナは命令口調でミライに言った。

ミライは黙って、体ごとセーナの方を向いた。

そこには、ホットパンツを片手に持って立つセーナの姿があった。

そのセーナは、どんどんミライの方向へ近づいてくる。

「これで良いんでしょ、これで！」

セーナはミライを見上げるように、少し顔を赤くしながら言った。

戦闘以来の下から目線……。

そして、戦闘以上の顔の近さと赤さ。

その赤さは、僕にも移ってしまいそうだ。

…… 大体の考えは察することが出来た。

「それで良いよ、それで。でも、顔近すぎだ」

ミライの言葉にセーナは、顔の赤さを増してから顔を離して、空を見上げた。

そして、ちらりと手に持つホットパンツを見て、大空に向かってそのホットパンツを投げ上げた。

ホットパンツは空中をくるくると回りながら上へ飛んで行き、一番高い位置で、セーナのメニュー画面へと消えていった。

その光景はどうであれ、このエリアでの一番のセーナの良い顔だった気がする。

その3人の空間に、一筋の温かな風が横切った。

そして、セーナの長い白Tシャツの裾がひらひらり。

当然、その光景はミライもしっかりと目撃。

「……また見たわね！」

そう言つて、セーナはミライに殴りかかる。

「悪いのは僕じゃなくて風だつてば！」

そう言つてミライは、走つてセーナから逃げる。

その2人の追いかけてこをナトレは笑いながら見守る。

そんな温かな風がもたらしたホットな空間は、しばらくの間続くのであった。

第118層 冷製スープ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第118層 冷製スープ

夜。

星空の明かりしか無い空間に、セーナの妙な光魔法で一定区間を明るくしている。

その魔法は、光る玉のような物を作り出して地面に置いておくだけで単純だが、ミライの焚き火の数倍明るい。

セーナが言うには、この魔法は相当魔力を使うらしい。

でも調理には火が欠かせないので、ミライの焚き火も活躍している。

それにしても……。

「寒いわね……」

そう言つて、セーナは両手を組んで少し震えている。

でも服装は変えないという、謎の拘りっぷりを見せている。

「何でナトレは平然といられるんだ」

ミライも焚き火前で震えながら、すぐ横で夜食を作っているナトレに言った。

明らかに寒そうな格好なのに、楽しそうに料理に腕を振るうナトレ。

その雰囲気ふんいきでミライは料理を手伝うのを止めたのだ。

「そうねえ……慣れかしらね」

笑顔をミライに見せながら言うナトレ。

「慣れるものなのかなー」

ミライはそう言いながら、小刻みに震えるセーナの方を見る。

「セーナ、服変えたら？せめて何か穿くとか」

「べ、別に寒くなんか無いもん！これくらい……」

ミライの問いかけに、セーナは強気で言葉を返した。

しかし、その言葉の裏腹ひらひら、焚き火にどんどん近づくとセーナを見てミライは少し笑ってしまう。

「ほら、出来たわよ」

そうナトレは言って、2人のもとに出来上がった料理を持ってくる。セーナと前に置かれたのは、湯気の立ついい香りのスープだった。

「んで、これがミライの」

ナトレは笑顔でミライにもセーナと同じような物を出した。

しかし、そのスープからは湯気は立ってなかった。

「え……」

思わぬ料理に、ミライは言葉を漏らす。

「ミライは冷製スープよ」

「ちよ、ちよっと！」

セーナの言葉に、ミライは思わず声を張ってしまふ。

「ふふ、冗談よ。その顔が見れてよかったわ」

ナトレは笑いながら言い、温かいスープと冷たいスープを入れ替えた。

「うう、してやられた……」

ミライの言葉と表情に、セーナとナトレは笑う。

「はい、パンね。1人1個づつね」

そうナトレは言って、セーナとミライに1個のパンを渡す。

そして、ミライの左隣にナトレが座る。

「あれ、ナトレは冷たいスープのままでもいいの？」

セーナはナトレの下に置かれたスープを見て言う。

「いいのよ。ほら、熱いの苦手だし」

「ふーん、まあ良いわ。食べましょう」

そうセーナは言って、スープをスプーンで掬い、口に流し込む。

ナトレも丸いパンを1口。

「……いただきます！」

ミライは大声で手を合わせて言った。

「……何それ？」

ナトレとセーナは口を揃えて、ミライに聞くのだった。

第119層 食事のルール（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第119層 食事のルール

「これは、僕らのP.Tの食事の決まりで、食べ物をおいしく食べれることに感謝して、こつやつて手を合わせて言うんだ」

ミライは手を合わせる姿を見せながら言った。

「感謝してねえ……良いわね。私達もやりましょうか」

ナトレは楽しそうに提案した。

ナトレとミライの視線は、セーナの方に集中する。

その視線を感じ取ったのか、セーナが照れくさそうに口を開いた。

「べ、別に私は構かまわないわよ！悪いことじゃないし」

「それじゃあ決まりね。ねえミライ、他に何かルールあるの？」

ナトレは右手に持つパンをミライに向けながら話した。

ミライは口の中のパンをスープで流し込み、口を開く。

「ルールって言われても、気持ちの問題だしなー。まあ、食べる前に『いただきます』で、食べ終わったら『ごちそうさまでした』って言うだけかな」

「なるほどねー」

ナトレは肯うなづきながら言った。

「あ、あとは最初にだれかが『いただきます』を言った後に、残ったほかの人が続けて『いただきます』みたいな感じで言うんだよ」
「じゃあ最初はミライでいいわね」

ミライの説明に、ナトレが笑顔で言い返した。

ナトレの言葉に、セーナも肯うなづく。

「それにしてもスープ美味しいな」

「あら、褒ほめるのが上手ね」

こんな感じで、楽しい会話と食事の時間が進んでいくのだった。

「じゃあ食べ終わったことだし、早速やってみましょ」
全員の食事状況を見計らって、ナトレが楽しそうに言った。

ミライはセーナに視線を送ると、すぐに素直な肯きが返ってきた。
ミライは呼吸を整えて、大きく一言。

「ごちそうさまでした！」

「ごちそうさまでした！」

ミライの掛け声に、ナトレとセーナも大きく答えた。

「……そんなに声張らなくても良いからね」

苦笑いを浮かべながら、ミライは言った。

「えっ、そうなの？」

驚いた表情でセーナは言った。

「あら、そんなの聞いてないわよ」

笑みを浮かべながらナトレは言った。

こうして3人はあつという間の食事を済ませて、片付けへと入るのだった。

第120層 聞きたい謎（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第120層 聞きたい謎

食事後の後片付けも、ミライの水魔法の水で綺麗きれいに洗い、ナトレのメニュー画面にしまった。

あの時強引に溜ためて色々な物に入れておいた水も、残り半分になっ
っていた。

それにしても、この世界に住んでいるナトレがメニュー画面を持
っていたなんて……。

この世界の人たち全てが、メニュー画面を使うことが出来るのだろ
うか？

まあ、後でナトレに聞いてみようか。

後片付けが終わってすぐのことだった。

「ねえナトレ……ちょっとついて来て」

もじもじしながらセーナは言った。

「うーん、わかったわ」

そう言っ
てナトレは立ち上がる。

セーナは、すぐさま暗闇に消えていき、ナトレもミライに笑顔を
見せてから暗闇へと消えていった。

そして、明るい焚たき火の空間にぼつんとミライ1人。

やっぱり女の子は暗いところではダメなのだろうか……。

あれ、でもセーナ前の所では単
独行動だったような……。

後でセーナに聞いてみるか。

そうこう考えていたら、2人は暗闇の中から帰ってきた。

「じゃあ、僕もちょっと行ってくる」

2人に一言言っ
てから、ミライはその場を立ち上がる。

「私わたしもついて行くのうか？」

「遠慮えんりょしときます」

ナトレの意地悪な言葉に、笑顔付きの敬語でミライは返し、暗闇の
中へと消えていくのだった。

第121層 ふて寝と星空（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第121層 ふて寝と星空

そして残るは眠るだけとなった夜。

敷くものも何も無いので、砂まみれよりはまし、と言うことで地面には平たく大きなバリアが張られている。

極力平温きょくりよくへいおんになったバリアの上に3人は横に寝転がっている。

セーナの点けた明かりも、ミライの焚き火たも完全に消して、何も見えない状態だ。

「で、何で僕が真ん中？」

左右で寝転がる2人に対してミライが問いかける。

「私寝像悪いから、端っこの方が迷惑じゃないかと」

そうナトレは言っつて、大きな欠伸あくびをする。

「私は挟はさまれるのが嫌」

「……まあ、いいか」

僕も嫌だ！とは言わないでおこう。

それにしても、左右に異性が眠っていると、こころも落ち着かないものだろうか。

「あら、もしかしてかわいこちゃんに挟はさまれると落ち着かないか？」

「む……」

ナトレの言葉にミライは言葉を詰まらせる。

「ふふ、凶星ね」

セーナがさかさず言葉を突いてくる。

ミライは返す言葉も浮かばない。

たぶん、2人は悪魔的笑みを浮かべているだろう。

「それにしても、本当にここ一体を守らなくて良いの？」

ミライが指示したのは、寝ているときにモンスターに襲われない大事な対策のこと。

今回は今までと違って、四方と真上にバリアを張ってないのだ。

「あら、話逸そらしてきたのね。別に良いのだけど。しばらくモンスターは現れないから大丈夫だと思うわよ」

ナトレは、いやらしい話し方から、まじめ口調に戻ってそう話した。そうは言っても、ナトレを信頼しんらいしてないわけじゃないが、やっぱり心配である。

「それを言い切れる根拠こんきょは？」

ミライの思いを代弁たいべんしたかのように、セーナはナトレに聞いた。

「そうねえ……。昔はこの場所が砂漠じゃなかったとしたら？」

「えっ……」

突然のナトレの言葉に、ミライは思わず声をからす。

「昔は自然豊かで、モンスターも豊富にいたわよ。でも、ある日突然、この世界のあらゆる水が無くなった。それで……」

「モンスターが姿を消したと」

ナトレの話の終わりに、理解したと示す言葉をミライが割り入れた。

「そう言う事。それが分かれば、他は何も話すことは無いわ。じゃあ、おやすみなさい」

「え、ちよつとナトレ！」

話を強制で止めたナトレをセーナは大きな声で呼んだ。

しかし、ナトレは全く反応しなくなった。

逆に大事な話から逃げられてしまったようだ……。

ミライは何も見えない闇の中で、セーナに語りかけた。

「そういえばセーナ」

「なに？」

「前のエリアと言うか……世界では、単独で行動してたんだよね」

「そうよ」

「その……食事とかトイレとかって……」

「あー……1人だったわよ。でも急に1人で行けなくなる時だってあるの！」

「じゃあ、そのきっかけは？」

ミライの言葉の後、しばらく物音しない時間が流れた。

もう一度ミライは闇の中、疑問形ぎもんけいで名前を読んだ。

「セーナ？」

「……別に良いでしょ！私にだって色々あるのよ！……おやすみ」
そのセーナ言葉の後、ミライはセーナに声を掛けることはしなかった。

きつと何かあったんだな……。

考えないようにしようつと。

ふとミライは、目線を闇の世界から、星の世界へと変えた。

「それにしても、綺麗きれいな星だなー。あつ流れ星！」

恐らく寝てないだろう2人に聞こえるように、ミライは独り言をぼやいた。

前の世界とは比べ物にならないくらいの数の星が、キラキラと輝いている。

次に流れ星が流れてきたら、何を願おう……。

「楽しいひと時が、永遠と続きますように」

そうミライが言うと、再び星空に1本の流れ星が現れた。

強い光の星に比べれ弱い光だが、その光は、長い光の線の存在感を残し、消えていった。

その光景を見て、ミライは無意識ぼんぼんに微笑む。

もしかしたら、2人とも同じ光景を見て、同じ表情をしてるかもしれない。

あと、遠くの町にいる金髪の彼女も。

「じゃ、おやすみー」

ミライはそう言って、目の中に星空の光景をしまった。

ミライは最後の言葉の後に、小さな「おやすみ」の音が聞こえてきたような気がして、再び微笑むのだった。

第122層 抱き枕（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第122層 抱き枕

「……ねむれない……」

ミライは月明かりを頼りに、動かせる首だけを動かし、自分の状況を確認した。

右腕と両足はナトレに捕まり、左腕はセーナに触れていた。と言
うより、捕まっていた。

ミライは完全に女2人の抱き枕まくらと化していたのだ。

「んんー逃がさないんだから」

寝言だろうか。ナトレはそう言っつてミライをギュツと締め付ける。

く、うあっ……ちょっとナトレ……当たってるって……。

ミライは腕や足を強引に動かし解こうとするが、動けば動くほどナ
トレの締め付けは強くなっていく。

それどころか、動いたせいでセーナはミライの手を持ったまま寝
返りをして、肌に触れていた腕は、セーナの胸上に乗っかっていた。
セーナが左手で、ミライの左手を握り締めはなさない。

不味い不味い不味い不味い……。

鼻の穴から、何かの液体が垂たれてきた。

これが鼻水であると言う確立は極めて低い。

朝起きて、この状況だったらどうなるだろうか。……考えただけ
でも冷や汗が流れる。

「ちくしょう、どうすれば……」

ミライは鼻からの液体をすすりながら、声を漏らした。

ミライの口の中に錆びた鉄のような味が広がる。もう確定のようだ。

この状況は嬉しい状況なのかもしれない。だが、相手が悪い。

ミライを挟む美女と美少女は、こんな行為を許す天使ではないのだ。

もし天使だとしても、美女に関しては意地悪な天使だろう。後で何されることか……。

「……まさか起きてたりして……」

この出来すぎた状況に、ミライは呟く。

十分にありえる可能性だが、2人は本当に寝相が悪いだけのよう

で。

さすがにこんな寝息の音まで演技つてのは出来ないだろう。

「ミライ……」

「ん？寝言か……」

セーナの言葉に、ミライは声を返してしまふ。

2人は一体どんな夢を見ているのだろうか……。

「うる、さい……あっちいけ……」

呼吸のようになかすれた声だが、はっきりと聞こえた。

セーナの寝言を聞いて、ミライは苦笑いを浮かべる。

そちらから離れて行って欲しいものだが……まあ、いいか。

そう思って、ミライは目を瞑^{つぶ}った。

そして2人の寝息の音に合わせながら、ようやくミライも眠りにつくのだった。

第122層 抱き枕（後書き）

だいぶ書き方を変えてみました。

指摘されたら直しますんで、コメントの評価、批判を待っています。

第123層 触れられぬ血跡（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第123層 触れられぬ血跡

「…………ぬああっ！」

変な奇声を上げながら、ミライは目覚めて、飛び起きた。

「どうしたの？そんなに慌てて」

「ほらミライも手伝ってよ」

ナトレとセーナの声が順番にミライの元に届いた。

「…………おはよう」

ミライは鼻下を指で擦りながら、起きて何かしている2人に対して言った。

指を確認するが、鼻血の痕跡は残ってなかった。

「あ、おはよー」

セーナは明るく言って、ミライに笑顔を見せた。

「おはよう。ミライは律儀ねー」

ナトレも挨拶を返して、セーナと同じような笑顔を見せる。

昨日出来事は夢だったのだろうか。

そう思いながら、自分の着ている服を確認した。

…………ベージュ色の服だったのに、首元から赤く染まっている。

ミライはその光景を見て固まり、我に返って2人の姿を見る。

2人は仲良く朝食を作っている。

この匂いにおからして、焼き魚のようだ。

ただ朝食を気にしてる場合ではない。

この血の量を気がつかないような2人ではない。

だが、この事に全く触れない2人。なんだか怖い……。

第124層 悪人の再生魔法（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第124層 悪人の再生魔法

「ねえ、僕……何か言うことある？」

ミライが2人に聞いた言葉は、2人の表情を曇らせる者だった。ナトレとセーナは顔を見合わせて苦笑いを浮かべている。

「そうねえ、思い当たることがあるなら、言ってみれば？」

ニヤリとナトレは作業を止めて、笑みを浮かべながら言った。

「やっぱりあれは夢じゃなかった。腹を括るくしかないか。」

「ふうー」とミライは大きな溜め息をついて、2人を見てミライは言った。

「その……昨日は、悪かった！」

手を合わせて少し頭を下げて言った。

2人は笑うかと思えば、完全に無表情だった。

「なに？ミライくん何か悪いことしたの？」

ナトレのくん付けに、ミライは妙な鳥肌を感じる。

「え、あの、これ……」

ミライは服を手前に引っ張り、服の赤いしみを強調させて2人見せる。

ナトレとセーナは苦笑いを浮かべる。

「その鼻血がどうかしたの？」

セーナは苦笑いのまま首を傾げて言った。

鼻血だと言ふ事は完全にはれてるようだ。

一体2人は何を考えているんだ……。

「あのー、策を練らずに許して欲しい……です」

ミライはどんどん弱気になっていく。

考えれば考えるだけ、2人の思考が分からなくなっていく。
魂の抜け始めてるミライに、ナトレが言葉を投げかけた。

「少なくとも、私たちは何も怒ってなんか無いわよ。むしろその逆」

「はあ……。え？」

ミライは口を空けて硬直する。

一体何を言ってるか訳が分からない。

固まるミライに、セーナが笑みを浮かべながら言葉をかける。

「鼻血の原因は何？少なくともミライじゃなくて私達よ。分かる？」

「さっぱり分かりません」

「ミライが好き勝手私達を……となったら殺すけども、今回は違うでしょ」

ナトレの助言に、ミライはようやく我に返った。

そして、苦笑いを浮かべて頭を掻く。

「何か知らないけど、助かったー」

ミライは安堵あんどの溜め息をついた。

「触られたことは気に食わないけど、罪が無い人間を怒るような小さな心じゃないのよ？お姉さんはね」

腰に手をあて胸を張りながら、笑顔でナトレは言った。

「私は起きてすぐ、反射的に殴っちゃったけどね」

セーナも胸を張って言った。

「いや、何かおかしいし……」。

ミライは体をあちこち見渡すが、殴られた場所は分からない。そのミライの姿を見て、「フッフ」とナトレは口を開いた。

「大丈夫よ。ミライの体は、私の再生魔法で治したから」

「再生魔法？」

ミライはナトレに聞き返した。

「どおりで、セーナとの戦闘で折れた小指の痛みが治ってるわけだ。」

「そう、壊れた部分や物を治す能力よ。ミライやセーナとは違って元々ここにいる私だけでも、それでも使えるキャラは使えるのよ」

「ふーん。再生魔法ねえ」

「ミライの破いたセーナのパンツも私が治したのよ？」

「ちょ、ちよつと！」

ナトレの言葉に、セーナが慌てふためく。

ナトレはニヤニヤしている。

なんだかんだで凄い人なんだなナトレって……。

ナトレは足元の魚の焼け具合を見て、2人に声を掛けた。

「ちょうど焼けたところだし、朝ごはんにしましょ」

「分かった」

ナトレに言葉を返して、ミライは2人の元へと歩き出した。

「そういえば、僕の鼻血跡消したのって？」

「2人だよ。ペロペロと舐めてね」

「ええっ!？」

驚いてミライは顔を真っ赤にした。

「ナトレ、何冗談言ってるのよ！」

セーナも少しほほを染めて、ナトレに対して強めに言った。

「いいじゃない。ミライいじるの楽しいもん」

満面の笑みを浮かべながら言うナトレ。

全然この人凄い人じゃない。むしろ酷い女だ!

そう思いながらも、2人の朝食の手伝いをしに行くミライであった。

第125層 初朝食中（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第125層 初朝食中

「いただきます！」

「いただきます」

ミライの元気な掛け声と2人の軽い返しで、この世界で初めての朝食が始まった。

それにしても、どこかの金髪のリーダーさんの掛け声に似てしま
う。

元気にしているだろうか……。

1本の竹串に指された魚を貪りながら、ナトレは口を開いて話し始めた。

「そういえばミライ。食事終わって行く前に、水を出しておいて欲しいのだけど、いいかしら」

「分かったけど、少し時間掛かるからね」

「ふふ、気長に待つとするわ」

ナトレは、ミライに微笑みながら言葉を返して再び口をつけた。

ミライは右手で焼き魚を口に運びながら、左手をふらふらと動かした。

ミライ前方の少し奥の方で、バリアの蓋無しの^{ふたな}大箱が出来上がった。
た。

その光景を見て、セーナが口を開いた。

「へー声出さなくても魔法出せるんだ」

「出せないの？」

ミライの言葉に、セーナは竹串の持ち手を左に変えて、右手で魔法を出す構えをした。

数秒後、ミライとナトレの間を一筋の光線が通過していった。

「おおー！」

驚いた表情で自分の手を眺めるセーナ。

「殺す気か！」

そんなセーナを怒るミライ。

横切るだけで、少し頬が熱い……。

こりや当たったらほんとに死ぬな。うん死ぬ。

怒りつけるミライに対して、セーナは苦笑いを浮かべて頭を掻く。

ミライは、やれやれと溜め息をついてから、ナトレの方を向いて声を掛けた。

「ねえナトレ。そう言えばさ、再生魔法って何でもなおすんだよね」

「ええ、死人じゃ無ければね」

「じゃあ、これを直して欲しいのだけど……」

そう言ってミライは、メニュー画面から折れた筈を取り出し、ナトレに見せた。

「持ってきてたんだ」

その箒はらを見て、セーナが呟いた。
ミライは正直捨てようか迷ったが、何か特別な力を感じるから持
ってきてしまったのだ。
セーナの折れ傘かさとは違って、ステータスは全く上がらないわけな
んだけど……。

「分かった、直しておくわ」

ナトレから了解の声が返ってきた。

第125層 初朝食中（後書き）

これから0時に予約投稿です。今後もよろしくです！ 誤字脱字は指摘してくださいな

第126層 食後の時間（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第126層 食後の時間

ミライは、自分の分の焼き魚を綺麗きれいに食べ終えて、セーナとナトレの方に目を向けた。

2人はとつくに食べ終わっていたらしく、ミライが目線を送ると、薄っすら笑みを浮かべた。

ミライが両手を合わせて、大きく息を吸った。

「ごちそうさまでした!」

「ごちそうさまでした」

こうして3人の食事が終わったのだった。

ミライはその場を立ち上がり、独り言のように言葉を呟いた。

「さてと、僕は水でも集めましょうか」

「じゃあ私は、ミライの箸はしを直すとするわね」

ミライに続いてナトレも立ち上がった。

セーナも2人の言葉に続こうと立ち上がり、口を開く。

「私は……」

だが、することが無くて言葉を詰まらせた。

「食事の後片付けね」

「なんでよ!それに片付ける物、今日は無いじゃない!」

ナトレの投げ掛けに、セーナはじたばたと反論した。

「まあ、かまうなら私じゃなくて、ミライにしてよね。結構集中力要るのだから」

「そこまで言うなら、仕方なくミライにでも……」

そう言って、セーナはミライに視線を送った。

セーナは昨日の最初に出会った頃とは、まるで別人のようだ。つくづく思いながら、ミライはセーナに向けて声を出した。

「僕も結構集中力が……」

セーナが話を聞き終わる前に殴りかかる。

「何でだよ!」

手加減のされたパンチを受け止めながら、ミライは言葉を続けた。

「分かったけども、結構危ないから……水汲むの」

「危ないって?」

「見てれば分かるから」

そう言ってミライは、ナトレに真っ二つに折れた箒を差し出した。ナトレに対してミライが一言言葉をかけた。

「じゃあ箒よろしく」

「分かったわ」

ミライからしつかりと箒を受け取り、折れた箒の柄えの部分を器用に片手で回して見せた。

ミライはその行動に「おー」と驚いてから、バリアの方に歩き出した。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

そうセーナが言って、ミライを追いかけて小走りした。

そしてミライとセーナは、バリアの元に2人で向かっていくのだった。

第127層 ダイナミック水汲み（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第127層 ダイナミック水汲み

「ウォーター・プレス！」

バリア前で、右手を空高く上げて、ミライは叫んだ。

叫んだ瞬間、巨大な水柱がミライから天に向けられて飛び出した。そして、天に勢いよく上って行った大量の水は、空中でくの字に曲がり、バリアの箱の中へと一直線に向かって行った。

ザバーンッと音を立てて、バリアに勢い良く水が入っていった。そして、半分以上の水が、噴水のごとく飛び散っていった。

大量の水が、ミライとミライの近くに居たセーナを襲った。

「きゃっ、何すんのよー！」

「だから言ったじゃん。危ないって」

びしょびしょになるセーナの姿を見ながら、ミライは言った。

ミライはこの状況が分かったので、上半身裸で服をしまっけて置いてあるのだ。

セーナにミライと同じ体制にしとけと言っても無理な話ではあるが……。

「ふふっ、楽しそうね」

ナトレは、ミライたちの方に歩きながら2人に声を掛けた。

背中にナトレの存在を感じながら、ミライはナトレに声を掛けた。

「ナトレ、もう篝直かきひらったの？」

「ええ、元通りよ」

「集中が必要にしては早くない？」

「集中と速度は比例しないわよ。それにしても……」

ナトレはバリアのすぐ近くまで歩いていき、その光景をじっと眺めた。

ナトレの姿が小さく見える。

ナトレは、バリアの箱側面に左手を当てて、ミライを見ながら叫んだ。

「この中の水、どうやって汲むのよ。前とは高さ違いすぎるわよ」

「えっ、そんなはずは……」

ナトレの叫びに、ミライとセーナはナトレの元へと近づいていった。

こんなに大きく作ってしまったのか……。

3mは高さのあるバリアの壁を見上げて、ミライは思った。

「どつするのよ。こんなの登れないわ」

セーナはミライを見つめながら言った。

セーナの言葉で何かをひらめいたかのように、ミライは笑みを浮かべて呪文を放った。

「バリア！」

そうミライが言うと、バリアの壁に沿うようバリアが次々と作られて階段状になった。

「これで登れるだろ。ほら、離れないと濡れるよ」

ミライはそう言いながら、もとの位置に向かって歩き出した。セーナもミライに歩いて付いて行く。しかし、ナトレは動こうとしなかった。

「ナトレー」

ミライは足をとて、ナトレの方を向いて言った。

すると突然、ナトレは胸に巻きつけられた青い布の、背中結び目を解き始めた。

「ちよ……」

「濡れないようにすればいいんでしょ？」

完全に上の布を外して笑いながらナトレは言う。

この人、僕が見れないの分かってやってないか……。

ミライはナトレに背中を向けながら、叫ぶように声を出した。

「もう勝手にしてくれよ！……体力の減りだけは注意してよ」

そう言って、ミライは定位置に向かって歩き出した。

「ふふっ、分かったわ」

しばらくミライは歩いていき、さっきの位置より少し遠く的位置で振り向いた。

ナトレはしっかり胸に布をグルグル巻きにして、バリアを物珍しそうに眺めていた。

そんなナトレを見て少し笑みを浮かべながら、ミライは上空を見上げた。

「セーナ」

「何？」

「また濡れるから、もっと離れたら？」

「別に大丈夫よ。もう透けるほど濡れちゃったしね」

「ははは……よし。ウォーター・プレス！」

ミライの叫びだされた呪文名と共に、再び天に向かって水柱が放たれるのだった。

第127層 ダイナミック水汲み（後書き）

指摘されましたが、最近ぐだぐだなのは100も承知です！
ミチちゃんファンには悪いですが、もう少し日数待ってください。

第128層 見えてきた目的地（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第128層 見えてきた目的地

「よし！水も汲み終わった事だし、そろそろ町に向かいましょうか」

そうナトレは言って、2人の顔を見つめた。

ナトレの覗き込む顔に、ミライは苦笑いで見返した。

……やつと町に向かえる。

そうミライが思うのも無理は無かった。

ナトレは水を汲み終わってから何をしだしたかと言うと……着ている物全てを脱ぎだしたのだ。

そして、背中を向けて戸惑うミライに対して一言。

「これだけ水があると……泳ぎなくなっちゃった」

語尾に音符が付きそうな口調で言いながら、フード越しでミライの目を布で隠すナトレ。

この時は、突然すぎて何がなんだか分からなかった。

そして、次のナトレの言葉になぜか心を打たれたのだ。

「……昔みたいにな、水が有り余る時代だったら……こんな事も思わないのにな」

そして、その言葉に対してミライは言ってしまった。

「……じゃあ、泳いでも良いよ。僕は見ないから」

「そう。ありがとう」

そうナトレはうれしそうに言って、そこからは……ナトレとセーナの楽しそうな声がするだけ。

それも小一時間。って何でセーナまで……。

ミライは、ただただ噴出す汗を感じながら座っていたのだ。ある意味拷問だ。せめて冷たいバリアを敷いとくんだった……。

「ほら、ミライ早く行くわよ！」

元気にセーナが声を掛けてくる。

無駄にしてしまった1時間をどうこう言う事は出来ないようだ。

「はいはい」

ミライは早くも疲れ始めた体を動かし、2人の元へと歩いて行く。

そして、3人は大量の水を確保して町に向かうのだった。

歩き始めてだいぶ時間が経った。

歩きに歩いてへとへとな3人に、希望の光の存在が見えてきた。

それは、目的としていた大きな町だった。

「何あれ？」

その街の雰囲気を見て、セーナがしほが呟く。

セーナが言う通り、確かに不思議な町だ。

結構な大きさの町に、1つだけ大きな建物が見える。

……何かの宮殿みたいなものだろうか。砂漠らしい、石造せきぞうの大きな建物だ。

そして、その町全体を包み込む……。

「バリア？」

ミライは町の光景に見とれながら呟いた。

そのミライの呟きに、ナトレは笑みを浮かべながら言葉を返した。

「あれは水よ。飲めないけど」

「飲めないって……毒でも入ってるのか？」

ミライはナトレに聞いてみる。

その言葉に、ナトレは腕を組みながら言葉を返す。

「ふふっ毒とはねえ。まあ、一種の毒……みたいなものかしらね」

「何それ？」

すかさずセーナが聞き返した。

ナトレはセーナに顔を近づけて、人差し指をピンツと立てながら言った。

「そうね。王にこき使われなきゃいけなくなる毒かしらね」

「……………?」

その言葉を聞いて、セーナは複雑な表情を浮かべる。

僕にも全く理解できない言葉だった。

「あ、それと、その毒は女性限定ねー」

追記を笑いながらナトレは言った。
話が余計に分からなくなってきた……。

「じゃあ、男はどうなるの？」

ミライが冗談交じりで聞いてみる。

その言葉に、ナトレは冗談のような言葉を投げ掛けてきた。

「水飲む前に殺されちゃうわね」

「はい？」

ミライもセーナと同じような複雑な表情になり、考え込んだ。

2人の表情を見て、ナトレはクスツと笑う。

そして、2人に対してナトレは話しかける。

「ほら2人とも、そんなに考えない。あの水飲まなければ良いだけの話よ。ほら、あと半分で町だから頑張るわよ」

「ええー半分もー」

セーナは疲れきった声で言って、肩を落とした。

「僕、あの町に近づきたくないんだが……」

ミライは苦笑いを浮かべながら言う。

そんな2人をナトレはつつい笑って見ている。

そして、「ほら、行くわよ」とナトレが声をもう一度掛け、3人は町に向かって再び前進するのだった。

第128層 見えてきた目的地（後書き）

予約投稿やめます。毎日投稿は続けます。

投稿宣伝後、すぐ見たいと言う人がいるのと

何より私もめんどくさいなwと思ってたからです。

色々変更で迷惑おかけします。

第129層 一人街へ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第129層 一人街へ

町が見えてから、さらに歩いて数時間。

辺りはだいぶ日が落ち始めた。

そして、町まであと少し……と言うより、街の目の前まで3人は来ていた。

そこで3人は揉めていた。

「何で街に入らないんだよ。ナトレもセーナも」

「怖いから」

ミライの強い問いかけに、セーナは即答した。

「少なくとも水がある分には、この街の中より、砂漠の方が安全と
いったら安全なのよ。だからミライ、街に行く前に水を置いていっ
てね」

ナトレは冷静に解釈して一言つけた。

ナトレの言葉に、ミライはもの寂しそうに言葉を返した。

「それは良いけど……何だかなー」

「あら、一人だと怖いのか？」

ナトレは笑みを浮かべながら言い返した。

「それもある。ただそれ以上に……」

「それ以上に？」

セーナが聞き返す。

ミライは一呼吸置いてから、呟くように言葉を吐いた。

「何だか急に1人になると思うと、寂しいなーっと思って……」

「あら、言ってくれるわねえ……」

ナトレは苦笑いを浮かべながら、言葉を返した。

そう。この2日ほどだったが、相当濃い内容のものだった。

色々あったが、ここまでよく楽しくこれたほうだったと思う。

そんな色々の原因のような2人と、こんな早くに……。

「そんな顔するぐらいなら、私達と一緒に残れば良いじゃない」

ナトレは少し寂しそうな視線を向けて言葉をミライに向けた。

ナトレの言う事は、確かに正当で、一番安全かもしれない。

でも、ナトレから街に関する謎の情報を聞いた以上、この街からミチを連れ出したいのだ。

何せミチは、かれこれ2日も街で待っているじゃないか。

例えばどんな危険な場所でも、待たせているなら、行かなければならない。

決心をつけてミライは、2人に対して笑みを浮かべながら話し出した。

「……うん、僕は行くよ。街の中で待っている仲間がいるんだ」

「そう。私は町の近くでゆっくりしてるから、何かあったら合いに来れば良いわ」

「ふん。厄介やっかいな男が消えてくれて清々するわ」

セーナは腕を組みながら、ミライに背を向けて言った。
そんなセーナに、ミライは何かを思い出したかのように声を掛けた。

「あ、そういえばセーナ」

「な、何よ？」

「PT登録しておこうよ。人数制限無いだろうし」

「別にそれぐらい良いわよ」

そう会話を交わして、セーナとミライはメニュー画面を開き、PT登録をお互いにした。

PT登録するナトレの手つきは手馴れていた。

「ありがとう。何かあったらメール出来るから」

そう言ってミライは、笑みを浮かべてセーナに見せる。

そんなミライの姿に、セーナも笑みを浮かべながら言葉を返す。

「ふん。ミライも頑張りなさいよ。私のライバルとして！」

そんな突然のライバル宣言をミライは笑って受け入れ、顔を真剣な表情に戻す。

「それじゃ。バリア、バリア、バリア、バリア、バリア……ウオ

「ター・プレス！」

素早く作り出されたバリアのケースに、大量の水が入り込み、飛び出していく。

当然近場にバリアのケースを作ったので、3人に勢い良く水が襲ってくる。

「これだけあれば大丈夫でしょ」

「もっと大きくしてくれても良かったのに……泳げるし」

ナトレは濡れた事を怒る事無く呟いた。

「横幅は広くしたんで……」

ミライは、残念そうな表情を浮かべるナトレに対して、苦笑いを浮かべながら言った。

そのミライの言葉に、ナトレは嬉しそうに微笑む。

……どれだけ泳ぎたいんだ！

そう思いながらミライは、2人やバリアの方向ではなく、大きく佇む街の方に体を向けて、言葉を放った。

「それじゃあ、またどこかで」

「ええ、また」

「行ってらっしゃい」

そのナトレとセーナの言葉に、右手を大きく上げて見せながら、ミライは街の方へと歩いていったのだった。

……そして、街の前。

確かに言われた通り、街の周りを液体が覆いかぶさっていた。

その光景は、夕暮れ時のせいかわ、紫色の毒々しい液体に見える。殺されると聞かされるので、何だか入りづらい。

でも、ここまで来た以上引き下がるわけには……。

「……さて、行こうか」

そうミライは呟き、街を取り囲む液体に右手から突っ込むのだった。

第130層 2日ぶりの再会（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第130層 2日ぶりの再会

ミライは液体の壁を抜けて、無事に街に入る事ができた。街を囲む液体は、触れた温度も、感触も、普通の水と変わらなかつた。

……身構えて何だか損した。

「さて、ここはどの辺りなんだろう」

ミライは独り言を呟きながら、その場で街全体を見渡した。

砂漠なので建物は石造りかと思えば、意外にもほとんどの建物が木造だった。

唯一木造じゃないのは、この街で一番高い場所にある、あの宮殿だけだろうか。

ミライは人気の少ない、街の外周の道を歩いて進んでいく。

そして、少し歩いて行くと、この街の大通りに当たると思われる広い道に出てきた。

「うわっ……たけー」

ミライは宮殿を見つめて、ただただ呟く。

大通りをずーっと進んでいった先には、もの凄い段数の階段がある。

その階段を登りきって、やっと宮殿のようだ。

あれだけ高い場所には何があるのかと行って見たいものだ……。

ただ、そんなことよりミチを探さなくては。

「えーっと。どうやって探そう……」

それなりに広い街を見渡しながら、ミライは眩く。

そして、メニュー画面のPT画面のメール機能を思い出す。

……そういえば、どうなっているだろうか？

ミライはメニュー画面を開いて、PTの項目を選択し、ずーっと下の方まで見ていく。

「やばいな……こんなにメール着てたんだ……」

未読件数13……。

ミライは恐る恐る、メールの内容を古い履歴から見て行った。

「……………ふう」

メールを一通り見通して、一息つくミライ。

そのメールの内容はどんな文よりも、ミライに対する心配事の文が多く、際立って見えた。

……なんて返事返そうかな。

ミライがどう返事を返そうか迷っている、その時だった。

「街に着いたら連絡してね……」

すぐ後ろからか聞こえてきた言葉は、ミチから受け取った最後の文章だった。

その冷ややかな、聞き覚えのある声にミライは凍りつく。

何だか、嫌な予感が……。

ミライは恐る恐る、後ろを振り向いた。

そこに見えたのは、紛れも無い、2日ぶりのミチの姿だった。

ミチの表情は笑っているが、眉毛や口元がぴくぴくと小刻みに動いている。

……言うまでもないが、彼女は完全に怒りきってるようだ。

ミライはこの場を切り抜けるための言葉を瞬時に考え、口にした。

「無事に街に着きましたよ……………ミチ？」

「バカ！返事よこしなさいよ！死んだかと思ったじゃない！」

ミチの怒りの鉄槌てつづいが、大声となって降りかかってきた。

「ヒィー……………ごめんなさい」

無意識で早口で謝るミライ。

「大体なんで私が送ったメールに気がつかないの！」

「それは……………その、色々」

「色々って何よ！良いわ、宿でじっくり話を聞かせてもらいまじょうか！」

「ヒィー……………」

ミチの怒りは治まるどころか、どんどんヒートアップしていく。

そんなミチの怒りを、ミライは変な奇声を上げながら受け止める事しか出来なかったのだった。

第131層 夜、宿屋にて（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思い込んでいます。

ゆっくりと進んでいるストーリーを楽しんで読んで行ってください。

第131層 夜、宿屋にて

「ふーん、なるほどねえ……」

ミライの長い長い説明で、どうにかミチは怒りを静めてくれたようだ。

僕は、もしかしたら話し上手なのかもしれない。

そう思ってしまうぐらい、ミチは僕の話に吸い込まれるのが見て分
かり、楽しかった。

……ここは、恐らく街の中心部分に当たる宿屋。

その一番安い部屋に2人は止まっていた。

ミチの支払いで止めてもらっている。

……2人で一部屋だけ。

たぶん2人で一部屋と言われて、決まったときがミチの不機嫌のピ
ークだったと思う。

「うがああああ」って吠えられたのは、何だか新しかった。

「でもその話の内容の半分ぐらい、裏が隠されてそうね。……えっ
ちいのとか」

「ギクツ……」

ミライは無意識に言葉を漏らしていた。

その反応に、ミチはニツと笑ってみせる。

「ミライの鼻を見たらすぐ分かるわ」

その言葉を聞いて、ミライは鼻に手を置く。

……一体この鼻に何が表れてると言っんだ。

「ふふっ、冗談よ。でもミライは分かり安いからねー」
相変わらず強気なミチである。

ミチの言葉と表情に、ミライは「ははは……」と苦笑い。

「でも、あのセーナの1夜を共にしたなんてね」

苦笑いに似た、嫌な笑みを浮かべながらミチは言った。

「何か言い方が、卑いやしいのは気のせいか？」

その表情を言葉と共に返すミライ。

「あら、否定はしないのね」

「うぐっ……」

「ふふっ、分かり安い」

「うるさいし、何も無いし」

完全にミチに言い丸められてしまった。

もう否定は出来ないようだ……。

ミライは、表情も心情も元に戻してから、話を切り替えるべく声を出した。

「そういえば、ミチはこの2日間何してたの？」

「それは……」

ミチが軽く言葉を詰まらせたそのときだった。

この部屋の唯一の扉から、コンコンと音が鳴った。

「びっぞー」

ミチが扉に対して声を掛けた。

その声に反応して、ゆっくりと扉が開いた。

「……食事を持って来ました」

そう言って入ってきたのは、銀色の髪の女性だった。

第132層 情報料(前書き)

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第132層 情報料

「ありがとうございます」

そうミライは言って、銀髪の女性から食事をお盆ごと受け取る。

そして、部屋の隅に置いてある机にお盆を置いた。

「この宿って、食事つきでしたっけ？」

そうミチは、銀髪の女性に聞いた。

「いえ」

その女性の軽い返しに、ミライは驚く。

一体どうなっているんだ……。

女性は言葉を続けた。

「この食事は、情報料として個人的に持ってきました」

「やっぱり……で、何を聞きに来たのよ」

ミチが再び女性に質問を投げ掛ける。

女性は入ってきた扉を閉めて、2人の目の前の床に正座をした。

そして、ゆっくりとした口調で話し始めた。

「少し、廊下であなたたちの話を聞かさしてもらいました。その話の中に、なつかしい名前が聞こえてきたのです」

ミライが出した名前は、たった2人。

ミライは女性の言葉で、誰の情報を知りたいのかすぐに分かった。

「そう、それで？」

強気な態度で、言葉の詰まる女性に語りかけるミチ。

「そのナトレと言う女性について、詳しく聞きたいのです」

銀髪の女性は少し声を張って、そう話したのだった。

第133層 ナトレの過去（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第133層 ナトレの過去

ミライは、その銀髪の女性と、ミチからの視線を感じながら、口を開いた。

「……まず、どうしてナトレの事を？」

「それは、話す少し長くなるかもしれませんが……」

「構かまいません」

ミライは、うんと肯うなずきながら言葉を返した。

銀髪の女性はミチにも視線を向ける。

ミチも無言で肯うなずいた。

その光景を見て、銀髪の女性は2人に語りかけるように話し始めた。

「それでは……まず、ナトレはこの国の中心に立つ人物でした」

「それって、ナトレって人が王女だったってこと？」

ミチが聞き返した。

銀髪の女性は、こくりと肯うなずき言葉を続けた。

「そんなところです。それで、ナトレはこの国の上に立っていたのですが、ある日、この国に事件が起きたのです。……あらゆる国の水と言う水が無くなってしまふという事件が。そして、その事件が起きた後に一人の男が現れました。それが今の王です」

「なるほど……」

ミライは小声で呟いた。

何となく、この街の成り立ちが分かってきた……。

銀髪の女性は言葉を続けた。

「今の王は、水を操ると言う能力を持っています。それも相当強い能力です。その能力を使えば、支配する者を操り、いとも簡単に人の命も、自由も奪えます。そして冷酷な王の行動を見ていられずに、ナトレはこの国から姿を消したのです」

「ふーん。王が酷い存在と言う事しか分からないわね。ミライ、まかせたわ」

そう言ってミチは、考えを膨らませているミライの背中をポンと叩いた。

ミライは押されるがままに口を開いた。

「相当強い能力でも、ナトレに勝てるとは思わないんだが……」

「ナトレと戦ったんですか？」

銀髪の女性は驚いた表情と共に、言葉を返してきた。

「いや、戦わなくても何となく分かります」

セーナを短時間であれだけ強くする事が出来るなら、本人自身も相当な実力者じゃないと駄目なのだ。

だからナトレは、あのセーナの数倍上の力を持つてると考えても良い。

それを上回るなんて……。

「今の王は、はっきり言って酷ひどすぎます。当然、ナトレが手を出せないように、様々な弱みを握ってました。それでナトレは手くだを下す事が出来なかったのです」

「うーん……厄やっかい介かいだな……」

ミライは再び考え込んだ。

「そう言えば、私から一つ聞きたいんだけど。何で、偉い存在のナトレが、こつも呼び捨てなわけ？」

突然のミチからの言葉だった。

「それは……」

突然のミチの言葉に、銀髪の女性は言葉を詰まらせた。

銀髪の女性の代わりに、ミライが口を開いた。

「ナトレが敬語が嫌いだったんだよ。僕もセーナも同じ視線で話してた」

「ふーん、なるほどねえ。……王に会いに行ってみる？」

再び突然のミチからの案が飛んできた。

ミライは少し黙り込んでしまう。

「私は、殴り込みでもいいわ。でもミライはそんな訳には、いかないでしょ？」

「まあね。話の通じる相手だったら良いけど……」

「じゃあ決まりね!」

「……まあ、良いか」

最悪、いろいろな手段を使って逃げれば問題ないだろう。そうミライが思っていたら、銀髪の女性から声が掛かった。

「あの……それで、ナトレについて話して欲しいのですが……」

「そうだった。それで、ナトレの何について話せば」

「ミライさんとナトレの出会いから、ここまでの旅の話を手短かにいいます」

「ミライでいいよ。えっと、名前は?」

ミライの言葉に、銀髪の女性は少し慌ててながらも、ゆっくりと声を出した。

「……クロネ、です」

「私はミチ。よろしくねクロネ」

ミライが言葉を返そうとしたら、すかさずミチが言葉を入れてきた。ミライもミチの言葉に続いた。

「よろしくクロネ」

「よろしく、お願いします」

まだ固い口調で、そう言うクロネ。

「少し硬いけど、いいか。それじゃ、まずわね……」

そう言って、ミライは2日間を思い出しながら、本日二度目の旅の話を始めるのだった。

第134層 二人の笑顔（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第134層 二人の笑顔

2週目を話し終わって、ミライは2人の表情を恐る恐る見た。

2人とも素晴らしい笑顔だ。

金髪の彼女は完全に苦笑いだけど……。

そして、苦笑いの引金ひきがねとなった銀髪の彼女は、清々（すがすが）しいくらい笑顔で楽しんでくれたらしい。

「ミライは話すのが上手ですね。何だか、お話が映像になって出てきそうでした」

笑顔で嬉しそうに話すクロネ。

そう、この笑顔に僕は負けてしまったのだ。

「それは、それは……」

ミライも無理やり笑顔を作って言葉を返した。

クロネはとつても話を聞きだすのが上手でしたよ。

そんな事をミライは思いながらも、口には出さずに笑顔で表現する。

「そ、そんな事よりもさ……スープ冷めちゃうから、飲んじゃおうよ。せつかく持ってきてくれてんだし……」

ミライは無理やりにも、旅の話忘れさせようと努力する。

だが、すかさずクロネの言葉の猛攻が来る。

「ナトレは元気にしてたんですね。それにしてもミライが羨ましいです。ナトレと一夜過ごすなんて……」

「ンン」

ミチのわざとらしい咳が、ミライの耳を過よせる。

「う……」

視線を感じながら、ミライは考える。

どうしてこうなったんだ！と、言つと……

第135層 質問攻め(前書き)

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第135層 質問攻め

「ナトレと最初合ったのは、巨大な骨の前だったんだ」

ミライが旅を語り始めた。

長々と一人で語るつもりだったが、クロネがそれを許さなかった。

「何故ミライは、骨の前に？」

「それは……道に迷って、目印になるのがその骨しかなかったから」

「そうですか。では、そこにナトレが住んでいたんですか？」

「いや……ナトレは、遠くから僕の魔法を見て駆^かけつけたらしい」

「そうなんですか」

ミライは、どうにかクロネの質問攻めを回避した。

ミライはしばらく話し続けた。

「……んで、セーナと戦いになって、どうにか勝って」

「セーナさんの勝敗はどうやって決まったんですか？」

再び、クロネの質問攻撃が仕掛けられてきた。

しかも、今回は強攻撃だ。どう回避するか……。

「それは……あれだよ。魔法でズバツって……」

「どんな魔法ですか？」

「うーん……布を切る魔法？」

他に言葉が浮かばなかった。

何かに勘付いたようで、ミチの目が少し鋭くなる。

「凄い魔法だったんですね。出来れば、今度見せてくださいね」

「ありがとう。……それで、その後町に向かって……」

どうにかミライは、クロネの質問攻めの回避に成功し、再び話に戻った。

そして、最後の質問の猛攻が、話の終盤に襲ってきた。

「バリアを敷いて眠ったって、バリアって何ですか？」

「えっとね……これ」

そう言っつて、ミライは手のひらサイズのバリアを作り出し、クロネに渡した。

クロネは手に乗せたバリアをじっと見つめて、一言。

「少し冷たいですね。この上に3人で？」

「そうそう。眠ったのは、もっと大きくて、温度もそんなに冷たく無かったよ」

「ミライ……3人で？」

今まで黙って楽しそうに話を聞いていたミチがゆっくり聞き返した。

「あ……」

ミライは過去の言動を考え直す。

まずい…… 3人1つは…… 言うべきじゃなかった。

「それは、さぞかし楽しい眠りだったのね」

ミチが尖り気味とがりの声で言った。

「それはその……」

「ミライは3人のどの場所で寝たの？」

クロネの質問の猛攻。効果は抜群はっぐんだ。

「それは、端っはじこで……」

「ミライ、それ嘘うそね」

ミチが見透かしたように一言。

「ミライ、嘘なんですか。じゃあどこなんですか？」

再びクロネが聞いた。

いや、もう3人で端じゃなかったら分かるでしょ……。

「ミライ、答えなさい！」

そしてミチのとどめである。

「もう分かったから！……ああ……」

何もかもが崩れる瞬間をミライは感じながら、その後も質問と答えを繰り返すのだった。

第136層 反省会（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第136層 反省会

「ありがとうございます。色々お話が聞けて楽しかったです」

そうクロネは笑顔で言って、部屋の扉に手をかけた。

「またねクロネ。おやすみ」

ミチは、明るく部屋を出るクロネに声を掛ける。

クロネは扉を開けて、出て行くときに後ろに振り向き、笑顔で一言。

「おやすみなさい」

そのクロネの笑顔に、ミライも手を上げて笑顔で見送った。

そして、部屋の扉がパタンと閉まった。

ミチが小さく溜め息をついて、口にスープを流し込む。

そして、ミチが大きく深呼吸をして、一言。

「さてミライ、反省会ね。それとも、もっと詳しく旅の話してくれる？」

何でここまで怒ってるか分からないが、ミチの顔は怒りそのものだった。

「旅の話はもう疲れたから、反省会で良いです」

力の抜けた声で、ミライは言った。

「もうバリアの上での話とかは良いわ。でも1つだけ……布を切る魔法って何よ！」

「それは、その……これです」

ミライは、先の鋭く軽いバリアをミチに手渡した。

それをミチは、片手でブンブン振り回して、後ろに投げた。バリアは、壁に勢い良く突き刺さった。

「ふーん。何だか予想通り過ぎて残念ね。あれの使い方も、きっと残念な使い方だったのよね」

「どんな想像してるか分かんないけど、たぶん残念な使い方であつてるよ……」

言い返す言葉も浮かばないので、とりあえず肯定しておく。

「もう良いわ。何だか攻める気も起きないわ」

「すみません……」

何だかんだで僕のイメージは、今日だけでリセットされた気がする……。

ミチは、疲れきったように口を開いた。

「今日はもう寝ましょ。明日からの事は、明日考えましょ」

「うん……そつだね」

ミライは声のトーンを戻した。

今日の事は、もう忘れよう。
そう思いながら、今日眠る1つのベッドの方を見る。
……ベッドが1つしかない。

「私は床で寝るわ。ミライはベッドで寝て良いわよ」

「いやいや、僕が床で良いよ」

「いいの！私は……高いところ眠るのは落ち着かないの！」

「……分かったよ」

そうミライは言って、ベッド上に座った。

ミチは、服も着替えずに、タオル1枚を自分の体にかけて横になった。

ベッドとは反対の方を見ながら、ミチがミライに言葉をかけた。

「寝るとき明かり消してよね」

「分かった」

ミライは返事を返してすぐに、スイッチ式の部屋の明かりを消した。
そして、暗闇の中ミライはベッドの上で横になり、暗闇に向かって声を出した。

「ミチ……おやすみ」

「……おやすみ」

ミチからの言葉が返ってきて、ミライは少し安心して眠りに付くの

だった。

部屋の薄闇の中、ミチは一人起き上がる。

メニュー画面を淡々と操作して、服をいつもの黄緑のパジャマに着替える。

寝息の音を立て始めたミライをミチは見つめて、ベッドの元へと近づいていく。

「……別に良いわよね。昨日もセーナやナトレって人とも添そい寝だっただから……」

そうミチは小さな声で呟いて、ミライの眠るベッドの上の掛け布団の中にもぐりこんだ。

ミチは、じーっとミライの顔を見つめる。

「……………」

そして、ミチはにっこりと笑うと、すやすやと眠りに入るのだった。

第137層 複雑な朝（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第137層 複雑な朝

「う、うっ……」

窓からの明るい光で、ミライは目を覚ました。

……街の朝は、砂漠の朝よりも涼しいようだ。

それにしても、何だか左手が……。

ミライは視線を天井から、すぐ横に目を向けた。

「え……何で？」

ミライは、ベッドの左側の光景を見て、目を見開いた。

そこには、すやすや寝息を立てて眠るミチの姿があった。

一体何がどうなって隣にミチが寝てるんだ……。

考えても仕方ないので、ミライはミチを起こさないようにそっとベッドから起き上がるうとした。

しかし、左手が何かに引っかかり、起き上がれない。

「何で……手を繋いでいるんだ」

ミライは一人呟く。

ミライの右手とミチの左手は、しっかりと手を繋いでいた。

しかも、ミチの指の1本1本がミライの指に絡まってるという、完全密着型。

ミチが起きたら、大変な事になりそうだ……。

それにしても、眠ってるのに外れないって……こんな事あるのか？

ミライは、この状況をどうにか切り抜けようと、ミチから手を放そうとする。

しかし、手を櫛ろつとも、爪ろつとも、ミチの手が離れる事はなか

った。

それどころか……。

「ん、んんっ？……ミライ」

ミチが完全に目を覚ましてしまった。

ミライは、まだ寝ぼけ気味のミチに視線を向けて語りかけた。

「ミチ……手……」

少ない言葉だったが、ミチにはすぐに通じたようだ。

ミチは慌てて手を放して起き上がると、ミライとは反対の方を向いて、しばらく動かなくなった。

そして、しばらくしてからミチから弱い声が届いた。

「服替えるから、こっち見ないでよね」

「……わかった」

複雑な感じで、2人の朝が始まったのだった。

第138層 懐かしの声（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第138層 懐かしの声

「いただきます！」

「いただきます」

ミチの元気な掛け声で、朝食が始まった。

朝食は、ミチの持っていた小さく硬いパンと、ミライの持っていた水だけだ。

一応朝の出来事は、ミライが気を利かせて、その話に触れないようにしたら丸く収まった。

僕だってそんなに鈍感ではない。……勘違いかもしれないけど。

とにかく、ミチも何だか吹っ切れたようで、元通りになったのでよかった。

「で、早速食べたら行くの？」

ミライは口の中のパンを水で流し込んでから言った。

ミチは、固いパンを噛み締めながら、うんと肯うなずく。

「あともう一つ。お金儲けて、何してたの？」

一生懸命パンを食べているミチを眺めながら、ミライは言った。

ミチは、パンを飲み込んでから、透明なコップの中に入った水を一気飲みして、ミライに言葉を返した。

「例の掲示板よ。1日中手伝ってたわ」

「やっぱりか。もっと楽に稼げればな」

「私は少なくとも、モンスターと戦わないとお金が貰えないって言うのよりは楽だと思うけど」

「確かにね」

ミチの言葉に共感して、ミライは呟いた。

でも、安い金額で良いからモンスターを倒したら、お金が手に入る制度は欲しいものだとはつくづく思ってしまう。

戦闘があんなに危険なのに、何も無いのは……。

「じちそうさまでした!」

「じちそうさまでした」

ミライの考え事をさえぎるように、食事終了の合言葉が出された。

ミチは食後すぐに立ち上がると、座っているミライに対して一言。

「ほらミライ。早いとこ行くわよ!」

「えー……まあ、いいか」

そう言って、ミライもその場を立ち上がった。

そして、部屋を出ようと扉に目を向けたそのときだった。扉がドンドンと叩かれて、勢い良く開けられた。

「ここにミライと言う者は居るか!」

そう言って入ってきたのは、若い2人の女性だった。

第139層 王からの使い（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第139層 王からの使い

「僕ですが何か……」

ミライは、突然入ってきた2人から視線を逸そらしながら言った。
きわどい水着姿にスカートだけってのは……直視できない。

そんなミライの気持ちを気にせず、2人の女性はミライの視線まで回りこんできて、顔をじっと覗き込んだ。

「……まあ良い。ついて来て貰うぞ！王の命令だ」

そう言つて、右の女性が強引に腕を引つ張った。

「何でミライが王様に呼ばれなきゃいけないのよ！」

ミチは2人の王の使いに対して反発した。

しかし、ミチの言葉を無視するかのように、ミライを連れ出そうとする女2人。

ミライは無理やり引つ張る女2人を振り払い、言葉を口にした。

「分かったから……その王の所に行くから、引つ張るのは止めてくれ」

「ねえ、私もついて行く！」

ミチの言葉に乗っかるように、ミライは再び主張した。

「彼女も連れて行くと言う条件で、僕は王の所に行く」

女2人は顔を見合わせてから、1人がミライに一言言った。

「分かった。良いだろう、だから早く行くぞ」

一人の女性は先に部屋を出て行き、もう一人が早くしろと言わんばかりに、扉の前で腕を組んで待っている。

ミライとミチは顔を合わせて肯くと、部屋を速やかに出て行った。それにしても僕は何故、王に呼ばれなきゃいけないのだろうか…

…。

自覚が無いだけあって、嫌な予感しかしない。

そうこう思いながらも、ミチとミライは、王からの使いの2人に連れられるまま、宿を後にするのだった。

第140層 王の宮殿へ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第140層 王の宮殿へ

宿の外はとつくに日が指して、町もそれなりの数の人でにぎわい始めていた。

でも、何だかこの街、違和感を感じる……。

ミライは妙な気分になりながらも、すぐ目の先にある宮殿に向かって、左右に女2人に挟まれるようにして歩く。

そんなミライの後ろを、ただただミチは付いて行く。

その光景を、町の人達が冷ややかな視線を送りつけてくる。

嫌な視線を感じながらも、ミライは歩いていく。

そして、宮殿前の長い階段にたどり着いた。

ミライはその高く、長い階段の前で立ち止まった。

「おい、早く歩け」

右側の女が強い口調で、急^せかして来る。

「何で呼ばれている身なのに、こんなにも扱いが酷いんだ？」

ミライは強い口調で言い返した。

その言葉に対しての返答は、少し時間がたってから返ってきた。

「それは、そのうち分かる。私達からではなく、王^{きんぐ}直々に聞けば良い。さあ、歩け」

「はいはい」

ミライは軽い返事を返してから、長い階段へと足を踏み入れた。まるで囚人の様な使いだな。

とにかく、王に合つて話を進めないと……。

ミライは階段を登るスピードをだんだん早くしていく。そのスピードに付いて行く女2人とミチ。

……そして、数分かけて長く急な階段をミライは登りきった。目の前には古くて大きな遺跡のような宮殿が建造されていた。

「王に無礼は無いように」

左の女から忠告を下される。

ミライはその言葉を聞き流して、広い入り口の宮殿の中へと入っていくのであった。

第141層 宮殿内部（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第141層 宮殿内部

宮殿の内部。

外見はポロポロだった宮殿も、中身は相当綺麗にされている。清潔感のある白色の広々とした、次に部屋に進むための廊下のよな場所。

その広い廊下の両脇に、均等に兵士が置かれている。その数ざっと見て、片側10人の計20人。

しかし、その廊下に置かれている兵士は皆女性で、何より武器は一流の剣だが、防具が三流にも満たない露出服ばかり。

こんな格好でこのエリアの守りが万全だとは思えないのだが……。ミライは目先にある次の部屋への入り口を直視しながら、その女兵士達の間をゆっくりと歩いていく。

当然、左右には女2人が、後ろにはミチが付いて来ている。

そして、長い長い廊下を歩ききった次の部屋への入り口で、左右の左にいる王の使いが、足を止めてミライに声をかけた。

「先に私が行く。その後を付いて来てくれ」

「分かりました」

ミライは、やる気の無い表情と軽い口調を話しかけた女に見せ付けた。

正直、囚人気分もなれたな……。

「さて、王とのご対面だー」

ミライは、わざとらしく声を張ってから、先に入っていた女に付いて行くのだった。

第142層 王の存在（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第142層 王の存在

「ミライを連れてきました」

先に部屋に入った女がしゃがみこみ、そう一言告げた。

ミライは部屋に入って立ち往生。

部屋は廊下ほど広くはないが、人数は廊下と同じくらいだ。

王の左右に10人ずつ、様々な格好で直立している。

そして、中央の一際目立つ椅子に悠々と座っているのか、色々聞かされた王なのだろう。

何も反論をさせまいとする、外跳ね紫髪のイケてる面おもてをしている。

そんなイケ王は、しゃがみこんでいる女二人を手招きしている。

女2人は立ち上がり、ゆっくりと王の元へと歩いていく。

そして、女2人が王の前で再びしゃがみ込むと、王は立ち上がり言葉ことばを吐いた。

「遅い！予定より7分だ！」

王は女2人に、どこからか取り出した鞭むちを振り下ろす。

「申し訳ありません……」

女2人は鞭に耐えながら、口を揃えて言った。

女2人の謝りが無かったのように、王の鞭は激しい音を立て続ける。

……見ているこつちまで痛みを覚えてしまう。

そんな激しい鞭の音の中、何をしていたか分からないが、少し遅れてミチが王の間へ入ってきた。

そして、入るないなやミチはミライと同じく立ち往生。

「え……ああ………えっ………」

ミチの立ち往生は、徐々（じょじょ）に立ち眩（くら）みの様なものに変化していき、ミチは床に崩れ落ちた。

「ミチ、どうした？」

後ろを向いて心配そうにミチに声を掛けるミライ。

しかし、今のミチにはそんな声は届かず、ミチは独り言を続けた。

「な………なんで………なんで、あいつが………ここに………」

ミチの目線の先には、鞭打ちを止めて玉座に座る王の姿。

そして、王はミチに向かって声を掛けた。

「あいつとは酷い言い様だな。久しぶりの再会だと言うのに………スミシャル・リケート・ミチ、よ」

その王の発言は、ミチとミライの脳裏（のうり）に焼きついたのであった。

第143層 王の攻撃（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第143層 王の攻撃

「いやあああああ」

王からの言葉が、部屋内を響き渡った後の事だった。
ミチが突然、発狂した。

その叫びは、前の芋虫の時に聞いたものに似ていた。
ミチはしばらく叫ぶと、力の抜けたような放心状態になった。

「おいミチ！ミチ！ミチ！……大丈夫か」

ミライは、ミチの肩をグツと掴み、大きく揺らしてミチの放たれた心を我に還らせて、しゃがみこみ、語りかける。

ミチは何も言わず、大丈夫と肯きを見せた。
顔色や息の荒さを見た限り、どう見ても大丈夫ではないのだが……。

ミライは、立ち上がると王の方を向き、王に向かって強く叫んだ。

「何なんだよ！ミチもおかしくなるし、それより何故僕を呼んだんだ！」

王からの返答はすぐに返ってくる。

「ミチの新しい彼氏か知らないが、何よりお前が男であるから呼んだ。それだけの事……」

劇団のような動きから、突然鋭い目つきに変わった王は、ミライに向かって鞭を持った右手を向けてきた。

そして、王の口から小さく呪文名が放たれる。

「スプラッシュ・ショット
圧縮の水撃」

「ぬあっ！」

ミライの左足を、もの凄い速さの水鉄砲のようなものが貫通していた。

ミライは足を抱えて、しゃがみ込んだ。

長ズボンには小さな穴が貫通して空き、血がドロドロと流れてきた。

激しい痛みが、ミライを襲う。

「ミライ！」

そうミチが叫んで名前を読んだ。

ミチはシュツと立ち上がり、王の方を向いて叫んだ。

「彼は何も関係無いじゃない！一体、王になって何を企たくらむのよ！」

「久々に会ったのだから、名前ぐらい呼んで欲しいものだな、ミチ」
「よ」

「あんたの名前なんか、とっくに忘れたわよ！」

「我が名は、リケート・グラム。呼び方はグラムで良いぞ？」

そうグラムは言って、ふてきに笑みを浮かべた。

ミチは、グラムの笑みを見る事無く、僕の方を心配そうに見ている。

グラムは何を考えているか分からないが、戦わないと……死んで

しまつ。

ミライは足の痛みに耐えながら立ち上がり、戦つ意思を固めて呪文を叫んだ。

「アベンジス情報強制公開」

第144層 絶対王者（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第144層 絶対王者

ミライの呪文発動後、このフロア一帯のキャラクターのステータスが表示された。その中からグラムのステータスに目を向けた。

グラムのレベルは35で、HP体力が1636。MP魔力は639。職業クラスは水隸術師すいれいじゆつしで当然属性は水か。

それにしても良く見えるようになったものだ……。そして、効果範囲も相当広く……。

ミライは強くなりつつある自分の魔法を感じながら、グラム以外のレベル1のステータス表示を見透みとおした。

「え、クリー？」

ミライは懐かしい名前を目にして、思わず声を上げた。

こちら側から見て、グラムから左に3人目の人物が、前のエリアで戦った魔女クリーだったのだ。

前の戦闘時の可愛らしい格好から豹変ひょうへんしていたので、まるで気づかなかった。

ミライの声には、まるで反応する様子は無いクリー。

「ほう。どんな魔法かと身構えてみれば、ただのストーカー魔法か」

グラムは不敵な笑みを浮かべながら言った。

ミライは即座そくざにメニュー画面ほつめんから箒ほうを取り出して、グラムに声と魔法を投げつけた。

「これからが本番だ！燃盛フゲネス・フレイムる変化球」

ミライの放った大きな炎の玉は、大きさに比例しない猛スピードで

グラムに向かって飛んでいく。

そして、グラムに直撃して、爆発音と共に燃え上がり、天井に大きく穴を空けた。

しかし、狙ったはずのグラムと地面は全くの無傷で、HPも1しか減ってない。

ダメージを食らったのは、その周りの女子たちで、ライフは半分以上持って行った。

半殺しを狙って放ったつもりなのに、効いてないなんて……。そして、なるべく範囲の狭い魔法を放たないと、犠牲者が出てしまう。

「フハハハハハ……貴様の魔法はその程度か！」

その言葉と共に、グラムは圧縮の水撃を飛ばしてきた。

「魔法反射！」

ミライは咄嗟の判断で、魔法を放った。

グラムの魔法は、バリアで跳ね返り、地面に小さな穴を空けた。

グラムはミライの魔法を見て、少し驚きの表情を見せてから、再び笑みを浮かべた。

「様々な魔法を使う魔法使いだな。職業が気になるものだな。まあ、全ての魔法を出し切るが良い。全て受け止めて絶望に浸らせてやる」

「職業は魔法使いだ！魔法の激圧」

ミライは、グラムに言葉を返して、魔法を放った。

今まで使って来た魔水の激圧の中で、一番細い形になった。

「うそ……」

ミチは目の前の光景を見て、声を漏らした。

魔法はグラムにだけ命中した。だが、グラムは全くの無傷だ。

グラムは魔法を跳ね返すと言っよりは、吸収してダメージを無くしている。

一体どうやって……。

グラムは、ミライの表情を見て笑みを深めたと思ったら、残念そうな表情を浮かべてミライに声を掛けた。

「その様子だと、貴様の魔法も出尽くしたようだな。そろそろ終わりだな」

そうグラムは言って、再び鋭い水鉄砲を放った。

ミライは、再び瞬時に魔術反射を目の前に張った。だが、グラムの魔法はミライの魔術反射を粉々に砕いて、ミライに命中する。

「ぐあっ！うあああああああ……」

「ミライ！」

ミチの呼びかけが掻き消される位、ミライは大声で痛みを叫んだ。

グラムの攻撃は、運悪くミライの右肩から右肘までを貫いた。

この世の物とは思えぬ痛みがミライを侵し続ける。

ミライは痛みには耐え切れず、地面に崩れ落ちて、体を起こしてグラムを見るのがやっとの状態。

「物理水激スプライドと言って、俺の物理攻撃だ」

グラムは笑顔で説明すると、物理水撃スプライトをミライに向かって放つ。
その攻撃は、今度はミライの左腹部を貫く。

「ぐふあっ」

ミライは真っ赤な血を口から吹き出した。

ついにミライは、体も支えられなくなり、地面に完全に倒れ込んだ。

「もう止めて！お願いだから……もう……」

ミチの涙交じりの声が響き渡る。

グラムは、ちらりとミチの方を向いて、再び視線をミライに戻し
容赦無しよっしやに魔法名を放った。

「アンダーウォーター・ワールド
水中の世界」

グラムが魔法名を放った瞬間、ミライに水が覆い被おおされて、円状に
纏まとまった水と共に、ミライの体も浮かび上がっていく。

ミライにダメージは無いが、呼吸が出来ずに、もがき苦しむ。

「……………」

ミチが何か叫んでいるが、水で耳が塞がっている以上、ミライは何も聞こえない。

こんな終わり方かよ……。

ミライは、薄れゆく意識の中、ミチとグラムを少し高い位置から見つめる。

しばらく見ていると、ミチはだんだんグラムの元によるよると近づいていく。

「な、何を……」

ミライはゴボゴボと声を出し、水の中でもがいた。

ミチは玉座に座るグラムの、靴に口付けをしたのだ。

そのミチの表情は、死んでも忘れれそうに無いほど、顔を真っ赤にして涙を流していた。

くそう。こんな所で……こんな形で……。

ミライは、後悔と無力さの見えない涙を流しながら、水の中で意識を完全に失うのだった。

第144層 絶対王者（後書き）

恐らく、今章のメインシーンの1つ。待ったかいあったな……

第145層 無力地獄（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第145層 無力地獄

青と紫の光が交差する世界。

全くの無音の謎の世界。

足元に移るのは、紛れも無くミチの姿。

ミチに対する様々な拷問、調教。

「もう……止めてくれ！」

ミライは叫ぶが、その声は自分の耳にすらも入らない。

ただ見ることにしか出来ないという、無力地獄。

そんな拷問に近い地獄の中、ミライの心は迷い続ける。

もつと力があれば、もつと判断力があれば、もつと……。

後悔に染められたミライの心に、一筋の明るい光が謎の世界から差さされた。

ミライは、その光に向かって歩んでいく。

ミチの表情をしっかりと記憶に留めながら。

「おい！おい！おい！お、起きたか……新入り」

ミライは、太い男の声でゆっくりと目を覚ました。

ミライの視野に入ったのは、何人もの男の顔だった。

一番顔が近いのは、アフロ頭の男だった。

「じ……じは……つぐっ」

ミライは、足元にももの凄い痛みを感じて声を上げる。

「ふうーようやく目覚めたか。まだ左足は回復中だ。無茶はするな」

誰から話し掛けてきてるか分からないが、ミライはこくりと肯いた。
そう思えば、血塗れちまみだった右肩と腹部は、完全に痛みが消えてい
る……。

目では確認できないが、恐らく空いた穴も塞がってる気がする。

「ありがとう。助けてくれて」

「当たり前よう！今までここに送られてきた奴らの中で、一番怪我が酷かったからな。戦闘の爆発音もここまで響いたしな。そして勘違いするな、俺たちは助かってはいない」

アフロ男の明るい口調が、瞬時にミライの耳元に入っていく。

第146層 迷える職業者たち（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第146層 迷える職業者たち

ミライは、左足の痛みを堪えつつ、体を起こして辺りを見渡した。ミライを取り囲むのは、もの凄く生き生きとした表情の、汚い男達。

服は汚れているが、みな強制の服ではなく、個性的である。

そして、この部屋の片側は、隙間の細い鉄の縦柵たてさくが取り付けられており、その向こう側は通路になっているようだ。

ミライの現在地は、どこかの広い牢屋やじうのようだ。

「ねえ、僕はここに着てからどれだけ気を失ってたの？」

ミライはアフロ男に目を向けて言った。

「分かんないが、たぶん一、二時間だな」

「ありがとう。それと……」

ミライは軽く礼を言って、僕の左足を熱心に回復させている黒髪の男に目を向けた。

男は、牢屋には不適切な紺色のスーツの格好をしていて、頭にはヘッドフォンがかかっている。

僕の傷口にかざしている両手は、細く輝いていて、集中力の途切れない青の瞳は髪で片目我が隠れているのに、見ているだけで吸い込まれそうだ。

回復に集中する男をジッと見つめるミライに、アフロ男は苦笑いを浮かべて声を掛けた。

「あいつは、ランツ。この牢の中で唯一ふたごいの回復役さ。そして、一種

のムードメーカーでもあるな」

「なるほど。じゃあ……あなたの名前は……」

ミライは、アフロ男の雰囲気を見て、敬語を捨てて話した。

「俺の名は、エクトリーヌ。この牢の恐らくトップだ！あだ名はボンバー番長、よろしく！」

エクトリーヌは、苦笑いから眩^{まぶ}しいほどの笑顔に変えると、ミライに右手を差し出した。

ミライはエクトリーヌの右手をがっちり^{つか}と掴み、言葉を返した。

「よろしく、エクトリーヌ。僕の名前はミライ。職業^{クラス}は魔法使いをやってるよ」

「俺は格闘家だ。あと、この牢にいるのは全員、職業^{クラス}を持った迷える闘士たちだ」

エクトリーヌは、そう言って胸を張る。

つまり、ここに居る全ての人が、この世界に最初から設定されているNPCではなく、ミライと同じような感じで、この世界に迷った挑戦者であるということ。

「それにしても、お前の情報通りだったな」

エクトリーヌは、沢山いる男たちから一人に言葉を向けて、手招きをする。

そして、ミライの視界に見覚えのある男が姿を現した。

あの時、魔女クリーと戦ったときにいた男の片方。

名前は……思い出せない。

ミライの驚いた表情に、その男は不敵に笑みを浮かべてみせる。

「お、おまえは！……誰だっけ？」

「おい！」

その展開に牢屋の中は、笑いの歓声が沸きあがったのだった。

第146層 迷える職業者たち（後書き）

作品の途中に出てきた『ランツ』は、抹茶さんからの提供です。ありがとうございます！

キャラクター募集をやつて、恐らく書きにくさと発想がトップクルアのキャラクターですw

何が書きにくいかって、まず見た目の、スーツにヘッドホン。このキャラを使う場所なんて……考え付きませんでした。

で、逆転の発想で牢屋に待機させました。我ながらよい判断だ。

説明はざっくり目にしましたが、スーツに黒髪にヘッドホン……十分でしょう。

キャラ設定は複雑です。ですので、そこは少し私の手を加えています。

……と、言った感じで、一般の募集キャラで被りが無ければ、こんな感じで登場開始次の後書きで、軽く紹介とか書かさせてもらいます。

今後の登場にも期待です。

では、また明日！

第147層 クリーの傍ら（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第147層 クリーの傍ら

笑いが鳴り止まぬうちに、もう一度名前の分からない男が聞き返してきた。

「本当に覚えてないのかよ」

「いや、クリーの傍らかたわってのは……覚えてるんだけど……」

ミライは苦笑いを浮かべながら話した。

その苦笑いに釣られるように、無名男も苦笑いを浮かべて溜め息をつき、話し出した。

「それだけ覚えてるなら良いか。名前名乗ったか俺も覚えてないしな。俺はギユウ。なんだかんだ色々合つて、ここに来たわけだ」

ミライは名前を名乗られても、パツとしない表情をしたままだ。それだけ、クリーの印象が強すぎるのだ。

「ギユウね……そういえば、もう一人いたような」

ミライは、過去を思い出しながら口を動かした。

ミライの言葉に、ギユウは少し表情を曇らせて、おもむろに言葉を口にした。

「……ああ、いたよ。でも、ゼインは……殺されたよ。……卑劣な王に！」

ギユウの尖った声に、ミライは表情を凍らせて、周りの男達も笑う

のを止めた。

ミライは少し時間を置いてから、声を出した。

「……ごめん」

「良いんだ。殺したのはお前じゃないし、何より逃げようと思えば逃げれた戦闘だったし……」

ギユウの話し声は、どんどん小声になっていった。

ミライは、どう声を掛けて良いか迷っている中、エクトリー又は2人に声を掛けた。

「まあ、とにかく、今は過去の悲しみに浸る前に、今をどうにかしようじゃないか」

エクトリー又は2人の方をポンポンと叩き、満面の作り笑いを見せた。

第148層 脱獄への思い（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

キャラ名が被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っています。様々な表現が含まれますが、話の内容と、作者の成長を見守ってください。

第148層 脱獄への思い

エクトリー又は本当にいい人だな……。

そう思いながら、ミライは今一番思っている心情を声に出した。

「あのさエクトリー又」

「ん？どうした？」

「僕さ、いち早くここから出たいのだけど……」

ミライの言葉に、エクトリー又は少し困った表情を見せた。

そして、一呼吸置いてからエクトリー又はミライに語りかけた。

「何故、いち早くここから出たい？」

「捕らわれた仲間を助きたいから」

ミライは、淡々だが重圧のある口調で答える。

エクトリー又も表情一つ変えずに、ミライに言葉を向ける。

「正直、仲間を助けたいと思うものは、この中に沢山いる。俺もそうだ！……だがな、それは時が来るまで無理だと言っておく。一つは、この牢からの脱出方法が無い。どんな強者が揃っても、レベルが1では檻の柵にも、周りを囲む大きな壁にも、傷一つ付けられないんだよ。それに……」

「そんなの、やって見ないと分かんない」

「俺たちはやった！だが無理だった……」

エクトリーヌの表情から、脱力感が見えた。

ミライは少し周りを見て、エクトリーヌに質問を投げた。

「エクトリーヌ。この中に魔術師は？」

「そんな女みたいな職業は……って、まさか」

エクトリーヌは、何か考えが浮かんだかのように、ミライを見つめた。

ミライは、回復中の左足を引きずりながら立ち上がり、声を張って発言した。

「僕たちの負かされた相手は、少なくとも水隸術師すいれいじゅつしと言う魔術師だった。そして、それは僕も同じ魔法使いだ！……少しその辺の壁から離れて」

そうミライは言って、牢ひだりよすみの左四隅の壁を指差した。

エクトリーヌも指示を出し、牢の左四隅から囚人達を離させた。

「僕は1日でも早く、彼女の笑顔が見たい！……燃盛フゲネス・フレイムる変化球！」

ミライが呪文を叫んだ瞬間、四隅に向かって、大きな炎の玉が放たれた。

第149層 衝撃的文通（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称出て、他作と被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っ
ています。初心者の文章構成ですが、話の内容と、作者の成長を優しく見守ってください。

第149層 衝撃的文通

ドーンと言う爆発音と共に、牢内に砂煙が立ち込めた。

牢内中のだれもが咳き込む中、徐々に砂煙は治まり、じわじわと眩しい光が見え始めた。

牢の中に、一際目立つ大きな穴が現れた。

その光景を見て、だれもが言葉を出せずにいた。

「……ミライ、やるじゃねえか！」

大分時間がたってから、エクトリー又は笑いながら言って、ミライの肩をがっしり腕で包んだ。

そのエクトリー又の言葉で、牢内は歓喜の声で包まれた。

ただ1人、ミライは声を上げずに、冷静に言葉を口にした。

「……だめだ、ここからじゃ抜け出せない……」

ミライの言葉が牢内全体に広がると同時に、牢内のむさ苦しい空気に、一筋の涼やかな風が吹きかけた。

ミライは、自分の穴を空けた方向を指差した。

ミライの指差した先は、この町を囲む水壁が見えた。

しかし、見えている水壁は、大分上部の丸まりの強い部分だった。

一人の男が、空いた穴から下を覗き込んで絶句した。

「無理だ……こんな高さ……」

「みんなの持ち合わせを繋ぎ合わせて、1本のロープにしたら……
って無理か」

エクトリー又は提案を出す^{みずか}が、自ら現在地の高さを確認して、諦めた。

全員が、言葉を再びなくし、誰もが諦め始めた。……その時だった。

「いよーし……完全治療終わり！」

その声を上げて立ち上がったのは、今まで座りながらミライの足を回復させていたランツだった。

ランツは、耳を塞いでいたヘッドホンを外して、肩に掛けた。

ミライは、どこかしら力の感じ取れないランツに声を掛ける。

「傷の治療ありがとう。助かったよ」

ミライは足の痛みがなくなっているのを、足をグネグネ動かして確認する。

ランツはまじめな表情をして、ミライに言葉をぶつけた。

「音楽の力は最高だ！」

「……え？」

突然の言葉に、ミライは思わず聞き返そうとする。

すると、やれやれとエクトリー又は「また始まったか」とミライとランツの間に割って入った。

「ランツ、何かテンション上がるの1曲頼む。……そしてミライ。彼はこういう男だ」

「うん。さっぱり分かん」

ミライはエクトリーヌに苦笑いで言葉を返した。

そしてランツは、エクトリーヌの言葉を聞いて、穴の空いた壁とは反対側の壁までゆっくりと歩き、ずるずると壁に横たわりながら座ると、メニュー画面を開き、手元にギターを取り出した。

そして、数秒ほどこめかみに指を当てて考えたそぶりを見せると、突然ギターで陽気な音を醸し出した。

その音色に、思わずミライは耳を傾けてしまう。

……そういえば、この世界に入って音楽なんて、まるで聴かなかつたな。

何だか、もの凄く……落ち着かない！

エクトリーヌの醸し出すBGMによつて、荒れ狂うように牢内は賑わい始めた。

踊りだす者、声を張り出すもの、そして何所かしらから楽器を取り出して、高音の笛や、リズムカルなドラムの音まで鳴り出した。

その全員に共通するのは、僕も含めて笑顔になってしまう事だ。

まさに、音楽の力は最高である事を実感してしまう。

陽気な音楽の中、エクトリーヌはミライに小声で話しかけてきた。

「……何故そこまで、ミライは強いんだ？」

「技や魔法は、単純なステータスだけでなく、その時の感情や強い思いで、いくらでも威力に強弱を付ける事が出来るんだ。……つて、僕は思ってるんだが」

第1エリアのボス戦時の覚醒も、セーナ戦でセーナの体を傷つける事無く布を引き裂いたのも、感情や思いが反映してるんだと思う。その事を重視して、少なくとも僕は戦ってきた。

「だから、『1日でも早く彼女の笑顔が見たい！』なんて叫んだの

か

エクトリーヌは小声ながらも、ミライの口調を真似して言ってみせた。

ミライはその言葉に、少し苦笑いを浮かべる。

あれ……それは、心の中で叫んだつもりだったんだが……。

考えただけで、顔の温度が上昇していく。

「ま、まあ、とにかくレベルなんて関係ない」

「そうか……でも、さすがにあの王を倒すのは、例え脱出しても無理じゃないのか？」

「……少し時間は掛かるが、当てはある」

ミライの言う当てと言うのは、ナトレの存在である。

彼女に鍛えてもらえば……少なからず、ミチを助け出す位は出来ると思う。

保障は無いが、セーナが1日であの強さだ。少なくとも自分でどうにかするよりは、効率が良いはずだ。

「そうか……。あと、もう一つ思うのだが……」

エクトリーヌが言葉を続けようとした。その時だった。

「おい！ミライ、少し顔を出せ！」

強気の口調の女兵の声が、牢内に向けられた。

エクトリーヌは、行って来いと首を女兵に向かって降った。

「何か用でも有るのですか？」

ミライは女兵にやさしめの声で振舞った。

ミライ宛にやって来たのは、ミライを王の下まで連れて行った女兵の一人だった。

「王から、お前宛に手紙を預かった。目を通すと良い」

そう言つて、ミライに折りたたまれた紙を渡す女兵。

ミライは言われるままに、ゆっくりと開き、内容に目を通した。

その文通を覗き見しようと、エクトリーヌも含む数人がミライの後ろから内容を覗き込む。

……文章を見た誰もが言葉を失った。

そして、色々な感情が込み上がり、ミライは叫んだ。

「な……こんな有りかよ！何だよこれ！」

その絶叫は、一瞬で牢内の明るい音楽や空間をぶち壊した。

手紙の中に書かれていた内容。

それは、ミライを3日後の昼0時に一時的に脱獄さしてくれると言
うもの。

その理由は、……『3日後の昼0時に、リケート・グラムとスミシ
ヤル・リケート・ミチの婚約式を行う。君も招待してあげよう』…
…と言う、卑劣な内容だった。

ミチが、素直に婚約的な事を認めるはずが無い。

だとしたら、完全にあの男の勝手な行動……。

許せない。……許せない！

ミライは血走った目を女兵の目に向けて、小さく呪文を呟いた。

「瞬間接近」
アフロトチャー

次の瞬間。ミライは、女兵と牢獄の柵の間に入り込むような形で姿を表した。

牢内の男達は皆驚き、目の前に姿を現したミライに、女兵も驚き、尻餅をついた。

そんな女兵を、ミライは無言のバリアで周りを囲んだ。

女兵は慌ててバリアを叩くが、ビクともしない。

牢内から、エクトリーヌがミライに声を掛けた。

「おい。お前って奴は……まあ良いが、牢から抜け出してどうする気だ。はつきり言って王にはまだ勝てない」

「そんなの知るか！いち早くミチを助けに行かないと……」

ミライは完全に混乱状態に陥おちいっている。

そのミライの精神状況にエクトリーヌは、再び声を掛けた。

「……じゃあ、あれだ。PTリストだけお互いに登録しよう。文通代わりにな」

エクトリーヌはメニュー画面を開き、ミライに画面を見せつけた。ミライも早まる気持ちを抑えながら、メニュー画面を開く。

そして、お互いにPT登録を完了した。

エクトリーヌは登録と同時に、ミライに真剣な口調で言葉を向けた。

「気をつけていけよ。ミライ、死ぬなよ」

「必ず生きて、全て助け出す。……またな」

そうミライは言い残して、牢獄の通路を走っていくのだった。

第149層 衝撃的文通（後書き）

投稿を1日ですかね（10分）遅らせました。

その理由は、今後の更新ペースを変更しようと思うからです。（受験生ですし！）

区切りの悪い毎日更新よりも、良い所で切り抜く週間更新にします。

（指摘されました）

また、指摘があれば変更も考えますが、一応これから1週間更新。と言っことで、よろしくおねがいます。

第150層 逃走、奇跡、思力、強化（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称出て、他作と被ったりしますが、作者はオリジナルだと思っ
ています。長編物ですので、話の内容と、作者の成長を優しく見守って
ください。

第150層 逃走、奇跡、思力、強化

「ハア……ハア……くそう、どこに行けば良いんだ……」

ミライは、何処なのか判断出来ない通路を、ひたすら逃走していた。通路の横幅は、人二人が通れるか通れないかの細い通路だ。

ミライは牢獄脱出後、上りの階段を掛け上がり、様々な選択肢の別れ道を勘で曲がって今に到るのだ。

「まつ……待て！」

少女の様な甲高い声が、ミライの背後で放たれた。

僕の背中を追って走るのは、本当に短めの黒髪の女の子だ。

もちろん僕と同じ挑戦者だったが、こんな小さい子まで……。

そう思いながら逃走していると、再び通路の分岐点が目先に姿を現した。

「……………左だ！」

ミライは通路を左折して、後ろを確認しながらも走り続けた。

気がつけば追っ手の少女との距離が離れていたらしく、少女の姿も声も確認できなかった。

その後は誰にも遭遇する事無く走り続けた。

そして、ついにミライは1つの扉に辿り着いた。

大きめの扉の左右には、松明が激しく燃えている。

……もしかしたら、この先にミチが居るかもしれない。

ミライは扉の前で立ち止まり、乱れた呼吸を整え、唾を飲んだ。そして、扉の円形の取っ手を掴み、ゆっくりと扉を引き開けた。

「……倉庫？」

ミライは、扉を開けっ放しで部屋内を見渡した。

少し高い位置にある柵窓から夕日が差し込んでいて、今までの通路より明るい空間。

そこに、剣や斧といった様々な武器が雑に置かれていた。

部屋内が埃^{ほこ}つぽくない所を見ると、この部屋はそれなりに使われている部屋らしい。

そんな部屋で、ミライは見覚えのある形の箒^{ほうじ}を目^めで捉えた。

「あれは、もしかして……」

ミライは少し足を速めて歩み寄り、地面に落ちている竹製の箒^{ほうじ}を手^てに取った。

この箒^{ほうじ}の柄^えの折れたのを直した跡……間違いなく僕の箒^{ほうじ}だ。という事は、ここはグラムに敗北した者の私物置き場と言った所だろうか。

ミライは部屋内の武器を興味津々に眺めていた。その時だった。

この部屋の唯一の入り口である大きな扉が、もの凄い物音を立てて開いたのだ。

そして、全開きになった扉から流れ込むように女兵達が部屋内に入ってきた。

「観念しなさい、脱獄者！」

恐らくあの少女からの言葉だった。

ざっと見て数十人だが、これだけ多いと誰が発言してるかさっぱり判^{わか}らない。

ミライはその圧倒的な数で、気がつけば柵窓際の壁に追い詰められていた。

数十人の先頭に、一番最後に出会った少女が歩み出て、ミライに向けて言葉を放った。

「あなたがあの通路を左に曲がったのを確認して、私は通路内の全ての兵を呼び集めたの。ここで行き止まりなのが分かっていたからね」

少女は不敵な笑みを浮かべている。

……道理で、後ろに振り向いたときには居なかった訳だ。

小さいながらも、良い判断する子だな。

ミライは感心の目を女の子に向けていると、少女から再び声が掛けられた。

「何、ジロジロ見てるのよ」

「いや、頭の冴える女の子だなーと……」

ミライは、体を屈めて少女に言葉を返した。

「……私を身長だけで判断してるでしょ！私は、もう20を越えた成人なの。バカにしないで！」

馬鹿にした覚えは無いのだが、女の子……ではなく、彼女を相当怒らせたようで……。

小さき女兵は怒りを静めると、ミライにゆっくり歩み寄り、声を張らせて言葉を向けた。

「さあ、脱獄者。早いとこ捕まって貰うわよ。抵抗しなければ、痛い目にはあわせないから」

そう言う少女の表情は、今から甚振りますよと言わん限りに目が見開いていた。

……しかし、この数相手では抵抗しても無意味だろうな。どうすれば……。

小さき女兵はゆつくりとミライを捕らえに歩み寄る。

そして、女兵の顔に橙色の眩しい夕日が照りつけた。

その瞬間、ミライは何かを思い浮べて柵窓の方をチラリと見た。

……一か八か、これしかない！

ミライは小さな可能性を一瞬で頭で固めて、行動に移した。

歩み寄る女兵に、ミライは右手を突き出し、手を広げた。

その行動に、部屋内の女兵が動きを止めた。

「何？この数に抵抗する気？」

小さき女兵は不敵な笑みを浮かべて言った。

その言葉に返答する事無く、ミライは女兵たちに背を向けた。

そして、壁際に目線を送りながら、両手に1本の箒を持って手を上に上げた。

「そう。それで良いのよ。……確保」

小さき女兵の声で、大量の足音がミライに向けられた。

ミライは、大きく息を吸い、夕日を差し出す柵窓に向かって叫んだ。

「ミチ、僕は必ず助けに戻るからな！待ってるよ！」

ミチに聞こえるように叫んだと言うより、自分の戒めのために叫んだ。

ミライの突然の咆哮に、女兵は動きを止めた。

ミライは、左手を筭から手放し、呪文名を叫んだ。

「フゲネス・フレイム
燃盛る変化球！」

部屋内を一瞬明るく照らし出したミライの魔法は、すぐ目の前の壁を崩壊させた。

部屋内を砂煙が包み込む。

「ケホツ……ケホツ……一体何を……」

苦しそくに片目を開く小さき女兵に、ミライは不敵な笑みを浮かべて、声を掛けた。

「またね。はたがひ二十歳の少女さん」

ミライはその言葉の後、壁に出来た明るい穴に向かって、勢い良く身を投げ出した。

「待ちなさいよ！」

女兵の呼び止めの声は、ミライに伝わることは無かったのだった。

「……バリア魔術反射」

ミライは、空中で3枚目のバリアをミライの落下する方向に作り上げた。

そのバリアに、空中で叩き付けられるミライ。

そして、ミライを受け止めたバリアを解除して、再び地面に向かって落ちていく。

最初のエリアの大樹からの落下の時に使用した落下速度低下術だが、魔力消費の少ない割にはもの凄く便利な技術である。

しかし、前回は作り出したバリアと共に落下を繰り返していたのだが、今回は毎回解除する事にした。

そうしたのは、1枚目のバリアが鳥系統の飛行生物に衝突してしまっただから。

あの時慌てて解除をしたから良かったものの、下手すれば無害の生物が死んでしまうところだった。

……今考えてみれば、バリア落下地点に人でも居たら、それこそ大惨事だ。
だいさんじ

「バリア」

ミライは4枚目のバリアを造り出した。

そして、造ったバリアに叩き付けられる。そして解除。

これを繰り返すだけの簡単なお仕事である。

これをしないと死んでしまうわけだが……。

……そして、繰り返す事、数十枚目。ついに着地点の地面が見え始めた。

街で見た、砂を固めたような地面だ。

「バリア……ってあれ？……バリア！……」

ミライは、淡々と繰り返してた通りにバリアを発動しようとした。しかし、ミライの言葉でバリアが発動される事は無かった。

「バリアッ！……バリア」

声を張り上げて、集中して唱えても、バリアは出現しない。

ミライの落下速度は、今まで以上に上昇していく。

……このままじゃ……まずい。

「ぬうあああああああああああああああああああああ！」

ミライは風圧を大きく受けながら叫んだ。

地面との距離。

……推定100mを切った辺り。

どンドン地面が迫^{せま}ってくるのが嫌でも分かる。

このまま地面に着陸すれば大惨事。

……下手すれば死に兼^かねない。

何故、急にバリアが……どうすれば、どうすれば……。

「ああああああああ……ああ？」

ミライの落下地点に、偶然にも人が通りかかった。

人が通りかかったのと同時に、ミライの希望の光も脳内を通りかかる。

ミライはそれをいち早く発見して、声の出る限り叫んだ。

「その人！上だ！上を見て！上！上！上……！」

ミライは上と言う単語を連呼した。

その叫びが聞こえたのか、通りかかった人がふと上を見上げた。

その瞬間、通行人の銀色の瞳が、ミライの瞳と一瞬だが交わった。

そして、その瞬間を逃すまいと、ミライが全力で魔術名を叫んだ。

「^{アブローチャー}瞬間接近ア！」

ミライが叫んだ瞬間、ミライは地面の上に立っていた。
咄嗟の判断は、無事に成功したようだ。

「ありがとう。助かった……よ？」

ミライは、その通りかかった人にお礼を言おうとしたが、辺りを見渡しても誰も存在しなかった。

……あれ、あの子は一体どこに……。
そうミライが思った瞬間だった。

空から何かが落下してきて、ミライに直撃した。

ミライは、その落下物と共に地面に倒れこんだ。

「……………つつ……んん!？」

ミライは仰向けのまま、ミライの上に乗りがかる重い物に目を向け、言葉を失った。

ミライに乗りかかったのは、綺麗な瞳の赤い髪の女の子だ。しかも馬乗りである。

その子の赤髪は長く、地面に付いているミライの手を毛先で撥るほどだ。

そして、服装の黒いマントとローブを見る限り、同じ魔法使いだろうか。

黒い服装に反比例している白い肌の表情は、これと言って落ち着いているようだ。

しかし、今の体勢で落ち着かれても困るので、ミライは優しい口調で言葉を向けた。

「あの……えーっと……降りてくれる？」

「あっ……………ごめんなさい」

そう言つて、女の子は落ち着いてその場を立ち上がり、ミライとの距離を少しとつた。

ミライもその場を立ち上がり、服を軽く掃い、赤髪の女の子に目を向けた。

立ち上がつてみると、身長はミライとそこまで変わらない様だ。

2人の間を時間だけが過ぎていく。

気まずい空気の中、最初に声を掛けたのはミライの方だった。

「あのー怪我は無い？大丈夫？」

「……大丈夫」

女の子から返つてきた言葉は、それだけだった。

再び気まずい空気の中、一羽の鴉からすがバサバサと飛んできて、女の子の肩にピタッと止まった。

ミライはその肩に止まった鴉に視線を送り、再び女の子に声を掛けた。

「その鳥、君の？」

「そう。タツトつて言つたの」

そう言いながら女の子は、鴉の首元を人差し指で撥くすくすつた。

そのタツトと言う鴉も、気持ち良さそうな素振りそぶりを見せる。

「ふーん、可愛いね。君の名前は？」

「……ネク」

ミライの質問に、頬ほほを赤めかせながら小声で返すネク。

「ネクか……。僕はミライ、職業クラスは魔法使いをしてるよ」

「……ミライ」

小声でミライの名前を復唱ふくしょうするネク。

ミライは、すぐ近くに落ちている黒の魔法帽に気がつき、手に取った。

そして、その帽子に視線を送るネクに声を掛けた。

「そう、ミライ。……僕は急がなきゃいけないから。はいこれ」

ミライは黒の魔法帽を、ネクの頭にポンと乗せてあげた。

「……ありがとう」

「「ちら」ぞ。それじゃあね」

ミライは、その言葉を最後に走り出した。

……とにかく目指すのは、この水で囲まれた街の外。
ナトレに合わなくては……。

ミライは様々な思想の中、水の壁に向かって、夕焼けの街中を走って行った。

……一人、神殿の横で残されたネク。

「タット……鳴かなかったね」

「カー」

ネクの呼びかけに答えるように鳴くタツト。
そして1人と1匹は、不思議なオーラを醸し出すミライの背中を、
見えなくなるまで見届けたのだった。

街中を全力で走り抜けて、ミライはこの街の入り口とも言える、
水で出来た壁前に来ていた。

……前に来たのも、これくらい夕暮れだっけか……。
安全だと分かっているけど、水を潜るといって緊張感から息を呑む。
実際に水で死にかけてのだから、無理も無いかもしれない……。
ミライは心を落ち着かせたから、勢い良く水の壁を通り越した。

「……どうにか脱出は出来たな」

ミライは街の宮殿の方を振り向いて、一人呟いた。
さて、ナトレを探さないと……。
そう思い、ミライは辺りに広がる大砂漠を見渡した。

「……何あれ」

大砂漠には相応しくない光景をミライは目の当たりにして、思わず
声を漏らす。

ミライの目線の先には、もの凄い長さの女性の行列だった。
そして、その行列の先端で何かをしているのは、ナトレとセーナ
の姿だった。

……一体何が在ると言うんだ……。
ミライは、何か嫌な予感を感じながらも、2人の方に向かって走っ

ていくのだった。

ナトレとセーナに直接話を聞こうとしたら、行列の後方の女性軍から「並べ」と野次が飛ばされまくったので、ミライは仕方なく、行列の最後尾に並んだ。

これだけ並んでまでも手に入れる価値の物って……。しかも、そんな物どうやって2人が手に入れたんだ。

ミライは色々考えながら、行列をゆっくりと歩み進める。

そして、1時間を越える時間を費やし、ミライは2人の元へとたどり着いた。

「いらっしやいませー。……って、ミライ！」

そうやってセーナは驚いた表情を浮かべた。

ミライの存在に、ようやく2人は気がつき、ミライを行列から外させた。

それにしても、今の今まで気づかれなかった僕って……。

そう思いながら、つつい苦笑いを浮かべてしまっミライ。

そんなミライに、セーナは小声で言葉を向けた。

「何か用なら、もう少しここで待ってて。もうすぐ終わると思うから」

そう言って、セーナは行列の方を見た。

ミライの後ろにも、人が並びに並び、ざっと見て残り100人位だろうか。

セーナはミライに視線を向けてから、再びナトレの元へと戻って

いった。

「いらつしゃいませー。はい10Lリットルですね。500rpリオンになります」
笑顔で接客するセーナとナトレ。

来る人来る人は必ず10リットルと言って、ナトレは水袋を5つ渡してるだけ。

この人数から毎回500rpなら……相当な金額になるな。

……一体、あの水袋の中には何が入っているのだろう。
それにしても、早く終わってくれないものだろうか……。

ミライは、様々な思考と焦りの中、2人の行動をじっと見つめていた。そして、待つこと更に30分。ようやく3人以外の人影が無くなった。

「相当儲かったわねえ」

「本当に、いくら稼いだらうね」

2人楽しく話すナトレとセーナ。

そしてナトレは、ミライの方に目を向けて、苦笑いで声を掛けた。

「どうしたの？そんなに浮かない顔をして……一体どんなご用件で？」

……気がつけば、僕の表情は曇っていたらしい。

そしてナトレには、全てがお見通しのような口調になった。

ミライは苦笑いの表情から、苦虫を潰したような表情をして、ナトレに弱々しい声を聞かせた。

「……単刀直入に言う。ナトレ……僕を、鍛えてください……」

ミライの言葉に、セーナは驚いた表情を見せた。

ナトレは真剣な顔つきで、ミライに言葉を投げ掛けた。

「どつして急にそんな事を……」

ミライは、ナトレに無言であの手紙を手渡し、顔を俯うつむかせた。

ナトレとセーナは、その一枚の手紙を広げて内容に目を通した。

「……………」

「……………何よ……………これ……………」

ナトレは言葉が出てこず、セーナも絶句する。

ミライは言葉を失う二人に、今までに起きたことを全て話し出した。

「……………ミチと僕は王のグラムに会ってきた。僕を生き残らせるためか、ミチはグラムに捕まって……………僕は牢に入れられた。そして……………その手紙を受け取って……………牢から脱獄して、ようやくここに来た」

気がつけば、ミライの声は掠かすれ、涙を流しながら話していた。

……………話しているのに浮かんでいるのは、グラムの前で見せたミチの表情……………それだけだった。

砂に手を付き、ぽたぽたと涙を浮かべるミライに、ナトレはゆっくりと近づいていった。

そして、ミライの体をギュッと抱き寄せた。

その体に心を委ねるように、ミライは泣け叫び、尖った声で呟き始めた。

「……何も出来なかった…… たった一人すら守れなかった……」

胸の中で叫ぶミライを、我が子の様に抱きしめるナトレ。

ミライはしばらくの間、大粒の涙を流し続けた。止めようと思っ
たが、出尽くすまで涙は止まることはなかった。

今まで堪えていた感情が、全て瞳の滴おたとなつて流れていく。
そんな時が、日が暮れるまで続いたのだった。

「セーナ、お皿並べといてね」

「はい」

ナトレの問いかけに答えて、セーナはメニュー画面から丸皿を取り
出して、地面に並べた。

セーナとナトレの行動に目を配りながら、ミライが2人に声を掛
けた。

「僕も何か手伝う事ない？」

「ミライーもう大丈夫なの？」

セーナは嫌味つたらしい笑顔で質問を質問で返す。

それに乗りかかるように、ナトレもミライに言葉を向けた。

「本当に、さつきまで大泣きしていた人が突然手伝うなんてね。そ
うね……特に手伝わせる事もないし、のんびり待ってて」

「分かった。お言葉に甘えさせてもらおうよ」

ミライの返答を受け取り、ナトレは再び料理の仕上げ工程に入った。ミライは、ただ呆然とナトレの姿と砂漠の景色を眺めていた。

もう日は落ちていますが、セーナの魔法と星空のおかげで、遠くの大砂漠は美しい闇を纏まとっていた。

ぼーっとしているミライに、何もする事のなくなったセーナが近づき、ミライの左側にゆっくりと腰を下ろした。

そして、少し間を空けてからセーナが語りだした。

「……私はミライが泣いている時、ただ見つめる事しか出来なかった。ナトレはミライを優しく抱き寄せているに……って考えたら、私だって無力なの」

「……………」

ミライは言葉を返すことも、セーナの表情を窺うかがうこともできない。

セーナは、小さく深呼吸をして再び話し始めた。

「でもね、別に無力って訳じゃないの。必ず誰もが、少しだけ力を持っているの。『思う力』……って私は小さい頃、そう教えてもらったんだ」

「『思う力』……か……………」

「その思う力は、時として無力を有力に変える事が出来る。……だからミライ、諦めちゃダメなんだからね！」

「……………セーナ、ありがとう」

この時、初めてミライは言葉を掛けたセーナに顔を向けた。

セーナは遠い星空を見上げていた。何か過去を思い出しているかのようにも見える。

ミライにお礼を言われたセーナは、少し硬直してから、くすぐったそうな表情を浮かべて口を開いた。

「べ、別に私はただ当たり前のことをしたまでで……別に^{れい}お礼なんか……」

セーナの恥ずかしそうな表情に、ミライは笑う。

……何だか、助けられちゃったな。

「セーナ、ミライ。食事出来たわよー」

程よいタイミングで、ナトレからの呼びかけが掛かった。

ミライとセーナは顔を見合わせ、互いに笑って見せると、2人揃ってナトレの元へと向かったのだった。

「いただきます」

「……いただきます」

張りの無い合掌で、食事が始まった。

今日の料理は、残り物をほとんど混ぜ込んだシチューと、麦パンである。

シチューには、魚介類から、肉、野菜に掛けて、様々な食品が入

っている。

しかし、具沢山な割には、白の液体で白一色に染まっている。

……それにしても、もの凄く美味しい。

静かなスタートを切った食事で、始めに口を開いたのはミライだった。

「そういえば、あの時一体何を売ってたの？行列凄かったけど……」

「あれは、水よ。2リットルの水袋にパンパンに水を入れて1000リピ。そして、お一人様水袋5つまで」

ナトレは淡々と言葉を返した。

ナトレの言うリピは、リピオンrpの略語だろうか。

ミライは、軽く返事を返し、再び質問をした。

「それって、儲けになるの？」

「水袋自体が、1つ10リピもしないから……1人に付き最大450リピの儲けね」

ナトレは食事を進めながら、呟くように言葉を返した。

……1人につき450rpで、それが100人だと4万5千、もしも1000人だと……。

ミライはもの凄い金額の料に、目を眩くらませた。

「そうね。今日だけで10万以上は稼いだわね」

「……凄い金額だな」

セーナの言葉に、ミライは呟く。

……考えるまでも無いが、販売した水は、僕が置いていったものだろう。

もっと早くに気がつけば……。

ミライは少し後悔しながらも食事を食べ進めると、今度はナトレから質問が投げられた。

「そう言えば、ミライは鍛えて欲しいと言ったけど、どう鍛えて欲しいの?」

「それは……どうゆうこと?」

「そうねえ……例えば、王を倒せる力が欲しい!とか……」

ナトレが次の例えを考え出す前に、ミライが迷い無く口を開かせた。

「3日後までに、ミチを無事に助け出す程度の力が欲しい」

ミライの言葉に、ナトレは満足げに笑みを浮かべた。

「そう。それなら、食後に作戦会議ね」

その言葉をミライに向けて、ナトレは一枚の紙と筆を取り出し、さらさらと紙に何かを書き始めた。

そしてナトレは、何かを書かれた紙をセーナに手渡すと、小声で言葉に向けた。

「セーナはその紙通りに買い出しに行つてきて。これ、代金ね。あと、もしも追ってくる人や怪しい人影が見えたら……買い物中断で逃げてきて構わないから」

「分かったわ」

ナトレから代金を受け取りながら、セーナは一言返した。

……そして、いつの間にか手元のシチューや麦パンは無くなり、食事の終了時間が来た。

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

3人は手を合わせて合掌した。

合掌終了後、3人は同時に立ち上がり、食事中のほんわかな笑みを完全に消した。

最初にセーナが口を開いて、2人の方を向いて話した。

「じゃあ私、買出しに行つて来るね！」

「行つてらっしゃい」

ミライとナトレの言葉が重なってセーナに返されると、セーナは優しく微笑み、街に向かって走っていった。

そして、セーナの背中を見届けた後、ナトレがフウっと思を吐き、ミライに向けて言葉を放った。

「さて、私達も行動に移しましょうか」

「そうだね。僕も頑張らないと……」

2人は地面に座り、顔を見合わせる。

……ナトレは僕の顔をじっと見つめて、何かを考えている。

と、思ったら突然ナトレは立ち上がり、ミライに思わぬ言葉を向けた。

「とりあえず……そうね、全ての魔法を私にぶつけてみて」

「え……それは一体……」

下手すれば死に追いやる魔法を、ナトレに向かって発動なんて出来るわけがない。

しかし、そんなミライの気もお構い無しに、ナトレは再びミライに言葉を向けた。

「別に大丈夫だから。ほら、ため試しに……何だっけ？ア……アペ……」

「アベンシス情報強制公開」

それ位ならと、ミライも立ち上がると、魔術をナトレの方に向かって発動した。

そしてミライは、ナトレのステータスを見て言葉を失った。

……まず、レベルが80と明らかに高すぎる。

そして、それに見合ったHPとMPを兼ね備えている。どちらも5千ジャストだ。

属性は以外にも水で、クラス職業は……表示されていない。

（一体私の周りに何が見えているのかしら……）

ミライは突然聞こえてきた声に、驚きの表情を見せた。

ナトレの事をずっと見ていたが、間違いなくナトレの口は動いていない。

……今聞こえたのは、間違えなくナトレの内心の声だ。

前エリアのボス戦以来だが、一体どうして今更……。
ミライが複雑な表情を浮かべていると、ナトレから声が掛けられた。

「どう？ 私はどんな風に見えるの？」

「……レベルが80で、体力、魔力共に5000。ハッキリ言って、強すぎる……」

ミライは正直な感想を返した。

ナトレの質問は続けざまに投げられる。

「ふーん。その体力とか魔力とかは見えつぱなしなの？」

「魔法を解除するか、僕との一定距離を取られると見えなくなる」

ミライは今までの経験上での判断で話した。

「そう」（相当使える技ね……）

「……解除」

ミライは、ナトレの情報を覗くのを止めた。

……何だか、人の心情は知ってはいけない気がする。

それと、心声しんせいはそれなりにハッキリと聞こえるので、何だか気持ちが悪いです。

だから解除した。

「あら、どうして魔法解除するの？」

「別に見なくても、問題ないって思ったから……」

ナトレの声掛けに対して、軽く誤魔化すミライ。

ナトレはミライの表情を伺って、再び意見を言った。

「体力が見えてるのなら、私の体力の減り具合で他の魔法の威力差が判るのだけど」

「……ほら、あれだよ。この情報強制公開は、相手のが見えてる間は、魔力消費するから……」

ミライは再び強引に誤魔化しを入れる。

少し慌てるミライをセーナはじっと見つめて、苦笑いを浮かべてから再び話し出した。

「ふふつ。……まあ、いいわ。それよりも、私の強さが分かったんだから、早いとこ本気で魔法をぶつけなさい」

「……死んでも僕は知らないからな！」

そう言つて、ミライは素早くメニュー画面から箒を取り出し、右手に持った。

ミライの言葉を聞いても、ナトレは余裕の笑みを浮かべている。

……そこまで言うんだったら、本気でやってやる！

ミライは箒を空に向かって掲げて、叫び声を上げる。

「ぬおおおおおおおお……燃盛る変化球！」

ミライの足元には、ナトレの足元まで延びる巨大な魔方陣が描かれる。

第150層 逃走、奇跡、思力、強化（後書き）

すっかり一週間書かせていただきました。

個人的には、こちらの方が楽しく書けたと思いますし、何より気分が良いです！

さて、今回出てきたネク。これも抹茶さんからの頂き物です。地味に一番気に入ってますね。一番普通の子ですし……。

一応、1万文字超えています。読み終えお疲れ様でした。毎週こんな感じになります。オーバー10000です！本当に、思ったよりも楽しく書けたので、今後もこんな感じにしようと思います。

では、また次の投稿で。後書きでした。

第151層 読み合い戦（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第151層 読み合い戦

ミライの放った巨大な火炎球は、小爆発音ながらも、凄まじい爆風を辺り一面に吹き荒らした。

ミライは強力な爆風に目を腕で覆い隠した。

片付けなかつた食器等が、爆風で吹き飛んでいく。

そして数秒後、爆風は治まり、ミライは閉じた目を開いてナトレの姿を確認した。

ナトレは、まだ平然と笑みを浮かべている。

……一体、あの威力でどれだけダメージを受けたのだろうか……。

情報強制公開
「アペンシス！」

ミライは、ナトレの心声しんせいが聞こえるのを覚悟で、再びアペンシスを掛けた。

……HPは4899と、101のダメージ。
体力

後、これを49発は……無理だな……。

ミライは色々考えながらも、次々に魔術を繰り出した。

燃盛る変化球
「……まだまだ！フゲネス・フレイム！」

(また同じ技なの?)

ナトレの思想が、手に取るように聞こえてくる。

ナトレは、ミライの繰り出した火炎球に警戒する。

火炎球は、ミライ頭上からナトレに目掛けて、少し遅めのスピードで落下していく。

だが、その落下の工程の途中で、1つが2つに、2つが4つに、といった感じで横に分裂していく。

(なるほど……多様な変化が出来る火の玉ね……)

4つに分裂した火炎球は、中央左の火炎球から、右、左端、右端の順番でナトレに向かって急降下した。

ナトレは、左、右、左と人間離れのサイドステップを見せてから、最後の一球は大きく後ろに宙返りをして回避した。

……どうやってたらあんなに華麗にかわせるんだよ……。
当然全て外れたので、HPの数字に変化は見られない。

ミライは諦めずに、次々と魔術を発動していく。

「まだ次だ！ウォーター・プレス！」

ミライは魔術名を叫びながら、左腕を伸ばしナトレに向けて、手を大きく開いた。

その開いた手のすぐ前方から、円筒状に激流水がナトレに向かって飛ばされた。

ナトレはその攻撃を見て、にやりと笑みを浮かべる。

(水魔法ね。威力は凄まじいけど……)

「……ハアツ！」

ナトレは一言叫び、右手を前に突き出すと、ミライからの激流水は一瞬で大粒の雫となり、辺り一面に大きく弾けた。

……たった一度の掛け声で、すぐ前方の魔術発動地点までが大粒の雫に変化するなんて……。

ミライは、ナトレの凄まじさに圧巻させられる。

(どうしたの？かかってきなさい。……それとも、もう魔力切れ？)

ナトレは不敵な笑みを浮かべながら、心声で挑発してくる。

……あれ、心情見えるの見透かされてないか……。

ミライは苦笑いを浮かべながら、ナトレを見つめる。

ナトレはミライの視線に気がつき、ミライに言葉を掛けた。

「どうしたの、もう魔力切れ？」

ナトレは不敵な笑みのまま、今度は言葉で挑発してくる。

ミライは、その挑発に乗るかのように魔術を発動した。

「まだまだこれからだ！……バリア魔術反射っ！」

ミライが叫んだ瞬間、ナトレ頭上に分厚い半透明な板状の物質が出現した。

そして板状の物質は、形作られてから数秒後、ナトレに向かって急降下した。

ナトレは落下する物質に戸惑う事無く、冷静に物質の落下に合わせて回避の動きを見せる。

その動きを見て、ミライはニヤリと笑うと、再びミライは魔術名を叫んだ。

「フリーズ・スプリンター《氷壁の再使用》！」

次の瞬間、地面に落ちるすれすれの所でバリアは荒く鋭い破片に変化して、回避後のナトレの方向に飛んでいった。

とっさにナトレは両腕で守りの体制に入る。だが、確実に命中した。

その証拠に、ナトレのHPの数値が4580と大分減少した。

「ふーん、やるわね」

ナトレは、体に付着した細かい破片を掃はらいながら言った。

ナトレじつと見るが、ナトレの体には傷1つ付いていない。

やはり、無意識に手を抜いてるのだろうか。

それとも単にナトレが強いのか……。

「どうしたの？体に傷が付かないのは、おかしい？」

そうナトレは微笑みながら言った。

それにしても、完全に僕の思考は見透かされてしまっているようだ。

それとも、心を読む力をナトレも……。

考えても仕方ないので、ミライは最後の魔術の発動にかかった。

「次いくよ。……………ナトレ？」

ミライは目を合わせてくれないナトレを呼んだ。

ナトレは少し足元の方を向いてしまっている。

何か考えてるのであれば聞こえてくるはずだから、恐らく目を合わせたら駄目だと分かっているのだろう。

ならばと、ミライは箒を片手に全力でナトレの元に向かって走り出した。

「うおおおおおおおっー！」

叫びながら、ナトレの元に走っていくミライ。

ナトレは、ミライの警戒してミライの動きを見た。

と、次の瞬間。

ナトレの目の前にミライが突然姿を現した。

そして箒を両手持ちに変えて、右から思いっきり振り下ろした。だが、次の瞬間。

振り下ろす頃には、前方にナトレの姿は無かった。

「フフツ、まだまだ遅いわね」

そうミライの背後から、優しい声でナトレが囁いた。

そして、ミライの背中にピタツとナトレの拳が当たった。

その触れる感触の直後、ミライは背中に激痛を感じた。

そして、ミライが勢いよく地面を転がっていった。

「ぐあつ、ぬつ、うぐつ……」

砂煙を上げながら大きく地面を3回転して、ミライは地面でうずくまった。

背中の中、たった一箇所だけが、骨を砕いたかのような痛みを襲われている。

ナトレは、うずくまるミライに遠くから声を掛ける。

「それで、あなたの与えたダメージと同じ400よ。でも痛みはミライの方が受けてるかも」

ミライはナトレの言葉を聞いて、表示されている自分のステータスを確認した。

HPが残り238。確かに丁度400減ってるが……。

痛みは、水が体を貫いたときよりも数倍痛いといっても過言じゃないくらいだ。

背中が痛すぎて、立つ事すら間々ならないのだ。

ミライは歪む視界の中、自分のMPも確認する。

……残り40。気がつけば438有った魔力も、底が見えていた。

ミライは気力を振り絞って、ナトレに弱々しい声を掛けた。

「ナトレ……もう終わりで、良い？」

「あら、全ての技を出し尽くしたと思って反撃したのだけど？」

不敵な笑みを浮かべながらナトレは言葉を返した。

ははは……ナトレは本当に全てお見通しのようなだ。

あー何だか目が霞かすんできた……。

ミライは、最後に大きく笑顔を浮かべると、眠るように意識を失うのだった。

第151層 読み合い戦（後書き）

……ここでは何も言いません。すいませんでした。
突然ですが、また明日から毎日更新です。

第152層 鍛える前に（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第152層 鍛える前に

真っ白な世界に、ポツンとミライは一人立っていた。

……また、夢の中の世界なんだろう。

さすがにこの空間、このワープに似た感覚は覚えてしまった。

さて今回は何が……。

ミライは呆然と純白の世界に突っ立っていると、何処どこからか声が聞こえてきた。

「主あぬじは、主の持つ強さを理解していない」

その言葉は、声と言うより電子音のような感じで、ミライの耳に入っていく。

……それは一体どういうことなんだろう？

だが、ミライはその答えを考える間も無く、純白の世界は次第に闇の世界へと変色していった。

「……………ん」

ミライは、ゆっくりと目を覚まし、目の前に広がる光景を見渡した。

すぐ真上にはセーナの顔が、そして同じ真上でも少し奥の方にはナトレの顔があった。

セーナは微笑んだ顔を見せて、ナトレも困った表情ながらも笑みを浮かべている。

そんな2人に、ミライは寝転んだまま口を開いた。

「……………2人ともおはよう」

その言葉に、セーナは笑いながら言葉を返す。

「おはよう。まだ、星空の夜だけだね」

そしてナトレは、笑みを浮かべるのを止めて、少し強い口調で言葉を掛けた。

「早く起きなさい。あなたには、まだ話さなくちゃいけない事が沢山有るのよ」

その言葉にミライは体を起こして、服についた砂を手で掃^{はら}う。そして、ナトレの顔を見上げて言葉を放った。

「ナトレ。僕を強くして」

「言われなくてもそのつもりよ。早速鍛える話に入りたいのだけど、その前に……僕使うの禁止ね!」

「じゃあ早速つて……へ?何だつて?」

ナトレの言葉に、ミライは思わず聞き返した。

ナトレは、にんまり笑うと少し訂正を加えて言葉を返した。

「僕使うの禁止。僕と言う一人称を、ミライにはしばらく別の言い方にしてもらいます」

「何なんだよ、それ!」

ミライは訳が分からない中、ナトレとセーナはニヤニヤと笑うのだった。

第153層 新たな第一人称（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第153層 新たな第一人称

「ミライが気を失ってる数十分の間で、セーナと話してたのよ。1人称が僕だと、なんか言葉が弱く感じるなーってね」

「いや、それは別に関係ないんじゃない？」

ナトレの言葉に反論するミライ。

僕と言う言葉遣いは、地上世界の昔からの癖のようなのであつて……。

とにかく、僕は僕で問題ないと思うのだが……。

ミライは不満を持ちながらも、さらに2人に質問を投げ掛けた。

「じゃあ、もし僕を言わなくなったとして……他に何て言えと？」

ミライの言葉に、2人は目を瞑つぶって考え込んでしまう。

いや、そこはまだ考えてないのかよ……。

ミライは、しばらく2人の様子を伺うかがった。

すると、今まで黙っていたセーナが、新しい何かを発見したかのよううに発言した。

「ねえ、俺様……なんてどう？」

「いや、言いたくないよ！そんなの……」

「良いわね！それ」

ミライの批判を押しつぶすナトレの発言だった。

「えー嘘だろ……」

そうミライは呟き、思わずナトレに冷ややかな視線を送ってしまう。そんな視線をよそに、ナトレは完結付けるかのように言葉を放った。

「それじゃ、今から僕を封印で、俺様ね。救出作戦が成功するまで俺様ね」

「そんなの僕は認めない！」

ミライは強い口調で言葉を返した。

どうして僕がそんな事を……。

口調変更を否定するミライに、ナトレはゆっくりと近づいた。

そして、ミライに何かを差し出しながら言葉を掛けた。

「まあ、俺様は確定として、これ飲んでみて」

ナトレに手渡されたのは、お猪口（しほぐち）に入れられた液体だった。

色はセーナの光の反射でよく見えないが、臭いはどんなに鼻をお猪口に近づけても無臭である。

ミライは嫌な予感を感じながらも、そのお猪口の中身をグイッと飲み干した。

……普通の水を飲んだような感覚で、のど元を通り過ぎていった。何だ、ただの水か。と、そう思った瞬間だった。

「……うっ、うえっ……うわっ、うわうわうわ……」

ミライは、うろたえながら声を出した。

……その液体はうわを連呼するほどの不味さだった。

時間差で、苦味と辛味を足して、3倍したような味が口元を襲ってくる。

その味が襲ってきた瞬間に、目の動向が大きく開き、体全身が火^ほ照る^て。

ミライは、この液体に対する疑問をナトレにぶつけた。

「なんなんだ！何を飲ませたんだ！」

ミライの言葉に、ナトレは冷静に言葉を返す。

「それは、言ってみればステータス増強薬ね。私手作りのハイポーション。一応臭い消せただけでも、十分評価して欲しいわね。そしてなんと、その1杯で2500リピ！」

「高っ！」

ナトレの乘りに、思わず純粹に言葉を返すミライ。

ナトレは笑顔で言葉を続ける。

「それで、ミライが僕を使うたびに、この薬品飲ませるから。力づくでもね」

ナトレの不敵な笑みに、ミライは不安を隠せず苦笑い。

「……一体これからどうなるんだ……僕。」

第154層 心の現れ所（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第154層 心の現れ所

「あつ、いま心の内で僕って使ったでしょ」

「な……」

セーナの鋭い指摘に、ミライは言葉を詰まらせた。

二人とも、どうして分かるんだ。 全く理解も検討も付かない。

「はいミライ。もう一杯！」

そう言つて、ナトレはミライに特製液薬の入ったお猪口を手渡した。ミライは、まじまじそれを見つめてから、一気にグビツッと飲み干した。

時間差で、あの妙な衝撃が口一杯に広がった。

「うえー」とミライは不味さを言葉に表し、さらに疑問を口にした。

「どうして二人ともぼ……お、俺様の考えと言うか思考が分かるんだ？」

ミライの言葉に、二人は満足そうに笑みを浮かべた。

そして、ナトレはその笑みのままミライに真相をさらりと語った。

「あなたのその顔が全てを物語っているのよ。……特に鼻」

一体僕の鼻が何だつて言っただ……。

「はいミライ、もう一杯。心配しなくても、在庫は沢山有るから」

「しまった……」

ミライの言葉はもう遅く、手には無臭の液体。……ミライは喉に液体を流し、数秒経ってからもがき苦しむ。

その光景をナトレは高位から楽しみ、セーナは少し気の毒そうな表情と苦笑い。

さすがにこの状況は長く続けると、精神面が持たない。だが……。ミライは、2人の表情をまじまじ見つめて、鼻をひくひく動かし

鼻を一定時間で色々動かし、2人を見る。

ナトレはミライの行動が分かったらしく、薄ら笑いを見せてミライに言った。

「……どうしたのミライ。くしゃみ出そうなの？」

一体……俺様の鼻がどうなったら……。

………僕。

「はい使ったー」

ナトレとセーナの言葉が重なって、2人は笑った。

確かに2人とも鼻を見ていたようだったが……。

「もう、何なんだよー!!」

ミライは、分からない事に文句を漏らしながらも、お猪口を受け取るのだった。

第155層 利点と欠点（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第155層 利点と欠点

3人は焚火を横に円陣形に座り、ミライ強化プログラムの話を始めた。

最初に口を開いたのはナトレだ。

「さて、とにかく時間はあまり無いのだから、とっとと本題に移るとして……」

ナトレは、げんなり弱ったミライに目を向ける。

ミライは本題に移る前までに、俺様のくだりで8杯もの液薬を飲んでいた。

さすがに、液薬の妙な感じには慣れないが、俺様を使う事に抵抗は無くなった。

ミライは目を虚ろにしながら、ナトレに言葉を向けた。

「で、俺様は一体何をすると……」

ミライの言葉に、ナトレは右手で待ったとばかりに手を広げて見せて、話し出した。

「行動に移す前に、ある程度知識を身に着けて貰わないといけなの。まずは、ミライ、あなたの利点ね」

俺様の利点……。考えてみても、意外に思いつかないものだ。腕を組み考えるミライを見つめながら、ナトレは話を続けた。

「ミライの利点は、様々なバリエーションの魔法を放てる事。そしてその狙いの的確さ。そして発動スピードに似合わない、絶大な

威力。……はつきり言ってセンス的才能ね」

「……そんなに褒められてもな」

弱った表情を明るくして、照れくさそうに言うミライ。

ナトレは表情を変える事無く、話を進める。

「まあ……バリエーション以外は、今のセーナの方が上手うわてね」

「当然よ！」

セーナが自慢げに言葉を放った。

セーナが強くなったのは認めざるをえない。でも何か悔しい……。ナトレは、しょんぼりするミライを軽く笑いながらも口を動かす。

「で、利点の次は欠点ね」

その言葉の後、少し空気が固まり、ミライは固唾を呑む。

ナトレは少し考えた後に、ミライの方をしっかりと向いて話した。

「あなたの欠点は、魔法使いならではの元々のステータスの低さ。そして、エロ的展開に弱い事」

「……はい？」

ミライは自分の欠点に違和感を感じて思わず言葉を返した。主に2つ目。

ナトレは薄ら笑いを見せて、口調を強めにミライに言葉を向けた。

「あなた、そういうの見てられないでしょ」

「いや……そんな事は無い」

ミライは男として言葉を返した。

そんな弱点、あつて堪^{たま}るか！

そんな思いの中、ナトレから言葉を向けられた。

「じゃあ、セーナの方を向いて」

ミライは言われるままに、セーナの方に体ごと向いた。

セーナは相変わら^ずの白Tシャツ一枚である。

八の字の女の子座りで、俺様に気を使つてか手で股元をシャツの裾で隠している。

そんなセーナにナトレは言葉を掛けた。

「セーナ、体育座り。足若干開いて」

そんな注文セーナは受け入れるわけが無く、ナトレに言葉を返した。

「そんなの、見られてるって分かつてるのに嫌よ！」

「お願いよ。あなたの弱点、話さないであげるから」

その言葉にセーナは無言になった。

そして……ゆっくりと座る姿勢を、ナトレの言ったとおり^に形を変えた。

ナトレは目線をミライに変えて言葉を放つ。

「ミライ、目を瞑^{つぶ}らない！逸^はらさない！……すぐに分かるんだからね」

ナトレの言葉で、ミライは無意識に瞑る目を開く。
目の前に映るのは、泣きそうになりながら顔を赤く染めて、体育座りをするセーナ。

細く美しい両足の間に見えるのは、間違いなくセーナの下着である。黄色の縞パンである。

こんな展開……全然……何とも……。

「こんな事して、一体何になるって言うんだ！……うっ」

ミライは叫んだ後に、鼻に手を当てた。

一瞬、鼻から何かが出てくるかと思ったからだ。

目を逸らせば、ナトレに見破られるが……この状況、セーナも泣きそうだし。あーどうすれば……。

そう思った瞬間、背中からどしどしと何かのしかかって来た。

そして、ミライの耳元にナトレが囁く。

「あなたの利点欠点にもう1つ共通してあるの。……それは、優しくよ」

ナトレは胸をギュッとミライの背中に押し付ける。

俺様の体温がどんどん上昇していく。もう……無理。

ミライは自分の鼻から流れ出る液体を、拒む事無く流した。

周囲を包む明るさに、液体は赤色を反射させて、ポタポタと地面に垂れ落ちる。

こうしてミライは、自分の欠点を受け入れる事になったのだった。

第156層 薬の効能の1つ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第156層 薬の効能の1つ

「さて、欠点利点共々を理解してもらった所で、早速、強化修行にしましょうか」

そう言つて、ナトレはその場を立ち上がった。

そんなナトレに、ミライは目線を送りながら言葉を掛けた。

「修行つて言われても、俺様は一体何をしろと……こう、もっと具体的な何かを」

ミライの言葉に、ナトレは少し考えてから口を開く。

「……そうね。私は利点の向上と欠点の穴埋めを主体としてるから……」

その言葉を残すと、ナトレは突然、服を脱ぎ始めた。

……脱いだ姿は下着姿 ではなく、下着によく似た水着姿だ。

色は薄い青色の上下で、いたって普通な水着姿だ。

しかし、俺様にとつては普通の水着姿も大ダメージなわけで……。

ミライの止まりかけていた鼻血の勢いが再び勢力を増す。

そんなミライの姿に、ナトレは苦笑いを浮かながらも話を続けた。

「欠点は私の調合した薬と、この格好でどうにかするとして、後は利点の向上ね。……簡単に利点向上メニューを言つと、寝ないで実戦練習かしら」

寝ないで実戦練習。……相当厳しい修行になりそうだ。
時間の都合上、仕方ない事なのだろうけど……。

ミライの表情を見て、ナトレは笑みを浮かべて口を開く。

「あ、別に眠くなる心配は無いわよ」

「何で？そんなに厳しい修行なの？」

ミライの言葉に、ナトレは首を横に振り言った。

「あなたの飲んだ8杯の調合薬。あの中に不眠草も配合されていて、一杯で約6時間、眠れなくなるわ」

その言葉の後、ナトレはニヤリと笑い、ミライは苦笑いを浮かべた。

48時間も寝ないなんて……。

第157層 ステータス向上（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000 Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第157層 ステータス向上

ミライは48時間と言う言葉に呆然とさせられた後、ふと何かを思つてナトレに声を掛けた。

「薬で48時間眠れなくなるのは別に良いんだけどさ、あの薬つて他にも効果あるんだよね」

「ふーん、さすがに鋭いわね。場面場面で説明しようと思つたのだけど……いいわ。先に全て話しておくわね。まずミライ、ステータス画面開いて見てみて」

ナトレの言葉に、ミライは慣れた手つきでメニュー、ステータス画面と順に表示した。

そして、ミライは自分のステータス画面の変化に気がつく。

体力、^{HP}魔力、^{MP}筋力、守備力、瞬発力とステータスはこの五大要素で表示されている。

そしてレベルアップする事に、この五大要素がその人の職業によつて様々な上がり方がするのだ……と俺様は思う。

少なくとも、皆個性的なパラメーターなのは、^{アベンス}情報強制公開でHPとMPを見る限りで判断できるのだ。

この五大要素の限界値が有るのか無いのかは、俺様にも分からない。ただ1つ宣言できる事は、レベル同様、この五大要素のパラメーターの数字も……さほど関係ない。

要は、努力すればこの表示される数字以上の力を発揮できるのだ。

……しかし、レベルアップのみで成長はずのミライの五大要素が、レベルも上がってないのに大きく変化していたのだ。

ミライはステータス画面で起こっていることを呟やいた。

「全てのパラメーターが80ずつ上がっている……」

「そう。私の作った調合薬は、様々な能力アップアイテムを混入させて、1杯で全ての能力が10ずつ上がるように作り上げたのよ」

そうナトレは自慢げに言っつて笑みを浮かべる。

全ての能力が10ずつアップ……これはもの凄い事なのだ。初期の頃となると特にだ。

ミライの現在の能力地は、体力718、魔力518、筋力215、防御力160、瞬発力281である。

どれもこれも相当上昇した感じがする。防御力なんて前に比べて2倍になった。

それにしても自分自身が強くなったのに、ステータス画面を見るまで気づかないなんてな。

実感が無いが、数値的には向上。この世界は大体こんな感じなのだろつ。

ミライは自分のステータス向上に笑みを浮かべながらナトレに言葉を向けた。

「まだ他にも、こんな凄い効果が？」

「もちろんよ。他にはね……」

そうナトレは、自慢げに薬の効能の話し始めるのだった。

第158層 修行開始！（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第158層 修行開始！

ナトレの話によると調合薬の効能は、五大要素の向上と、眠気無効の他に、疲労半減と言う効果があるらしい。つまり疲れないという事だ。

ナトレの話によると、調合薬1杯で2分の1の疲労軽減が出来るらしい。

その効力時間は眠気無効と同じ時間らしい。

そして、1杯で2分の1、2杯で4分の1、3杯で8分の1……と、飲むたびに効力を倍増していき、今現在では256分の1。はつきり言って俺様は、疲れ知らずの状態になったようだ。

だが、説明は深まるに連れて、この調合薬の欠点も分かってきた。五大要素の向上以外の効果、つまり眠気無効と疲労軽減の効果は、効力発揮時間を過ぎると反動が出るらしいのだ。

ナトレが言うには、その薬効能時間で蓄積した眠気や疲労が、薬の効果が切れると一気に襲ってくるらしい。

下手すれば死ぬとか何とか……。だから薬の多量はやせない積もりらしい。

8杯は多量じゃないのかと、俺様は思うのだが……。

そして、薬の効果を自慢げに話し終わったナトレは、その場を立ち上がってミライに言葉を掛けた。

「そろそろ、本格的に始めるわよ！ミライ、準備は良い？」

ナトレはニヤリと笑みを浮かべている。

そのナトレの表情をミライは真似して言葉を返す。

「いつでも良いよ。よろしくナトレ」

ミライはその場を立ち上がると、手首をグネグネと動かし軽い柔軟体操をする。

その姿をセーナは見上げて、ミライに優しい声でエールを贈った。

「修行頑張っつね、ミライ」

「うん頑張るよ。……そう言えば、セーナは僕の鍛えてる間に……あっ……」

ミライは自分の言葉のミスに気がつき、言葉を詰まらせる。

どうにか逃れようと思ったが、もう遅いようで。ナトレが笑顔でお猪口をミライに手渡した。

ミライは、嫌々ながらも一気にお猪口に入った調合薬を飲み干す。これで9杯目。

そんなミライに、セーナは微笑んで視線を送り、自分のする事を言った。

「私は、ずっと観戦かな。あと、その薬の管理も私がするのよ」

セーナは、透明なビンの中に入る液体をミライに見せ付ける。

こうして纏めて入った液体の色を見ると、毒々しい赤紫色をしているのが分かる。

俺様はこんな物を毎回飲んでいたのかよ……。

ミライはビンに入った薬を見下ろしながら苦笑いを浮かべる。

しかし、すぐさま目線を薬ビンからナトレに変えて、改めて言った。

「修行、よろしくお願いします！で、まずは何から始めるの？」

ミライの言葉に、ナトレは少し苦笑いを浮かべる。

しかし、その苦笑いもすぐに微笑みに変化して、ミライに言葉が向

けられた。

「フフツ、よろしく。まずは、全体的な魔法力の強化ね。最初は…
…バリア。さて、指示通りに動いてもらおうよ！」

「了解！」

こうして、2日間に亘る^{わた}修行が開始したのだった。

第159層 まずは守り（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第159層 まずは守り

「魔術^{バリア}反射！」

ミライとナトレのすぐ目の前に、1枚の透明な厚板が出現した。

ナトレは、ミライが造り出した透明な厚板をじっと観察する。

そして、それに掌^{うで}を密着させてから、ミライに話し始めた。

「正直ね。私は、あの王に魔法で打ち勝つのは、ハッキリ言って無理だと思うの。魔術師系統の人には同系統の技は効きにくいものなのよ。だから勝つために、ミライには物理技を覚えてもらわないといけないのよ」

「それでバリアを強化して物理を？」

「いや、それは違うわ」

「違うのかよ……」

即行な言葉の返しに、思わずミライは苦笑いを浮かべながら言った。

「……では一体バリアは何のために？」

その答えは、すぐにナトレの口から話された。

「えっと、あなたのバリアは氷属性でほとんどの魔術が反射できる、反則的な技よ。しかし、元は氷だから重い打撃には耐えられない。それじゃあの王には勝てない。だから……」

そう言ってナトレは、メニュー画面を操作して、水袋を取り出した。そして、バリアに向かって投げつけるように水をかけた。

「だから、あなたのバリアの氷属性を生かして、水をこんな感じにかけた瞬間に、水が凍るまでバリアの温度を下げてもらうわ。そうすれば、あの王の鋭い水攻撃も回避できる」

ナトレの言う事は分かるが、はたしてそんな事が出来るものだろうか……。

第160層 冷気（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第160層 冷気

「言うのは簡単だけど、実際にするのはこれが一番大変かもね。朝までには覚えてもらいたいものだけど……」

「朝まで！？……ずっと魔術反射？」

ミライの返した言葉は、見事なまでに裏返った。

修行時間のほぼ4分の1を使うなんて……。

守りに使うなら、それをこつ他の新しい技覚えるとかに……。

「ミライ。相手の力量を發揮させない事も、戦闘においては大事なよ。さて、考えてないでイメージしなさい！魔法に冷気を宿すような感じ……かしら？」

「……分かったよ」

ミライは考える事を止めて、ただただ魔術反射のことだけに意識を集中させた。

冷気……冷気……冷気……冷気……。

ミライは心内で呟き、自分のすぐ目の前に意識を集中させて叫んだ。

「冷気！じゃなかった……」

ミライが叫んだ瞬間、ミライ前方に透明の厚板が出現した。

その透明な厚板からは、もやもやと白い冷気が吹き出している。

ナトレは、ミライの造り出した透明の厚壁バリアに触れながら言葉を向けた。

「あなたの魔法、名前関係ないのね。……確かに冷たいけど、この程度では瞬間冷却は無理ね。私が触れた瞬間に、私自身が凍ってもらわないとね」

もしも本当にナトレ自信が凍ったら、そんな笑いながら話す余裕無
いんだろうな……。

ミライは苦笑いを浮かべながら、ナトレに言葉を返した。

「そんなの無理じゃない？」

「諦めは良くないわよ。それに、出来る人を知ってるから、教えようとしてるのよ」

まさか、人を一瞬で凍らせる事の出来る人が居るだなんて……。
そして、そんな技術を朝までに身に着けることなんて俺様出来る
のだろうか。

「ほら、うだうだ考えてないで、さっさとイメージ膨らます！」

「……だから、何で俺様の考えてる事が分かるんだよー。まあ、いか」

そうミライは言葉を返してから、目を瞑る。

そして、再び魔法反射ハリアに対するイメージを膨らませるのだった。

第161層 新たな力（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第161層 新たな力

魔法反射を鍛え始めてから、数時間後……。

「魔力無くなった。セーナ回復薬を………眠ったか」

体育座りのまま眠りこけるセーナを観察しながら、ミライは呟いた。俺様が鍛え始めてからセーナはずっと暇そうにしていた。

だから、そんなセーナに俺様は、魔力がなくなるたびに魔力回復ビンを貰って、休憩交じりでセーナと軽い会話をしていたのだ。

しかし、回復薬渡し役のセーナが眠ってしまったので、魔力回復手段が無くなってしまった。

どうすれば………と思いつきながら、ミライは何所どこからか勢いよく飛んできた回復ビンを左手でキャッチした。

ビンの蓋ふたを開けて、ミライは飛んできた方向に言葉を向けた。

「ありがとう、ナトレ」

そしてミライは、いつきにビンの中身を飲み干した。

「あら、顔に命中するように投げたのに、もう慣れたみたいね」

ナトレの表情は見えないが、恐らく笑みを浮かべながら言った。

修行途中で、ミライが最初に魔力を底付かせた時に、セーナから回復を貰う事になったのだが。

そう。それは俺様が魔法の使いすぎで魔力が無くなって、魔力回復の効率の良い方法を3人で考えていたときの事だった。

「……そうねえ……セーナ、明かり消して。ミライは、あなたのすぐ目の前に火を点ともして。その位の魔力はあるでしょ？」

「まあ、その位なら……」

それは、ナトレの突然の提案だった。

ミライとセーナは言われるままに行動した。

さっきの光明くわうみやうから一変して、明かりは弱々しい火の光だけで、他一面は闇だけとなった。

あまりの暗さに、ナトレとセーナが確認できない。

2人ともに情報強制公開アベンスを掛けているのだが、その情報すら確認できない。

何も見えなかったら、修行は無理なのでは……。

そう俺様が思っていたら、ナトレからセーナに指示が出された。

「セーナ。ミライの姿は分かるでしょう。」

「ええ、何となく見えるわ」

「じゃあ、ミライに魔力回復ピン投げてあげて。全力でね」

「……りょうかい」

セーナ少し明るめに返事を返した。

何も見えない闇先で、俺様に不都合な薬の手渡し方が決定された。

セーナの居た場所は、あの辺りだから……。

ミライはセーナの方向を向いて、身構えた。

だがしかし、セーナの投げたピンが当たったのは、ミライの後頭部だった。

ピンは綺麗な音と共に粉碎する。俺様の頭は、何とか粉碎しなかったが……。

「うっ……いやこれ死ぬって!」

「大丈夫よ。この世界じゃ体力が0にならない限り、絶対に死なないから」

そのナトレの言葉を聞いて、ミライは表示される自分のステータスを確認する。

ダメージはピンが当てられた前と後では、10の差があった。確かに死ぬようなダメージではないが、死ぬような痛みは感じてしまっ。

ミライは、正面から何かが飛んでくるのを感じて、咄嗟にそれを避けた。

「さすがに飲み込みが早いわね。でもかわすのは駄目よ」

そう言って来たのはナトレだった。

恐らく投げてきたのも……。

……今度は後ろから、来た。

「ぐあっ……痛っ……」

ミライは、ピンを手に掴もうとして手を伸ばしたが、手を開くのが遅く突き指をした。

突き指で済めば良いのだが……。

突き指した右手の中3本の指を、まじまじとミライは触って見る。

しばらくしてから、地面に落ちた魔力回復ピンを拾い上げて、ミライはそれを飲み干した。

そして、闇に向かってミライは叫んだ。

「さて、再開しよう」

そんなこんなの数時間の間で、ミライは合計70ものダメージを受けた。

しかし、その代償に回復ビンが何所どこから飛んできても、片手で受け止める事ができる能力を手に入れたのだ。

それが何所で使えるかは分からないが、とにかく強くなったのだ。

「……大分明るくなってきたな」

薄っすら明るくなってきた空を見上げながら、ミライは呟いた。そんなミライに、ナトレは軽く言葉を掛けた。

「そうね。日出が近づいてきたけど、もうバリアは大丈夫？」

「5分間は氷結状態を保てるようになったかな。魔術氷結」

ミライは、自分のすぐ目の前に氷の壁を造り出した。

その氷の壁は、前の透明な厚板から様々な変化を遂げたのだ。

透明だった色は白っぽくなり、氷壁の向こう側は、うっすらとしか確認できない。

そして、この氷に触れた瞬間、体全身が白一色に凍りつくのだ。

ミライは、メニュー画面を素早く開いて水袋を取り出した。

その取り出した水袋を、少し離れた位置から氷壁に向かって勢い良く投げた。

氷壁に触れた水袋は、綺麗に形状を残したまま凍りついた。その光景を見て、ナトレは満足げに言った。

「完璧な仕上がりね」

「魔力消費が前回の10倍以上に増えたけどね。それに、火の魔法が弱点になつたし」

ミライは淡々と言葉を返した。

今現在、この魔法で分かる弱点はミライの述べた2つだ。

ある時に、氷壁に燃盛る変化球フゲネスフレイムを当てたらどうなるかを試した。その時判明したのだが、火の魔法の弱点だった。

火が触れた瞬間、氷壁は一瞬で解けて水に変化したのだ。

……さすがに火を凍らすと言う神業的な事は出来なかったわけだ。ふとミライは、遠くの地平線の明るさに目を向ける。

この世界の朝日が昇ってきた。

「あら、もう朝日が昇ってきたのね」

「意外と早かったな……」

2人は朝日を眺めながら呟いた。

もう2日目の朝か……。ミチは無事なのだろうか。

……この1日で、俺様はもっと強くならなければ！

第162層 エメラルドグリーン（前書き）

この作品は、文章表現レベルが3 / 1000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第162層 エメラルドグリーン

「いただきます！」

「いただきます」

セーナの元気な掛け声で、早朝からの朝食が始まった。

時間帯は、日の光が昇り始めてから1時間ぐらいだろうか。

恐らくこの世界に来て、最も早い朝食だろう。

今日の朝食は、良い香りのカレーライス。

こんな朝早くから食べる料理ではない気がするのだが……。しかし、そんな今のカレーを目の前にしてみれば、ささいな疑問に過ぎない。

「ねえ、ナトレ。ここのカレーって緑なの？」

ミライの言葉に、セーナもナトレに視線を向ける。

そう。美しいほどの緑色。

その緑色は拒んでしまっこぼほど輝いて見えるのだ。

ミライとセーナの疑問の表情に、ナトレは明るく答えた。

「普通は茶色よね。私も緑色のカレーを見るのは初めてよ」

「えっ……何それ」

セーナが訳が分からないと言った表情で言葉を返した。

「えーっと、ステータス向上に最適な薬草類を入れに入れたら、こうなったの。体には良いカレーだと思うけど？」

そうナトレは言っ、苦笑いを浮かべた。
釣られるように2人も苦笑い。

……朝食が始まったのは良いが、誰もカレーを口に運ぼうとしない。

早くどちらか食べてくれよ……。

3人の睨めっこが長々と続く。

……その睨めっこで、最初に笑ったのはナトレだった。

「……味は？」

ナトレがカレーを飲み込むのを見計らって、ミライとセーナがほぼ同時に聞いた。

ナトレは無理に笑顔を作り、大きく深呼吸をしてから2人に味を教えた。

「あ、意外と普通のカレーよ。……鼻と喉のどに涼やかな風が通る以外はね」

ナトレの感想の限りでは、ミントカレーと言った所だろうか。
うん、全くおいしそうに感じない。

ナトレは着々と食べ進めるが、後の2人はまだ口にカレーを運べない。

ミライとセーナは再び睨めっこを開始した。

「先食べてみてよミライ」

「そう言っセーナこそ」

互いに苦笑いを浮かべ合い、動こうとしない。

ナトレはそんな2人を見据えて溜め息をつき、苦笑いを浮かべながら話した。

「そのカレーを食べたくなかったら、あの薬でも良いのよ？」

「うっ……」

その言葉に、セーナとミライが緑のカレーを銀スプーンで口に運んだ。

「うはっ。カレー味の歯磨き粉みたいだ……」

ミライは複雑な表情を浮かべて味の感想を言った。

ミライの批判的な感想の中、セーナは驚いた表情を浮かべながら言葉の口にした。

「……私、案外これ好きかも」

「うっそだー」

ミライとナトレの声が重なり、3人は軽く笑い始めた。

……そんな楽しい食事の時間は、悠々（ゆうゆう）と過ぎていくのだった。

第162層 エメラルドグリーン（後書き）

あ、作者さんレベルアップです。

この作品と同じで、レベルなんて関係ないのですけどね

第163層 次へ（前書き）

この作品は、文章表現レベルが3 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第163層 次へ

「「うちそうさまでした！」

いつも通りの合掌がっしょうで3人の食事が終了した。

その合掌後、ミライとナトレは同時に立ち上がった。

「さて、続きを始めましょうか」

そうナトレは、笑顔を振り撒まきながら言った。

その笑顔に釣られるようにセーナも笑い、口を開いた。

「そんなに笑顔になるほどミライの修行に成果でたの？」

「ふふ、期待通りの調子で成長しているわね。ミライ、成果見せてあげれば？」

ナトレの褒め言葉と視線に、ミライは少し恥ずかしげに笑い、頭の後ろを搔かいた。

……そう言われると、何だか照れくさいな。

2人の視線を感じながら、ミライは口を開いた。

「じゃあ、俺様の修行の成果を……」

ミライは微笑む顔をリセットし、鋭い目つきで呟いた。

「……魔術氷結バリア」

ミライが呟いた瞬間、セーナの後方に1枚の氷壁が出現した。

氷壁の大きさは一人が隠れる事のできる程度で、厚さは薄め。俺様的にもイメージ通りの物が出来た。

セーナはその場を立ち上がり、出現した氷壁をまじまじと見つめる。

「ふーん。見た目はこれと言って変わったことは無いみたいだけど……」

「それ、触れたら体が一瞬で凍るから」

そのミライの言葉を聞いて、慌ててセーナはバリアから距離をとる。セーナの危ないものを見る表情に、ミライは軽く笑いながら説明を付け足した。

「別にそんなに警戒しなくても、凍ってすぐに死ぬわけじゃないから大丈夫」

「そ、そうなの？」

「ここに凍り付いて生き残った本人が居るわよ」

そうナトレは、口をニヤ付かせながら言った。

……あの時、命の危機に晒されたのに、良く笑っていられるなの人。

ミライは苦笑いを浮かべて言葉を口にした。

「ナトレが凍りついたときは、本当に慌てふためいたけど……」

「ふーん、ナトレがねえ」

そうセーナは言って、ナトレに視線を送る。

ミライの言葉にナトレは笑顔を引きつるが、気を取り直して話を変えた。

「さて、新たな強さのためにそろそろ次の修行に移わよ」

「次は何を鍛えるんだ？」

ミライの質問にナトレはニヤリと笑顔を浮かべる。

「次はね……」

ナトレが次の修行内容を話し始めたと思った瞬間だった。

……ナトレの姿がミライの目の前から突然消えた。

第164層 新たな修行内容（前書き）

この作品は、文章表現レベルが3 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第164層 新たな修行内容

「えっ……」

目の前で起こることに、ミライは思わず声を漏らした。

何が起きたか分からないが、本当に一瞬の出来事だったのだ。

目の前に笑顔でいたナトレの姿が消えてしまったのだ。

消える予兆的なものも、感じる事ができなかった。

「え、一体何が起きたの……」

呆然と立ち尽くすセーナ。

そしてゆっくりとミライに視線を向けるセーナ。

と、ミライの方を見た瞬間、セーナの表情が変化した。

その変化は、目を見開いて驚いたかと思えば、納得のいった様な苦笑いと若干動いた程度。

…… 一体、俺様に何を伝えたいんだ。

そう疑問に思った時だった。

「ふうー」っと小さな音と共に、ミライの左耳にこそばゆい吐息が吹き付けられた。

「なあっ！」

ミライは思わず変な声を上げた。

その声を聞いて満足げに後ろで笑う高らかな女性の声。

そう、間違いなく消えたはずのナトレだった。

「ふふ、ミライは鈍すぎよ。そんなに鈍感だったら戦闘では生きていけないわよ？」

「俺様が鈍感じゃなくて、ナトレが俊敏すぎるんだよ……」

「褒め言葉と捕らえておくわ。ありがとう」

ナトレは楽しそうに話し、拳句にはミライに抱きついてくる始末。

この人は、自分の胸が当たっているという事に対して恥じらいを感じないのだろうか。

と、何とも言えない感触を背中感じていたが、それもすぐに無くなり、気がつけばナトレの姿はセーナの後ろに。

本当に一瞬過ぎて、ナトレの動きがまだ理解できない。だが、ナトレがその動きを見せる理由は大体予想が付く。

「もしかして、次の修行内容ってそれ？」

ミライは徐に聞いた。

「半分正解ー。あとはこんな技とか……」

セーナに抱きつくナトレは、そのままミライの方を向いてにっこり笑う。

そして、再び姿を消した、と思ったら背中にもの凄い厚を感じた。その厚でミライは、体を支えきれず地面に正面から倒れてしまう。

恐らく厚の原因は、背中に人の温もりを感じたのでまたナトレが抱きついたのか、と思えばそうでもないのだ。

……何と言うか、ナトレと違って……山が無い？

「ちよ、ナトレ、早くはなれてよー！」

ミライのすぐ上でセーナが喚き暴れる。

ミライの背中に押し掛かっていたのは、いうまでもないセーナだった。

だが、セーナに重りを乗せるように、セーナの上にはナトレが乗っている状況だ。

「別に良いじゃない。2人とも、こういうのそんなに嫌じゃないでしょ?」

「好き嫌いの前に、押しつぶされて死んじゃうと思うんだけど。ちよ、痛い、痛いって……」

セーナがミライの髪をがむしゃらに引っ張ってくる。

いや、この痛みダメージ判定入ってないか、と言っぐらい痛い。

……そして、体感的に数百ダメージ受けたのではないかと言っところ、ようやく身が軽くなった。

「……死ぬかと思った」

ミライは素直な言葉が口から漏れてくる。

セーナも2人を見て、顔を少し染めて短く言葉を吐き捨てた。

「2人ともバカ!」

「え、何で? ナトレはともかく、俺様まで……」

「バカバカバカ!」

セーナは顔の赤さと共に、言葉の強さもヒートアップしていく。

「別に良いじゃない。さて、今回は期待通りに進むかしらね」

唯一、この空間を楽しんでるナトレは言った。

その言葉に、ミライは自信を持って言葉を返すことが出来なかった。だから、両手を左右に広げて、苦笑いで首を横に振って見せた。

……今回の修行内容の第一印象は、理解不能 だった。

第165層 集中と表現（前書き）

この作品は、文章表現レベルが2 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第165層 集中と表現

「まず、この技の利点はね……」

「一瞬で近距離戦に持ち込めること」

ナトレの話す言葉の隙間に、そうミライは言葉を入れた。

ナトレはミライの言葉に微笑みながら大きく肯く。

俺様自身が使用しているから分かるが、本当に発動から相手のすぐ近くまで向かうのが一瞬なのだ。

高速移動と言うよりは、瞬間移動。ワープ的な感じだ。

しかし、遠距離魔法を扱う俺様にとっては、全く利点を生み出さない魔法であって……。

「今回この技を完璧に習得させるのは、あくまでミライの言う見方の救出であって王の撃退じゃないのよ」

ミライの心を見透かすようにナトレは言った。

「でも、俺様も相手の目の前には瞬間移動できるよ？」

「相手の目の前だと、出現した瞬間にグサツって一撃を食らう可能性もあるの。だから、相手の後方に瞬間移動が理想的なのよ。でも正直、私には扱えない技だから少し羨ましいのよね。あなたの目の前に瞬間移動できるやつ」

ナトレは一理ある答えを言った。

しかし、ナトレは後ろにしか回りこむことが出来ないなんて……。

「何となく分かったけど、瞬間移動って相手の近くなら何所でも飛べるんじゃない……」

「そうも行かないのが現実なのよね。まあ、とにかく実戦あるのみよ。早速やりましょ」

確かにそうだなとミライは肯いた。

ミライはその場で集中力を高める。

魔術氷結の時もそうだったが、時間を掛けてでも1回を成功させる。

これがナトレの大まかな修行術の教えだ。

だから、この集中すると言うのは次の行動のための大事な起点で、大事なイメージを膨らます場面である。

……しかし、相手の後ろ側に回ると言うイメージが浮かばない。

「ねえナトレ、後ろに回りこ込むコツは？」

集中力を半分鈍らせながら、ミライはナトレに聞いた。

ナトレはその言葉を聞いて、少し考えるそぶりを見せる。

イメージを言葉で表現するのは難しいようだ。

ミライの質問の答えは、少し間を空けてから返ってきた。

「そうねえ……真っ直ぐ相手に飛び掛るのじゃなくて、円を書くように左右や上を回り込む感じ？」

「……よく分からないけど、やってみる」

ハッキリそう言って、ミライは再び集中力を高める。

瞼を閉じ、呼吸を小さくし、意識を頭の中だけに集中させ、他は完全な脱力状態。

……前方に居るナトレを右から大きく回り込む。

「来た！」

ミライは大声で一言言い放ち、閉じた瞼を大きく開いた。

第166層 真正面10センチの壁（前書き）

この作品は、文章表現レベルが3 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第166層 真正面10センチの壁

「きゃっ！」

ミライが目を見開いた瞬間に聞こえた最初の一言がそれだった。

発言者は目の前に立っているセーナ。

困惑したような表情で俺様を見つめている。

いや、哀れに思ってるのかも知れない。

……なぜなら、俺様は予定していた瞬間移動地点とは違う場所に立っていたからだ。

「見事なまでに真正面ね」

ナトレは嫌々しく笑みを浮かべながら言った。

そう、ミライが瞬間移動した先はナトレの背後ではなく、セーナのすぐ目の前だった。

その距離10センチもない位で、少し手を伸ばせば抱き寄せられる距離だ。

上目遣いで見てくるセーナの表情が痛く眩^{まぶ}しい……。

ミライはセーナの視線から目線を逸^そらしつつ、溜め息交じりで思いを口にした。

「ナトレの背後に回りこむつもりだったんだけどなー……」

「え、私の背後じゃなくて？」

ミライの言葉に思わずセーナが聞きかえした。

うーむ、背後に回りこむルートが悪かったかな……。

色々考えながらも、ミライは自分のイメージを口にする。

「俺様は、ナトレの背後に右回りに大きく回り込もうと思ったんだけど……。何が違ったんだろう」

「そこにセーナと言う障害物が在^あったから、じゃない？」

ナトレは1つの答えを導き出して言った。

「えっ、えっ、何、私のせいなの？」

少し動揺しながらセーナは言った。

それは違う。

そう思いミライは大きく首を横に振った。

もしそうだとしたら、俺様は少なくともセーナの背後に回り込んだはずだ。

それに、セーナが居た場所よりも、もう少し遠回りのルートを俺様はイメージしたはずだ。

なのに、どうして……。

ミライが考えに困っていると、何所からかナトレの提案が耳に入ってきた。

「もう一回やってみたら？今度は左回りでも」

「そうしてみる」

そう言って、ミライは再び集中モードへ入っていく。

セーナは真後ろに居て、前方にはナトレの姿。

大丈夫だ、次こそは……。

「瞬間移動！」
テレポート

そうミライは、ナトレだけに意識を集中させ叫んだ。

その瞬間、ミライの姿がパツと消えて、パツと現れた。

だがしかし、ミライの目の前に立つのは、ナトレの後姿でもナトレ自身でもなく、鋭い目つきで上目遣いをするセーナの姿だった。

そのセーナとの距離は10センチで。

「技の名前普通すぎるし、また私の目の前だし……」

セーナの冷ややかな言葉がグサッとミライを貫く。

「技の名前も、技の内容も改善しないといけないわね」

追い討ちを掛けるようにナトレの言葉がミライに襲い掛かる。

何だこの負け犬のような気分は……。

それに、そんな短時間でカツコイイ技名なんて浮かばないだろうよ。

「納得いくまで背後に回り込もうとするけど、いい？」

「納得いくまで名前を変えて良いわよ」

ミライの言葉に、笑みを浮かべながらナトレは言葉を返した。

その卑しい笑みをミライは受け流しつつも、ミライは集中力を高めるのだった。

第167層 行き詰まり（前書き）

この作品は、文章表現レベルが3 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第167層 行き詰まり

修行の行き詰まりの中、ミライは言葉を吐き捨てていた。

「何で……何で出来ないんだ！」

ミライは自分の出来なさにイラつきを覚え始めていた。かれこれ数時間。一度も裏手に回る瞬間移動が成功していないのだ。

……それに、まだ名前も決まっていない。

「それが当たり前よ。今までが出来すぎたのだと私は思うのだけど？」

そうナトレはミライに問いかけた。

確かにそうかもしれない。

そうなのかもしれない。

いや、もしかしたら俺様には出来ないのかもしれない。

「まだ始まったばかりなのだから、諦めるのは早すぎるわよ」

ナトレはミライを見つめ、少し強めの口調で言った。

本当に、ナトレには心が見透かされているんだな……。

ミライは大きく溜め息を吐いた。

そして吐いた息を取り戻すように大きく息を吸って、それを言葉に代えた。

「もう一度やろう」

「そつだよ。結果はともかく、ミライは確実に上達しているんだから」

そうセーナは言葉を掛けて、ミライに魔力回復ビンを投げつけた。ミライはそれを受け取り、ありがとうと右手を軽く振った。

確かにセーナの言う通り、確実に上達はしている。

現に、もうセーナの目の前に瞬間移動してしまうという問題点は原因も分かったし、解決もした。

原因は、セーナが瞬間移動時に一番近場に居たからだった。

その一番近場の人に飛んでしまうのは、どうやらその時使っていた瞬間移動が全体魔法だったから。

悩むまでも無く簡単な話だった訳だ。

そして、その原因の解決策は、単に全体魔法を単体魔法に変えただけ。

それも相手の目を見てから瞬間移動のイメージをするだけ。本当に簡単な話だった。

だからきつと、後ろに回り込むのも案外簡単に出来るかもしれない。その方法が分からないだけで。

ミライはビンの中身を一気に飲み干す。

「ふーっ、やるぞ！」

言葉を吐き捨てて、集中に入る。

成功のイメージなんてしない。

今回は出来ると言う感覚だけで意識を固める。

……よし。

ミライは意を決めて魔術を発動した。

スススツツと自分が移動したのを感じ取った。

目の前にナトレの姿は、無い。もちろんセーナの姿もだ。

「……成功したのか？」

まだ実感が無く、ミライは一人呟いた。

「私の後ろに回り込んだみたいね。相当距離は離れてるけど」

後方からナトレの声が聞こえてきた。

振り返ってみると、大分距離が離れた場所でナトレが笑っている。

結果はどうであれ、成功したようだ。

不思議と笑みが浮かんでできてしまう。

「ちょっと待って！」

2人が笑顔を浮かべる中、困惑気味でセーナが声を発した。

ミライとナトレは、2人の間にいるセーナに視線を送る。

セーナは1度深呼吸をして、それから徐おもむろに話し始めた。

「違う、違うの。ミライが後ろに回り込んだんじゃない。……たぶんだけど、ミライとナトレは入れ替わったんだと思う」

「それは、どういうこと？」

ナトレは思わず聞き返した。

「確かにミライは一瞬で消えた。でもそれと同時にナトレも消えて……と思ったら2人は現れたわ。消えた場所とは反対の場所に、だ
けど」

セーナの言葉は、それは理解しがたい事だった。

今発動した魔法は回り込みではなく、入れ替わりだということだろうか。

使った俺様自身ですら、分からない。

訳の分からない空気の中、口を開いたのは考え込んでいたナトレだった。

「セーナの言葉が間違ってるとは言い難いわね。……真相を調べるためにもう一度しましょう。ミライは自分の周りにぐるっと円を描いて」

「……分かった」

ミライは自分の周りを囲むように右足で時計周りに線を引く。

ナトレは自分の周りを4本の直線で囲んだ。

「何をするかは分かっているわよね。さっきイメージした通りに瞬間移動するのよ」

ナトレの考えているのは、瞬間移動後に自分のではなく相手の描いたマークの上に立っていたら実験成功。

回り込みではなく入れ替わりだと確定するのだ。

「分かってるけど、さっきは何もイメージしなかったからな……」

「……イメージしなかったとは？」

ナトレは、どこか引っかけかりを覚えてミライに聞き返した。

聞かれると説明しづらいが、あの顔を見る限り説明しないと駄目なようだ。

「その……成功のイメージを浮かばせるんじゃないやなくて、感性に任せたいとか」

「そう、まあいいわ。早速やってみて」

「分かった」

ミライは、ナトレの軽い返しに軽く返して集中に入る。

説明を軽く流された気もするが、まあいいだろう。

そして、完全に気分にも似たその感覚で魔術を発動した。

ふとミライは、足元のマークを確認する。

……ダイヤのマークである。これで入れ替わりが実証されたわけだ。

「完全に入れ替わったな」

「でしょ。私の思ったとおり！」

セーナは、どこかしら自慢げに言った。

そんなに人の事を胸張って言う必要のないのにな、と心の内に秘めておく。

「確かに完全に入れ替わったわね。全く気づかなかったけど……」

そうナトレは言って考え込んでしまう。

と思ったら、一瞬で考えをまとめたらしく、再び発言した。

「うん。間違いないわ。ミライは恐らくだけど、私と違うタイプの瞬間移動を使うの」

「と、言うこと？」

ミライとセーナの声が同時に重なる。
その現象にナトレは少し笑い、それから説明に入った。

「私の使う瞬間移動術は高速移動型。つまり、相手に見えない位の速いスピードで移動するものなの。それでミライのは、間違いなく空間移動型ね。この場所とは別の空間を行き渡って来る感じかしら？体感した事ないから断定はできないけれど」

ナトレは徐おもむきに説明し終わった。

だがしかし、全く訳が分からない。

セーナも訳が分からないような表情をしている。

「……分からないわよね。分かりやすく説明するわ」

2人のあつけない表情を見て、ナトレは溜め息混じるに言った。

こうして、ナトレによる簡単な魔術の系統の違いの説明が始まるのだった。

第168層 光の反論（前書き）

この作品は、文章表現レベルが3 / 10000Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第168層 光の反論

物理的魔術と空間的魔術。

ナトレが説明するには、魔術の代表的な二系統らしい。

物理的魔術は、セーナが使うような、この世界に存在する者を吸収、圧縮、変換などをして作り出す魔法。

セーナ自身も、あの光魔法は辺りの光を集めて作り出すとか言っていた。

そして、もう一方の空間的魔術は、物理的魔術とは正反対でこの世に存在しない物呼び出すらしい。

全く訳が分からないが、契約、召喚、闇魔術とか精霊術などがそこから側らしい。

そして、俺様の今まで使ってた魔術も空間的魔術ではないのか、と言うわけだ。

他にも、この2つの魔術系統から外れる物も在るらしい。
有名なのが時間を自在に操る魔術。

物理や空間と分けられているのは、その魔術現状がハッキリ分かってないかららしい。

時間軸がずれた空間を移動するとか、光よりも速いスピードで移動するとか、説は様々だ。

まあ、そんなこんな無駄話も入りつつ、魔術系統の話は終わったわけ……。

「ミライの魔術が空間形だとすると、……根本的に考え方を変えないと駄目ね」

ナトレは、何かに諦めがついた様に言った。

いや、そこは諦めてもらったらどうしようもないのだが、しかし完全に行き詰ってしまった。

ナトレが言っていたのだが、魔術タイプの違う俺様に、ナトレは魔術を教えようが無いのだ。

見た目同じ魔術でも、発動方法もイメージも全く違う。全く、どうしたら良いのだろうか……。

全員が諦めモードの中、口を開いて話し出したのはミライだった。

「もう後ろに回り込むのはいいよ。前方に飛ぶ事は出来るんだし、それよりも他に何か修行したほうが……」

「駄目だよ！」

ミライの意見を一言で否定したのは、意外にもセーナだった。

真剣な表情でセーナは言葉を続ける。

「まだ出来ないって決まった訳じゃないし！むしろ出来る可能性が有るならやらなきゃ駄目だよ。……ミチを確実に救うために必要な技なんだから！……その、えっと……」

「わかった……やってやるよ！」

ミライは、そう大きく宣言してその場を立ち上がった。

セーナの言ってる事は、ハッキリ言っただ目茶苦茶めぢやくちやだった。

どんだん顔が赤くなるし、話す言葉も探り探りだ。

……でも、俺様は前向きすぎる熱意に負けた。

きつとセーナの言いたかっただろう、「諦めるな」という真っ直ぐすぎる光のような意見に折れたのだ。

ここまで人の為に言われると、不思議と笑みが浮かんでくる。

隣で座っているナトレも、何だか吹っ切れたような表情をしている。

俺様の視線に気づいたのか、ナトレは立ち上がり口を開いた。

「何だか良いわね。……そんな素晴らしい空気に、お客さんみたいよ」

そう言つてナトレは遠くを見た。

すぐに2人もナトレの見つめる方向を向いた。

「……何、あれ」

セーナは徐に聞き、その場を立ち上がった。

3人の視線の先の砂漠には、謎の生物が一匹立っていた。それは、人間のようなモンスターのよう……。

「数ヶ月ぶりのモンスターよ。それも、相当なレア種ね」

「うー」

妙に人らしい唸り声を上げるモンスターと、ミライは目線が合わさるのだった。

第168層 光の反論（後書き）

お待たせしました。

明日からこの感じの量を2章完結まで毎日更新です。

ここに印したのは「作者を逃がさないため」なのです。

第169層 人型モンスター（前書き）

この作品は、文章表現レベルが3 / 1000 Lvの作者の書いた作品です。

様々な名称が出てますが、作者は全てオリジナルだと勘違いしてます。

作品も作者も駆け出しですので、作品と共に作者の成長も見守ってあげてください。

第169層 人型モンスター

ナトレの言うレア種のモンスターは、俺様には到底理解しがたい格好だった。

……理解しがた過ぎて、直視できない。

外見は、ほぼ完全に人型だ。しかも女の子。

そこまで長くない小豆色の髪でポニーテール。

後ろ髪は一纏めに赤球髪飾りで束ねられ、肩まで垂れ下がっている。そして何かを察知するように、あほ毛がピンと跳ねている。

人と何等変わりない顔つきの中、眼鏡という人間の装備品が備わっていた。

体つきも、普通に人の手足が備わっている。

だがしかし、明らかに人には装備されないアイテムが彼女には備わっていた。

それは、髪に隠れるように付いている、いかにも硬そうな角だ。武器としては使われないようで、垂れ下がる髪と平行に2本伸び下がっている。

そして、もう一つ明らかに目立つのは、背中から左右に生える漆黒の翼。

その翼は鳥の翼というよりは、悪魔の翼。

翼の素材が何で作られているか、この目ではさっぱり判断できない。……しかし、直視できない理由は角だの翼だのではない。

「……何で裸なんだよ」

ミライは、そのモンスターから目を逸らしながら呟いた。

そう。そのモンスターは女体で人型でありながら、全裸なのだ。上も下も何も身に纏ってない。

セーナ位の少女なので、上から下までスレンダー……。

……って、何を思ってしまったってんだ俺様は！

「レアモンスターなら、逃げられる前に倒すわよ！」

セーナは威勢よく言い、数十メートル先のモンスターに向かって走っていった。

ナトレは何を考えているのか、薄ら笑みを浮かべるだけで戦闘に参加する気は無いようだ。

……俺様は苦笑いという笑みを浮かべるだけで、戦闘に参加する事ができない。

ミライの心理を見破ったのが、ナトレは棒立ちするミライに声を掛けた。

「モンスターが裸なのは当然だと思っわよ？」

「でも、裸でも体毛とかで隠されてるもんじゃ……」

「確かに、あの子は成長すれば獣毛が良い感じに隠してくれるわ。でも、あの子はまだ幼いわね。あれだけ小さいのは始めてみたわ」

ナトレの言葉に疑問しか浮かばない。

成長した姿はどれだけ大きいんだよ……。

それに良い感じに隠れるって……。

考えれば考えるだけ、ナトレに笑われる気がする。

ミライは吐き出したい疑問を腹に留め、大きな溜息ためいきで誤魔化ごまかした。

それを見てナトレはフツと軽く笑い、セーナの方へと目線を送る。

俺様もセーナとモンスターの戦闘を見つめる。

「ライトビーム！」

セーナの高らかに叫ばれる魔術は、華麗にかわされてた。

セーナの魔術の速さも異常だが、あのモンスターの速さも異常だ。速すぎて目で追う事で精一杯だ。

どんなかわし方をしてるかなどは、全く確認できない。

……しかし、あれだけ素早い動きを見せていたモンスターが、突然ピタツと動きを止めた。

セーナは、そんな動きを見落とさずライトビームを放つ。

そのセーナの魔術の発動と同時に、モンスターは空気を引っ掻く様に、大きく右手を振り下ろした。

と、その瞬間だった。

モンスター側から、目で捕らえられるほどの空斬刃かまいたちが放たれた。

それによりセーナの放った光が大きく進行を左右に逸そらし、そして……。

「キヤツ！」

セーナの大きな叫び声と同時に、セーナの体が宙に舞まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3976u/>

ア・ホールド・ダンジョンズ！

2011年11月24日23時52分発行